

第Ⅲ部 2010-2011年度における各教員の活動

01 言語学

教授 熊本 裕

KUMAMOTO, Hiroshi

Personal web site : <http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/~hkum>

1. 略歴

- 1974年 3月 東京大学文学部言語学専修課程卒業 (文学士)
- 1974年 4月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程入学
- 1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了 (文学修士)
- 1976年 4月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程入学辞退
- 1976年 4月 東京大学文学部助手 (言語学研究室)
- 1976年 8月 東京大学文学部助手 休職 (海外研究のため) ~1979年 8月 (休職期限につき退職)
- 1976年 9月 米国ペンシルヴェニア大学大学院東洋学科博士課程入学
- 1982年 12月 米国ペンシルヴェニア大学大学院東洋学科博士課程修了 (哲学博士)
- 1983年 4月 四天王寺国際仏教大学文学部助教授 ~1989年 3月
- 1989年 4月 東京大学文学部助教授 (言語学)
- 1994年 6月 東京大学文学部教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (言語学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

イラン言語学、特に中央アジア出土の中期イラン語であるコータン・サカ語文献の解明。

b 研究課題

中央アジアの遺跡(いわゆるシルクロード)から発掘されて、20世紀に初めて解読された言語の一つであるコータン・サカ語の研究に従事し、過去十数年、世界各地の博物館や研究所に保存された写本を調査し、そのうちのいくつかは初めて解読し出版した。90年代は主としてペレストロイカ以降ようやく外部に開放されたロシア所蔵の写本を対象に、現地の研究者と共同研究を行った。現段階では、現存するコータン・サカ語文献の全体像がようやく明らかになったといえる。すなわち、今の段階で欠けている、この言語の総合的な文法と辞書のための作業の土台が、ようやく整いつつある。この作業と平行して、かつて断続的に出版した、パリのフランス国立図書館所蔵のコータン・サカ語文書(Paul Pelliot 蒐集)の研究を改訂して、Saka Documents Text Volume II として準備中である。

c 主要業績

(1) 論文

- “Sino-Hvatanica Petersburgensia, Part 2”, Iranian Languages and Texts from Iran and Turan: Ronald E. Emmerick Memorial Volume, edited by Maria Macuch, Mauro Maggi and Werner Sundermann, pp.147-159, Wiesbaden: Harrassowitz, 2008.12
- “The Injunctive in Khotanese”, East and West. Papers in Indo-European Studies, ed. By Kazuhiko Yoshida and Brent Vine, pp.133-149, Bremen: Hempen, 2009.5
- “Paul Pelliot and the Deśanā-parivarta of the Suvarṇabhāsa-sūtra”, Bulletin of the Asia Institute 19, pp.79-84, 2009.12
- “A St. Petersburg Bilingual Document and Problems of the Chronology of Khotan”, Journal of Inner Asian Art and Archaeology 3, pp.79-84, 2009.12
- “The Khotanese in Dunhuang”, The Silk Road: Key Papers (2 Vols), Vol. II, edited by Valerie HANSEN, pp.604-620, Leiden: Brill, 2012 (<http://www.brill.nl/silk-road-key-papers-2-vols>)

1. 略歴

1977年3月	東京大学文学部言語学科卒業（文学士）
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（言語学専攻）修了（文学修士）
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（言語学専攻）単位取得退学
1984年4月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1989年7月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 併任
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、チュルク語学

b 研究課題

(1) ユーラシア周辺部チュルク諸語の記述研究

中国新疆ウイグル自治区南部のエイヌ語、中国甘粛省のサリグ・ヨグル語、そして、ドイツ・ベルリン市でトルコ系移民の話すトルコ語を主な対象とし、現地調査によって収集したデータによりながら、小規模な言語共同体が周囲の言語から導入した要素によって新たな用法を生み出す過程を明らかにする。

(2) トルコ語の指示詞に関する研究

トルコ語の3系列の指示詞が使われる語用論的条件を解明するため、共通の課題を与えられた話者による会話の音声と映像を、指示詞の用法と非言語的行動（ジェスチャーや視線の変化など）の関係に注目しつつ、分析する。

c 主要業績

(1) 解説

林 徹、「アジアにおけるラテン文字化：アラビア文字からラテン文字へ」、『世界の文字を楽しむ小事典』、134 - 140 頁、2011.11

林 徹、「文字改革：トルコの場合」、『世界の文字を楽しむ小事典』、172 - 177 頁、2011.11

林 徹、「国際音声記号（IPA）は何を表しているか？：文字で音を再現する試み」、『世界の文字を楽しむ小事典』、129 頁、2011.11

(2) 学会発表

国際、Tooru Hayasi、「Variability in linguistic judgment: an analysis of a questionnaire survey data on the usage of Turkish demonstratives carried out in Istanbul and Berlin」、15th International Conference on Turkish Linguistics、University of Szeged, Hungary、2010.8.21

国際、Tooru Hayasi、「Indigenous and foreign properties in copied constituents」、Societas Linguistica Europaea 43rd Annual Meeting、Vilnius University, Lithuania、2010.9.3

国際、Tooru Hayasi、「How different is Turkish spoken in Berlin from its 'standard' variety of Istanbul? : an analysis of a questionnaire survey on linguistic judgment of adolescents living in the two cities」、Second International Symposium of Tokyo Academic Forum on Immigrant Languages、University of Tokyo, Komaba, Tokyo、2012.2.10

(3) 共同研究・受託研究

共同研究、林 徹、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、「ダイクシス表現の多様性に関する研究」、2010～2011.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、日本大学文理学部、「言語学」、2010.4～2010.9

非常勤講師、日本大学文理学部、「言語学」、2011.4～2011.9

非常勤講師、京都大学文学部、「チュルク諸語研究入門」（集中）、2011.9

(2) 学会等

- 日本語学会 評議員
- 日本語学会 会計監査委員 2009.4～2012.3
- 日本語学会 編集委員長 2012.4～
- 日本学術会議 特任連携会員 2010.11～
- 日本学術会議 連携会員 2012.4～

准教授 **西村 義樹** NISHIMURA, Yoshiki

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
- 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
- 1989年4月 実践女子大学文学部英文学科専任講師
- 1992年4月 東京大学教養学部助教授
- 1993年4月 東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
- 2004年4月 東京大学人文社会系研究科助教授 併任
- 2004年9月 東京大学人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、意味論、認知文法

b 研究課題

文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまでに分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 主要業績

(1) 学会発表

「文法と比喩」、日本フランス語学会 2010 年度シンポジウム「フランス語学と意味の他者」、早稲田大学早稲田キャンパス、2010

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

「文法に意味はあるのか?」 山口県教育委員会主催 夏期進学パワーアップセミナー、山口県セミナーパーク、2010年8月5日

「文法と意味、文法の意味」東京言語研究所春期特別講座、2011年4月16日
東京言語研究所理論言語学講座講師 2010.4～、学習院大学非常勤講師 2011.4～

(2) 学会

日本語学会、評議員 2009.4～、大会運営委員 2008.4～2010.12、夏期講座委員 2010.4～、編集委員 2012.4～

1. 略歴

- 平成4年3月 京都大学文学部文学科卒業（文学士）
平成4年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻入学
平成6年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程梵語学梵文学専攻修了（文学修士）
平成6年4月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程梵語学梵文学専攻進学
平成12年3月 京都大学大学院文学研究科梵語学梵文学専攻博士後期課程中途退学
平成8年9月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程入学
平成12年12月 ペンシルバニア大学文理大学院言語学科 Ph.D.課程卒業
平成12年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 COE 非常勤研究員（平成13年3月まで）
平成13年4月 白鷗大学経営学部専任講師（平成17年3月まで）
平成17年4月 白鷗大学経営学部助教授（平成19年3月まで）
平成19年4月 白鷗大学教育学部准教授（平成22年3月まで）
平成22年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

歴史言語学、音韻論、インド・アーリア語、ドラヴィダ語

b 研究課題

インド・アーリア語、とくにサンスクリットの音韻論と、ドラヴィダ語族言語のフィールドワーク

c 主要業績

(1) 著書

単著、Masato Kobayashi, *Historical Phonology of Old Indo-Aryan Consonants*. Tokyo: ILCAA, 2004.11

単著、Masato Kobayashi, *Texts and Grammar of Malto*, Vizianagaram: Kotoba Books, 2012.3

(2) 論文

小林正人、「クルフ語・マルト語の過去語幹」、『言語研究』、140、23-49頁、2011.9

Masato Kobayashi, Pāṇini's Phonological Rules and Vedic: Aṣṭādhyāyī 8.2, *Journal of Indological Studies* 18, 1
～21頁, 2006

Masato Kobayashi, Syllable Rimes in Old Indo-Aryan and Dravidian, 『アジア・アフリカ言語文化研究』62号,
91～106頁、2001

(3) 書評

Reiner Lipp, *Die indogermanischen und einzelsprachlichen Palatale im Indoiranischen* (Heidelberg: Winter,
2009)、Masato Kobayashi, *Indo-Iranian Journal* 55、287-296頁、2012

Martin Kuemmel, *Konsonantenwandel*, Ludwig Reichert, Masato Kobayashi, *Kratylos* 55、45-54頁、2010

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本言語学会 大会運営委員 2008年～2010年、常任委員 2012～。

02 考古学

教授 **大貫 静夫** ONUKI, Shizuo

1. 略歴

1971年3月 千葉県県立千葉高等学校 卒業
1971年4月 東京大学文科3類 入学
1975年3月 東京大学文学部考古学専修課程 卒業
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
1984年6月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学
1984年7月 東京大学文学助手（東京大学遺跡調査室）
1986年5月 東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設に配置換え
1994年4月 東京大学文学部助教授（考古学）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（考古学）
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（考古学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

東北アジア考古学

b 研究課題

日本列島を含む環日本海の定着的食料採集社会の成り立ち、およびその変容過程を考古資料によって明らかにすることを主な研究課題としている。かつては考古資料からだけでは限界のある極東の先史社会復元を目的とした北方少数民族の伝統的な生業および居住形態の研究や変容過程を考える際に重要となる中国中原勢力の東方進出を考古学的に明らかにする作業をしてきた。最近ではアムール川下流域の古代文化の解明とともに、日本先史文化との関係を考えるために環日本海北回廊の解明に努めている。

c 主要業績

(1) 論文

大貫静夫、「サケ・マスと堅果類—『縄文式階層化社会論』を読む」、『異貌』、27、2-42頁、2010.4
大貫静夫、「縄文文化と東北アジア」、『縄文時代の考古学1』、141-153頁、2010.6
大貫静夫、「北東アジア新石器社会の多様性」、『東北アジアの歴史と文化』、71-86頁、2010.12
大貫静夫、「アムール編目土器の終焉と周縁」、『東京大学常呂実習施設研究報告第9集』、243-264頁、2011.3

(2) 予稿・会議録

国内会議、大貫静夫他、「2009年度クニャーゼ・ヴォルコンスコエ1遺跡の調査について」、第11回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2010.3.13
『第11回北アジア調査研究報告会要旨集』、21-24頁、2010.3
国内会議、国木田大・吉田邦夫・I.Shevkomud・大貫静夫他、「ロシア・アムール流域における過去一万年間の文化編年」、日本文化財科学会第27回大会、関西大学、2010.6.26
『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集』、276-277頁、2010.6
国際会議、大貫静夫、国木田大、吉田邦夫、「關於昂昂溪額拉蘇C地点的年代」、紀念梁思永先生發掘昂昂溪遺址80周年暨昂昂溪文化學術研討会、中国・黒竜江省齊齊哈爾市、2010.9.8
国内会議、国木田大・吉田邦夫・大貫静夫、「額拉蘇C（オロス）遺跡出土土器附着炭化物の¹⁴C年代測定」、第12回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2011.3.5
『第12回北アジア調査研究報告会発表要旨集』、19頁、2011.3
国内会議、大貫静夫他、「極東北部新石器時代の変遷について」、第12回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、2011.3.5
『第12回北アジア調査研究報告会要旨集』、16-18頁、2011.3
国内会議、福田正宏・I.Shevkomud・熊木俊朗・大貫静夫他、「アムール河口域の考古学的調査（2010年度）」、12回北アジア調査研究報告会、2011.3.6

『第12回北アジア調査研究報告会要旨集』、28-31頁、2011.3
国際会議（招待講演）、大貫静夫、「極東の考古学」、第1回韓国考古学会聯合大会、韓国・大田市・忠南大学校、
2011.6.27

『第1回韓国考古学会聯合大会発表資料集』、295-304頁
国際会議（招待講演）、大貫静夫、「アムール川下流域新石器時代研究の新たな成果」、第11回環東海考古学研究会
学術発表会、韓国・木浦市・国立海洋文化財研究所、2012.1.28

『第11回環東海考古学研究会学術発表会』、1-21頁、2012.1

(3) 監修

大貫静夫、『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』、東京大学常呂実習施設研究報
告第9集、2011.3

(4) 会議主催（チェア他）

国内、「日本中国考古学会2011年度大会」、実行委員長、東京大学、2011.12.3～2011.12.4

国内、「第13回北アジア調査研究報告会」、実行委員、東京大学、2012.2.11～2012.2.12

(5) 共同研究（産学連携除く）

国際、主催、ロシア・ハバロフスク地方郷土誌博物館、「アムール川下流域の古代文化についての考古学的研究」、
2011～

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（A）海外学術調査、大貫静夫、研究代表者、「環日本海北回廊の考古学
的研究」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、名古屋大学、「東北アジア考古学の諸問題」、2010.12～2010.12

特別講演、ロシア・マガダン・東北国立大学、「Neolithic cultures in Northeast Asia」、2011.3～2011.3

(2) 学会

日本中国考古学会、会長、2010.4～2012.3

史学会、理事、2010.4～2012.3

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部考古学専修課程 卒業
1982年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
1988年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
1991年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
1991年4月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
1994年3月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士(文学)取得
1994年4月 財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年5月 東京大学文学部付属北海文化研究常呂実習施設助教授
1999年4月 東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
(新領域創成科学研究科助教授併任、2004年3月まで)
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1)日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論、石材論的研究。
(2)生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
(3)民俗知の環境論的研究。

c 主要業績

(1) 著書

- 共著、佐藤宏之、『縄文の考古学 12巻』、同成社、2010.1
共著、佐藤宏之、『比較考古学の地平』、同成社、2010.2
共著、佐藤宏之、『長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化2』、長野県埋蔵文化財センター、2010.3
編著、稲田孝司・佐藤宏之編著、『講座 日本の考古学 第1巻 旧石器時代(上)』、青木書店、2010.4
編著、稲田孝司・佐藤宏之編著、『講座 日本の考古学 第1巻 旧石器時代(下)』、青木書店、2010.6
共著、Sato, H., Izuho, M., Morisaki, K., 『The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northern Asia』、Sakhalin State University、2010.9
共著、Sato, H., 『Papers in Honour of Viola T. Dobosi』、Hungarian National Museum、2011.3
編著、佐藤宏之、『環日本海北部地域における後期更新世の環境変動と人間の相互作用に関する総合的研究』、総合地球環境学研究所・東京大学大学院人文社会系研究科、2011.3
編著、佐藤宏之・飯沼賢司、『野と原の環境史』、文一総合出版、2011.3
編著、Izuho, M., Kaifu, Y., Sato, H., Ono, A. 『Program, Abstract, and Excursion Guide for Dual Symposia “The Emergence and Diversity of Modern Human Behavior of Palaeolithic Asia & The 4th Annual Meeting of the Asian Palaeolithic Association”』、National Museum of Nature and Science、2011.11
共著、佐藤宏之、『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態論的総合研究』東北芸術工科大学東北文化研究センター、2012.3

(2) 論文

- 佐藤宏之、「旧石器時代の北東アジアと日本」、『考古学ジャーナル』、605号、6-9頁、2010.10
Sato, H., Izuho, M., Morisaki, K., 「Human cultures and environmental changes in the Pleistocene-Holocene transition in the Japanese Archipelago」、『Quaternary International』、237、pp. 93-102、2011.4
佐藤宏之、「オーストラリア大陸への人類の移住」、『旧石器考古学』、75、101-108頁、2011.9
佐藤宏之、「荒川台型細石刃石器群の形成と展開」、『考古学研究』、58巻3号、51-68頁、2011.11

Sato, H. 「Late Pleistocene trap-pit hunting in the Japanese Archipelago」『Quaternary International』、248、pp. 43-55、2012.1

Iwase, A., Hashizume, J., Izuho, M., Takahashi, K., Sato, H. 「The timing of megafauna extinction in the late Late Pleistocene on the Japanese Archipelago」『Quaternary International』、255、pp. 114-124、2012.3

(3) 学会発表

国際、佐藤宏之・早田勉・出穂雅実、「Human adaptation to the environmental change caused by the gigantic AT eruption (28-30 ka) of the Ito Caldera in South Kyushu, Japan」、International Field Conference and Workshop on Tephrochronology, Volcanism and Human Activity、鹿児島県霧島市国分庁舎多目的ホール、2010.5.14

国内、佐藤宏之・大貫静夫・福田正宏・I.Shevkomud 他、「コンドン文化の理解に向けて-クニャーゼ・ヴォルコンスコエ 1 遺跡の調査から-」、第 76 回日本考古学協会総会、国士舘大学、2010.5.23

国内、高橋啓一・出穂雅実・佐藤宏之、「北海道忠類ナウマンゾウ産出地点の再調査報告」、化石研究会、日本歯科大学新潟生命歯学部、2010.5.29

国内、佐藤宏之、「日本列島における後期旧石器時代の陥し穴猟-OIS3 後半の自然環境と生業・居住を考える-」、シンポジウム「日本列島における酸素同位体ステージ 3 の古環境と現代人的行動の起源」、浅間縄文ミュージアム、2010.6.6

国内、國木田大・吉田邦夫・辻誠一郎・I.Shevkomud・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・福田正宏・内田和典・森先一貴・Konopatskii、「ロシア・アムール流域における過去一万年の文化編年」、第 27 回日本文化財科学大会、2010.6.27

国際、岩瀬彬・橋詰潤・出穂雅実・高橋啓一・佐藤宏之、「AMS 14C chronologies of terrestrial mammalian megafauna in the late Late Pleistocene on the Japanese Archipelago」、The World Mammoths: 5th International Conference on Mammoths and Their Relatives from the Pleiocene to Present-day: Biotopes, Evolution and Human Impact、Puy-en-Verlay、フランス、2010.9.1

国際、森先一貴・出穂雅実・佐藤宏之、「Upper Palaeolithic technological organization response to landscape changes in northern Japan」、International Symposium "The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the Northeast Asia"、サハリン総合大学、2010.9.21

国際、出穂雅実・岩瀬彬・橋詰潤・佐藤宏之、「Late Pleistocene megafauna extinction on the Japanese Island」、第 3 回アジア旧石器協会年次大会、韓国国立公州大学校、2010.10.11

国内、佐藤宏之、「東北日本の後期旧石器時代前半期の編年研究」第 24 回東北日本の旧石器文化を語る会、2010.12.18

国内、役重みゆき・佐藤宏之・熊木俊朗・尾田識好・林和広・夏木大吾・高屋敷飛鳥・高鹿哲大・山田哲、「北海道北見市吉井沢遺跡」第 24 回東北日本の旧石器文化を語る会、秋田市、2010.12.19

国内、佐藤宏之・出穂雅美・森先一貴・山田哲・和田恵治・向井正幸・A.ポポフ・V.ポポフ・B.ラジン、「ロシア沿地方の旧石器時代石器群と"玄武岩ガラス": グヴォズデヴォ 5 遺跡発掘調査および沿海地方南部玄武岩質台地の知悉巡検報告」、第 12 回北アジア調査研究報告会、金沢学院大学、2011.3.6

国内、福田正宏・I.Shevkomud・熊木俊朗・國木田大・森先一貴・大貫静夫・佐藤宏之・吉田邦夫・内田和典・S.Kositsyna・M.Gorshkov・E.Bochkaryova、「アムール河口域の考古学的調査(2010 年度)」、第 12 回北アジア調査研究報告会、金沢学院大学、2011.3.6

国際、佐藤宏之、「Recent advances of Paleolithic archaeology in Japan」、特別講演会、ロシア国立マカダン大学、2011.3.11

国際、海部陽介・佐藤宏之、「Archaic hominins in East and Southeast Asia: comments on the hypothetical wide distribution of "Denisovans"」、International Symposium "Characteristic features of the Middle to Upper Paleolithic transition in Eurasia"、ロシア連邦アルタイ共和国、2011.7.8

国内、佐藤宏之、「旧石器考古学からみた日本列島の文化形成」、日本人類学会遺伝分科会、東京大学理学部、2011.7.16

国際、佐藤宏之、「Original characteristics of modern human behavior on Japanese early Early Upper Paleolithic: edge-ground axe, circular settlement and trap pit hunting」、The 16th International Symposium: SUYANGGAE and her Neighbours in Nihewan, Yangyuan county, Hebei Province, China、2011.8.16

国内、佐藤宏之、「環日本海北部地域における後期旧石器時代の環境変動と先史狩猟採集民の生業適応」、第 26 回北方民族文化国際シンポジウム、網走市オホーツク文化交流センター、2011.10.2

国際、和田恵治・佐野恭平・向井正幸・佐藤宏之・出穂雅美、「Chemical composition and microstructure of obsidian from Hokkaido source area: with special reference to geological and petrological data for Shirataki obsidian lava complex, Hokkaido, Japan」、International works on the Japanese Obsidian: Nagano Workshop in 2011、明治大学黒曜石研究センター、2011.11.5

国際、佐藤宏之、「Trap pit hunting in Late Pleistocene Japan」、Dual Symposia: Symposium on the Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia and the 4th Annual Meeting of the Asian Paleolithic Association、国立科学博物館、2011.11.30

国内、大貫静夫・I.シエフカムート・福田正宏・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・尾田識好・大澤正吾・夏木大吾・内田和典・M.ゴルシュコフ・S.コシツィナ・E.ボチカレバ・森先一貴、「東部極東平底土器の形成過程について -コンドン1遺跡の調査から-」、第13回北アジア調査研究報告会、東京大学、2012.2.12

(4) 会議主催 (チェア他)

国際、「International works on the Japanese Obsidian: Nagano Workshop in 2011」、実行委員、明治大学黒曜石研究センター、2011.11.4～6

国際、「Dual Symposia: Symposium on the Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia and the 4th Annual Meeting of the Asian Paleolithic Association」、実行委員、国立科学博物館、2011.11.26～12.1

国内、「第13回北アジア調査研究報告会」、実行委員、東京大学、2012.2.11～2012.2.12

(5) 共同研究 (産学連携除く)

国際、共同、東京大学、「東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究」、2010～2011

国際、共同、国立民族学博物館、「ロシア極東森林地帯における文化の環境適応」、2010～

国内、共同、東北芸術工科大学東北文化研究センター、「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態論的総合研究」、2010～2012

国内、共同、滋賀県立琵琶湖博物館、「日本列島におけるヒト出現期の人間-環境系復元」、2010～2012

国際、共同、東京大学、「環日本海北回廊の考古学的研究」、2011～

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 (A)、佐藤宏之、研究代表者、「黒曜石の流通と消費からみた更新世人類社会の形成と変容」、2010～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立正大学、「考古学概説 1,2」、2010.4～2011.3

非常勤講師、早稲田大学、「野外考古学概論」、2010.9～2011.3

(2) 学会

国内、日本第四紀学会、評議員、幹事、2010.4～2012.3

国内、日本考古学協会、理事、2010.4～2012.3

国内、法政大学史学会、評議員、2010.4～2012.3

国内、日本旧石器学会、渉外委員長、2010.4～2012.3

国際、Asia Paleolithic Association、Executive Committee Member、2010.10～2012.3

(3) 行政

常呂遺跡史跡整備専門委員会、立案、委員、2010.4～2012.3

東京都文化財保護審議会、教育政策、委員、2010.4～2012.3

文化庁「旧石器時代の遺跡等の保存に関する検討会」、立案、委員、2012.2～

神奈川県文化財保護審議会、立案、委員、2012.4～

考古調査士認定機構、考古調査士資格審査委員会、委員、2010.4～

1. 略歴

1974年3月	群馬県立前橋高等学校卒業
1974年4月	静岡大学人文学部人文学科入学
1978年3月	静岡大学人文学部人文学科卒業
1978年4月	静岡大学人文学部人文学科研究生
1979年3月	静岡大学人文学部人文学科研究生修了
1979年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻博士課程入学
1986年3月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻単位取得退学
1986年4月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生
1987年12月	筑波大学大学院歴史人類学研究科文化人類学専攻研究生修了
1988年1月	国立歴史民俗博物館考古研究部助手
1996年4月	国立歴史民俗博物館考古研究部助教授
2004年4月	駒澤大学文学部歴史学科助教授
2006年12月	博士(文学)取得(筑波大学)
2007年4月	駒澤大学文学部歴史学科教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本考古学

b 研究課題

- (1) 縄文時代から弥生時代への移行問題の研究
- (2) 縄文・弥生時代の葬墓制の研究
- (3) 縄文・弥生時代の通過儀礼の研究

c 主要業績

(1) 著書

- 共著、武末純一・森岡秀人・設楽博己、『列島の考古学3 弥生時代』、河出書房新社、2011.7
共編著、設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦『多様化する弥生文化』第3巻 弥生時代の考古学、同成社、2011.5
共編、設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦『古墳時代への胎動』第4巻 弥生時代の考古学、同成社、2011.8
共編、設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦『弥生研究の歩みと行方』第9巻 弥生時代の考古学、同成社、2011.11

(2) 論文

- 設楽博己、「弥生絵画と方相氏」、『史学雑誌』、第119編第9号、1525～1527頁、2010.9
設楽博己、「入墨からみた邪馬台国の位置」、『文化交流研究』、第24号東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要、1～7頁、2011.3
設楽博己、「盾持人埴輪の遡源」、『川西宏之編『東国の地域考古学』』、123～134頁、六一書房、2011.3
設楽博己、「弥生式土器の発見」、『弥生誌—向岡記碑をめぐって—』、63～72頁、東京大学総合研究博物館、2011.4
設楽博己、「弥生中期という時代」、『弥生時代の考古学』、第3巻 多様化する弥生文化、3～24頁、同成社、2011.5
今村峯雄・設楽博己、「炭素14年の記録からみた自然環境—弥生中期—」、『弥生時代の考古学』、第3巻 多様化する弥生文化、48～58頁、同成社、2011.5
設楽博己、「社宮司遺跡の多鈕無文鏡によせて」、『佐久考古通信』、第108号、13頁、佐久考古学会、2011.7
設楽博己、「男と女の弥生時代」、『列島の考古学』、第3巻 弥生時代、51～63頁、河出書房新社、2011.7
設楽博己、「弥生人の生い立ち」、『列島の考古学』、第3巻 弥生時代、64～66頁、河出書房新社、2011.7
設楽博己、「まぼろしの弥生都市」、『列島の考古学』、第3巻 弥生時代、67～81頁、河出書房新社、2011.7
設楽博己、「トイレの考古学」、『列島の考古学』、第3巻 弥生時代、82～84頁、河出書房新社、2011.7
設楽博己、「日本列島南北の異文化—統縄文文化と貝塚後期文化—」、『列島の考古学』、第3巻 弥生時代、104～106頁、河出書房新社、2011.7
設楽博己、「弥生時代の農耕祭祀」、『講座日本の考古学』、第6巻 弥生時代(下)、316～344頁、青木書店、2011.9

設楽博己、「信濃の弥生墓制」、『長野県考古学会誌』、第138・139号、111～113頁、長野県考古学会、2011.11

(3) 書評

磯前順一、『記紀神話と考古学—歴史的始原へのノスタルジア—』、角川学芸出版、設楽博己、『季刊考古学』、第113号、116頁、雄山閣、2010.11

(4) 学会発表

国内、設楽博己、「シナノとツクシー—弥生文化の交流—」、『古代シナノ地域史の再構築—地域から古典を読み直す—』、社団法人金鶏会・科学研究費補助金（学術創世研究費）「目録学の構築と古典学の再生」共催シンポジウム、ホテル犀北館、2011.10.15

国内、山田康弘・設楽博己・茂原信生・増山禎之、「愛知県田原市保美貝塚における盤状集骨葬の調査」、日本考古学協会第77回総会、國學院大學、2011.5.29

国内、設楽博己、「弥生再葬墓の成立と祭祀」、日本考古学協会2011年度栃木大会シンポジウム「考古学からみた葬送と祭祀」、國學院大學栃木学園教育センター2・3Fレクチャーホール、2011.10.16

(5) 研究報告書

設楽博己、「上本郷遺跡出土の縄文時代後期から晩期を中心とする考古資料」、『松戸市考古資料集4』、松戸市立博物館、25～37頁、2010.3

設楽博己、「遠賀川式と亀ヶ岡式の接点」、『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター2010年度年次報告書』、南山大学人類学博物館、24～25頁、2011.3

(6) 予稿・会議録

国内会議、設楽博己、「弥生時代の始まり」『平成22年度考古学ゼミナール 始まりの考古学』、神奈川県埋蔵環境文化財センター、9～10頁、2010.10

国内会議、設楽博己、「再葬墓とその社会」『公開講座「ひたちなか市の考古学」第3回 弥生時代の墓制と社会』、ひたちなか市埋蔵文化財調査センター、3～14頁、2010.11

国内会議、設楽博己、「先史時代の人々は骨をどのように扱ったか—再葬と祖先祭祀—」、『東京大学公開講座講義要項 ホネ—万物を架橋する—』、東京大学、33～36頁、2010.11

国内会議、山田康弘・設楽博己・茂原信生・増山禎之、「愛知県田原市保美貝塚における盤状集骨葬の調査」、『一般社団法人 日本考古学協会第77回総会研究発表要旨』、一般社団法人日本考古学協会、182～183頁、2011.5

国内会議、設楽博己、「日本におけるイレズミの起源と謎」、『2011年特別展 弥生人の姿—倭人伝の人々—』、出雲弥生の森博物館、32～35頁、2011.7

国内会議、設楽博己、「縄文人と耳飾り」、『縄文人のKAZARI—顔を飾る縄文人—』、十日町市博物館、10～12頁、2011.7

国内会議、設楽博己、「弥生再葬墓の成立と祭祀」、『一般社団法人 日本考古学協会2011年度大会研究発表要旨』、一般社団法人日本考古学協会、32～33頁、2011.10

(7) 共同研究（産学連携除く）

国内、参画、国立歴史民俗博物館、「総合的年代研究 歴史・考古資料研究における高精度年代論」、2010～

(8) 共同研究・受託研究

共同研究、設楽博己、国立歴史民俗博物館、「総合的年代研究 歴史・考古資料研究における高精度年代論」、2010～

共同研究、設楽博己、国立歴史民俗博物館、「新しい古代像樹立のための総合的研究 農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」、2010～

共同研究、設楽博己、国立歴史民俗博物館、「柳田國男収集考古資料の研究」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、駒澤大学文学部、「考古学特殊講義」、2010.4～

非常勤講師、東京学芸大学文学部、「考古学特殊講義」、2011.4～2011.9

特別講演、留辺蘂公民館公会堂、「弥生時代の北海道」、第15回東京大学文学部公開講座 道民カレッジ連携講座、2011.6.11

特別講演、南山大学、「遠賀川式と亀ヶ岡式の接点（南山大学オープンリサーチ『高蔵遺跡に始まる弥生時代前期の諸関係』」、2011.6.26

特別講演、出雲弥生の森博物館、「日本におけるイレズミの起源と謎」、2011年出雲弥生の森博物館特別展記念講演、
2011.7.30

特別講演、十日町市博物館、「縄文人と耳飾り」、平成23年度夏季特別展 縄文のKAZARI—顔を飾る縄文人—記念講演会、2011.8.6

特別講演、仙台市体育館研修室、「発掘された動物たち—縄文・弥生時代の動物形土製品—」、平成23年度特別企画展「動物の考古学」記念講演会、2011.9.3

特別講演、前橋ホテル2F紅雲、「設楽コレクションとは何か」、「講演会時空を越えてふるさとの魅力再発見」平成23年度群馬県文化資産発掘・活用事業、2011.9.24

特別講演、神奈川県埋蔵環境文化財センター、「関東地方における農耕文化の成立」、神奈川県考古学同好会10月例会、2011.10.21

セミナー、ひたちなか市埋蔵文化財センター、「再葬墓とその社会（公開講座「ひたちなか市の考古学」第3回『弥生時代の墓制と社会』）」2010.2.27

セミナー、飛ノ台史跡公園博物館、「墓制から読み解く先史社会—縄文から弥生へ—（『飛ノ台史跡公園博物館 縄文大学』）」、2010.10.6

セミナー、神奈川県埋蔵環境文化財センター、「弥生時代の始まり（平成22年度考古学ゼミナール『始まりの考古学』）」、2010.10.8

その他、朝日カルチャーセンター横浜、「弥生時代研究の最前線—邪馬台国とその南北世界—」、2010.7～2010.9

その他、朝日カルチャーセンター横浜、「縄文時代研究の最前線—さまざまな疑問に答える—」、2011.2～2011.3

その他、朝日カルチャーセンター横浜、「儀礼と祭祀の考古学—縄文から律令時代まで—」、2011.10～2011.12

その他、静岡市SBS学苑、「古代史探訪 縄文文化研究の最前線—さまざまな疑問に答える—」、2011.4

その他、静岡SBS学苑、「古代史探訪 縄文の農耕・弥生の農耕」、2011.10

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

新潟県教育委員会、新潟県村上市山元遺跡調査指導委員会委員、2010.4～2012.3

静岡市教育委員会、静岡市文化財保護審議会委員、2010.4～

静岡県教育委員会、静岡県出土文化財価格評価員、2010.12～

佐倉市教育委員会、史跡井野長割遺跡整備検討会委員、2010.4～

佐倉市教育委員会、佐倉市文化財保護審議委員、2011.4～

伊豆の国市教育委員会、大仁町史編纂委員会委員、2010.4～

考古調査士資格認定機構、考古調査士資格認定機構資格審査専門委員会委員、2010.4～

国立歴史民俗博物館、国立歴史民俗博物館採用・昇任選考委員会委員、2010.7～2010.8

国立歴史民俗博物館、客員教授、2011.4～

群馬県教育委員会、群馬県文化財保護審議会委員、2010.8～2012.7

松戸市教育委員会、松戸市史上巻改訂事業原始・古代部会員、2011.4～

03 美術史学

教授 小佐野 重利 OSANO, Shigetoshi

1. 略歴

- 1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学
1980年9月 パドヴァ大学美術史学科専門課程(Scuola di Perfezionamento)
(イタリア政府給費留学生) ～1982年10月
1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（美術史学修士）
1983年4月 東京大学大学院博士課程 ～1985年4月15日
1985年4月 東京大学文学部助手（美術史学科）～1987年3月
1987年4月 多摩美術大学美術学部講師（西洋美術史）～1989年3月
1989年4月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等芸術）～1993年3月
1993年4月 東京大学文学部助教授（美術史学科）～1994年6月
1994年6月 東京大学文学部教授（美術史学科）～1995年3月
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授に配置換え（文学部教授兼任）
(1995年9月～12月 ジョン・ポール・グッティ財団グッティ美術史人文学研究所招聘研究者)
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）
教授を兼任
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長（兼務）～2009年3月

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋近世美術史 イタリア中世・ルネサンス美術 アルプス南北の美術交流 比較美術史

b 研究課題

- ①イタリア中世末、ルネサンス期の美術を特に絵画史の観点から、古代美術および同時代のアルプス以北の美術との影響関係をも検討しながら幅広くかつ詳細に研究すること。
- ②西洋美術作品における身振り言語の機能に関して、隣接研究分野（文化史、民俗学、文化人類学、考古学、社会学、記号学）の先行研究成果も踏まえ、再検討を加え、新しい様式学および図像学的研究のモデルを模索研究すること。
- ③美術の展開に果たした芸術家の旅行の意義に関する包括的研究。
- ④ヴェローナの画家一門バディエーレ家（14-16世紀）の包括的な作品現地調査・資料収集研究の継続。
- ⑤1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討 ——写真家アドルフォ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツイレーリ伯爵の研究（研究代表者：平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑥国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究（研究代表者：平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）
- ⑦西欧17世紀以降の王侯の絵画コレクションの形成における複製絵画の影響（研究代表者：平成23-25年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究課題）

c 主要業績

(1) 論文

- 小佐野 重利、「ウフィツィ美術館自画像コレクション—光と影に彩られたその歴史—」、『カタログ「ウフィツィ美術館自画像コレクション—巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010』、pp.19-29、2010.9
Shigetoshi Osano, “La Collezione di autoritratti della Galleria degli Uffizi: una storia ammantata di luci ed ombre”, *Autoritratti dalla Collezione della Galleria degli Uffizi* (a cura dell’ autore), The Asahi Shimbun, 2010, pp.12-23, 2010.9
小佐野 重利、「ウフィツィ美術館自画像コレクションの毀誉褒貶—2、3の考察」、『美術史論叢』、No.27 (2011)、pp.130-113、2011.3

Shigetoshi Osano, "L'histoire de l'art au Japon et son avenir", *Diogene*, 229-230, Janvier-Avril 2010, pp. 174-196, 2011.3

Shigetoshi Osano, "Adolfo Farsari fotografo dell'album "Viste e Costumi del Giappone" negli Anni Ottanta del XIX secolo", *Asiatica Ambrosiana. Saggi e ricerche di cultura religioni e societa' dell'Asia*, 3, pp. 105-127, 2011.10

Shigetoshi Osano, "The Exhibition of Self-Portraits from the Uffizi Gallery in Japan in 2010-11 and the Donation of Three Japanese Artists' Self-Portraits", *Bollettino degli Uffizi 2010* (Gli Uffizi. Studi e Ricerche 22), pp. 39-43, 2011.10

小佐野 重利, 「トスカナ大公国メディチ家のフェルディナンド大公子の絵画収集における複製絵画」、『文化交流研究』、No. 25、55-71 頁、2012.3

(2) 解説

小佐野 重利, 「国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究—学術調査研究から展覧会に至るまで—」、『国立国際美術館ニュース』、2010.12 no. 181、pp. 2-3、2010.12

小佐野 重利, 「ウフィツィ美術館自画像コレクション展開催記念と平成 20-22 年度科学研究費補助金・基盤研究 (B) の研究成果一部公開を兼ねた日伊講演会の報告」、『美術史論叢』、No.27 (2011) 、pp. 134-131、2011.3

(3) 学会発表

国際、小佐野 重利 Osano Shigetoshi, 「Adolfo Farsari fotografo dell'album "Viste e Costumi del Giappone" negli Anni Ottanta del XIX secolo」, Classe di studi sull'Estremo Oriente. III Dies Academicus, I Sessione, Venerdì 22 - sabato 23 ottobre 2010, Accademia Ambrosiana, Milano, Piazza Pio XI, 2 - Sala delle Accademie, 2010.10.22

国際、Shigetoshi Osano, 「What About: The Chinese Literati' s View of Calligraphy and Painting ("書画" shuhua); a Reconsideration of What is Considered Art in China and Japan」, International Conference (CIHA Colloquium) 30 June - 2 July 2011: Aesthetics and Techniques of Lines between Drawing and Writing, Biblioteca degli Uffizi, Salone Magliabechiano, Loggiato degli Uffizi, 50122 Firenze/ Kunsthistorisches Institut in Florenz - Max-Planck-Institut, Photothek, Palazzo Grifoni Budini Gatta, Via dei Servi 51, I-50121 Firenze, 2011.6.30

(4) 啓蒙

小佐野 重利, 「イタリアとフランドル、西欧と日本—美術史研究から異文化接触のあり方を見る」、『地中海学会月報』、335 (2010/12) 、p. 4、2010.12

Shigetoshi Osano, "Testimone di un doppio sogno", *Gli Uffizi. Studi e Ricerche. I pieghevoli*. 45, page unnumbered, 2011.3

小佐野重利, 「仏のような温かい掌の上で」、『美の軌跡—デューラーから中村彝 前川誠郎の美学』(展覧会カタログ)、pp. 12-13、新潟県立近代美術館、2011.9

木島俊介×小佐野重利, 「特集 2 西洋美術を語る <対談>」、『青春と読書』、第 47 巻第 2 号 2012 年 2 月号、16-21 頁、2012.1

(5) 監修

Shigetoshi Osano e Kazuaki Ura, *Autoritratti dalla Collezione Galleria degli Uffizi*, The Asahi Shimbun, 2010.9

小佐野 重利ほか、『ウフィツィ美術館自画像コレクション—巨匠たちの「秘めた素顔」1664-2010』、朝日新聞社、2010.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、イタリア文化会館、日伊講演会「巨匠たちの素顔 —ウフィツィ美術館自画像コレクション展開催を記念して—」、"La fortuna della collezione di autoritratti degli Uffizi: alcune riflessioni" / 「ウフィツィ美術館自画像コレクションの毀誉褒貶—2、3の考察」、2010.9~2010.9

特別講演、ブリヂストン美術館土曜講座、「イタリアとフランドル、西欧と日本—美術史研究から異文化接触のあり方を見る」、2010.9~2010.8

(2) 行政

日本学術会議 史学委員会 連携会員 2011.10~

(2) 学会

国内、美術史学会、常任委員、2010.6～2012.3

国内、美術史学会、代表委員、2010.4～2012.3

国際、国際美術史学会C I H A、Bureau メンバー（副会長）、2011.1～2012.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国立西洋美術館評議員会評議員、2010.4～2011.3

花王芸術・科学財団、選考委員、2010.4～2012.3

損保ジャパン美術財団、評議員、2010.4～2012.3

鹿島美術財団、選考委員、2010.4～2012.3

大塚美術財団、評議員、2010.4～2012.3

Accademia Ambrosiana、Academicus (Academy member) in classe di studi sull'Estremo Oriente、2010.10～2012.3

教授 **佐藤 康宏** SATO, Yasuhiro

1. 略歴

1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業
1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）入学
1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美術史学専攻）修了
1980年4月 東京国立博物館学芸部資料課に勤務（文部技官）
1981年4月 文化庁文化財保護部美術工芸課に出向
1989年10月 同上 絵画部門文化財調査官
1994年10月 東京大学文学部に出向（助教授）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美術史学）
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（美術史学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史を専攻する。主たる分野は絵画・版画の歴史。

b 研究課題

室町時代末期から江戸時代初期にかけての風俗画、江戸中期の若冲・蕭白と浮世絵、中後期の南画をおもな研究領域としているが、近年は平安・鎌倉時代の絵巻や近代の洋画も論文の主題にするなど、論及の対象は拡大した。いわゆる〈新しい美術史学〉が提起した記号論、社会史、精神分析などの観点を日本絵画の解釈に生かすとともに、作品と文献史料の双方で絵画史研究のための基礎資料を整備することに努めている。

c 主要業績

(1) 著書

単著、佐藤康宏、『国宝の美 41号 絵画 13 風俗画』、朝日新聞出版、2010.6

単著、佐藤康宏、『もっと知りたい伊藤若冲 生涯と作品 改訂版』、東京美術、2011.7

(2) 論文

佐藤康宏、「横断する龍——曾我蕭白『雲龍図』」、『美術史論叢』、28号、1-26頁、2012.3

(3) 書評

Matthew Philip McKelway, *Capitalscapes: Folding Screens and Political Imagination in Late Medieval Kyoto*,
University of Hawai'i Press、佐藤康宏、「書評 マシュー・マッケルウェイ『都のながめ』」、『美術史論叢』、
28号、45-49頁、2012.3

(4) 解説

佐藤康宏、「池大雅筆 比叡山真景図」、『國華』、1380号、32-35頁、2010.10

(5) 啓蒙

- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 12 楽屋落ち」、『UP』、450号、48-49頁、2010.4
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 13 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本」、『UP』、451号、6-7頁、2010.5
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 14 技官たち」、『UP』、452号、24-25頁、2010.6
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 15 前略 横尾忠則様」、『UP』、453号、20-21頁、2010.7
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 16 力を抜く」、『UP』、454号、50-51頁、2010.8
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 17 コカコーラの壘の中のトカゲ、と寺山修司は日本を呼んだ」、『UP』、455号、18-19頁、2010.9
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 18 美術史学評論家の生活と意見」、『UP』、456号、18-19頁、2010.10
- 佐藤康宏、「江戸中期、南画の斬新さに思いを馳せる」、『美術の窓』、325号、192-193頁、2010.10
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 19 受験社会科不案内」、『UP』、457号、26-27頁、2010.11
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 20 人生に必要な知恵はだいたい阪神タイガースから学んだ」、『UP』、458号、28-29頁、2010.12
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 21 かくも重き不在」、『UP』、459号、26-27頁、2011.1
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 22 長いお別れ」、『UP』、460号、22-23頁、2011.2
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 23 生半可な翻訳者」、『UP』、461号、44-45頁、2011.3
- 佐藤康宏、「若沖における墨と色」、『美術史論叢』、27号、77-101頁、2011.3
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 24 日本美術の特質——暫定的に」、『UP』、462号、34-35頁、2011.4
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 25 東大教師が新入生にすすめる日本美術史以外の本 その二」、『UP』、463号、32-33頁、2011.5
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 26 トポグラフィー」、『UP』、464号、34-35頁、2011.6
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 27 あまりに遠し」、『UP』、465号、20-21頁、2011.7
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 28 日の丸なんか背負うな」、『UP』、466号、36-37頁、2011.8
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 29 ベルメールの子供たち」、『UP』、467号、22-23頁、2011.9
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 30 福井利吉郎はいかにして鍛えられたか」、『UP』、468号、16-17頁、2011.10
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 31 言葉以前」、『UP』、469号、32-33頁、2011.11
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 32 信仰の悲しみ」、『UP』、470号、34-35頁、2011.12
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 33 料理長殿、御用心」、『UP』、471号、32-33頁、2012.1
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 34 仏像は美術か」、『UP』、472号、26-27頁、2012.2
- 佐藤康宏、「日本美術史不案内 35 卑小なる幻影」、『UP』、473号、38-39頁、2012.3
- 佐藤康宏、「十六世紀日本の都市図——宋代の都市図との関係」、『美術史論叢』、28号、51 - 72頁、2012.3

(6) マスコミ

『若沖屏風』は本人の作?』、『朝日新聞朝刊』、2010.5.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 委嘱教授、放送大学、「日本美術史 (08)」、2010.4~2012.3
- 特別講演、静岡県立美術館、「若沖における墨と色」、2010.5
- 特別講演、中央研究院歴史言語研究所 (台湾)、「十六世紀日本の都市圖與宋代都市圖的關係」、2010.11
- 特別講演、東京大学文学部公開講座、「引用と変奏——日本美術の作られ方」、2011.6

(2) 行政

- 文化庁、文化審議会専門委員 (文化財分科会)、2010.4~2012.3
- 文化庁、文化財買取評議会委員、2011.12~2011.12

(3) 学会

国内、美術史学会、常任委員、2010.4~2012.3

(4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

- 國華編輯委員会、編輯委員、2010.4~2012.3
- 國華賞選衡委員会、選衡委員、2010.4~2012.3
- 倫雅美術奨励基金、倫雅美術奨励賞候補者推薦委員、2010.4~2012.3

鹿島美術財団、推薦委嘱者、2010.4～2012.3
練馬区立美術館運営協議会委員、2010.7～2012.3
財団法人教育美術振興会、教育美術・佐竹賞ゲスト審査員、2011.4～2011.5
第18回MOA岡田茂吉賞審査委員、2012.3

教授 **秋山 聰** AKIYAMA, Akira

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業（文学士）
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）
1997年2月 フライブルク大学哲学部 Ph.D
1997年4月 電気通信大学電気通信学部助教授（～1999年3月）
1999年4月 東京学芸大学教育学部助教授（～2006年3月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 同上准教授
2011年3月 同上教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史

c 主要業績

(1) 編著

Akira Akiyama/Kana Tomizawa(Kitazawa) eds., *Images and Visions in Christian and Buddhist Culture*, Tokyo 2012.

(2) 論文

秋山聰、「扮装好きな二人のアルブレヒト アルブレヒト・デューラーと枢機卿アルブレヒト・フォン・ブランデンブルク」、『SPAZIO』、69、2010.9

秋山聰、「肖像」名声の存続のためのメディア」、『デューラー版画・素描展カタログ』、国立西洋美術館、2010.10

秋山聰、「足跡と足裏の図像学：デューラーの足裏への執着についての一試論」、『SPAZIO』、70、2011

秋山聰、「イメージとヴィジョン 東西比較の試み」、『死生学研究』16号、2011

秋山聰、「発展的コメント：前近代におけるデューラー受容」、『言語文化』28、72-76頁、2011

Akira Akiyama, 「Interrelationship of Relics and Images in Buddhist and Christian Traditions: Comparative and Performative Aspects」、『*Spatial Icon: Performativity in Byzantium and Medieval Russia*, ed. by Alexei Lidov』、pp.643-660、2011

秋山聰、「初期近世ドイツ美術における検閲をめぐるノート」、『西洋美術研究』、16号、141-153頁、2012.6

秋山聰、「西洋中近世における像を用いた儀礼をめぐるノート」、『美術史論叢』、28、74-86頁、2012.3

Akira Akiyama, “Images and Visions in Christian and Buddhist Culture”, in: Id./Kana Tomizawa(Kitazawa) eds., *Images and Visions in Christian and Buddhist Culture*, Tokyo 2012.3.

(3) 解説

秋山聰、「グンプ、グッテンブルン、ベルクハイデ、ベックリー、フォン・シュトックの展覧会出品作品のカタログ作品解説および略歴」、『ウフツィ美術館自画像コレクション展カタログ』、2010.9

秋山聰、「デューラー版画・素描展出品作品 10 点のカタログ解説 (小枢機卿、大枢機卿、フリードリヒ賢明公、ピルクハイマー、伝マルガレーテ・デューラー、メランヒトン、エラスムス、フェルンビューラー、聖コロマンとしてのシュタビウス、オーストリアの守護聖人)」、『デューラー版画・素描展カタログ』、2010.10

(4) 翻訳

監訳 (市川佳世子、甲斐義明訳)、ミケーレ・バッチ、「ビザンチンと西洋中世における生動するイコン：比較的観点から」、『死生学研究』15号、2011年

監訳 (甲斐義明、荒川仁美訳) ハーバート・L・ケスラー、「雲に描く：中世のイメージを現実として、イメージとして読む」、『死生学研究』16号、2011年

(5) 学会発表等

国内、秋山聰、「西洋中近世における像(イメージ)の生動性をめぐって」、地中海学会研究会、2010.4.24

国内、秋山聰、「デューラーのイタリア旅行」、地中海学会秋季連続講演会、ブリジストン美術館、2010.10.9

国内、秋山聰、「発展的コメント：前近代のデューラー受容」、デューラー・シンポジウム、明治学院大学、2011.11.17

国内、秋山聰、「イメージとヴィジョン 東西比較の試み」、G-COE 公開・国際シンポジウム「イメージとヴィジョン 東西比較の試み (死生と造形文化 III)」、2011.2.13

国際、秋山聰 (M. シュトイェ博士と共同で)、「美術における宗教の客体化についての比較文化的研究セクションについて」、国際美術史学会ニュルンベルク世界大会のための座長会議、ニュルンベルク、ゲルマン国立博物館、2011.5.15

国内、秋山聰、「ベックリオンとフィレンツェ」、地中海学会秋季連続講演会、ブリヂストン美術館、2011.11.19

(6) 啓蒙

秋山聰、「芸術家の神話学」(連載)、『フェーマス』、2010年4月号～2012年3月号

秋山聰、「西欧中近世における像(イメージ)の生動性をめぐって」、『地中海学会月報』、332、2010.9

秋山聰、「デューラーとイタリア旅行」、『地中海学会月報』、336、2011.1

(7) 予稿・会議録

国際会議、Akira Akiyama、「Human Remains and Figurative Images: A Comparison between Buddhist and Christian Practice」、*Dialogue on Death & Life: Views from Egypt*, Bibliotheca Alexandrina, Alixandria, Egypt, 2010.10.3 (『*International Symposium Dialogue on Death & Life: Views from Egypt*』、pp. 6-7 (アラビア語および英語))

(8) 会議主催 (チェア他)

国際、ミニ・シンポジウム「礼拝像の生動性をめぐって」、実行委員長、チェア、東京大学、2010.5.13

国内、「展覧会「ウフィッツィ美術館自画像コレクション展」、実行委員、損保ジャパン東郷青児美術館、2010.9.13～2010.11.14

国内、「美術史学会東支部大会シンポジウム「自画像を考え、自画像から語る」、チェア、「自画像の視点・服装・目的・ほか」、2010.10.23

国際、「エジプト・日本学術交流シンポジウム：死者の追悼と文明の岐路 2011年」、チェア、2011.9.23

(9) 共同研究 (産学連携除く)

国内、参画、国立民族学博物館、「物質性の民俗学」、2011～

(10) 研究テーマ

G-COE「死生学の展開と組織化」事業推進担当者、～2012.3

科学研究費補助金、基盤研究 (B)、「像(イメージ)の生動化についての比較美術史的研究」、研究代表者、～2011.3

科学研究費補助金、基盤研究 (B)、小佐野重利、研究代表者、「国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究」 研究分担者、～2011.3.

科学研究費補助金、基盤研究(B)、「美術と宝物の相関性についての比較美術史的研究」、2011.4～

科学研究費補助金、基盤研究(B)、小佐野重利、研究代表者、「西欧 17 世紀以降の王侯の絵画コレクションにおける複製絵画の影響」、研究分担者、2011.4.～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学大学院文学学術院、「西洋美術史」、2010.4～2010.9

非常勤講師、青山学院大学文学部、「芸術史特講 (2)」、2010.4～2012.3

非常勤講師、神戸大学大学院文学研究科・文学部、「西洋美術史」、2010.7
ブリヂストン美術館地中海学会主催土曜講座講師、2010.10; 2011.11.

(2) 学会

地中海学会常任委員、2010.4～
美術史学会常任委員、2010.4～2011.5.
国際美術史学会国内委員会委員、2010.4～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国立西洋美術館、客員研究員、2010.4～2011.3.
国立民族学博物館、共同研究員、2011.4～
鹿島美術財団推薦委嘱者、2010.4～
雑誌 西洋美術研究、編集委員、2010.4～
オンライン・ジャーナル *Art in Translation*, Member of the Advisory Board, 2010～
学術雑誌（イタリア）*Iconographica*, Member of the Advisory Board, 2012～

04 哲学

教授 **天野 正幸**

AMANO, Masayuki

1. 略歴

- 1975年 9月 東京大学人文科学研究科博士課程（哲学）中途退学
- 1975年10月 山形大学人文学部講師（倫理学）
- 1981年 4月 山形大学人文学部助教授（倫理学）
- 1985年 4月 東北大学文学部助教授（哲学）
- 1989年 4月 東京大学文学部助教授（哲学）
- 1993年12月 東京大学文学部教授（哲学）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（哲学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学, 特にギリシャ哲学

b 研究課題

プラトンの哲学および倫理思想の研究

c 主要業績

(1) 論文など

天野正幸、「プラトンの現実的理想国家論」、『ギリシャ哲学セミナー論集』、9、ギリシャ哲学セミナー、54-66頁、2012

3. 主な社会活動

(1) 学会

「哲学会」、役員・委員、理事、1989.4～

教授 **高山 守**

TAKAYAMA, Mamoru

1. 略歴

- 1973年 3月 東京大学文学部卒業
- 1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
- 1982年 4月 南山大学文学部助教授
- 1988年 4月 東京大学教養学部助教授
- 1990年 4月 東京大学文学部助教授
- 1994年 4月 東京大学文学部教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る
- 2001年 3月 京都大学博士（文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近代哲学

b 研究課題

概要

- 1) 因果必然性を理由必然性に解消することにおいて、必然性、偶然性、および、人間の自由というものの関係性を確定し、それぞれのあり方を明確化する。
- 2) とりわけ、人間が自由であるということの内実を浮き彫りにし、その自由論を家族論へと展開する。人間のもっとも基本的な自由のあり方を、家族というあり方のうちに見いだそうと試みる。家族なるものの崩壊が、人間の自由というものの、ひいては、人間のもっとも重要なあり方の崩壊につながりうるのではないか。

(以上、二つの課題遂行の基盤は、いずれもヘーゲル哲学である。)

c 主要業績

(1) 論文

高山守、「家族の新たな基礎づけ——哲学的自由論のもとで——」、『論集』、29、1-21 頁、2011.3

高山守、「絶対的な自由」をめぐって、『ヘーゲル哲学研究』、17、1-5 頁、2011.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京芸術大学（2010年度、2011年度）、広島大学（2011年度）

(2) 学会

日本哲学会、哲学会、日本ヘーゲル学会、日本シェリング協会、日本フィヒテ協会

(3) 行政

動物実験委員会委員、学生懲戒委員会委員

教授 一ノ瀬 正樹 ICHINOSE, Masaki

1. 略歴

- | | |
|----------|-------------------------------------|
| 1981年3月 | 東京大学文学部第一類哲学専修課程卒業 |
| 1984年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了 |
| 1988年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学 |
| 1988年4月 | 東京理科大学理工学部非常勤講師（～1991年3月） |
| 1991年4月 | 東洋大学文学部専任講師 |
| 1994年4月 | 東洋大学文学部助教授 |
| 1995年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 |
| 1997年11月 | 東京大学より博士（文学）の学位を取得 |
| 2002年7月 | 英国オックスフォード大学客員研究員（～2003年7月） |
| 2007年1月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る） |
| 2011年1月 | 英国オックスフォード大学 Honorary Fellow（現在に至る） |

2. 主な研究活動

a 専門分野

因果論、人格概念の研究、確率の哲学、死刑論、意思決定理論、動物倫理、自由と責任、音楽化された認識論、イギリス経験論

b 研究課題

原因概念と責任概念の連携をめぐる認識論における規範性の役割の研究など

c 主要業績

(1) 単著

一ノ瀬正樹、『功利主義と分析哲学—経験論哲学入門』、日本放送出版協会、2010年3月、280頁

一ノ瀬正樹、『死の所有—死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学』、東京大学出版会、2011年1月、408頁

一ノ瀬正樹、『確率と曖昧性の哲学』、岩波書店、2011年3月、320頁

(2) 共著

一ノ瀬正樹、『ヒトと動物の死生学—犬や猫との共生、そして動物倫理』、新島典子氏との共編著、

秋山書店、2011年3月、167頁(担当部分・「まえがき」pp.3-9、「動物への配慮」の欠落と充実」、pp.143-159.)

一ノ瀬正樹、『低線量被曝のモラル』、伊東乾・影浦映・児玉龍彦・島菌進・中川恵一諸氏との共編著、

河出書房新社、2012年2月、351頁(担当部分・「はじめに」pp.1-9、「因果関係とは何か—低線量被曝の因果的影響をめぐって」pp.219-250.)

(3) 論文

一ノ瀬正樹「原因と結果と自由と」、中公クラシックス・土岐邦夫・小西嘉四郎訳『ヒューム 人性論』所収の解説、中央公論新社、2010年7月、pp.1-24.

一ノ瀬正樹「戦争をめぐる事実と規範」、『戦争と戦没者をめぐる死生学』、東京大学大学院人文社会系研究科グローバルCOE「死生学の展開と組織化」ワークショップ報告論集、2010年9月、pp.106-114.

一ノ瀬正樹、「触法精神障害者についての医療診断をめぐる不確実性」、『論集』第29号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2011年3月、pp.23-39.

一ノ瀬正樹、「死んだらおしまい—形而上学と死生学と応用哲学と」、『応用哲学を学ぶ人のために』戸田山和久・出口康夫編に所収、世界思想社、2011年5月、pp.84-95.

一ノ瀬正樹、「ヒューム自由論の三つのスキャンダル」、『思想』第1052号、岩波書店、2011年12月、pp.334-355.

一ノ瀬正樹、「日本における低線量被曝論争の構図」、『東アジアの死生学 IV』、東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」、2012年3月、pp.38-58.

一ノ瀬正樹、「期待効用の概念をめぐる覚え書き—原発事故と低線量被曝問題に寄せて」、『論集』第30号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、2012年3月、pp.1-33.

(4) 学会発表

国内、一ノ瀬正樹、「生命現象と自由」、第10回東京大学生命科学シンポジウム、2010.5.1.

一ノ瀬正樹、「「動物への配慮」の欠落と充実」、死生学シンポジウム「ヒトと動物の関係をめぐる死生学」第二部「動物の倫理」での伊勢田哲治氏発表および鶴田静氏発表へのコメント、東京大学理学部小柴ホール、2010.9.4.

一ノ瀬正樹、「死の被害性」、日本イギリス哲学会第35回研究大会・緊急セッション「東日本大震災のなかで—イギリス哲学研究からのメッセージ」提題、京都大学、2011.3.28.

一ノ瀬正樹、「無常と不確実性にまみれて—事実・評価・対策の三区分別を踏まえつつ—」、第6回応用倫理・哲学研究会 東京大学緊急討議会「震災、原発、そして倫理」の「導入」、東京大学人文社会系研究科、2011.7.8.

一ノ瀬正樹、「音楽化された認識論 再訪」、応用哲学会臨時大会シンポジウム「音楽と哲学：表現の限界」、京都大学文学研究科、2011.9.23.

一ノ瀬正樹、「東日本大震災後の未体験ゾーン—日本における低線量被曝論争の構図—」、日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」、国立中山大学社会科学学院、台湾・高雄市、2011.10.7.

一ノ瀬正樹、「特別講演・低線量被曝について」、哲学会第50回研究発表大会、東京大学文学部二番大教室、2011.12.4.

一ノ瀬正樹、「原発事故と放射能問題をめぐる論争の帰趨」、東京大学グローバルCOEプログラム「死生学の展開と組織化」研究会議「慰霊と被曝をめぐる死生学」、長崎市バストウエスタンプレミアホテル長崎、2011.12.23.

海外、Masaki Ichinose, "Degrees of Freedom and Life Science", *Metaphysics of Science Conference*, Kyung Hee Global Research Network Team, Seoul, Korea, 5 August 2010.

Masaki Ichinose. "Who is a Victim of Homicide?", *The 2010 Uehiro Lectures, Modes of Responsibility*, Part 1. University of Oxford, Oxford Martin School, Old Indian Institute, Broad Street, 16 November 2010.

Masaki Ichinose. "Freedom, Responsibility, and Natural Phenomena", *The 2010 Uehiro Lectures, Modes of Responsibility*, Part 2. University of Oxford, Faculty of Philosophy, Lecture Room, 10 Merton Street, 22 November 2010.

Masaki Ichinose. "Death Penalty and Human Rights", *The 2010 Uehiro Lectures, Modes of Responsibility, Part 3*. University of Oxford, St Cross College, St Giles, 25 November 2010.

Masaki Ichinose. "Rethinking The Death Penalty: Uncertainties over Harm, Blame, and Dangerousness", *Tenth East-West Philosophers' Conference*. Plenary Session "Distinguishing Worth and the Worthwhile", University of Hawaii at Manoa, East-West Center, Imin Conference Center, 18 May 2011.

一ノ瀬正樹、「死生学プロジェクトの現在」、*The First Social Science and Humanities Forum between Japan and Russia*, Moscow State University, Moscow, Russia, 8 December 2011.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

講義「死刑について考える」、川崎市市民アカデミー「現代日本における「死生学」の展開」、2011年12月12日

(2) 学会

哲学会理事長

教授 **榊原 哲也** SAKAKIBARA, Tetsuya

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程退学
1988年4月 東京大学文学部助手
1992年4月 立命館大学文学部助教授
2001年4月 立命館大学文学部教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2009年9月 東京大学より博士（文学）の学位を取得
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ現代哲学、ケアの哲学

b 研究課題

ドイツ現代哲学のなかでも、とりわけフッサール、デュルタイ、ハイデガー等によって展開された現象学・解釈学に関する歴史的・体系的研究を行っている。これまで積み重ねてきたフッサール研究については、1冊の書物にまとめたものを、2009年11月に公にした。また以上の文献的研究と並行して、現象学的哲学の今後の展開の可能性のひとつとして、「看護」を中心とする「ケア」の営みを現象学の視点から基礎づけ解明する試みも行っている。

c 主要業績

(1) 論文

Tetsuya Sakakibara, "Reflection Upon the Living Present and the Primal Consciousness in Husserl's Phenomenology," in: Dieter Lohmar and Ichiro Yamaguchi (eds.), *On Time - New Contributions to the Husserlian Phenomenology of Time*, Phaenomenologica 197, pp. 251-271, 2010

Тетсуя САКАКИБАРА [Tetsuya Sakakibara], “Переживание болезни и феноменология медицинского ухода за больными” [The Experience of Illness and the Phenomenology of Nursing], *Ежегодник по феноменологической философии [Annual for phenomenological philosophy]*, вып. 2, pp. 87-99, 2010.11

Tetsuya Sakakibara, “Phenomenology in a different voice: Husserl and Nishida in the 1930s,” in* Carlo Ierna, Hanne Jacobs, and Filip Mattens (eds.), *Philosophy, Phenomenology, Sciences. Essays in Commemoration of Edmund Husserl*, Phaenomenologica 200, pp. 679-694, 2010.12

榊原哲也、「現象学的看護研究とその方法——新たな研究の可能性に向けて」、『看護研究』、第44巻第1号、5-16頁、2011.2

榊原哲也、「育むということ——現象学的哲学の視点から——」、『文化看護学会誌』、第3巻第1号、50-53頁、2011.3

榊原哲也、「西田とハイデガーにおける「私」と「汝」、『立命館文學』第625号、55-65頁、2012.2

榊原哲也、「「生きる意味」を支えるもの——「自殺に傾く人」へのケアについての現象学的一考察——」、『論集』第30号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、34-47頁、2012.3

(2) 学会発表

国内、榊原哲也、「「生きる意味」を支えるもの」、第34回日本自殺予防学会総会 シンポジウムⅢ「減らない自殺——社会・文化的な視点から考える」提題、大妻女子大学千代田キャンパス、2010.9.11

国際、Tetsuya Sakakibara, “A Phenomenological Study on Caring for People with Suicidal Inclinations,” The 4th International Conference of PEACE (Phenomenology for East Asian Circle), Institute of Philosophy, National Sun Yat-Sen University (國立中山大學哲學研究所), Kaohsiung, Taiwan, 2010.12.11

国際、Tetsuya Sakakibara, “Phenomenological Research of Nursing and Its Method,” Phenomenology as Bridge between Asia and the West Conference “Phenomenology and the Other Disciplines,” Saint Louis University, Saint Louis, USA, 2011.5.24

国際、Tetsuya Sakakibara, “Ich und Du bei Nishida und Heidegger,” Heidegger-Nishida-Symposium 2011 „Zwischen Heidegger und Nishida“, Schloss Meßkirch, Meßkirch, Deutschland, 2011.9.10

(3) 会議主催 (チェア他)

国内、「日本現象学会第33回研究大会」、チェア、シンポジウム「ケアの現象学」、立命館大学、2011.11.5~2011.11.6

国際、The 6th BESETO Conference of Philosophy、主催、東京大学 (本郷キャンパス)、2012.1.7~2012.1.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立命館大学大学院応用人間科学研究科客員教授、2010.4~2010.9、2011.4~2011.9

日本赤十字看護大学非常勤講師、2010.4~2012.3

事業協力、日本ホスピス緩和ケア研究振興財団による平成22年度事業助成「対応困難なスピリチュアルペインの事例検討集の作成事業」エキスパートパネルへの参加、2010.11.3

特別講演、京都府立医科大学医学部看護学科、「現象学的看護研究・入門」、2011.8.22

講義、NHK文化センター柏教室、「現象学という哲学は死生をどう見るのか」、2011.12.2

特別講演、第4回日本不安障害学会学術大会 (於早稲田大学国際会議場)、「不安・抑うつ臨床哲学——現象学の視点から」、2012.2.5

(2) 学会

哲学会理事 2010.4~2012.3

日本哲学会事務局幹事 2010.4~2011.5

日本哲学会評議員 2011.6~2012.3

日本現象学会委員 2010.4~2012.3

実存思想協会理事 2010.4~2012.3

実存思想協会幹事長・事務局長 2011.10~2012.3

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士
1990年10月 東京大学教養学部助手（～1993年3月）
1993年4月 神戸大学文学部助教授（～2006年3月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、特に西欧近世哲学と現代フランス哲学

b 研究課題

<内在性の哲学>の体系化の作業として次の三つが現在の研究課題である。

- 1/西洋形而上学の形成史の探求とそれを背景とした<存在の一義性>の哲学の系譜学の作業。
- 2/現代フランスにおける差異哲学の検討。
- 3/非人間主義 (inhumanisme) の哲学の展開。

c 主要業績

(1) 著書

- 共著、松永澄夫他、『叢書 哲学への誘い——新しい形を求めて I巻 哲学の立ち位置』2010.10
共著、神崎繁他、『西洋哲学史II 「知」の変貌・「信」の階梯』2011.12

(2) 書評

「中田光雄『正義、法・権利、脱・構築——現代フランス実践思想研究——』（創文社、2008年）及び『現代を哲学する 時代と意味と真理——A・バディウ、ハイデガー、ウイトゲンシュタイン——』（理想社、2008年）」（松本潤一郎氏との共著）『フランス哲学・思想研究』第15号、2010年、pp.190-194.

(3) 学会発表

「内在の途——スピノザと無限性」哲学会、（村上勝三氏との）ワーク・ショップ「超越の途と内在の途—『デカルト研究』三部作完結を機会として」、東京大学文学部、2010年10月30日。

“Philosophy of Non-Humanism reconsidered: Deleuze and *Ritornello*”, The 5th Annual Philosophical Meeting BESETO “Rationality in Human Life”, Peking, 2011年1月9日.

« Philosophie de la ritounelle. Deleuze & Guattari et pop-music », LA PHILOSOPHIE FRANCAISE CONTEMPORAINE EN ASIE, Journée d'étude internationale organisée par Hisashi Fujita et Arnaud François, Centre International d'Étude de la Philosophie Française Contemporaine (CIEPFC) et Master Erasmus Mundus EuroPhilosophie, École normale supérieure, salle Dussane, 2011年2月10日.

「ライブニッツはスピノザ哲学の何に惹かれ、何を恐れたのか？」文部省科学研究費「近現代哲学における虚軸としてのスピノザ」第2回研究会「ライブニッツとスピノザ、18世紀へ」（日本ライブニッツ協会・スピノザ協会との共催）提題、大阪大学文学部、2011年3月6日

「<ヘーゲルかスピノザか>再考——規定は否定か——」日本ヘーゲル学会第13回研究大会、シンポジウム「ヘーゲルとスピノザ」、お茶の水女子大学、2011年6月18日。

3. 主な社会活動

(1) 学会

- スピノザ協会、運営委員、2010.4～2012.3
日本哲学会、評議員、2011.5～
日仏哲学会、理事、2010.9～

(2) 非常勤講師

- 京都大学非常勤講師、2011.4～2012.3

05 倫理学

教授 関根 清三 SEKINE, Seizo

1. 略歴

- 1974年3月 東京大学文学部倫理学科卒業（文学士）
- 1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了（文学修士）
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
- 1979年4月 日本学術振興会奨励研究員（所属：東京大学倫理学科）～1980年3月
- 1980年8月 ドイツ学術交流会（DAAD）・ドイツ福音教会（DW）奨学生としてミュンヘン大学福音神学部旧約学科に留学（1985年2月に博士号審査合格）～1985年3月
- 1981年10月 ミュンヘン大学学術助手～1985年3月
- 1985年4月 北海道大学文学部助教授（宗教学）～1988年3月
- 1988年4月 東京大学文学部助教授（倫理学）～1994年6月
- 1989年6月 ミュンヘン大学より Dr. Theol. [神学博士] の学位を取得
- 1994年6月 東京大学文学部 [1995年4月より大学院人文社会系研究科] 教授（倫理学）～現在
- 1996年3月 東京大学より博士（文学）の学位を取得
- 1997年6月 大学入試センター研究開発部教授を併任～1998年3月
- 2000年4月 放送大学客員教授を併任～2004年3月
- 2004年3月 ウィーン大学およびエッセン大学で客員教授～同7月

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋倫理思想史・旧約聖書学

b 研究課題

ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教倫理思想の研究

c 主要業績

(1) 著書

単著、関根 清三、『ギリシア・ヘブライの倫理思想』、東京大学出版会、2011

編著、関根 清三、『アブラハムのイサク献供物語：アケダー・アンソロジー』、日本キリスト教団出版局、2012

(2) 論文

関根 清三、「旧約聖書と哲学：老死観編（上）」、『共生学：上智大学共生学研究会』、第4号、pp.20-40、2010.7

関根 清三、「旧約聖書と哲学：老死観編（下）」、『共生学：上智大学共生学研究会』、第5号、pp.72-91、2011.2

関根 清三、「キリスト教の決算：その功罪を顧みると」、『出会いーキリスト教講演・談話集』、第21号、pp.19-50、2011.3

関根 清三、「内村鑑三の旧訳読解と震災の年の日記」、『内村鑑三』別冊『環』、18号、pp.52-87、2011.12

関根 清三、「生の贈与と死にまつわる罪責：ヘブライズムの場合」、『倫理学年報』、第59集、pp.35-45、2012

関根 清三、「貢献心は本能か」、『一般財団法人 ホモコントリビューエンス研究所 Website』、www.homo-contribuens.org/jp/kyodokenkyu/pdf/thesis_taki_017.pdf、2012

関根 清三、「終わり・黙示・メシア：終末論の諸態と批判的展望」、『旧約聖書を学ぶ人のために』、pp.1030-1125、2012.2

(3) 学会発表

国内、関根 清三、「日本の旧約学：学の回顧と学界の展望」、日本旧約学会、同志社大学、2010.10.12

国内、関根 清三、「キリスト教の決算：その功罪を顧みると」、桃山学院大学キリスト教講演会、桃山学院大学、2010.11.12

国内、関根 清三、「一神教の功罪：キリスト教の場合」、東京大学エグゼクティブ・プログラム講義、2010.12.18

国内、関根 清三、「思想史から見た死生観」、東京大学医学部 GCOE 生命・医療倫理基礎コース講義、2011.2.4

国内、関根 清三、「命についての考え方：キリスト教を基点として」、東京大学エグゼクティブ・プログラム講義、2011.12.17

(4) 教科書

『西洋哲学の誕生』、関根 清三、分担執筆、放送大学教育振興会、2010

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

オリエンズ研究所、「キリスト教の光と闇」、2011.5.20

アスペン・フェローズ懇話会、「キリスト教の光と闇」、2011.6.25

日本クリスチャン・アカデミー 修学院フォーラム、「いのちについて ―キリスト教倫理と一般倫理のはざまから―」、2011.11.5

(2) 学会

国内、日本倫理学会、評議員、1995～

国内、日本宗教学会、評議員、2001～

国内、日本基督教学会、理事、2005～

国内、日本旧約学会、会長、2010～

教授 **菅野 覚明** KANNO, Kakumyo

1. 略歴

1979年3月 東京大学文学部倫理学科卒業
1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（倫理学）
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（～1985年3月）
1986年4月 東京大学文学部助手（～1991年3月）
1991年4月 東京大学文学部助教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2005年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史

b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

c 主要業績

(1) 著書

単著、『女子の心得』、PHP 研究所、2010.5

(2) 論文

「礼の思想と経済活動」、儒教文化研究・国際版、第14輯、2010.8

(3) 解説

「両頭を超える三頭」、一般雑誌、『本』、35巻3号、2010.3

「仏性とは何であったか」、一般雑誌、『本』、35巻5号、2010.5

「いまどきはやりの名付け方」、一般雑誌、『月刊「武道」』、523号、2010.5

「数えられる真理」、一般雑誌、『本』、35巻7号、2010.7

「団塊の世代」、一般雑誌、『月刊「武道」』、526号、2010.8

「無を修行する」、一般雑誌、『本』、35巻9号、2010.9

(解説) 相良亨『武士道』、講談社学術文庫、2010.9
「虚空の如く学ぶ」、一般雑誌、『本』、35巻11号、2010.11
「夢見る力」、一般雑誌、『月刊「武道」』、529号、2010.11
「修行の要件」、一般雑誌、『本』、36巻1号、2011.1
「花の季節」、一般雑誌、『月刊「武道」』、532号、2011.3
「般若の音色」、一般雑誌、『本』、36巻3号、2011.3
「仏とは何か」、一般雑誌、『本』、36巻5号、2011.5
「仙陀婆」「如常」、一般雑誌、『月刊「武道」』、535号、2011.5
(解説) 相良亨『本居宣長』、講談社学術文庫、2011.6
「公案を現成させよ」、一般雑誌、『本』、36巻7号、2011.7
「譲れぬ一線」「新たな日本人の創出」、一般雑誌、『月刊「武道」』、538号、2011.8
「修行の前と後」、一般雑誌、『本』、36巻9号、2011.9
「三思一言」、一般雑誌、『月刊「武道」』、541号、2011.11
「迷いにおける悟り」、一般雑誌、『本』、36巻11号、2011.11
「修行は誰のものでもない」、一般雑誌、『本』、37巻1号、2012.1
「雪裏梅花」、一般雑誌、『月刊「武道」』、544号、2012.2
「ただ一つの時」、一般雑誌、『本』、37巻3号、2012.3
「ここで生まれ出で、ここに死ぬ——武士道と愛国心」、一般雑誌、『修親』、632号、2012.3
「差異を窮める」、一般雑誌、『本』、37巻5号、2012.5
「園芸術の極意」、一般雑誌、『月刊「武道」』、547号、2012.5
「修行者の寿命」、一般雑誌、『本』、37巻7号、2012.7

(4) 啓蒙

「日本人にとって宗教心とは何か(三)」、一般雑誌、『飢餓陣営』、35号、2010.3
「教育勅語に学ぶ」、一般雑誌、『月刊「武道」』、546号、547号、2012.4、2012.5

(5) マスコミ

新聞、(書評)「をぐり——再生と救済の物語」山梨日日新聞、2012.1.8
新聞、(書評)鳥居明雄著『をぐり——再生と救済の物語』、図書新聞、3059号、2012.4.21

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

慶應義塾大学非常勤講師、1997～2011
皇學館大学客員教授、2010.4～
陸上自衛隊幹部学校非常勤講師
海上自衛隊幹部学校非常勤講師
海上自衛隊幹部候補生学校非常勤講師
日本武道館「月刊武道」編集顧問、2009.4～
関東管区警察学校外部講師(非常勤)
警察大学校外部講師(非常勤)

(2) 学会

日本神道史学会、2002～
鈴屋学会、一般会員、1991～
社団法人 日本弘道会、特別会委員

1. 略歴

1981年 3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年 3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年 4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年 3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年 4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年 3月
1987年 4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年 3月
1989年 4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年 3月
1990年 4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年 4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年 10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年 4月	東北大学文学部人文社会学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年 4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年 10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年 10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動**a 専門分野**

倫理学原理論、近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 主要業績**(1) 著書**

- 単著、熊野 純彦、『埴谷雄高 夢みるカント』、講談社、2010
- 編著、熊野 純彦、『近代哲学の名著』、中央公論新社、2011
- 編著、熊野 純彦、『西洋哲学史 I』、講談社、2011
- 編著、熊野 純彦、『西洋哲学史 IV』、講談社、2012

(2) 論文

- 熊野 純彦、「空間経験の基層」、『国立民族博物館調査報告』、90、23-39頁、2010
- 熊野 純彦、「世界と他者を肯定する思考のために」、『現代思想』、40-3、322-334頁、2012
- 熊野 純彦、「マルクスをどう読むか」、『立命館哲学』、23、1-38頁、2012

(3) 解説

- 熊野 純彦、「西田の影のもとで——詩人哲学者の系譜について」、『図書』、2010-2号、18-21頁、2010

(4) 翻訳

- 個人訳、I. Kant、「Kritik der reinen Vernunft」、熊野 純彦、『純粹理性批判』、作品社、2012

06 宗教学宗教史学

教授

島 蘭 進

SHIMAZONO, Susumu

1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部宗教学宗教史学科（文学士）
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学宗教史学）
1974年4月 東京大学博士課程単位取得退学（同上）
1974年4月 日本学術振興会奨励研究員
1977年4月 筑波大学哲学思想学系研究員（文部技官）
1981年4月 東京外国語大学外国語学部日本語学科助手（のち専任講師、助教授に昇進）
1984年8月 カリフォルニア大学バークレイ校留学（フルブライト奨学金） ～85年7月
1987年4月 東京大学文学部宗教学宗教史学科助教授
1994年1月 東京大学文学部宗教学宗教史学科教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 ～継続中
1996年3月 シカゴ大学宗教学部客員教授 ～96年5月
1997年11月 フランス社会科学高等研究員招聘教授 ～97年12月
2000年6月 テュービンゲン大学日本文化研究所客員教授 ～00年7月
2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター創生部門（死生学）教授（兼任）
2006年2月 カイロ大学文学部客員教授 ～06年4月
2011年3月 ベネチア・カフスカリ大学客員教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

- (1) 死生学の諸問題について考察している。①死生観、死生学という概念・学知の歴史、②日本人の死生観と宗教の関わり、③生命倫理と人間の尊厳をめぐる諸問題、④死生学の方法論的・理論的枠組み、など。21世紀COEプログラム「死生学の構築」の拠点リーダーとして、新たに興隆しつつある死生学の基礎づくりが重要な仕事になってきている。
- (2) 近代日本の宗教の歴史を総体としてとらえ、現代日本人の生活や思考において、宗教がどのような位置を占めているかを明らかにしようとしている。明治維新以降、また第二次世界大戦後の日本の宗教史を理解する鍵概念として「国家神道」があるが、この概念の意味するものを正確にとらえることを目標としている。
- (3) 現代世界の中で宗教がどのように多様な形をとって広がっているかを調査研究を踏まえて研究し、現代人の精神状況について考察してきている。発展途上地域でのファンダメンタリズムを含めた救済宗教的な復興運動の強力な展開、先進国での従来の「宗教」という語に収まらないようなスピリチュアルなものへの関心の拡充などを統合的に理解することを目指している。
- (4) 一九世紀から二〇世紀のはじめに確立してくる有力な宗教理論の意義について検討し、新たな宗教理論の可能性について考察する。これに関わって、(1)(2)のどちらの問題にも関わるが、そもそも「宗教」という概念がどのような背景をもったものであり、どれほど適切なものであるかを検討するという課題についても研究を進めている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、岡田典夫、小澤浩、櫻井義秀、島蘭進、中村圭志、『はじめて学ぶ宗教——自分で考えたい人のために』、有斐閣、2011.4

(2) 論文

島蘭進、「死生学」、大内尉義・秋山弘子編『新老年学[第3版]』東京大学出版会、1753-1772頁、2010.1

島蘭進、「宗教研究から見た安丸史学——通俗道徳論から文明化論へ」、安丸良夫・磯前順一編『安丸史学への対論』ペリかん社、137-164頁、2010.3

島蘭進、「救済からスピリチュアリティへ——現代宗教の変容を東アジアから展望する」、『宗教研究』、365号、127-153頁、2010.9

- 島菌進、「日本仏教と正法の理念——仏教の社会倫理の基礎概念の見直し」、『東 ASIA 宗教文化研究』、第 2 号、181—208 頁、2010.10
- 島菌進、「丸山眞男の宗教理解——日本仏教史と思想史の方法論」、安丸良夫・喜安朗編『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆』山川出版社、67—96 頁、2010.12
- 島菌進、「吉本隆明の思想と宗教——一九四〇年代から六〇年代まで」、安丸良夫・喜安朗編『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆』山川出版社、133—175 頁、2010.12
- 島菌進、「未来をどう生きる」、矢崎義雄編『医の未来』(第 28 回日本医学会総会) 岩波書店、203—220 頁、2011.3
- 島菌進、「日本人論と国家神道の関わり」、『宗教と現代がわかる本 2011』平凡社、198—205 頁、2011.3
- Susumu Shimazono, “The Ethical Issues of Biotechnology: Religious Culture and the Value of Life,” *Current Sociology*, 59(2), 2011.6
- Susumu Shimazono, “The Many Faces of Religious Studies and the Multiplicity of Religious Traditions in Japan,” *Religion*, vol.41, no. 2, pp.175-179, 2011.6
- 島菌進、「付論 民衆宗教研究の新たな視角とその可能性」、武内房司編『越境する近代東アジアの民衆宗教—中国・台湾・香港・ベトナム、そして日本』明石書店、331—337 頁、2011.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本大学医学部、慶応大学医療看護学部、東京医科歯科大学、国際仏教学大学院大学、上智大学グリーンケア研究所などで非常勤、あるいは臨時の講義を行っている。

(2) 学会

日本宗教学会、日本印度学仏教学会、日本生命倫理学会、日本文化人類学会、日本社会学会、日本スピリチュアルケア学会、地球システム倫理学会、日本人体科学会、「宗教と社会」学会、宗教倫理学会などに所属している。

(3) 日本学術会議会員

哲学委員会に所属し、2012 年初めから第 1 部の「福島原発災害後の科学と社会とあり方を問う分科会」のまとめ役を務めている。

(4) 日本宗教学会常務理事、日本生命倫理学会理事、日本スピリチュアルケア学会副理事長、地球システム倫理学会理事、日本人体科学会監事などを務めている。

教授 **鶴岡 賀雄** TSURUOKA, Yoshio

1. 略歴

- 1976 年 3 月 東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業
- 1979 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程修士課程修了
- 1982 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程博士課程単位取得退学
- 1982 年 4 月 日本学術振興会奨励研究員 (～1983 年 3 月)
- 1984 年 4 月 東京大学文学部助手
- 1985 年 4 月 工学院大学工学部専任講師
- 1987 年 4 月 工学院大学工学部助教授
- 1996 年 4 月 工学院大学工学部教授
- 1998 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001 年 10 月 東京大学より博士 (文学) の学位取得
- 2002 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学、西洋宗教思想

b 研究課題

- (1) 近世西欧（とくにスペインとフランス）における神秘思想の研究を一貫して続けている。中世後期から現代にいたる西欧の宗教思想の展開を、広い視点で見通す研究を目指している。
- (2) 上の研究課題の鍵語である「神秘主義」という概念、およびその実質的内容について、近現代（19世紀末～20世紀の西欧と日本）における歴史的形成過程およびその意義についての研究を進めている。
- (3) これら宗教思想史的研究の成果に基づいて、現代世界における「宗教」なるものの存在意義について考察したい。

c 主要業績

(1) 著書

辞書・辞典・事典、星野英紀、池上良正、氣多雅子、島菌進、鶴岡賀雄編、『宗教学事典』、丸善、2010.10
編著、鶴岡賀雄・深澤英隆、『スピリチュアリティの宗教史 上』、リトン、2010.12
編著、鶴岡賀雄・深澤英隆、『スピリチュアリティの宗教史 下』、リトン、2012.1
編著、加藤信朗・鶴岡賀雄・桑原直己・田畑邦治、『キリスト教と日本の深層』、オリエンツ宗教研究所、2012.3

(2) 論文

鶴岡賀雄、「聖書読解における「多義性」、「著者性」、「身体性」」、『共生学』（上智大学共生学研究会）、4号、151-164頁、2010.7
鶴岡賀雄、「「神秘主義」は「西欧キリスト教」的か？——十字架のヨハネの「神秘的」祈りの読解から——」、『東西宗教研究』、9、4-47頁、2010.7
鶴岡賀雄、「近世神秘神学の誕生——近世カルメル会学派の「神秘主義」と「スコラ学」——」、『東京大学宗教学年報』、28、1-18頁、2011.3
鶴岡賀雄、「死後の生——死生学における〈宗教の領分〉」、『死生学年報 2011』、229-242頁、2011.3
鶴岡賀雄、「十字架のヨハネの〈神秘思想〉——〈神との合一〉をどう語るか——」、『カトリック研究所論集（仙台白百合女子大学）』、16、1-40頁、2012.3
鶴岡賀雄、「西欧キリスト教における「身心変容」研究への展望」、『身心変容技法研究』、1、15-20頁、2012.3
鶴岡賀雄、「「宗教」的共同体の成立根拠——「共感」の根源をめぐって」、宮本久雄・武田ほなみ編『あなたの隣人はだれか——現代における共生の行方』日本キリスト教団出版局、203-230頁、2012.3

(3) 書評

「中村弓子『心身の合一——ベルクソン哲学からキリスト教へ』、東信堂」、鶴岡賀雄、『宗教研究』、364、168-174頁、2010.6
「岡部雄三、『ヤコブ・バーメと神智学の展開』、岩波書店」、鶴岡賀雄、『宗教研究』、368号、206-212頁、2011.6

(4) 学会発表

国際、鶴岡賀雄、「Construction of 'Mystical Experience' in Early Modern Christianity, XXth World Congress of the International Association for the History of Religions, Toronto, 2010.8.19

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、鶴岡賀雄、分担者(部局内に代表者あり)、「国際連携による仏教学術知識基盤の形成」、2010～
文部科学省科学研究費補助金、鶴岡賀雄、分担者(部局内に代表者あり)、「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」、2010～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学文化構想学部、「現代人間論系演習 宗教と言語」、2010.4～
非常勤講師、立教大学大学院キリスト教学研究科、「キリスト教史研究・比較宗教論」、2010.10～2012.3
非常勤講師、国際仏教学大学院大学、「宗教哲学」、2011.4～2012.3

(2) 学会

国内、日本宗教学会、常務理事、学会誌編集委員長
国内、宗教哲学会、理事
国内、新プラトン主義協会、理事、2010.9～

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学法学部卒業（法学士）
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学・宗教史学）
1982年7月 ヘブライ大学（エルサレム）人文学部タルムード学科特別生等（1985.7.）
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
1986年5月 筑波大学哲学・思想系文部技官（～1990.8.）同講師（～1991.3.）
1991年4月 東京大学文学部助教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 現在に至る
1998年10月～11月 ボストン大学人文学部客員研究員

2. 主な研究活動**a 専門分野**

宗教史学・ユダヤ教

b 研究課題

継続して以下の3つの主要な課題に取り組み、成果は講義において主として反映させるとともに、3つの課題全体にわたって、2009年に上梓した『ユダヤ教の歴史』（山川出版社）において、その成果を簡潔にまとめることができた。

- (1) 宗教的想像力の比較宗教学の構想：聖書とタルムードの宗教を基盤とするユダヤ教の宗教思想の特徴を、自由の精神の意義に重点を置いて宗教と法の基礎理論を構築し、これをモデルにして、他の古典的宗教との比較考察を行う。
- (2) 宗教学の観点から近現代を見直す作業：近代に遭遇したユダヤ教の葛藤と変容を研究の出発点として、近代の人間観、世界観を形成した啓蒙主義とロマン主義の今日的意義を考察し、現代世界の喫緊の課題の淵源とその解決のための枠組みを提示し、もって日本の近代の理念を再検討する。
- (3) イエス時代のユダヤ人社会に関する宗教史的研究：「旧約時代・中間時代・新約時代」という歴史分割をせずに、ヘレニズム・ローマの影響下における古代地中海世界の宗教として、ユダヤ宗教文化の特徴を把握する試みを行う。

c 主要業績**(1) 論文**

市川裕、「ユダヤ教の現代メシア論—ショーレムとレヴィナスの対話—」、『東京大学宗教学年報』、第27号 東京大学宗教学研究室発行、1—15頁、2010.3

市川裕、「Persecution and Theodicy in the Case of Medieval Japanese Buddhism」、『Monotheism in Asia』、東京大学文学部・パルイラン大学共催国際シンポジウム報告書、107—122頁、2010.12

市川裕、「ユダヤ教におけるタルムード学の意義と批判精神の育成」、『宗教研究』、第369号、57—82頁、2011.9

市川裕、「国制としてのユダヤ教とイスラーム：ギリシア的ポリテイア概念からのアプローチ」、『CISMOR ユダヤ学会議』、第4号 同志社大学一神教学際研究センター発行、48—66頁、2011.10

市川裕、「悔い改めと和解—伝統的宗教思想からのアプローチ」、『共生学』、第6号、上智大学共生学研究会、36—56頁、2011.11

市川裕、「貧しさの中の感謝：ユダヤ教の食と祭祀」、『上智大学キリスト教文化研究所紀要30』、31—45頁、2012.3

(2) 書評

手島勲矢、『ユダヤの聖書解釈—スピノザと歴史批判の転回』、岩波書店、市川裕、『日本の神学』、第45号 日本基督教学会編、133—138頁、2010.9

(3) 研究報告書

市川裕、「Monotheism in Asia 東京大学パルイラン大学共催国際シンポジウム報告書」、科学研究費基盤研究（B）平成18—21年度「近代ユダヤ文化論の学際的総合研究」、英文、全155頁。発表者延べ21名の報告を掲載、2010.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、創価大学、「比較文化総合講座」、2010.4～2010.4
非常勤講師、立教大学大学院、「聖書学演習（旧約）」、2010.4～2010.9
非常勤講師、東京芸術大学音楽学部、「宗教学」、2010.7～2010.9
非常勤講師、慶應義塾大学文学部、「哲学倫理学特殊 I I」、2011.4～2012.3
非常勤講師、東京女子大学、「キリスト教と諸宗教B」、2011.4～2011.9
非常勤講師、東京芸術大学音楽学部、「宗教学」、2011.7～2011.9
非常勤講師、立教大学大学院キリスト教学研究科、「聖書学演習（旧約）」、2011.10～2012.3
特別講演、日本中東学会第16回公開講演会、「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム—中東に誕生したアブラハムの宗教」、2010.7～
特別講演、未来エネルギー研究協会、「ユダヤ的発想とユダヤ教の学問的伝統—ノーベル賞受賞者にユダヤ人が多い理由に迫る」、2011.8～

教授 池澤 優

IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学文学部 I 類宗教学宗教史学専門課程卒業
1982年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程進学
1987年9月 ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程（カナダ・ヴァンクーバー）入学
1990年8月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程退学
1990年8月 筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
1993年4月 筑波大学地域研究研究科（哲学思想学系）助手昇進
1994年5月 ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
1995年4月 東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教史学研究室助教授転任

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生観研究

死者儀礼・祖先崇拜といわれる宗教現象を比較文化的視点から考察することを主たる目的とし、そのための基盤となる研究対象を中国古代に設定する。この問題関心は三層に分けることができ、まず、(A)古代中国の死ならびに死者（祖先）に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論を明らかにし、(B)それを通して死ならびに死者にかかわる宗教現象の普遍的構造とメカニズムを理論化し、(C)更にそこから凡そ人間にとって死と死者が有する意味について、現代における状況を視野に含めて、考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず中国古代における祖先崇拜の研究（上記(A)）にかかわる分野として

- (1) 中国の殷周春秋時代の宗教現象を出土文字資料（甲骨・金文）を用いて分析し、その意味を考える。
- (2) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料（簡牘・帛書・鎮墓文・画像石）を用いて、殷周時代の祖先崇拜が戦国時代以降の死生観と他界観に変化していく様態を明らかにする。
- (3) 殷周～隋唐時代における祖先崇拜・死者儀礼・他界観を全体的な宗教的宇宙観の中に位置づけることにより、“死者であること（死者性）”の基本的な在り方と変化を把握する。

(4) 儒家を中心とする諸典籍を資料として用い、殷周時代の祖先崇拝に内在していた世界観が「孝」として思想的に昇華され、それが中国の基本的価値観・人間観の一つとなったことを考察する。

祖先崇拝の比較研究（上記(B)）の分野として

(5) 中国古代の祖先崇拝と「孝」思想の分析によって得られた洞察を出発点として、祖先崇拝という宗教現象を比較文化的視点から検討する視座を用意する。

(6) 世界中の諸文化に現れる祖先崇拝を具体的に検討することによって、祖先崇拝の本質的意味と可変性を明らかにする比較研究を行う。

死生観と死者性に関する研究（上記(C)）として

(7) 諸宗教の死に関する儀礼や考えが表明している人間観や価値観は何であるのかを抽象化し、比較研究を行った上で、

(8) それを現代における死の状況や生命倫理と対照させ、現代の状況を客観的・批判的に捉える視座を用意する。

この内、(1)(2)(4)(5)は従来からの問題関心であるが、2001年度発刊の著書の中で系統的に見解を述べることができ、かなりの成果を挙げえた。(3)はその問題関心から派生してきた課題であり、現在最も中心的な活動になっている。また、この期間の研究の進展に伴い、上記(7)(8)という研究課題が次第に関心の中心を占めるようになってきている。

c 主要業績

(1) 論文

「現代的宗教性としての生命倫理——中国の事例を題材に」、『日台国際研究会議「東アジアの死生学へⅡ」』（『死生学研究』特集号）、東京大学大学院人文社会系研究科、30-45頁、2010.11.30

「甘肃省天水放馬灘一號秦墓「志怪故事」註記」、谷中信一編『出土資料と漢字文化圏』、汲古書院、179-211頁、2011.3.31

‘Observing Chinese Excavated Materials from a Perspective of Life and Death Studies: “Image Reversal of the Dead” during the Zhanguo, Qin, and Han periods,’ Bulletin of Death and Life Studies vol.7, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, pp9-35, 2011

「儒教的生命倫理」における“伝統”——Juria Tao ed., China: Bioethics, Trust, and the Challenge of the Market (2008)を題材として、『日韓国際研究会議「東アジアの死生学へⅢ」』（『死生学研究』特集号）、東京大学大学院人文社会系研究科、15-37頁、2011.3.15

「中国の生命倫理」、今井道夫・森下直貴編『生命倫理学の基本構図』（シリーズ生命倫理第1巻）、丸善、138-149頁、2012.1.31

「生命倫理と宗教——エンゲルハート再考」、日台国際研究会議『東アジアの死生学へⅣ』（『死生学研究』特集号）特集号、東京大学大学院人文社会系研究科、129-141頁、2012.3

(2) 学会発表

XXth Quinquennial World Congress of the International Association for the History of Religions パネル
“Appropriation of the Western Concept of “Religion” in Asian Cultural Traditions,” 企画・司会。University of Toronto, Canada, 2010.8.20

“The acceptance of the concept of “person” and the tradition of Confucianism in modern China: through bioethical discourses as modern religiousness,” XXth Quinquennial World Congress of International Association for the History of Religions, University of Toronto, Canada, 2010.8.20.

“Many Coexisting Gods, or One God with Many Names?: the Representation of the Supreme Deity in Ancient China,” 国際シンポジウム “Monotheism Characteristics in Asian Religions,” 2010.8.30

「儒教的生命倫理」における“伝統”——Juria Tao ed., China: Bioethics, Trust, and the Challenge of the Market (2008)を題材として、東京大学文学部 GCOE プログラム「死生学の展開」・成均館大学校共催日韓国際学術会議「東アジアの死生学へ」、2010.11.20

「東アジアの文化と現代の死生観——岸本英夫と傅偉勳の事例に見る宗教学者の死」、PESETO (北京・ソウル・東京) 三大学人文学会議、2012.3.24

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學非常勤講師、2004.4～。慶應義塾大学、2009.3～2011.4。

(2) 学会

日本宗教学会、理事。中国出土資料學會、理事。東方学会、評議員。

(3) 行政

東京大学医学部倫理委員会委員、東京大学医学部附属病院臨床試験審査委員会委員、東京大学医学部附属病院法的脳死判定委員会委員。

准教授 **藤原 聖子**

FUJIWARA, Satoko

1. 略歴

1986年3月	東京大学文学部宗教学宗教史学専門課程 卒業
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 入学
1988年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程 修了
1988年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程 進学
1991年9月	シカゴ大学大学院ディヴィニティ・スクール宗教史専攻留学 (至1994年6月)
1995年12月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程単位取得退学
1996年1月	日本学術振興会特別研究員 (至1998年12月)
2001年4月	大正大学文学部国際文化学科助教授
2006年4月	大正大学文学部表現文化学科教授
2010年4月	大正大学文学部人文学科教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻宗教学宗教史学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学 (理論研究・比較研究)、宗教と教育の関係、アメリカの宗教

宗教学の基礎でありながら、20世紀後半以降、方法として成立し難くなった「比較」に注目し、その観点から、理論研究を行うとともに、ケーススタディとして宗教と教育の関係やアメリカの諸宗教を分析している。

b 研究課題

宗教比較の方法、宗教史の記述について、学界ならびに一般社会に見られる問題とその背景・原因を洗い出し、具体的対案を提示することを課題とする。個々の課題設定は以下の通りである。

(1) 比較理論の検討として、①対話というメタファーの功罪、②宗教分類概念の問題をとりあげる。

①「対話」(討議)は社会科学等では理論用語として多用されるが、宗教学では「宗教間対話」の意味で用いられることが多く、比較宗教研究もそのメタファーによりとらえられる傾向がある。社会科学系の「対話」概念と、宗教学の「対話」メタファーの異同を明らかにし、また、近年の宗教学内外の比較方法論争を参照することで、宗教学の比較に伴う固有の問題を考察し、宗教間対話モデルではない比較宗教のあり方を提示する。またその成果が、人類学などの隣接諸学にとってどのような意義をもちうるかについても論じる。

②「世界宗教」「民族宗教」の対概念をはじめ、宗教学で伝統的に用いられてきた宗教分類概念の妥当性を、昨今の批判理論に照らして検討する。特にマックス・ウェーバーの宗教社会学(「世界宗教の経済倫理」)の受容が、日本とアメリカの宗教学でどのように異なるかに焦点を当て、何がその違いをもたしたのか、それが今日の両国の学界・社会におけるマクロな宗教比較言説をどう規定しているかを調べる。

(2) 近現代社会の公教育において宗教がどう扱われてきたかに関する歴史的研究を行う。

ある国の公教育では宗教が排除される、他の国では宗教が取り込まれるという現象を、単に「宗教教育の有無」や「政教分離の有無」として見るのではなく、排除・吸収どちらの場合でもその前提として公権力により「宗教」が定義されていることに注目し、各国の教育制度と法令・教科書の中にその表れを探る。一般概念としての「宗教」のみならず、キリスト教、仏教といった各宗教に関する記述と、教育方法・思想や当該国の宗教・社会情勢の関係を調べる。対象国はイギリスとアメリカを中心とし、共同研究による10カ国比較の成果も取り入れる。

- (3) (2)の研究成果を踏まえ、国内の公教育における宗教の描き方・教え方に関する問題点を指摘し、改善のための具体的方策を示す。対象は中等教育から高等教育、社会人教育を含む。

c 主要業績

(1) 著書

- 単著、藤原聖子、『教科書の中の宗教』、岩波書店、2011.6
単著、藤原聖子、『世界の教科書でよむ〈宗教〉』、筑摩書房、2011.7
共著、藤原聖子、「宗教に現れるアメリカの特徴」 渡辺靖編『現代アメリカ』、有斐閣、2010.11

(2) 論文

- 藤原聖子、「「対話」としての比較研究、「批判」としての比較研究—宗教学からの問題提起—」、国立民族学博物館調査報告『人類学的比較再考』、283-307頁、2010.4
Satoko Fujiwara, “On Qualifying Religious Literacy: Recent Debates on Higher Education and Religious Studies in Japan,” *Teaching Theology and Religion*, 13/3, pp.223-236, 2010.7
藤原聖子、「テキサス州の教科書論争と宗教の関係」『宗教と現代がわかる本 2011』、238-241頁、2011.3
藤原聖子、「グローバル化時代の宗教知識教育」、『宗教研究』、85/369、293-318頁、2011.9
Satoko Fujiwara, “Has Deconfessionalization Been Completed?: Some Reflections upon Quebec's Ethics and Religious Culture (ERC) Program,” *Religion and Education*, 38/3, pp. 278-287, 2011.9

(3) 学会発表

- 国際、Satoko Fujiwara, “The Paradox of Religion Teaching,” XXth Quinquennial World Congress of the International Association for the History of Religions, University of Toronto, 2010.8.17
国際、Satoko Fujiwara, “Has Deconfessionalization Been Completed?: Some Reflections upon Québec's ERC Program,” XXth Quinquennial World Congress of the International Association for the History of Religions, University of Toronto, 2010.8.19
国内、藤原聖子、「宗教学における分類の問題と教育」、日本宗教学会、関西学院大学、2011.9.4
国際、Satoko Fujiwara, “Establishing Religion through Textbooks: The Paradox of Religion Teaching (Teaching about Religions) in Japan,” Multidisciplinary Science Forum, the US JSPS Fellows Alumni Association, Western Michigan University, 2011.10.29

(4) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、藤原聖子、分担者(部局内に代表者あり)、北米の宗教研究の調査・分析「宗教概念ならびに宗教研究の普遍性と地域性の相関・相克に関する総合的研究」(代表者：池澤優)、2010～
文部科学省科学研究費補助金、藤原聖子、代表者 「ポスト多文化主義における公教育と宗教の関係」、2012～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 非常勤講師、大正大学、「宗教学特論」、2011.9～

(2) 学会

- 国際、International Association for the History of Religions、executive committee、2010.8～
国内、日本宗教学会、理事、2011.4～

(3) 日本学術会議、連携会員、2011.10～

(4) 文化庁宗務課「海外の宗教事情に関する調査」への調査協力(カナダ担当)、2009～2011

07 美学芸術学

教授 西村 清和

NISHIMURA, Kiyokazu

1. 略歴

- 1966年3月 兵庫県立尼崎北高等学校卒業
- 1971年6月 東京大学文学部（美学芸術学専修課程）卒業
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
- 1976年5月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
- 1976年6月 岡山大学法文学部助手（美学美術史）
- 1977年6月 ドイツ連邦共和国・ミュンヘン大学へドイツ学術交流会（DAAD）奨学生として留学（～79年3月）
- 1979年7月 岡山大学法文学部講師
- 1983年4月 埼玉大学教養学部助教授（芸術論）
- 1990年4月 埼玉大学教養学部教授
- 1997年8月 アメリカ合衆国コロンビア大学客員研究員（文部省在外研究）（～98年4月）
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（美学芸術学）
- 2010年10月 東京大学大学院人文社会系研究科において博士（文学）取得

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学

b 研究課題

カント、シェリング、ヘーゲル、ゾルガーを中心としたドイツ観念論・ロマン派美学の研究から出発したが、遊戯論を研究するなかで、芸術と遊びとを同型の論法で扱う結果遊びの独自性を取り逃がしてしまう近代美学の不備を認識するにいたった。そこでわたしはあらためて現代における美学の諸問題、また現代アートに胚胎する諸問題をあらたな観点から論じようとするようになった。その際近代ヨーロッパ大陸の美学とはべつの可能性を開くものとして、英米系の分析的な美学・芸術哲学へと接近した。また「美学」をひろく美的現象や美的経験の哲学的考察として捉えることで、美学があつかうべき対象領域をたんに伝統的な「芸術」に限定せず、現代のわれわれがそこに身を置いている、複製技術やマス・メディアに支えられた多様な美的文化現象にまで広げようとした。こうしてフィクション、現代アート、キッシュや悪趣味、広告、写真といった問題を、これまでとはちがうかたちで論じる可能性を追求し、いくつかの著書を公刊してきた。

2009年11月には、伝統的なエクフラシスやパラゴネともかわることばとイメージの関係を体系的に考察した著書『イメージの修辞学——ことばと形象の交叉』を刊行した。これは、読書における想像力やイメージの関与、ことばによる小説を映画化する際の諸問題、ことばにおけるレトリックの中心的問題のひとつである隠喩が絵画や映像の形ではたして可能であるかどうか、さらにはミニアチュール挿絵やステンドグラス、壁画、歴史画、そして近代における小説の挿絵などの「物語る絵」のナラトロジー分析といった諸テーマをあつかったものである。

2011年12月には、自然の分析美学や環境美学にかかわるさまざまな問題を考察した著書『プラスチックの木でなにが悪いのか』を刊行した。さらに2012年3月には、4年にわたる科学研究費補助金による研究会「生活場所（ピオトープ）の美学——自然・環境・美的文化」の研究成果を編著『日常性の環境美学』として刊行した。

c 主要業績

(1) 著書

単著『プラスチックの木でなにが悪いのか——環境美学入門』、勁草書房、2011.12.

編著『日常性の環境美学』（編著）、勁草書房、2012.3

(2) 論文

「美的なもの」の分析美学、『哲学の探究』（哲学若手研究者フォーラム）、2010.6、pp. 18-30.

「〈内なる自然〉の美学——醜をめぐって」、『美学芸術学研究 29』（東京大学 美学芸術学研究室）、2011.3、pp. 85-116.

The Aesthetics of Abject Art, *JTLA (Journal of the Faculty of Letters. The University of Tokyo. Aesthetics)*, vol. 35, 2011. 3, pp. 13-25.

「(美学=感性学)における快と感情」、『美学芸術学研究 30』(東京大学 美学芸術学研究室)、2012. 3, pp. 295-322.

The Aesthetics of Smell and Taste for the Appreciation of Landscape, *JTLA (Journal of the Faculty of Letters. The University of Tokyo. Aesthetics)*, vol. 36, 2012. 3, pp.

(3) 学会発表

「アブジェクト・アートはアートか？」(美学会シンポジウム、2011.4、ヨコハマ創造都市センター)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

上智大学文学部非常勤講師、2010～

慶応大学文学部非常勤講師、2010～

日本大学文理学部非常勤講師、2011～

沖縄県立芸術大学芸術学部非常勤講師、2010～

(2) 学会

美学会、会長、2007. 10～2010. 10

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

大学評価・学位授与機構、運営委員会委員、2008～2012

日本学術会議、哲学委員会連携委員、2008～2011

日本学術会議、哲学委員会委員、2011～

教授 **渡辺 裕**

WATANABE, Hiroshi

1. 略歴

- 1972年3月 千葉県立千葉高校卒業
- 1977年3月 東京大学文学部第1類(美学芸術学専修課程)卒業
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(美学芸術学)修了
- 1983年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程(美学芸術学)単位取得退学
- 1983年7月 東京大学文学部助手(美学芸術学)
- 1986年4月 玉川大学文学部専任講師(芸術学科)
- 1991年4月 玉川大学文学部助教授
- 1992年4月 大阪大学文学部助教授(音楽学)
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(美学芸術学)
- 2001年7月 博士(文学)学位取得(東京大学)
- 2002年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

聴覚文化論、音楽社会史

b 研究課題

1. 音の文化の伝承、受容、流用にかかわるプロセスとメカニズムの歴史研究による解明。これまで、西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー、西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム、日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマを取り上げてきたが、最近では「音楽」だけでなく「音」一般にまで対象を広げ、むしろそういう中から様々なコンテクストと関わりつつ生成、変容するものとして、「音楽」という概念自体を捉え直すことをも射程に入れている。

2. 場所の表象、記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用の解明および芸術作品や感性的体験がその過程で果たす役割の考察。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩、映画のロケ地巡りとといった営みの考察、廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを起点に、主に写真や映像による表象の分析を通して、様々な立場や観点がぶつかり合い、また離合集散しつつ変容してゆく場としての文化のありようを捉えることを目指している。
3. 上記のような問題意識の、いわば「応用問題」として、1960年代の雑誌『朝日ソノラマ』や、同時代のドキュメンタリー・レコード、ドキュメンタリー映像などを題材に、この時期に起こった文化や文化観の大きな変容のありようを明らかにする試みを行っている。

c 主要業績

(1) 著書

『考える耳・再論——音楽は社会を映す』、春秋社、2010.7

『歌う国民——唱歌・校歌・うたごえ』、中公新書、2010.9

『聴衆の誕生——ポスト・モダン時代の音楽文化』、中公文庫、2012.2（初版：春秋社、1989.3）

(2) 論文

「『ノイズ』言説・再考——ジンタとチンドンをめぐる表象の生成と変容」、『文学』11巻6号、2010.11、pp.70-87

「映像による都市イメージの生成と変容——映画《Love Letter》と小樽のまちづくり」、『日常性の環境美学』（西村清和編、勁草書房）、2012.3、pp.252-280

「日本橋と高速道路——都市景観言説にみる美的判断の生成と変容の力学」、『美学芸術学研究』30、2012.3

(3) その他の寄稿

「東ドイツの美しい記憶？——『オスタルギー』のなかのベルリン」、『アステイオン』72、pp.184-187、2010.5

「窒息する文化——作品の公共性と著作権の横暴」、『アステイオン』73、pp.174-177、2010.11

「レコードと『純正な日本語』——バスガイドの語る《別府温泉地獄めぐり》は何をもたらしたのか」、『月刊みんぱく』403、pp.4-5、2011.4

「過剰な原理主義の時代？——『リマスター盤』、『古楽器演奏』、『アメリカ流民主主義』という三題噺」、『アステイオン』74、pp.188-191、2011.5

「文化としての『発車メロディ』——『サウンドスケープ』から『聴覚文化』へ」、『アステイオン』75、pp.178-181、2011.11

(4) 書評

塚原康子著『明治国家と雅楽——伝統の近代化／国楽の創成』（有志舎、2009）、『東洋音楽研究』76、pp.159-162、2011.8

(5) 学会発表

『鉄ちゃん』のサウンドスケープ——音楽の『環境化』再考、美学会東部会例会、東京大学、2012.3

(6) 受賞

第61回芸術選奨文部科学大臣賞（評論等部門）、『歌う国民——唱歌、校歌、うたごえ』（中公新書）、2011.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

兵庫県高齢者放送大学ラジオ講座「唱歌のもうひとつの顔」、2011.7.16

明治学院大学横浜キャンパス公開講座「歴史と現在 第4回 『音楽』」、2011.10.25

(2) 学会

美学会、委員、2010.4～

美学会、機関誌編集委員長、2010.11～

文化資源学会、理事、2010.7～

文化資源学会、機関誌編集委員長、2010.7～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

サントリー文化財団、サントリー学芸賞選考委員、2010.4～

企業メセナ協議会、助成認定審査委員、2011.4～

1. 略歴

- 1977年3月 東京教育大学附属高等学校卒業
1977年4月 東京大学教養学部文科3類入学
1981年3月 東京大学文学部第一類（美学芸術学専修課程）卒業
1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程入学
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程進学
1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
（その間 1987年10月～1988年9月 DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生としてハンブルク大学に留学）
1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1988年10月 神戸大学助教授，文学部（哲学科芸術学専攻課程）
（その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究）
1993年10月～ 神戸大学大学院文化学（博士課程）兼任
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学専門課程）助教授
2007年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）教授
（その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府の招聘によりドイツにて研究）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究、「感性の学」としての美学の歴史的再構成、18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究、および間文化的視点からの美学理論の構築

b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』以来の研究の一環として、美学・芸術学の基本概念の研究に従事している。その一端は2009年に公刊した『西洋美学史』（東京大学出版会）において示した。この書物は、学説史研究の持ちうる現代的な意味を問う試みでもある。

第二に、「感性の学」としての美学を歴史的に再構成し、現代の美学を刷新する作業に携わっている。これは数年後に『西洋美学史』第二巻として結実するはずのものである。

第三に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探り、その一端は『木村素衛——「表現愛」の美学』、および共編著である *Kulturelle Identitaet und Selbstbild. Aufklaerung und Moderne in Japan und Deutschland* の内に示した。

c 主要業績

(1) 著書

- 単著、小田部胤久、『木村素衛——「表現愛」の美学』、講談社、2010.9
共著、Tanehisa Otabe、『Gott, Natur, Kunst und Geschichte.』、Wien、2011
共著、Tanehisa Otabe、『Manfred Milz (ed.), Facing Mental Landscapes. Self-Reflections in the Mirror of Nature』、Olms、2011
共著、小田部胤久、『坂部恵——精神史の水脈を汲む』、水声社、2011.6
編著、Tanehisa Otabe、『Kulturelle Identitaet und Selbstbild. Aufklaerung und Moderne in Japan und Deutschland』、LIT Verlag、2011.8

(2) 論文

- 小田部胤久、「美学から見た日独交渉史——グローバル化の三段階——」、『言語文化』、27、13-23頁、2010
Tanehisa Otabe、「"Schoene Kunst muss als Natur anzusehen sein." Zu einer kleinen Ideengeschichte der Aesthetik」、『Internationales Jahrbuch fuer Hermeneutik』、9、pp. 147-160、2010
Tanehisa Otabe、「The Corporeity of Self-awakening and the Interculturality of Cultural Self-awakening: Motomori Kimura's Philosophy of Expression」、『International Yearbook of Aesthetics』、14、pp. 142-159、2010.8

小田部胤久、「魂とその根底——ライブニッツからシェリングまでの美学的言説の系譜学の試み」、『美学芸術学研究』、29、117-133頁、2011.3

Tanehisa Otabe、「Der Begriff der "petites perceptions" von Leibniz als Grundlage fuer die Entstehung der Aesthetik」、『JTTLA』、35、pp. 41-53、2011.3

Tanehisa Otabe、「Karl Loewith und das japanische Denken, das in zwei Stockwerken lebt」、『JTTLA』、36、2012

小田部胤久、「プラトンからの感性論＝美学の試み」、『美学芸術学研究』、30、2012.3

(3) 書評

秋庭史典 『あたらしい美学をつくる』、小田部胤久、『週刊読書人』、2011年8月12日号、4頁、2011.8

(4) 学会発表

国内、小田部胤久、「感性の理論——美学の立場から」、感性科学フォーラム、九州大学、2010.3.12

国際、Tanehisa Otabe、「Karl Loewith und das japanische Denken, das in zwei Stockwerken lebt」、Das 18. Symposium der Académie du Midi、Ales les Bains、2010.5.28

国際、Tanehisa Otabe、「Karl Loewith and Japanese Thinking That Consists of Two Floors: A Contribution to Intercultural Aesthetics」、The 18th International Congress of Aesthetics、北京大学、2010.8.9

国際、Tanehisa Otabe、「Japanese Aesthetics seen from Intercultural Point of View」、The 18th International Congress of Aesthetics、北京大学、2010.8.10

国際、Tanehisa Otabe、「Der Begriff der "petites perceptions" von Leibniz als Grundlage fuer die Entstehung der Aesthetik」、国際18世紀学会、グラーツ大学、2011.7.26

国際、Tanehisa Otabe、「Der „Grund der "Seele". Ueber Entstehung und Verlauf eines aesthetischen Diskurses im 18. Jahrhundert」、ドイツ哲学会、ミュンヘン大学、2011.9.14

国内、小田部胤久、「ライブニッツからの感性論＝美学——微小表象論の射程」、美学会全国大会（シンポジウム）、2011.10.17

国内、小田部胤久、「美学の生成と無意識」、シンポジウム「フロイトの時代」、東京大学文学部、2011.11.5

国内、小田部胤久、「「無意識」をめぐるヘーゲルとロマン主義——美学（史）の立場から」、ヘーゲル学会第14回研究大会、2011.12.18

国内、小田部胤久、「創造的資本としての近代美学」、シンポジウム「アートの社会的有用性」、京都精華大学情報館、2012.1.22

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、美学会、委員、2010.4～

国内、美学会、副会長、2011.4～

国内、日本シェリング協会、理事、2010.4～

国内、日本シェリング教会、役員・委員、2011.4～

国際、国際シェリング協会、役員・委員、2010.11～

国内、日本18世紀学会、代表幹事、2010.4～

国内、日本18世紀学会、役員・委員、2011.4～

国際、国際18世紀学会、役員・委員、2011.7～

1. 略歴

- 1979年3月 神奈川県立光陵高等学校卒業
1980年4月 東京大学教養学部文科Ⅲ類入学
1985年3月 東京大学文学部（美学芸術学専修課程）卒業
1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程入学
1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程修了
1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）博士課程入学
1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）博士課程単位取得退学
1995年1月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
1991年9月 広島大学総合科学部講師（地域文化研究）
1995年4月 広島大学総合科学部助教授（地域文化研究）
（その間、1995年7月～1996年4月、文部省在外研究員として、連合王国ロンドン大学、サセックス大学で特別研究員）
2002年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授（地域文化研究）
2007年4月 東京大学大学院総合文化研究科准教授（地域文化研究）
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（美学芸術学専門課程）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学芸術学

b 研究課題

第一に、観念連合主義や趣味など、近代イギリス経験論美学の歴史研究。その関連で、とりわけピクチャレスクの美学を包括的に扱ってきた。

第二に、イギリス庭園論の歴史研究。特に十八世紀に誕生したイギリス風景式庭園を、その背景の哲学・政治・経済思想などとあわせ、十七世紀および十九世紀から現代にいたる流れを視野に入れ研究した。最近ではコテージ・ガーデンについて、それが十九世紀の産物であることを、詳細に跡付けようとしている。

第三に、以上の歴史的対象の背景にある（広義の）美的イデオロギーの解明。たとえば、近代的イギリス経験論美学の中に残る共和主義的政治性・道徳性を、シヴィック・ヒューマニズムや公共性の視点から記述した。さらにイギリス庭園論や風景論を、いわゆるポスト植民地主義的・ジェンダー論的な観点から相対化した。

第四に、現代美学的関心から、庭園や環境設計、環境美学を、一般的に扱う試みも行っている。特に最近では、日常性の美学の問題を取り上げ、「トランス・エステティック」や世界の審美化の問題を批判的に論じている。またその関連で、ミュージック・ビデオという新しいメディアの可能性に注目し、論じた。

加えて、いまだ緒に就いたばかりだが、十八世紀イギリス美学（庭園論・風景論を含む）にも影響の深い古典主義的なフランス絵画理論の研究を行っている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、「庭園の中の道具——桂離宮外腰掛をめぐる」、西村清和編『生活環境の美学』（勁草書房）、2012.3.

(2) 論文

「趣=味 (taste, goût, gusto, Geschmack) ——味覚と美的判断力のアナロジー」、『日本18世紀学会年報』、第26号、7-9頁、2011.6

「Unmediated Nationalism: Science and Art in Shigetaka Shiga's *The Japanese Landscape* (1894)」*JTLA* (Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo, Aesthetics), Vol. 34 (2009): 65-81.

「地球を審美化する——日英庭園美学のはざまで」、『アルス・ウナ芸術論集』（アルス・ウナ芸術学会編集委員会）、25-35頁、2011.12

「コテージ・ガーデン——内向するイングリッシュネス(2)」、『美学芸術学研究』（東京大学・美学芸術学研究室）、29、135-169頁、2011.3.

「英米系の環境美学——自然鑑賞の適切さから歴史的多層性へ」、『アルス・ウナ芸術論集』(アルス・ウナ芸術学会編集委員会)、37-49 頁、2011.12.

「リチャード・ペイン・ナイト『風景』——解説と翻訳(1)」、『美学芸術学研究』(東京大学・美学芸術学研究室)、30、2012.3.

(3) 書評

「宮元健次『近世日本建築の意匠——庭園・建築・都市計画、茶道にみる西欧文化』」、『日本18世紀学会年報』第26号、2011.6

「小特集：近年のイギリス風景式庭園研究——Tim Richardson, *The Arcadian Friends*; Yu Liu. *Seeds of a Different Eden*; Martin Calder (ed.), *Experiencing the Garden in the Eighteenth Century*」、『日本18世紀学会年報』第27号、2012.6.

(4) 翻訳

A・D・ハーヴェイ「イギリスの歴史画——ベンジャミン・ウエスト、フィリップ・ジェームズ・ド・ラウザーバーク、J・M・W・ターナー」、『アルス・ウナ芸術論集』(アルス・ウナ芸術学会編集委員会)、51-59 頁、2011.12.

(5) 啓蒙

「ミュージック・ビデオ——Jポップのなかの凡俗性の美学」、『東京大学新聞』、第2546号、2011.4.

(6) 研究報告書

「古典主義絵画理論の射程——近世アカデミー的絵画論(特にデュフレノワ)の受容と変容」、平成16-18年度科学研究費補助金報告書、2010.6

「Aestheticising the Globe: Graden Aesthetics between the Japanese and English Traditions」、『第5回東方美学会・第16回日韓美学会・合同研究会報告書』(広島比較美学研究会、広島大学大学院総合科学研究科芸術存在論)、329-334 頁、2012.3.

(7) 学会発表

「地球を審美化する——日英庭園美学のはざままで」、アルス・ウナ芸術学会大会、2010.7

(8) 会議主催(チェア他)

「趣=味 (taste, goût, gusto, Geschmack) ——味覚と美的判断力のアナロジー」、日本18世紀学会・第32回全国大会、共通論題、2010.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

武蔵大学人文学部非常勤講師、2002～

(2) 学会

広島芸術学会、役員・委員、2002.4～

東北芸術学会、役員・委員、2002.4～

日本18世紀学会、役員・委員、2003.6～

08 心理学

教授 立花 政夫 TACHIBANA, Masao

1. 略歴

- 1972年 3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業（文学士）
- 1974年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（心理学）修了（文学修士）
- 1975年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（心理学）退学
- 1975年 4月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程（生理学）入学
- 1979年 3月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士）
- 1979年 4月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所・助手（生体情報研究系）
- 1979年 10月～1981年 3月 ハーバード大学医学部（神経生物学）研究員
- 1985年 1月～1985年 4月 シカゴ大学 Visiting Assistant Professor
- 1985年 5月～1985年 8月 ノースウェスタン大学 Visiting Associate Professor
- 1988年 10月 東京大学文学部助教授（心理学）
- 1994年 1月 東京大学文学部教授（心理学）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（心理学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

視覚神経科学

b 研究課題

視覚を成立させる神経機構を、細胞レベル・神経回路レベル・行動レベルで神経科学的に研究すること。

c 主要業績

(1) 論文

Itaru Arai, Masashi Tanaka, and Masao Tachibana, 「Active roles of electrically coupled bipolar cell network in the adult retina.」、『The Journal of Neuroscience』、Vol. 30, no. 27, pp. 9260-9270、2010.7

(2) 学会発表

国内、田中雅史、立花政夫、「キンギョ Mb1 型双極細胞における EGTA 感受性の異なるグルタミン酸放出経路」、視覚科学フォーラム、筑波、2010.8.26

国際、M. Tachibana and M. Tanaka、「Reciprocal and lateral inhibitory inputs at the axon terminal of goldfish retinal bipolar cells」、5th Asia and Oceania Conference for Photobiology、奈良、2011.8.1

国内、M. Tachibana, I. Arai, and M. Tanaka、「Lateral inhibition through electrically-coupled bipolar-cell network in the retina」、第34回日本神経科学大会、横浜、2011.9.15

国内、M. Tanaka and M. Tachibana、「Local and global inhibition at the axon terminal of goldfish retinal bipolar cells」、第34回日本神経科学大会、横浜、2011.9.16

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、東京薬科大学、「網膜における神経コーディングと逃避行動」、2010.7

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部心理学専攻卒業
1976年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程（心理学）
1976年4月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程 ～1983年3月
1978年9月	ブラウン大学心理学部大学院 ～1982年10月
1983年6月	ブラウン大学心理学部大学院 Ph.D. (Experimental Psychology)
1983年4月	日本学術振興会奨励研究員（東京大学文学部）
1984年4月	日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所研究専門調査員
1986年4月	(株)国際電気通信基礎技術研究所（ATR）主任研究員
1987年4月	(株)国際電気通信基礎技術研究所（ATR）主幹研究員
1990年11月	日本電信電話（株）基礎研究所主幹研究員
1995年5月	東京大学文学部助教授
1996年12月	東京大学文学部教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学

b 研究課題

心理物理学的手法や誘発電位（脳波）を用いた実験、およびモデリングの手法を用いて、視覚、聴覚の比較的低次のプロセス、特に運動視、両眼立体視のメカニズムの研究を進めている。また、顔の知覚、視線の知覚、指さしの知覚などの比較的高次のプロセスに関わる研究も行っている。さらに、インテリジェント・モデリング・ラボラトリーの大型設備を使用したバーチャルリアリティに関する研究、総務省の委託を受けたプロジェクトで映像情報の安全性に関わる研究なども行って来た。

c 主要業績

(1) 論文

- 中嶋豊, 佐藤隆夫, 「Motion binding に対する奥行きの影響.」, 『信学技報』, 110(108), 73-78 頁, 2010
- Nakajima, Y., & Sato, T., 「The influence of duration on perception of gaze direction and being looked at.」, 『The Japanese Journal of Psychonomic Science』, 29(1), pp. 69-70, 2010
- Tani, Y., Nakajima, Y., & Sato, T., 「The perceived range of the pointed space.」, 『The Japanese Journal of Psychonomic Science』, 29(1), pp. 87-88, 2010
- 松崎直幸, 原澤賢充, 繁樹博昭, 森田寿哉, 伊藤崇之, 齊藤隆弘, 佐藤隆夫, 相澤清晴, 北崎充晃, 「能動的観察による映像酔いの低減」, 『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』, 15(1), 41-44, 2010.3
- 細川研知, 丸谷和史, 佐藤隆夫, 「Psychlops: C++言語による汎用的な視覚刺激提示ライブラリ」, *Vision*, 21, 165-172, 2010
- Koizumi, A., Kitagawa, N., Kitamura, S. M., Kondo, M. H., Sato, T., Kashino, M., 「Serotonin transporter gene and inhibition of conflicting emotional information」, 『NeuroReport』, 21(6), pp. 422-6, 2010.4
- Koizumi, A., Tanaka, A., Imai, H., Hiramatsu, S., Hiramoto, E., Sato, T., & de Gelder, B., 「The effects of anxiety on the interpretation of emotion in the face-voice pairs.」, 『Experimental Brain Research』, 213(2-3), pp. 275-282, 2011
- Wen, W., Ishikawa, T., & Sato, T., 「Working memory in spatial knowledge acquisition: Differences in encoding processes and sense of direction.」, 『Applied Cognitive Psychology』, 25, pp. 654-662, 2011
- 妹尾武治 & 佐藤隆夫, 「内発的な運動情報が姿勢制御に及ぼす影響」, 『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』, Vol.16 No.1, 41-44 頁, 2011.3
- 中嶋豊・佐藤隆夫, 「大域運動順応は局所運動残効を増強しない」, 『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』, Vol.16 No.1, 99-102 頁, 2011.3

(2) 予稿・会議録

- 国際, Sato, T., & Nakajima, Y., 「Orientation and shape tuning of van Lier aftereffect」, Vision Science Society (VSS) 10th annual meeting (Naples, Florida, USA 2010/5)
- 国際, Sato, T., & Hosokawa, K. 「Dominance shift with hybrid images is dependent on relative spatial frequency」, Asia-Pacific Conference on Vision (APCV) 2010 (Taipei, 2010/7).
- Sato, T., & Nakajima, Y., 「Positive color is perceived with dichoptic presentation in van Lier's afterimage phenomenon」, 33rd European Conference on Visual Perception (ECVP) (Lausanne, Switzerland, 2010/8)
- 国際, Koizumi, A., Tanaka, A., Imai, H., Hiramatsu, S., Hiramoto, E., Sato, T., & Kashino, M., 「The Effects of Anxiety on the Perception of Emotion in the Face and Voice」. The 9th International Conference on Audio-Visual Speech Processing (Hakone, 2010/10)
- 国際, Kanaya, H., & Sato, T., 「Cross-attribute object trackings are much slower than within-attribute trackings」, Vision Science Society (VSS) 11th annual meeting (Naples, Florida, 2011/5)
- 国際, Sato, T., & Nakajima, Y., 「Dichoptic positive color aftereffect induced by contour figure: a new color aftereffect」, Vision Science Society (VSS) 11th annual meeting (Naples, Florida, USA 2011/5)
- 国際, Sato, H., Motoyoshi, I., & Sato, T., 「Spatial suppression of the perceived contrast is polarity selective」, Asia-Pacific Conference on Vision (APCV) 2011 (Hong Kong, 2011/7)
- 国際, Sato, T., Nakajima, Y., Hirasawa, E., & Takeuchi, T., 「Enhancement of afterimage colors by surrounding contours」, Asia-Pacific Conference on Vision (APCV) 2011 (Hong Kong, 2011/7)
- 国際, Koizumi, A., Kitagawa, N., Kondo, M., Kitamura, S. M. H., Sato, T., & Kashino, M., 「Serotonin transporter gene & gender affect detection of facial expressions」, Plenary meeting of the International Society for Research on Emotion (ISRE) (Kyoto Garden Palace, 2011/7)
- 国際, Sato, T., Nakajima, Y., & Hirasawa, E., 「Enhancement of afterimage colours by surrounding contours: Examination with dichoptic presentations」, 34th European Conference on Visual Perception (ECVP)(Toulouse, France, 2011/8)

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内, 日本心理学会, 理事長, 2011.6～
- 国内, 日本心理諸学会連合, 常務理事, 2009.4～2009.6
- 国内, 日本基礎心理学会, 理事長, 2006.12～2011.12
- 国内, 日本視覚学会, 幹事, 2008.4～
- 国内, 日本バーチャルリアリティー学会, 評議員, 2006.4～
- 国外, Society for Gestalt Theory and its Applications, 編集委員, 2006, 8～

(2) 他機関での講義等

- 非常勤講師、駒澤大学、「心理学特論」、2010.4～2010.9

1. 略歴

- 1981年9月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程入学 (フルブライト奨学生)
- 1985年6月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程修了 (Ph.D.)
- 1985年9月 Virginia 大学心理学部専任講師
- 1987年4月 早稲田大学文学部専任講師
- 1990年4月 東京大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学文学部教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

認知心理学 (人間が行なっている情報処理の研究)

b 研究課題

- (1) 鏡像問題: この問題 (「鏡に映ると左右が反対に見えるのは何故か?」という問題) は、プラトンの昔から議論されてきたにもかかわらず、未だに定説がない。1998年に、この問題に解答する理論を記した論文をアメリカの学術雑誌に発表した。2000年から2004年にかけて、3つの実験をおこない、その理論の妥当性を立証した。これらの実験の結果は、2007年にイギリスの学術雑誌に発表した。また、日本の物理学者たちとも、シンポジウムで議論を交わし、誌上討論を行なった。現在、鏡像問題に関する単著を執筆中。
- (2) 外国語副作用: 不慣れな外国語を使用している最中は、一時的に思考能力が低下する。30年ほど前に、この現象を発見して、理論的な説明をおこない、実験によって立証した。現在は、国際基督教大学の森島泰則教授と協力して研究を続ける一方、国際学会のシンポジウムなどを通じて、この現象の周知に努めている。
- (3) 日本人論批判: 「日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的」という日本人論の通説について、実証的な国際比較研究を組織的に調べたところ、実証データはこの通説をまったく支持していないことを発見し、国内外の学術雑誌に論文を掲載した。この論文はかなりの論議を呼び、通説の擁護者と議論を続けてきた。2004年には、カナダの研究者による批判の妥当性を調べるために同調行動の実験をおこない、この批判が事実と合致していないことを確認した。これらの研究の成果をまとめて、2008年には、『「集団主義」という錯覚』と題する単著を出版した。
- (4) 因果的説明における価値のバイアス: 20年近く前、本学に赴任してきたばかりの頃に、湾岸戦争直前の世論を利用して、社会的事象の因果的説明は、社会的対象に抱いている価値によって歪められることを実験的に示した。この研究は、病気のために長らく中断していたが、2004年に新しい実験をおこなって、最初に行なった実験の結果に関する別解釈を排除できることを確認した。
- (5) 確率推定: 確率推定においては、事前確率を考慮に入れ損なう「基準率無視」という現象がよく知られている。この基準率無視の原因については、多くの研究者説明を試みてきたが、因果関係が推定されることが一因となっていることを一連の実験によって明らかにした。また、この現象が確率の形式での表記法に起因するとするドイツの研究者の著名な説が誤っていることも、実験的に証明した。

c 主要研究業績

(1) 著書

共著、子安増生・二宮克美 (編) 『キーワードコレクション 認知心理学』、新曜社 2011.
海保博之・松原望 (監修) 『感情と思考の科学事典』朝倉書店 2010.4.

(2) 論文

「書評シンポジウム: 高野陽太郎著『「集団主義」という錯覚』 — 日本人論の思い違いとその由来」
「著者による原著の紹介」「書評にこたえて」 『児童心理学の進歩 2010年版』 金子書房 282-284、306-313、2010.8.

Wakebe, T., Sato, T., Watamura, E., & Takano, Y. Information seeking in a non-hypothesis testing task. *Psychological Studies*, 55(4), 386-389, 2010.

綿村英一郎・分部利紘・高野陽太郎 一般市民の量刑判断. 『法と心理』9(1), 98-108, 2010.

杉本崇・高野陽太郎 対象に関する知識量が少ない場合のアンカリング効果: 意味的過程説と数的過程説の比較. 『認知心理学研究』8(2), 145-151, 2011.

常岡充子・高野陽太郎 他視点取得の活性化による言語的攻撃の抑制. 『社会心理学研究』 27(2), 93-100, 2012.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2010.4～2012.3

(2) 学会

「日本認知心理学会独創賞選考委員会」、役員・委員、委員長、2010～2011

「日本認知心理学会」、役員・委員、常務理事、理事、2010～2012

「日本心理学会」、役員・委員、代議員、2010～2012

日本認知科学会の第28回大会を2011年9月に東京大学で開催し、大会委員長を務めた。

教授 **横澤 一彦** YOKOSAWA, Kazuhiko

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yokosawa/index-j.html>

1. 略歴

1979年3月 東京工業大学工学部情報工学科卒
1981年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了
1981年4月 日本電信電話公社（現NTT）入社
1986年9月～1990年2月 ATR 視聴覚機構研究所（出向）
1990年9月 東京工業大学より工学博士号授与
1991年11月～1992年12月 東京大学生産技術研究所 客員助教授
1995年6月～1996年6月 南カリフォルニア大学 客員研究員
1998年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授
2009年12月～2010年3月 カリフォルニア大学バークレイ校 客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野

統合的認知の心理学

b 研究課題

統合的認知について、認知心理学的研究を行っている。統合的認知とは、知覚された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあって、認知に至るのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジェクト認知の問題を中心に研究している。さらに、統合的認知の脳内プロセスの解明を目指し、fMRI を使った脳機能計測の共同研究にも取り組んでいる。感覚融合認知や共感覚に関する研究も開始し、研究分野は視覚だけに限らず、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

c 主要業績

(1) 論文

中島亮一、横澤一彦、「フリッカー変化時における自然情景の視覚表象」、『心理学研究』、81, 3, 210-217 頁、2010
A. Nishimura & K. Yokosawa, 「Visual and auditory accessory stimulus offset and the Simon effect.」、
『Attention, Perception & Psychophysics』、72, pp. 1965-1974, 2010
S. Kanaya & K. Yokosawa, 「Perceptual congruency of audio-visual speech affects ventriloquism with bilateral visual stimuli」、『Psychonomic Bulletin & Review』、18, 1, pp. 123-128, 2011

- R. Nakashima & K. Yokosawa, 「Does scene context always facilitate retrieval of visual object representations?」、
『Psychonomic Bulletin & Review』、18, 2, pp. 309-315、2011
- M. Asano & K. Yokosawa, 「Rapid extraction of gist from visual text and its influence on word recognition」、
『The Journal of General Psychology』、138, 2, pp. 127-154、2011
- R. Niimi, A. Saneyoshi, R. Abe, T. Kaminaga, & K. Yokosawa, 「Parietal and frontal object areas underlie
perception of object orientation in depth」、『Neuroscience Letters』、496, pp. 35-39、2011
- A. Saneyoshi, R. Niimi, T. Suetsugu, T. Kaminaga, & K. Yokosawa, 「Iconic memory and parietofrontal
network: fMRI study using temporal integration」、『NeuroReport』、22, 11, pp. 515-519、2011
- M. Asano & K. Yokosawa, 「Synesthetic colors are elicited by sound quality in Japanese synesthetes」、
『Consciousness and Cognition』、20, 4, pp. 1816-1823、2011
- 金谷、石渡、横澤、「自己による触刺激がラバーハンド錯覚に与える影響」、『基礎心理学研究』、30, 1、11-18 頁、
2011
- A. Nishimura & K. Yokosawa, 「Effects of Visual Cue and Response Assignment on Spatial Stimulus Coding in
Stimulus-Response Compatibility」、『Quarterly Journal of Experimental Psychology』、65, 1, pp. 55-72、
2012

(2) 研究テーマ

- 文部科学省科学研究費補助金、横澤一彦、研究代表者、「基盤研究（B） 情報統合としての共感的認知に関する
認知心理学的研究」、2010～
- 文部科学省科学研究費補助金、横澤一彦、研究代表者、「萌芽研究 視触覚相互作用に基づく誤定位の生起要因に関
する認知心理学的研究」、2011～
- 文部科学省科学研究費補助金、横澤一彦、分担者(代表者は東大外)、「新学術研究 視聴覚相互作用に基づく顔定位
特性に関する認知心理学的研究」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本認知科学会、会長、2011.1～2012.12

(2) 行政

総務省、科学技術政策、委員、2010.4～

09a 日本語日本文学（国語学）

教授 尾上 圭介

ONOE, Keisuke

1. 略歴

1972年3月	東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1975年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1975年4月	東京大学文学部助手 ～1977年3月
1977年4月	神戸大学文学部助教授 ～1989年3月
1989年4月	東京大学文学部助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2006年1月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

- (1) 言語表現の文法的構造とそれが結果として持つ意味、表現性との関係を論理的に明らかにすることを課題とし、具体的には、(イ) 助動詞を含む述定形式の文法的性格とその意味との関係(モダリティ、テンス、アスペクトを含む)、(ロ) 平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の文の種類の本質とその表現性との関係、(ハ) 係助詞の文法的性格と文中での表現性との関係、(ニ) 主述関係を中心とする文の格的構造と文の表現的断続構造との関係、などについて研究している。

(イ) に関しては、現代語の個々のモダリティ形式の叙法的性格とそれらの全体組織について私なりの最終的な結論を得るとともに、古代語のモダリティ形式についてもその叙法的性格の全体像をほぼ描くことができた。また、テンス・アスペクトに関しても独自の見解を(公開講義等で)発表することができた。これらに(ロ)に関する論文を加え、まとめて2001年に個人の論文集の形で刊行することができた。

(ハ) (ニ) に関しては、1996年度と2000年度の講義で「受身・可能・自発」文の格的構造の特殊性を明らかにすることができ、これをもっていわゆる「ハとガの問題 —主語と題目語と現代語の係助詞の機能に関する問題—」全体についての最終的な見解を得ることができた。主語・題目語に関しては、尾上編『朝倉日本語講座6巻文法II』所収の論文「主語と述語をめぐる文法」において、私の研究の現段階の全体像を概観的にまとめることができた。(ハ) (ニ) の領域に関する論文を全て含む論文集を2011年度に刊行する予定であり、「受身・可能・自発」文の構造を多角的に分析した一書を刊行する予定である。

- (2) 大阪方言のディスコースの特徴、表現上の特徴という観点から、大阪の文化のあり方を照射しようとしている。この問題に関しては、これまでの検討の結果をまとめて1999年3月に単行本として出版した。

c 主要業績

(1) 論文

「主語と主題（題目語）」、ヨーロッパ日本語教育 12、2008

「動詞が述語になるとはどういうことか」、張威・山岡政紀編『日語動詞及相關研究』外語教学与研究出版社(北京)、2009.6

(2) 予稿・会議録

基調講演、「動詞が述語になるとはどういうことか」、北京清華大学日本語学国際フォーラム予稿集、2008.8

(3) 学会発表

「文の種類について」、中日理論言語学研究会、2008.7.27

「文法論で問うべきことは何か」、山田孝雄日本文法論刊行100年記念シンポジウム、2008.11.29

「存在承認と存在希求—文的意味成立の原理—」、ドイツ文法理論研究会、2009.5.31

「日本語教育と日本語研究」、第5回中国大学日本語教育研究国際シンポジウム、2009.12.12

「自然の美的鑑賞」、『創文』（創文社）、No. 516、2009. 1、pp. 11-14.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 東京言語研究所 2008 年度春期特別講座「日本語文法理論」、2008.4.20
北京第二外国语学院講演「主語と題目語（主題）の関係」、2008.8.9
北京日本学研究中心講演「主語述語発生の原理」、2008.8.9
北京大学講演「文の種類をどう見るかー述語を持つ文と持たない文ー」、2008.8.10
文法学会 2008 年度連続公開講義（第 4 回）「述語のダイクシス」、2008.11.8
東京外国語大学集中講義、2008.12.24～2009.1.9
東京言語研究所 2009 年度春期特別講座「日本語文法のおもしろさ」、2009.4.19
NHK ラジオ第 2 放送「私の日本語辞典」1～4 回、2009.7.4.～7.25
文法学会 2009 年度連続公開講義（第 2 回）「主語と述語がなぜあるか」、2009.7.18

(2) 学会

- 日本語文法学会、『日本語文法事典』編集委員、2008.4～2010.3
日本語文法学会、会員、2008.4～2010.3
日本語学会(国語学会)、評議員、2008.4～2010.3
日本言語学会、評議員、2008.4～2010.3
日本笑い学会、理事、2008.4～2010.3

(3) 学外組織

- 金田一京助博士記念賞選考委員、2008.4～2010.3

教授 月本 雅幸 TSUKIMOTO, Masayuki

1. 略歴

- 1977 年 3 月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1980 年 3 月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1981 年 3 月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1981 年 4 月 茨城大学文学部専任講師（～1985 年 3 月）
1985 年 4 月 白百合女子大学文学部専任講師（～1987 年 3 月）
1987 年 4 月 白百合女子大学文学部助教授（～1992 年 3 月）
1992 年 4 月 東京大学文学部助教授（～1995 年 3 月）
1995 年 3 月 ドイツ連邦共和国ルール大学ボッフム交換助教授（～1996 年 1 月）
1995 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2006 年 1 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語史

b 研究課題

漢文に日本語としての読みを記入した訓点資料の研究を課題としている。関心の中心は平安時代から鎌倉時代にかけての訓点にあり、学界未紹介の資料を公表し、また既に知られている資料も含め、その資料的性格を再検討して言語の特質や年代性を吟味することにより、国語史料としての訓点資料の新たな利用の方法を模索している。

c 主要業績

(1) 論文

- John Whitman, Masayuki Tsukioto et al., Toward an International Vocabulary for Research on Vernacular Reading of Chinese Texts (漢文訓読)、*Scripta* Vol.2, pp.61～83, 2010.9

「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿（七）」、平成二十二年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、73～76頁、2011.3

The Development of Japanese Kana, *Scripta* Vol.3, pp.45～59, 2011.9

「石山寺本阿吒薄俱儀軌の古訓点について」、訓点語と訓点資料127輯、132～139頁、2011.9

「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿（八）」、平成二十三年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、81～84頁、2012.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

文化審議会専門委員（文化財部会第一専門調査会）2010.2～2012.3

人間文化研究機構国立国語研究所運営会議委員 2009.10～2012.3

(2) 学会

日本語学会 理事、2009.6～2012.3

日本語学会 評議員、2008.4～2012.3

訓点語学会 運営委員、2008.4～2012.3

訓点語学会 運営委員長、2009.5～2012.3

准教授

井島 正博

IJIMA, Masahiro

1. 略歴

- 1982年 3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1984年 3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1984年 4月 東京大学大学院人文科学研究科研究生
- 1985年 10月 防衛大学校人文科学研究室助手
- 1989年 4月 山梨大学教育学部専任講師
- 1991年 4月 山梨大学教育学部助教授
- 1992年 4月 成蹊大学文学部日本文学科助教授
- 1998年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本語・日本文学）
- 2007年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（日本語・日本文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 日本語文法・日本語文法学史および言語理論

b 研究課題

現代語・古典語の日本語文法あるいは日本語文法学史および言語理論の研究をテーマとしている。なかでも現代語日本語文法に関する研究を一貫して続けており、これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

さらに現代語の成果を古典語に適用して、古典語文法に新たな方向からアプローチをするとともに、従来の文法研究を歴史的にとらえることによって、各時代の文法理論を相対化することも試みている。言語理論に関しては、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。

c 主要業績

(1) 著書

単著、井島正博、『中古語過去・完了表現の研究』、ひつじ書房、2011.2

編著、井島正博、『新明解国語辞典第7版』、三省堂書店、2011.12

(2) 論文

井島正博、「名詞述語文を作る名詞節—形式名詞述語文の成立根拠を考える—」、『日本語学』、29 卷 11 号、pp. 48～57、2010.11

井島正博、「山田文法における格理論—近現代文典の流れの中における—」、『山田文法の現代的意義』、pp. 181-198、2010.12

井島正博、「主節における非文末ノダ文の機能と構造」、『日本語学論集』、第7号、pp. 70-103、2011.3

井島正博、「上代・中古推量助動詞の確定条件用法」、『言語変化の分析と理論』、pp. 116-132、2011.3

井島正博、「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」、『日本語学論集』、第8号、pp. 95-145、2012.3

(3) 書評

鈴木泰、『古代日本語時間表現の形態論的研究』、井島正博、『国語と国文学』、88 卷 6 号、pp. 73-77、2011.4

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本語文法学会、学会誌編集委員、2010～2012

准教授 肥爪 周二

HIZUME, Shuji

1. 略歴

1989 年 3 月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1991 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993 年 4 月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996 年 3 月）
1996 年 4 月 茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997 年 9 月）
1997 年 10 月 茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003 年 3 月）
2003 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授
2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授（～現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を、主な専門領域とする。

c 主要業績

(1) 著書

共著、肥爪周二、『日本語史概説』、2010.4

編著、肥爪周二、『古語大鑑』第一巻、2011.12

(2) 論文

肥爪周二、「音韻（史的研究）」、『日本語の研究』、2010.6

肥爪周二、「日本漢字音における拗音・韻尾の共起制限」、『訓点語と訓点資料』、2011.9

肥爪周二、「日本悉曇学と『韻鏡』」、『ことばに向かう日本の学知』、2011.10

(3) 書評

佐々木勇、『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』、肥爪周二、『国語と国文学』、2010.9

(4) 学会発表

国際、肥爪周二、「悉曇学と『韻鏡』」、名古屋大学GCOE『ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—』、2010.9.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、國學院大學、「日本語音韻史」、2010.4～2012.3

(2) 学会

国内、訓点語学会、運営委員、2010.4～2012.3

国内、日本語学会、編集委員、2010.6～2012.3

09b 日本語日本文学（国文学）

教授 多田 一臣

TADA, Kazuomi

1. 略歴

1973年3月	東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1975年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1975年4月	東京大学文学部助手
1980年4月	千葉大学文学部講師
1981年4月	千葉大学文学部助教授
1994年4月	東京大学文学部助教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1996年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（～現在に至る）
1999年1月	博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代文学

b 研究課題

日本古代文学のうち、とくにその前期にあたる上代文学を主たる研究対象領域とする。これまで神話・伝説・説話といった伝承性の色濃くあらわれた文学、記紀歌謡に代表される古代歌謡や『万葉集』などの韻文系の文学の研究に従事してきた。歴史的な客観性に基盤を置いた実証を重んじつつも、一方で発生論的規型に立つ表現論的な方法を積極的に取り入れようと考えてきた。2010年、十年以上の歳月を費やした『万葉集』の全注釈である『万葉集全解』全七冊を完成させた。現在は、万葉語彙の語源的な研究、柿本人麻呂の伝記的研究、『古事記』の総合的研究に精力を傾注している。

c 主要業績

(1) 論文

「〈采女〉の背景」『観世』第77巻10号（2010年10月）、檜書店、24～32頁。

「アマテラスの影」『古代文学の創造と継承』（針原孝之編、2011年1月）、新典社、521～538頁。

「古代の「言」と「音」」『古事記年報』第53号（2011年1月）、古事記学会、1～19頁。

「古代日本人の時間意識—古代文学表現史論の構想のために—」『文学・語学』第200号（2011年7月）、全国大学国語国文学会、25～36頁。

「歌謡の表現の特性—『古事記』の歌謡に及ぶ」『文学』第13巻1号（2012年1月）、岩波書店、35～48頁。

(2) 小論等

「万葉から吹く風21 悪口の歌」『ひととき』（2010年6月）、ウエッジ、49頁。

「いまなぜ古代文学を研究するのか」『国文学 解釈と鑑賞』第76巻5号（2011年5月）、ぎょうせい、6～15頁。

「「あの人。この人。万葉集の字。自然を慈しむ」2012年モリサワカレンダー」（2011年12月）、モリサワ。（監修、解説・跋文を執筆）

「《座談会》古事記研究の新段階」『文学』第13巻1号（2012年1月）、岩波書店、35～48頁。（司会を担当、三浦佑之・呉哲男・居駒永幸氏と）

「子午線 大会二日目印象記」『日本文学』第61巻4号（2012年4月）、日本文学協会、34～35頁。

(3) 書評

「多田元著『古代文芸の基層と諸相』」『國學院雑誌』第113巻5号（2012年5月）、國學院 大學、53～57頁。

(4) 辞書・事典

『現古辞典』（古橋信孝・鈴木泰・石井久雄編、河出書房新社、2012年3月）

（「手本」「でたらめ」「都市」「日本」以下23項目を執筆）。

(5) 学会発表

「和歌の本質とは—巻十六から」（青山学院大学日本文学会春季大会、青山学院大学、2010年6月12日）

「古代の「音」と「言」（古事記学会大会、皇學館大学、2010年6月19日）

「古代和歌の一面—歌の呪力」(中日文化比較研究国際シンポジウム、東北大学(瀋陽)、2010年9月9日)
「和歌の本質」(奈良時代をめぐる研究集会、ミラノ・ビッコカ大学、2010年11月26日)
「注釈の方法意識—『万葉集』の注釈を通じて」(シンポジウム「注釈の未来—日本文学研究から」、東方学会第56回国際東方学者会議、日本教育会館、2011年5月20日)
*Haruo Shirane、荒木浩、Robert Campbell、鈴木健一(司会)、三角洋一(司会)、斎藤希史(コメント)氏と。
「母の甜き乳をめぐって」(上代文学会大会、東海大学、2012年5月12日)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、1999.4～
千葉市民大学非常勤講師、1990～
聖心女子大学非常勤講師、2011～

(2) 学会

古代文学会、委員、1977.4～
上代文学会、常任理事・理事、1988～
東京大学国語国文学会、会長、2008.1～2011.1 評議員 2011～
美夫君志会、理事、2006.4～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

財団法人杉並能楽堂、理事、2006.12～(現在一般社団法人)
日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、2010.4～
人間文化研究機構国際日本文化研究センター運営会議委員、2010.4～

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1980年4月 実践女子大学文学部専任講師
1985年4月 名古屋大学文学部専任講師
1986年12月 名古屋大学文学部助教授
1993年4月 東京大学文学部助教授(1993年4月～1994年3月、名古屋大学助教授併任)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(～現在に至る)
2000年9月 博士(文学)(東京大学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世文学

b 研究課題

近世中期の上田秋成・建部綾足・与謝蕪村らの文人の文学を、伝記・作品論・思想論等の様々な面から考察する。新しい文学理念を掲げ、それまでになかった文学ジャンル・学問・絵画を生み出した文人の活動を、一人一人の個別性・特殊性と、個人を越えた共通性との両面から明らかにすることを研究の目標とする。

この数年は上田秋成全集の編集と平行して、秋成の伝記的事実・作品書誌の調査を進めており、ほぼ全容を見通せるところまで研究を進めることができた。今後は、秋成の伝記研究をまとめたい。また、建部綾足については、物語と俳諧・国学の関係を中心に、作品論を試みたい。さらに蕪村については連句の注釈を刊行したが、引き続き作品論を深めていきたい。

c 主要業績

(1) 著書

共著、長島弘明、『上田秋成 没後二〇〇年記念』、2010.10

編著、長島弘明、『国語国文学研究の成立』、2011.4

(2) 論文

長島弘明、「講演 断簡零墨の中の秋成—『鶉居帖』について—」、『ビブリア』、2010.10

長島弘明、「月溪宛秋成書簡・『享和三年春寿算歌』紹介」、『東京大学国文学論集』、2011.3

長島弘明、「紹介 故前田利治氏旧蔵『猿蓑』坤巻一冊」、『東京大学国文学論集』、2012.3

(3) 学会発表

国際、長島弘明、「日本語の歴史的典籍のデータベースの構築—文部科学省による学術研究の大型プロジェクトの推進と関連して—」、欧州日本資料専門家会議（於、ニューキャッスル大学）、2011.9.8

国内、長島弘明、「『雨月物語』の多義性について」、仏教大学国語国文学会、2011.11.26

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2010・2011 年度

(2) 学会

東京大学国語国文学会、会長、2011.1～

日本近世文学会、常任委員、2010・2011 年度

日本文学協会、委員、2010・2011 年度

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、会員、2011.10～

国文学研究資料館運営会議委員、2010・2011 年度

教授 **藤原 克己**

FUJIWARA, Katsumi

1. 略歴

1976 年 3 月 東京大学文学部国文学専修課程卒業

1979 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了

1980 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学

1980 年 4 月 岡山大学教養部講師

1984 年 4 月 岡山大学教養部助教授

1989 年 4 月 神戸大学文学部助教授

1998 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2001 年 5 月 博士(文学) (東京大学)

2004 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野

平安朝文学

b 研究課題

現在の私は、平安朝文学の深さと美しさ、その固有の特質と普遍性を明らかにするとともに、そうした研究成果を専門外の人々に伝えてゆくことを課題としている。具体的には、「恋愛」を中心として、中国文学や西欧文学とも比較しながら、平安朝文学の特質と普遍性を解明しようとしている。

c 主要業績

(1) 学会発表

国際、藤原克己、「東アジアのなかの『源氏物語』」、第2回 PESETO 人文学会議：東アジアの文学と歴史における古典の現代的価値、北京大学、2010.4.10

国際、藤原克己、「日中文化交流史のなかの『源氏物語』」、第55回国際東方学会議、日本教育会館（千代田区一ツ橋）、2010.5.21

国際、藤原克己、「「虚幻の美」をめぐる中日比較文学的考察」、「中国三十年日本文学研究的成就与方法」国際研究会、北京大学英傑交流中心二楼第8会議室、2010.8.28

(2) 啓蒙

藤原克己、「撰関制と宮廷恋愛文学」、『天皇の歴史03 天皇と摂政・関白（講談社）』「月報」、1～4頁、2011.2

藤原克己、「日本で漢詩集が勅撰された時代」、『歴史と地理（山川出版社）』、第645号、27～31頁、2011.6

藤原克己、「「古典」の「鑑賞」について」、『UP』（東京大学出版会）、第40巻第12号(470号)、1～6頁、2011.12

(3) 予稿・会議録

国際会議、藤原克己、「東アジアのなかの『源氏物語』」、第2回 PESETO 人文学会議「東アジアの文学と歴史における古典の現代的価値、北京大学、2010.4.10

『第二届北京大学－首尔大学－東京大学(PESETO)人文学会議論文集』、126～131頁、

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、朝日カルチャーセンター横浜、「源氏物語を読む」、2010.4～2012.3

非常勤講師、朝日カルチャーセンター新宿、「平安朝文学の深さと美しさ」、2010.4～2012.3

委嘱教授、放送大学、「日本の古典—古代編（'09）」、2010.4～2012.3

(2) 学会

国内、紫式部学会、理事、2010.4～2012.3

国内、東方学会、学術委員、2011.9～2012.3

国内、和漢比較文学会、日本文学協会、中古文学会

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
1986年4月	東京大学文学部助手
1988年4月	フェリス女学院大学文学部専任講師
1991年4月	フェリス女学院大学文学部助教授
1993年4月	上智大学文学部助教授
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（～現在に至る）
1999年4月	博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中世文学、和歌文学

b 研究課題

和歌文学については、マクロ的には和歌史を構想し記述すること、ミクロ的には新古今集前後を中心とした中世和歌作品の方法を解明することを課題としている。前者は専門化し、細分化された研究の現状に対して、和歌を長い射程のもとに捉え、この文芸のもつ意義と独自性を総体的に把握することを目指している。後者は、作品を完成したものとして結果論的に捉えるだけでなく、より作者自身の方法に即した、内在的な理解を目標としている。

中世文学については、徒然草や方丈記など、とくに和歌的素養を基盤とした作品について、とくにその文体と方法を解明することを目指している。

c 主要業績

(1) 著書

共著、渡部泰明、『天皇の歴史10 天皇と芸能』、講談社、2011.11

(2) 論文

渡部泰明、「藤原定家の方法」、『文学 隔月刊』、第12巻第1号、42～56頁、2011.1

渡部泰明、「歌合の声―読み上げ、詠じもしたる」、『聖なる一和歌にひそむ力』、132～155頁、2011.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

駒澤大学文学部、非常勤講師

学習院大学文学部、非常勤講師

放送大学、客員教授、「和歌の心と情景」（2010～2013）

(2) 学会

和歌文学会、常任委員

中世文学会、常任委員

日本文学協会、委員

1. 略歴

1982年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1985年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1987年3月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退
1987年4月	東京大学文学部助手
1990年4月	上智大学文学部専任講師
1995年4月	上智大学文学部助教授
1997年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、書き手の表現意識が「私小説」というわが国独自の表現形式を生み出してゆく機構にあらためて着目するに至った。いわゆる作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、日本近代文学における「自己」表現の歴史的変容を解明して行く方向とを、同時並行的におしすすめて行くことを現在の研究課題としている。

c 主要業績

(1) 著書

『自意識の昭和文学 現象としての「私」』(至文堂、1994年3月)。

『太宰治 弱さを演じるということ (ちくま新書367)』(筑摩書房、2002年10月)。

『近代小説の表現機構』(岩波書店、2012年3月)。

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学、早稲田大学、成城大学、上智大学、慶應義塾大学

(2) 学会

日本近代文学会理事、昭和文学会常任幹事、日本近代文学館評議員

10 日本史学

教授 吉田 伸之 YOSHIDA, Nobuyuki

1. 略歴

1972年3月	東京大学文学部卒業
1973年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学
1975年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1975年4月	東京大学文学部助手
1979年4月	千葉大学教育学部講師
1981年1月	千葉大学教育学部助教授
1985年4月	東京大学文学部助教授
1992年9月	博士(文学)学位取得
1993年11月	東京大学文学部教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授
2012年3月	定年により退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

日本近世の三都を中心とする都市社会の社会＝空間構造について、民衆世界を中心に解明することをめざしている。また南信濃を素材として、山里の地域社会について調査・研究に取り組んでいる。

c 主要業績

(1) 著書

『伝統都市』全4巻(伊藤毅氏と共編著)、東京大学出版会、2010年5～8月

『成熟的江戸』熊遠報ほか訳、北京大学出版社、2011年5月

『伝統都市を比較する—飯田とシャルルヴィル』(フランソワ・ジョゼフ・ルジウ、ギヨーム・カレ、高澤紀恵の各氏と共編著)、山川出版社、東京大学出版会、2011年6月

『近世の地域と中間権力』(志村洋氏と共編著)山川出版社、2011年12月

(2) 論文

「高輪海岸」『伝統都市』3巻、東京大学出版会、2010年7月

「江戸・内・寺領構造」『伝統都市』4巻、東京大学出版会、2010年8月

"Edo au fil de l'eau" *Histoire Urbaine* - No29, Decembre 2010, Societe Francaise d'Histoire Urbaine

「身分・身分的周縁の比較類型把握」『部落問題研究』195号、2011年1月

「伝統都市の比較史」『伝統都市を比較する—飯田とシャルルヴィル』山川出版社、2011年6月

「近世の浅草寺と寺院社会」『浅草寺 仏教文化講座』55集、2011年8月

「城下町飯田の性格を考える」『飯田市歴史研究所年報』9号、2011年9月

"Espace Urbain et corporations ; Les associations de coiffeurs le Japon d'Edo", *Annales HSS*, 66-4, 2011

「問屋と惣町—文化年間、信州飯田紙問屋騒動再考」『近世の地域と中間権力』山川出版社、2011年12月

「高澤紀恵著『近世のパリに生きる—ソシアビリティと秩序』を読む」『年報都市史研究』18号、山川出版社、2011年2月

「コメント・岡田知宏氏報告「現代日本の地域再生を考える」に寄せて」『部落問題研究』197号、2011年6月

「嘉永2年山村九郎右衛門役用帳」『飯田市歴史研究所年報』9号、2011年9月

(3) 学会発表

「伝統都市の比較史」ぐるーぶ・とらっど3、飯田市歴史研究所主催「円座・伝統都市の比較史」2010年8月19日、飯田市信用金庫

- 「飯田城下町の形成過程」第8回飯田市地域史研究会シンポジウム、2010年8月21日
- 「コメント・岡田知宏氏報告「現代日本の地域再生を考える」に寄せて」部落問題研究者全国集会、2010年10月23日、同志社女子大
- 「山間部地域社会(山里)における薪炭燃料エネルギーの生産・流通構造に関する基礎的研究」東京大学 AGS・2010年度研究報告会、東京大学、2010年12月15日
- 「伝統都市を考える」歴史学入門講座、機関誌会館(京都市)、2011年7月9日
- 「飯田城下の町役人と惣町—文化年間の紙問屋騒動」飯田市歴史研究所地域史講座、りんご庁舎、2011年7月23日
- 「伝統都市の分節構造—日本前近代の城下町を素材に」明清史合宿、聖護院御殿荘、2011年8月11日
- 「江戸の橋と日本橋」中央区第12回特別展講演、中央区立郷土天文館、2011年11月19日
- 「安政大地震と浅草寺寺院社会」都市史研究会2011年度シンポジウム報告、東京大学大学院工学系研究科、2011年12月4日

3. 主な社会活動

(1) 学会

史学会評議員

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

飯田市歴史研究所、研究部長 2003～2011

教授 **村井 章介** MURAI, Shosuke

1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業(文学士)
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(国史学)
- 1974年4月 東京大学史料編纂所入所
- 1975年4月 東京大学史料編纂所助手(中世史料部)
- 1985年4月 東京大学史料編纂所助教授(中世史料部)
- 1991年4月 東京大学文学部助教授(国史学)
- 1993年3月 博士(文学)取得
- 1993年3月 ボッフム・ルール大学交換教授(1994年1月まで)
- 1994年4月 東京大学文学部教授(日本史学)
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本文化研究専攻)
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本文化研究専攻、韓国朝鮮文化研究専攻兼任)
- 2004年8月 北京日本学研究中心センター派遣教授(2005年1月まで)
- 2007年3月 韓国朝鮮文化研究専攻兼任を解かれる

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

9～17世紀の日本列島およびその周辺の政治や文化や社会を、国家領域を超えた<地域>のなかでとらえなおす。その<地域>の担い手となる人間集団の行動、物や情報の動き、あるいは<地域>外集団との相互認識や境界の性格などを解明する。そのほか、政治史を中心とした通史叙述、地域論や対外関係とリンクさせた交通史、中世史料論などにも関心をもつ。

c 主要業績

(1) 著書

- 共著、荒野泰典・石井正敏・村井章介、『日本の対外関係1 東アジア世界の成立』、吉川弘文館、2010.6
編著、村井章介、『今枝愛真『静岡県史』と歩んで』、ぎょうせい、2010.6
共著、荒野泰典・石井正敏・村井章介、『日本の対外関係4 倭寇と「日本国王」』、吉川弘文館、2010.7
編著、北島万次・村井章介、『先達の航跡―田中健夫先生を偲ぶ―』、田中健夫先生を偲ぶ会、2010.7
共著、荒野泰典・石井正敏・村井章介、『日本の対外関係6 近世的世界の成熟』、吉川弘文館、2010.11
共著、荒野泰典・石井正敏・村井章介、『日本の対外関係3 通交・通商圏の拡大』、吉川弘文館、2010.12
単著、村井章介、『海が見つないだニッポン (NHKテレビテキスト歴史は眠らない)』、NHK出版、2011.2
共著、荒野泰典・石井正敏・村井章介、『日本の対外関係2 律令国家と東アジア』、吉川弘文館、2011.5
共著、村井章介・三谷博、『琉球からみた世界史』、山川出版社、2011.6

(2) 論文

- 村井章介、「古代末期の北と南」、ヨーゼフ・クライナー他編『古代末期・日本の境界』、森話社、1-11 頁、2010.5
村井章介、「日朝間の海域社会と境界人」、『日本と朝鮮半島 2000 年』、下巻、80-90 頁、2010.6
村井章介、「境界と地域」、『日本の対外関係』、1 東アジア世界の成立、19-37 頁、2010.6
村井章介、「倭寇と「日本国王」」、『日本の対外関係』、4 倭寇と「日本国王」、1-27 頁、2010.7
村井章介、「蒙古襲来と異文化接触」、『日本の対外関係』、4 倭寇と「日本国王」、57-80 頁、2010.7
石井正敏・村井章介、「通交・通商圏の拡大」、『日本の対外関係』、3 通交・通商圏の拡大、2010.12
村井章介、「戦後歴史学私記」、『歴史評論』729 号、17-27 頁、2011.1
村井章介、「十年遊子は天涯に在り―明初雲南謫居日本僧の詩交―」、『アジア遊学』1 4 2 号、183-196 頁、2011.5
村井章介、「Lequios のなかの Iapam―境界の琉球、中心の琉球―」、竹田和夫編『古代・中世の境界意識と文化交流』、勉誠出版、97-114 頁、2011.5
村井章介、「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」、村井章介・三谷博編『琉球からみた世界史』、山川出版社、32-57 頁、2011.6
村井章介、「日本史と世界史のはざま」、『学術の動向』2011 年 10 月号、37-39 頁、2011.10
村井章介、「見直される境界空間」、『根津美術館紀要・此君』3 号、65-111 頁、2011.11
村井章介、「雪舟等楊と笑雲瑞祈―水墨画と入明記にみる明代中国―」、『東京大学東洋文化研究所紀要』第 160 冊、1-37 頁、2011.12
村井章介、「解説」、田中健夫著『倭寇―海の歴史―』、講談社 (学術文庫)、250-260 頁、2012.1

(3) 学会発表

- 国内、村井章介、「アジアのなかの中世博多」、「栄西と中世博多展」プレイベント、福岡市博物館、2010.5.15
国際、村井章介、「銀と鉄砲とキリスト教」、日本西洋史学会小シンポジウムⅡ大航海時代における東アジア世界の交流―日本をめぐる銀と鉛等の金属交易を中心に―、別府大学、2010.5.30
国内、村井章介、「14-15 世紀の日本列島と東アジア」、品川シルバー大学シリーズ講義「室町に想いを馳せる」第 2 回、品川歴史館、2010.9.17
国内、村井章介、「中世日本人の中国体験」、「栄西と中世博多展」公開シンポジウム「東アジアのなかの中世博多」、福岡市博物館、2010.10.17
国内、村井章介、「外交僧呆夫良心と大内氏」、第 5 回大内氏歴史文化研究会講演会、山口県立美術館、2011.3.26

(4) 会議主催 (チェア他)

- 国際、「第 55 回国際東方学会会議」、チェア、シンポジウムⅢ「日中交流史の諸問題―古代中世を中心に―」、日本教育会館、2010.5.21
国内、「史学会大会」、その他、シンポジウム「越境する歴史学と歴史認識」、東京大学本郷キャンパス、2010.11.7
国内、「歴史科学協議会大会」、その他、シンポジウム「世界史認識と東アジア」、中京大学名古屋キャンパス、2010.11.20~2010.11.21
国際、「文部科学省グローバルCOEプログラム関西大学文化交渉学研究拠点」、総合コメンテータ、シンポジウム「周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」―歴史学・考古学研究からの視座」、関西大学千里山キャンパス、2011.10.1~2011.10.2

(5) 史料

- 村井章介・須田牧子、『笑雲入明記―日本僧の見た明代中国―』、平凡社東洋文庫 798、2010.10

村井章介・勘仲記の会、『勘仲記弘安九年夏記一翻刻と注釈一』、鎌倉遺文研究 26 号、2010.10

村井章介・勘仲記の会、『勘仲記弘安九年冬記一翻刻と注釈一』、鎌倉遺文研究 28 号、2011.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学文学学術院非常勤講師、2010.4～2012.3

法政大学大学院人文科学研究科兼任講師、2010.4 以前より継続中

(2) 学会

日本歴史学会評議員、2010.4 以前より継続中

日本古文書学会理事、2010.4 以前より継続中

東アジア文化交渉史学会評議員、

財団法人東方学会第 33 期学術委員、2011.9～

(3) 行政

日本学術会議連携会員、2008.10～

石見銀山学形成事業有識者会議指導者（島根県・大田市）、2011.1～

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

財団法人東洋文庫研究員、2010.4 以前より継続中

教授 **佐藤 信**

SATO, Makoto

1. 略歴

1976 年 3 月 東京大学文学部国史学専修課程卒業

1978 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科（国史学）修士課程修了（文学修士）

1978 年 12 月 東京大学大学院人文科学研究科（国史学）博士課程中退

1979 年 1 月 奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員

1985 年 4 月 文化庁文化財保護部（記念物課）

1987 年 7 月 文化庁文化財調査官

1989 年 4 月 聖心女子大学文学部助教授

1992 年 4 月 東京大学文学部助教授（国史学）

1995 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本史学）

1996 年 7 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本史学）

1997 年 7 月 博士（文学）取得（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代都市、出土文字資料（木簡学）、古代国家財政、文化財学。

c 主要業績

(1) 著書

編著、佐藤信、『史跡で読む日本の歴史 4 奈良の都と地方社会』、吉川弘文館、2010.4

編著、田辺征夫・佐藤信、『古代の都 2 平城京の時代』、吉川弘文館、2010.7

単著、佐藤信、『木簡から読み解く平城京』（NHKカルチャーラジオ歴史再発見）、NHK出版、2010.10

編著、木下正史・佐藤信、『古代の都1 飛鳥から藤原京へ』、吉川弘文館、2010.12

単著、佐藤信、『古代日本列島における漢字文化受容の地域的特性の研究』科研費報告書、2011.3

(2) 論文

佐藤信、「武蔵国の七世紀」、『武蔵野』84巻1号、2010.5

佐藤信、「官宮鉦山と大仏造立」、木簡学界編『木簡から古代がみえる』岩波書店、2010.6

佐藤信、「古代史からみた鞠智城」、笹山晴生監修『古代山城鞠智城を考える』、山川出版社、2010.11

佐藤信、「平城京と大宰府」『都府楼』42号、2010.12

佐藤信、「日本古代の地方豪族と渡来人」、韓国東北亜歴史財団『古代韓日交流と相互認識』、2011

(3) 学会発表

佐藤信、「大仏造立と列島の古代史」京都橘大学歴史学科学術講演会、京都橘大学、2010.6.7

佐藤信、「奈良の大仏造立と列島の古代史」国分寺市本多公民館歴史講演会、2010.6.18

佐藤信、「史跡の整備・活用と歴史学」全国史跡整備市町村協議会役員会講演会、ホテルルポール麴町、2010.7.20

佐藤信、「古代史の中の青木遺跡」出雲古代史研究会シンポジウム「出雲青木遺跡をめぐる諸問題」、島根県埋蔵文化財センター、2010.7.31

佐藤信、「古代鞠智城と東アジア」熊本県・熊本県教育委員会主催東京シンポジウム「古代山城鞠智城を考えるⅡー東アジアの中の古代鞠智城」、砂防会館、2010.8.8

佐藤信、「大宰府・多賀城と古代の都」東北歴史博物館特別展「多賀城・大宰府と古代の都」記念講演会、2010.9.5

佐藤信、「古代西国の都大宰府」福岡市埋蔵文化財センター22年度講座「都市への胎動」、2010.9.18

佐藤信、「古代史研究と奈良文化財研究所」奈良文化財研究所特別講演会（東京会場）「古代はいま 奈文研最前線」、有楽町朝日ホール、2010.9.25

佐藤信、「世界遺産と日本史学」東京大学文学部・北見市教育委員会主催、第14回東京大学文学部北見公開講座、北見芸術文化ホール、2010.10.8

佐藤信、「日本古代の出土資料研究の課題」愛媛大学「資料学」研究会2010年度国際学術シンポジウム「東アジアの交通遺跡と出土資料」、愛媛大学法文学部、2010.10.10

佐藤信、「大宰府の機能と律令国家」九州歴史資料館開館記念特別展記念講演会、九州国立博物館、2010.10.30

佐藤信、「東山道武蔵路と古代東国」国分寺市、国指定史跡記念講演会「東山道武蔵路の時代ー日本の古代道路とそ
の保存・活用ー」国分寺市いずみホール、2010.11.3

佐藤信、「多胡碑と古代東国の歴史」NPO法人日本民俗経済学会主宰、2010年度多胡郡設立1300年記念イベント「古代の人々からのメッセージ」講演、ヤマダ電機LABI1高崎イベントスペース、2010.11.14

佐藤信、「古代都市平城京の実像」白山史学会第48回大会公開講演、東洋大学、2010.11.27

佐藤信、「多賀城の機能と歴史的意義」聖徳大学言語文化研究所連続学術講演会「平城京時代の遠の朝廷と東国」、聖徳大学、2010.12.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

放送大学客員教授、2010.4～2012.3

國學院大學大学院文学研究科、非常勤講師、2010.4～2012.3

法政大学大学院人文科学研究科、非常勤講師、2010.4～2012.3

(2) 学会

国内、史学会、理事・評議員、2010～

国内、日本歴史学会、評議員、2010～

国内、木簡学会、委員、2010～

国内、条里制古代都市研究会、評議員、2010～

(3) 行政

文化審議会文化財分科会、第三専門調査会、専門委員、2010～

文化審議会文化財分科会、世界文化遺産特別委員会、委員、2010～

文化庁、古墳壁画の保存活用に関する検討会、委員、2010～

宮内庁、陵墓管理委員、2010～

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大学評価・学位授与機構、学位審査会、文学・神学専門委員会歴史学部会、専門委員、2010.4～2012.3

奈良県立橿原考古学研究所、共同研究員、2010～
松江市教育委員会、松江市史編集委員会、編集委員、2010.4～
国立文化財機構、外部評価委員会委員、2010.4～
文京区文化財保護審議会、委員、2010.4～
岩手県教育委員会、平泉遺跡群調査整備指導委員会委員、2010～
岩手県二戸市教育委員会、史跡九戸城跡整備指導委員会委員、2010～
岩手県矢巾町教育委員会、史跡徳丹城跡調査指導委員会委員、2010～
宮城県教育委員会、多賀城跡調査研究指導委員会委員、2010～
秋田県由利本荘市・にかほ市教育委員会、史跡鳥海山保存管理計画策定委員会委員、2010～2012.3
栃木県下野市教育委員会、下野薬師寺跡保存整備委員会委員、2010～
栃木県下野市教育委員会、下野国分寺跡保存整備委員会委員、2010～
栃木県宇都宮市・上三川町教育委員会、上神主・茂原官衙遺跡調査指導委員会委員、2010～
群馬県埋蔵文化財調査事業団、特別顧問、2010.4～
群馬県太田市教育委員会、史跡上野国新田郡庁跡保存整備委員会委員、2010～
群馬県伊勢崎市教育委員会、三軒屋遺跡調査検討委員会委員、2010～
埼玉県教育委員会、史跡埼玉古墳群保存整備協議会委員、2010～
東京都国分寺市教育委員会、武蔵国分寺跡整備計画策定委員会委員、2010～
東京都府中市教育委員会、武蔵府中熊野神社古墳保存活用検討委員会委員、2010～2012.3
山梨県笛吹市教育委員会、甲斐国分寺跡・国分尼寺跡保存整備専門委員会委員、2010～
三重県立斎宮歴史博物館、運営専門委員会委員、2010～
島根県教育委員会、島根県古代文化センター企画運営委員会委員、2010.8～2012.7
島根県教育委員会、出雲国府跡調査指導委員会委員、2010～
福岡県教育委員会、大宰府史跡調査研究指導委員会委員、2010～
福岡県、宗像・沖ノ島と関連遺産群世界遺産推進会議、専門家会議委員、2010～
福岡市教育委員会、鴻臚館跡調査研究指導委員会委員、2010～
熊本県立装飾古墳館、鞠智城跡保存整備検討委員会委員、2010～

教授 **加藤 陽子** (戸籍名は野島陽子) KATO, Yoko

<http://www4.ocn.ne.jp/~aninoji/>

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業 (文学士)
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (国史学)
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学 (国史学)
1989年4月 山梨大学教育学部専任講師 (日本史学)
1991年4月 山梨大学教育学部助教授 (日本史学)
1992年12月 文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
1994年4月 東京大学文学部助教授 (日本史学)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (日本史学)
1997年2月 博士 (文学) 取得
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (日本史学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交

c 主要業績

(1) 著書

- 『それでも日本人は「戦争」を選んだ』(朝日出版社、2009年7月) 414p
『NHK さかのぼり日本史 ②昭和 とめられなかった戦争』(NHK出版、2011年7月) 137p
『昭和天皇と戦争の世紀』(講談社、2011年8月) 422p

(2) 論文

- 「一九三〇年代の戦争は何をめぐる闘争だったのか」、岩波書店編集部『日本の近現代史をどう見るか』(岩波書店、2010年2月) pp.107-131
「戦死と遺族」、『死生学研究』第13号(2010年3月) pp.32-44
「基調講演 戦争研究と戦争展示」、『歴博フォーラム 戦争と平和』(東京堂出版、2010年3月) pp.22-67
「なぜ、日中戦争をとめられなかったのか」、NHK取材班編『日本人はなぜ戦争へと向かったのか』上(NHK出版、2011年3月) pp.235-250

(3) 書評、新刊紹介など

- 「書評、小林英夫・林道生著『日中戦争史論 汪精衛政権と中国占領地』、『日本歴史』740号(2010年1月)
「歴史の複雑さに斬りこむ人」、『出版ダイジェスト みすず書房の本』2186号(2010年3月10日)
ジョン・ダワー『昭和』(みすず書房、2010年)の紹介
「回顧と展望」「近代 総論」「近代 外交二」(2009年度) 2010年5月

(4) 史料編纂、史料紹介など

- 「冷戦終結後に求められる歴史とは」、『学会会報』882号(2010年3月)
「史料紹介 森本州平日記(四)」、『東京大学日本史学研究室紀要』15号、2011.3、pp.327-352

(5) 学会発表・講演会・司会など

- シンポジウム発表「太平洋戦争を「かたち」から考える」(メトロポリタン史学会第6回大会、シンポジウム「20世紀の戦争——その世界史的位相」、2010年4月17日、首都大学東京)
ネクスト・ドキュメント・フォーラムN-1「歴史と文書 戦争と革命の20世紀を中心に」(2010年7月14日、東京ビックサイト)
史学会第一〇八回大会公開シンポジウム「越境する歴史学と歴史認識」コメンテーター(2010年11月6日、東京大学)

「明治期における日本陸軍におけるドイツ観」(日独国際シンポジウム「日独関係における相互認識」2010年12月4日、日独文化会館)

3. 主な社会活動

(1) 学会

史学会評議員、日本歴史学会評議員

(2) 行政

内閣府 公文書管理委員会委員

公文書管理委員会 不服審査分科会委員

教授 **大津 透** OTSU, Toru

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
1987年4月 山梨大学教育学部講師(歴史学)
1990年9月 山梨大学教育学部助教授(歴史学)
1994年11月 博士(文学)
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2010年7月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代天皇制、日唐律令制比較研究、摂関期国家の研究

c 主要業績

(1) 著書

共著、山中裕編、『御堂関白記全註釈 御堂御記抄・長徳4年・長保元・2年』、思文閣出版、2010.3

単著、大津透、『天皇の歴史01 神話から歴史へ』、講談社、2010.11

編著、大津透、『律令制研究入門』、名著刊行会、2011.12

共著、山中裕編、『歴史のなかの源氏物語』、思文閣出版、2011.12

(2) 論文

大津透ほか、「2009年の歴史学界—回顧と展望— 日本史古代」、『史学雑誌』、119編5号、35-71頁、2010.5

Toru OTSU、「The History of Research on the Ancient Ritsuryo System and the Comparative Study of the Ritsuryo System in Recent Years」、『ACTA ASIATICA』、no.99、pp. 81-108、2010.8

(3) 書評

上島亨、『日本中世社会の形成と王権』、名古屋大学出版会、大津透、『日本歴史』、763号、94-97頁、2011.12

荒川正晴、『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』、名古屋大学出版会、大津透、『史学雑誌』、121編3号、79-86頁、2012.3

(4) 学会発表

国内、大津透、「日本古代における「公」について」、史学会大会公開シンポジウム「歴史の中の公と私」、東京大学文学部、2011.11.5

(5) 啓蒙

大津透、『日本の歴史』から『天皇の歴史』へ』、『本』、2011年1月号、2010.12

(6) 会議主催（チェア他）

国際、「第55回国際東方学者会議」、チェア、シンポジウム「日中文化交流史の諸問題—古代・中世を中心に—」、日本教育会館、2010.5.21

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本歴史学会、理事、2010.7～

国内、史学会、理事、2011.5～

国内、東方学会、理事、2009.9～、東方学編集委員、2012.1～

准教授 **鈴木 淳**

SUZUKI, Jun

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部国史学科卒業

1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了
(1995年3月 博士(文学)学位取得)

1992年4月 東京大学社会科学研究所助手

1994年4月 東京大学教養学部助教授

1996年1-10月 ドイツ、ボーフム大学 (Ruhr-Universität Bochum) 客員教授

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授 (大学院重点化による)

1999年10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2007年4月 同准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、明治・大正期の雑多な課題に取り組んでいる。具体的には主に軍における技術者の位置付け、近代遺跡の保存活用、関東大震災時の応急対応につき検討した。

c 主要業績

(1) 論文

「横須賀造船所初期の技術官制度」、『市史研究横須賀』、10、1-22頁、2011.3

「戦間期日本の技術将校制度」、『軍事史学』、47巻2号、4-22頁、2011.9

(2) 著書

『日本史リブレット100 科学技術政策』山川出版社 2010年6月、112頁

(3) 共編書

『新横須賀市史 資料編 近現代Ⅲ』横須賀市 2011年7月、1268頁 (担当477～620頁)

(4) 書評

「書評 フェリエス女学院150年史編纂委員会編『フェリエス女学院150年史資料集 第一集 関東大震災女学生の記録』、『年報首都圏史研究』1号、2011年12月、93～95頁

(5) 学会発表

2011 年度政治経済学・経済史学会秋季学術大会パネル・ディスカッション「第一次大戦後の日本陸海軍軍縮と兵器関連産業・兵器生産」報告3「陸軍軍縮と兵器生産」, 2011 年 10 月 22 日, 立命館大学びわこ・くさつキャンパス

2011 年度政治経済学・経済史学会秋季学術大会共通論題「東日本大震災・原発事故からの地域経済社会の再建をめぐって」コメント2「専門家集団と「想定外」— 関東大震災と海軍の経験から」2011 年 10 月 23 日, 立命館大学びわこ・くさつキャンパス

3. 主な社会活動

(1) 学会

史学会 編集委員 (2009 年 6 月～現在)、理事 (2011 年 6 月～2012 年 3 月)

政治経済学・経済史学会 編集委員 (2008 年 11 月～)

日本歴史学会 理事 (2006 年 6 月～)、評議員 (1999 年 6 月～)

日本産業技術史学会 理事 (1996 年 6 月～)

(2) 行政

中央防災会議専門委員 災害教訓の継承に関する専門調査会 (内閣府) 2003 年 7 月～2011 年 1 月

近代遺跡の調査等に関する検討会委員 (文化庁文化財部) 2002 年 6 月～現在

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

横須賀市史専門委員、群馬県世界遺産学術委員会委員、(2010 年 7 月～)

富岡製糸場整備活用委員会委員 (富岡市)

西南戦争遺跡調査検討委員会委員 (熊本市・玉東町)

准教授

牧原 成征

MAKIHARA, Shigeyuki

1. 略歴

1994 年 3 月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
1996 年 3 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻修士課程修了
1999 年 12 月 東京大学大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻博士課程単位修得の上退学
2000 年 1 月 日本学術振興会特別研究員 (PD)
2003 年 3 月 博士 (文学) (東京大学) (博人社 390 号)
2004 年 4 月 宇都宮大学教育学部助教授 (社会科教育講座)
2007 年 4 月 宇都宮大学教育学部准教授 (同)
2011 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

近世史を専攻し、時期的にはとくに中世末から近世前期にかけての社会の変容に関心がある。地域やテーマとしては、信州・近江・関東等の村落構造や土地制度、兵農分離のプロセスや奉公人の問題、商人やその仲間、流通・交通、かわた等の身分とその集団などを検討している。

c 主要業績

(1) 論文

牧原成征、「虎岩郷の天正検地と土地制度」、『飯田市歴史研究所年報』、8、2010.8

牧原成征、「中近世移行期をどうとらえるか—江北の土地制度を中心に」、『歴史科学』、205、2011.5

牧原成征、「日本近世身分論の原点」『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』、25、2012.3

(2) 学会発表

国内、牧原成征、「中近世移行期をどうとらえるか—江北の土地制度を中心に」、大阪歴史科学協議会大会、関西学院大学、2010.6.12

国内、牧原成征、「商人と流通の近世」、近世史研究会例会、東京大学文学部、2011.12.18

(3) 会議主催（チェア他）

国内、「史学会大会（日本近世史部会）」、チェア、2011.11.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京大学文学部、「日本史学特殊講義」、2010.10～2011.3

(2) 学会

国内、史学会、史学雑誌編集委員、2010.6～2012.3

国内、歴史学研究会、委員、2011.6～2012.3

1 1 中国語中国文学

教授 戸倉 英美 TOKURA, Hidemi

1. 略歴

- 1973年 3月 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士）
- 1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（中国文学）（文学修士）
- 1981年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（中国文学）
- 1982年 4月 宇都宮大学教養部非常勤講師（～84年3月）
- 1983年 4月 千葉大学教養部非常勤講師（～85年3月、86年4月～90年3月）
- 1986年 10月 東京学芸大学教育学部非常勤講師（～87年9月）
- 1988年 4月 東京都立大学人文学部助教授（～91年3月）
- 1988年 4月 東京大学教養学部非常勤講師（～91年3月）
- 1988年 10月 東京大学文学部非常勤講師（～93年3月）
- 1991年 4月 東京大学教養学部助教授（～93年3月）
- 1993年 4月 東京大学文学部助教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

- (1) 中国文学史の再検討。古典詩文、古典小説、古典文学理論に対して個別の研究を行い、その成果を総合して、先秦より宋代に至る文学史の再検討を進めている。
- (2) 日本の雅楽・伎楽を資料とする隋唐宋代の文学・演劇・音楽の研究。北京大学中文系教授・葛曉音氏と共同で、97年度より進めている。雅楽・伎楽の源流は中央アジア諸国の音楽や宗教活動にあるが、それらはインドや西アジアの影響を強く受けている。研究が進むに連れ、雅楽・伎楽には、中国で完成するまでに行われた様々な文化交流の跡が封じ込められていることを知り、研究の対象は、アジア諸地域に朝鮮と日本を加えた交流の諸相へと拡大している。

c 主要業績

(1) 学会発表

「中国古代小説理論的結構」、詮釈・比較與建構：中国古代文学理論國際學術研討会、中国香港中文大学、2010. 5. 29

「日本雅楽與唐代文學—以李白所舞《青海波》為主」、唐代文史研究的新視野：以物質文化為主—紀念杜希徳—國際研討会、台湾国家図書館漢学研究中心、2010. 12. 22

(2) 翻訳

「葛曉音著『日本の伎楽「師子」と唐楽「蘇莫者」から見た西域音楽の東漸と変遷』要旨」（『東方学』第119輯、202～203頁、東方学会、2010.1）

(3) 会議主催（チェア他）

第10回中国古典小説勉強会（呉真氏〈南開大学中文系講師〉講演会）、主催、東京大学、2010.2. 6

第11回中国古典小説勉強会（俞為民氏〈南京大学中文系教授〉、孫蓉蓉氏〈南京大学中文系教授〉講演会）、主催、東京大学、2010.3.8

第12回中国古典小説勉強会（陳偉強氏〈香港浸会大学中文系副教授〉講演会）、主催、東京大学、2010.7.26

第13回中国古典小説勉強会（馬場昭佳氏〈東京大学教務補佐員〉研究報告）、主催、東京大学、2010.11.13

第14回中国古典小説勉強会（佐野誠子氏〈和光大学専任講師〉研究報告）、主催、東京大学、2010.12.18

第15回中国古典小説勉強会（葉長海氏〈上海戲劇学院教授〉講演会）、主催、東京大学、2011.1.17

第16回中国古典小説勉強会（施愛東氏〈中国社会科学院文学研究所 研究員〉講演会）、主催、東京大学、2011.4.30

第17回中国古典小説勉強会（松浦史子氏〈慶應義塾大学・早稲田大学非常勤講師〉研究報告）、主催、東京大学、2011.5.28

- 第 18 中国古典小説勉強会（福田素子氏〈東京大学博士課程〉研究報告）、主催、東京大学、2011.7.2
第 19 中国古典小説勉強会（呉真氏〈南開大学中文系副教授〉講演会）、主催、東京大学、2011.9.24
第 20 中国古典小説勉強会（敖玉敏氏〈上海東華大学専任講師〉講演会）、主催、東京大学、2011.11.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

台湾国立清華大学中文系特別講演会、2010.12

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）

網膜剥離友の会（任意団体）副会長 2001.6～

教授 **藤井 省三**

FUJII, Shozo

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士）
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国文学専攻課程修了
1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（中国文学）～1982年3月
1979年9月 復旦大学（中国文学系、中国政府国費留学生）～1980年8月
1982年4月 東京大学文学部助手
1985年4月 桜美林大学文学部助教授（中国文学）
1988年4月 東京大学文学部助教授（中国文学）
1991年9月 東京大学より博士（文学）学位を授与される
1994年7月 東京大学文学部教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

概要

- 概要(1) 魯迅・胡適から莫言・鄭義・高行健に至る 20 世紀中国文学の研究。
概要(2) 夏目漱石から村上春樹に至る日中両国文化人の交流、影響関係の研究。
概要(3) 香港・台湾・シンガポール・南洋における文学と地域主義との関わりに関する研究。
概要(4) 中国語圏映画の研究

b 研究課題

c 主要業績

(1) 著書

- 単著、藤井省三、『中国語圏文学史』、東京大学出版会、2011.10
共著、藤井省三、『香港文学與電影』、香港・香港公開大学出版社、2012.1
共著、田中実、須貝千里編『文学が教育にできること 読むことの秘鑰』教育出版、2012.3

(2) 論文

- 藤井省三、「日本文化界與李昂的對話——深廣の日台文化交流」、『中国文哲研究通訊』、第 79 期、121-140 頁、2010.9
藤井省三、「中国的『挪威的森林』、『聯合文学』、第 314 期、54-59 頁、2010.12
藤井省三、「中国高度經濟成長期の「人世」と「人性」を映し出す両面鏡——「東アジアと松本清張」論序説、『松本清張研究』、第 12 号、76-91 頁、2011.3
藤井省三、「殖民地臺灣の下村湖人——文教官僚の挫折和教養小説作家的誕生」、『中國文哲研究通訊』、第 21 卷 第 3 期、171-177 頁、2011.9

藤井省三、「臺北電影聯盟的興衰：一九三〇年代現代都市的電影界革命」、『中國文哲研究通訊』、第 21 卷第 4 期、2011.12

(3) 書評

西澤治彦、『中国食事文化の研究』、風響社、藤井省三、『東方』、2010.9

Ha Jin (哈金)、駒沢敏器(翻訳)、『自由生活』、日本放送出版協会、藤井省三、『信濃毎日新聞』、2010 年 10 月 17 日、2010.10

李永平／池上貞子、及川茜訳、『吉陵鎮ものがたり』、人文書院、藤井省三、『東方』、33-36 頁、2011.4

西楨偉、『響きあうテキスト 豊子愷と漱石、ハーン』、研文出版、藤井省三、『熊本日日新聞』、2011.7

楊逸、『獅子頭』、朝日新聞出版、藤井省三、『一冊の本』、8-9 頁、2011.10

欣然／中谷 和男(翻訳)、『中国最後の証言者たち』、武田ランダムハウスジャパン、藤井省三、『北海道新聞』、2011.12

(4) 解説

藤井省三、「解讀董啓章『地図集』抄訳」、『文學界』、53-54 頁、2010.10

藤井省三、「寄語于桂玲『渡辺淳一情愛文学論』」、于桂玲著『渡辺淳一情愛文学論』(北京、中国社会科学出版社、2010 年 10 月)、1-5 頁、2010.10

藤井省三、「中国における松本清張」、『北九州市立松本清張記念館企画「松本清張と東アジア」展図録』、53、2010.12

藤井省三、「中国における村上春樹受容の第二の転換期」、『新潮』、204-205 頁、2011.3

藤井省三、「魯迅が蔦谷虹児を翻訳するとき」、『孤愁の詩人・画家 蔦谷虹児展』、12-14 頁、2011.10

藤井省三、「中国政治犯たちの収容所の記憶：映画『無言歌』の原作『夾辺溝の記録』をめぐる」、『無言歌』パンフレット』、19-20 頁、2011.12

(5) 学会発表

国際、藤井省三、「日本文化界與李昂的對話——以吉本芭娜娜(YOSHIMOTO Banana) 和小川洋子(OGAWA Yoko)為主」、第四屆經典人物—李昂跨領域國際學術研討會／性別、記憶與跨文化書寫、台湾、嘉義市、中正大学台湾文学研究所、2010.5.21

国際、藤井省三、「日本文化界與李昂的對話——深廣的日台文化交流——」、中央研究院文哲研究所講演会、台湾・台北市・中央研究院文哲研究所、2010.5.24

国際、藤井省三、「《海角七號》：死、再生神話及東亞的歷史記憶」、中央研究院近代史研究所講演会、台北市・中央研究院近代史研究所、2010.5.25

国際、藤井省三、「魯迅文学里的阿 Q 形象的系譜：以『呐喊』、『彷徨』為主」、東亞的阿 Q 形象之系譜 Workshop、韓国ソウル市・東国大学、2010.12.2

国内、藤井省三、「魯迅「故郷」をめぐる」、日本文学協会国語教育部会公開シンポジウム「魯迅「故郷」をめぐる」、東京都立産業技術高等専門学校(品川キャンパス)、2011.5.15

国内、藤井省三、『百年恋歌』の中の台湾百年史、侯孝賢映画シンポ、名古屋大学東山キャンパス・カンファレンスホール、2011.6.26

国内、藤井省三、「東アジア・アイデンティティと「阿Q」像の系譜——夏目漱石から魯迅、村上春樹、ウォン・カーウエイ(王家衛)まで」、静岡大学人文学部アジア研究センター講演会、静岡大学人文学部、2011.6.30

国内、藤井省三、「中国語圏における村上春樹「村上春樹の読みかた」第 4 回」、世田谷文学館連続講座、世田谷文学館連続講座、2011.9.19

国際、藤井省三、「村上春樹《1Q84》中《阿Q正伝》的亡霊們」、紀念魯迅誕辰 130 周年暨「魯迅：經典與現實」國際學術研討会、中国・紹興・咸亨大酒店、2011.9.26

国際、藤井省三、「西川満の戦後創作活動と近代日本文学史における第二期台湾ブーム」、「日本文學中的台灣」國際研討会、台湾・台北・中央研究院民族學研究所大樓、2011.10.7

国際、藤井省三、「劉訥鷗在一九三〇年代的東亞文化」、璀璨波光——2011 劉訥鷗國際研討會(Illuminations at 2011 International Conference on Liu Na-ou)、台湾・中壢・國立中央大學文學院二館三樓國際會議廳、2011.10.9

国際、藤井省三、「侯孝賢創造台湾百年史電影之時——《最好的時光 Three Times》中的歷史記憶」、第 9 屆 東亞現代中文文學國際學術研討會(II)・韓國中語中文學會 2011 年度 聯合國際學術大會、韓国・ソウル・崇實大學校、2011.10.29

国際、藤井省三、「村上春樹《1Q84》中《阿Q正伝》的亡霊們」、「東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜」第 3 回ワークショップ、台湾・台北・台湾大学台湾文学研究所、2011.11.16

- (6) 研究報告書
藤井省三、「魯迅——東アジアを生きる文学」、1-244 頁、2011.3
- (7) 予稿・会議録
国際会議、Fujii Shozo (藤井省三)、「Report. SCA Special Session —Pop Culture in Asia—」、11th Science Council of Asia (SCA) conference in Manila、Softel Philippine Plaza Manila、2010.6.16
- (8) 監修
藤井省三、『中国文学研究文献要覧 近現代文学 1978-2008』、日外アソシエーツ、2010.5
- (9) 会議主催 (チェア他)
国際、「the 10th Science Council of Asia Conference in Manila」、チェア、Pop Culture in Asia- Comparison of Film Culture、Softel Philippine Plaza Manila、2010.6.15~2010
国際、「第八屆東亞現代中文文學國際學術研討會」、その他、王潤華、朴宰雨、柯慶明報告、慶應義塾大学日吉キャンパス、2010.11.3~2010
国際、「第 3 回東京首爾中國現代文學研究對話會」、チェア、李炫政 (韓國 首爾市立大學) 報告、吳敏報告 (中國 華東政法大學)、慶應義塾大学日吉キャンパス、2010.11.4~2012
国際、「11th SCA (アジア学術会議) at Mongolia」、チェア、Pop Culture in Asia、Mongolia-Japan Center for Human Resources Development, National University of Mongolia、2011.6.4
国際、「東大中文・南大中国新文学研究中心共催研究會」、主催、東大山上会館、東大赤門総合研究棟、2011.11.4~2011.11.5
- (10) マスコミ
「都市生活の影 奇妙な物語に」、『北海道新聞』、2010
「陳情村が映す腐敗と不条理」、『北海道新聞』、2010.1.26
「東大教師が新入生にすすめる本」、『UP』2-3 頁、東京大学出版会、2010.4
「関心高まる李昂 シンポ盛況」、『北海道新聞』、2010.7.13
「映画の夢かなえた高行健」、『北海道新聞』、2010.10.5
「2010 年読書アンケート」、『みすず』第 590 号、2011 年 1,2 月合併号、8 頁、みすず書房、2011.1
「映画が掘り起こす強制収容所の記憶」、『北海道新聞』、2011.1.5
「壁の中の劉曉波と村上春樹の砕ける卵」、『環』第 44 号、130-131 頁、藤原書店、2011.1.30
「相互理解深める東アジア」、『北海道新聞』、2011.3.29
「9 月 25 日に生誕 130 周年／東アジアで重要性増す／魯迅文学／漱石から春樹まで深い影響関係」、『公明新聞』、公明党、2011.8.21
「魯迅文学永遠活在日本人心底」、『中国社会科学報』、2011.9.20
「掲示板」、『週刊新潮』、2011.11.10
- (11) 翻訳
個人訳、蘇童、「香草宮」、藤井省三、『香草宮』、『2010 年 6 月号』、50-67 頁、新潮社、2010.6
個人訳、董啓章、「地図集」、藤井省三、『地図集 (抜粋)』、『文學界』、40-52 頁、文藝春秋、2010.10
個人訳、魯迅、「彷徨、故事新編」、藤井省三、『酒樓にて／非攻』、『古典新訳文庫』、全 286 頁、光文社、2010.10

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等
非常勤講師、早稲田大学法学部、「文学 I D 村上春樹と中国・香港・台湾」、2010.4~2010.9
非常勤講師、朝日カルチャーセンター、「映画『海角七号 君思う、国境の南』にみる愛と憎の記憶」、2010.5~
非常勤講師、朝日カルチャーセンター、「東アジア映画の中の愛と憎しみの記憶」、2010.7~2010.9
非常勤講師、金沢大学集中講義 2010 年 9 月 27-30 日、「魯迅と村上春樹」、2010.9~2010.9
非常勤講師、朝日カルチャーセンター、「新訳魯迅を読む：愛と死の小説」、2010.10~2010.11
非常勤講師、朝日カルチャーセンター、「新訳魯迅を読む：夫婦と恋人たちの物語」、2011.1~2011.3
非常勤講師、早稲田大学法学部、「文学 I D 村上春樹と中国・香港・台湾」、2011.4~
特別講演、日比谷高校同窓会、「現代中国文化探検：上海・北京の村上春樹チルドレンをめぐって」、2010.4~2010.4
特別講演、清華大学中文系、「魯迅帰化翻訳怎么引起日本人“誤読”——从松本清張之反《故郷》小説到当代初中国語課本問題——」、2011~

特別講演、Institute of Chinese Studies / University of Heidelberg、「How Japanese Dialogue with Li Ang」、
2011.3～

特別講演、松本清張記念館、「中国における翻訳『砂器』と映画『砂之器』——現代中国を映し出す両面鏡としての
の松本清張」、2011.3～

特別講演、東京外国語大学、「世界文学としての村上春樹」、2011.12～

特別講演、南京大学中国新文学研究中心、「魯迅与日本文学」、2011.12～

特別講演、南京師範大学日語系、「魯迅と日本作家」、2011.12～

特別講演、南京大学、「魯迅与日本作家」、2011.12～

特別講演、黒竜江大学日語系、「村上春樹と中国」、2011.12～

特別講演、佳木斯大学日語系、「村上春樹と中国」、2011.12～

特別講演、北京外国語大学日語系、「村上春樹と中国」、2011.12～

特別講演、南京大学中国新文学研究中心、「魯迅與劉呐鷗：圍繞“戰間期”在上海的《猪山豔史》《春蠶》電影論争」、
2012～

台湾大学文學院台湾文学研究所連続講演「現代日本文學與魯迅」

2月20日 夏目漱石(1867～1916)、森鷗外(1862～1922)与魯迅(1881～1936)

2月27日 ロシア盲詩人エロシエンコと魯迅

3月5日 芥川龍之介(1892～1927)与魯迅

3月12日 魯迅与太宰治(1909～1948)

3月16日 魯迅与松本清張(1909-92)

3月26日 魯迅与村上春樹(1949～)

台湾大学文學院台湾文学研究所連続講演「台日比較文學」

2月21日 佐藤春夫的臺灣經驗與『女誠扇綺譚』

2月28日 巫永福、呂赫若的東京經驗

3月6日 劉呐鷗的上海經驗與魯迅以及李香蘭

3月13日 臺北時代的西川滿與『赤嵌記』

3月17日 現代台日互相形象:從東京時代的西川滿到電影《海角七號》

3月27日 李昂在日本

その他、ドイツ・Darmstadt theater、「remarks on the discussion table of Dance and Literature」、2011.3～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

南京大学現代中国文学研究中心、客座教授、2011.11.～2011.12

台湾大学台湾文学研究所、客座教授、2012.2～2012.3

黒竜江大学日語專業、客座教授、2012.3～

1. 略歴

- 1976年3月 大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒業（文学士）
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（中国語学）
1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（中国語学）
1978年9月 中華人民共和国北京語言学院留学
1979年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学
1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士単位取得退学
1982年4月 金沢大学文学部助教授
1986年10月 神戸大学教養部助教授
1992年10月 神戸大学国際文化学部助教授
1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
1999年4月 東京大学文学部大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、主として現代中国語の意味論と文法論

b 研究課題

自然言語の普遍性と多様性のパラダイムを背景に、中国語の意味的現象と、その反映としてある文法的現象を考察し、中国語の意味と構造のメカニズムの解明に取り組む。

c 主要業績

(1) 論文

- 木村英樹、「「存在文」が表す〈存在〉の意味および‘定不定’の問題」、『漢語与漢語教学研究』、第2号、3-15頁、2011.7
木村英樹、「中国語文法研究にみる認知言語学の成果と課題」、『中国語学』、No.258、24-64頁、2011.10
木村英樹、「“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特性」、『東京大学中国語中国文学研究室』、Vol.14、89-117頁、2011.11

(2) 教科書

- 『中国語入門Ⅰ（'10）』、木村英樹、宮本徹、執筆、放送大学教育振興会、2010
『中国語入門ⅡⅠ（'10）』、木村英樹、宮本徹、執筆、放送大学教育振興会、2010

(3) 共同研究

- 「中国語文法史の歴史的展開 ―構文と文法範疇の相関的変遷の解明―（基盤研究B）」、2011～
東京外国語大学AA研「ダイクシス表現の多様性の研究」、「A study of variability in deictic expressions」、2010～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、東京言語研究所、「中国語のヴォイス」、2010.2
特別講演、津田塾大学・言語文化研究所、「中国語における〈現場性〉もしくは〈実存性〉の文法的表れ」、2011.10.8
非常勤講師、九州大学、2011.10
非常勤講師、京都大学、2012.1
非常勤講師、立命館アジア太平洋大学、2012.1

1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学（至1990年2月）
 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（至1995年3月）
 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）
 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（至1998年12月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 主要業績

(1) 論文

大西克也、「史書」とは何か——英藏敦煌漢簡及び秦漢楚地域出土資料を中心として——、『出土文献と秦楚文化』、第5号、23-45頁、2010.3

大西克也、「放馬灘秦簡用字的幾個特點」、『第二十一屆中國文字學國際學術研討會論文集』、375-392頁、2010.4

大西克也、「古漢語“來”類動詞詞彙使役句和句法使役句的語義差異」、『中國語言學』、4、73-89頁、2010.7

大西克也、「試說“流形”原意」、『出土文献』、1、181-184頁、2010.10

大西克也、「上博楚簡『平王問鄭壽』の歴史的背景について」、『出土資料と漢字文化圏』、3-16頁、2011.3

大西克也、「上博七『君人者何必安哉』「有白玉三回而不斃」及其他」、『第十屆中國訓詁學國際學術研討會論文集』、81-88頁、2011.5

大西克也、「所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張——」、『漢語与漢語教学研究』、2、16-31頁、2011.7

大西克也、「秦漢楚地隸書及關於“史書”的考察」、『簡帛』、6、437-456頁、2011.11

(2) 学会発表

国際、大西克也、「説“生”——上古漢語動詞“生”的語義及句法特點」、中国語言学發展之路——繼承、開拓、創新 国際學術研討会、中国・北京・北京郵電會議中心北樓2樓報告厅、2010.8.29

国際、大西克也、「從“領有”到“空間存在”——上古漢語“有”字句的發展過程」、第七屆國際古漢語語法研討会、フランス・ブルターニュ・ロスコフ海洋生物研究センター、2010.9.19

国際、大西克也、「上古漢語“奪取”類雙及物結構研究（初稿）」、第七屆海峽兩岸漢語語法史研討會、中国・浙江省・浙江師範大學國際交流中心、2011.8.18

(3) 書評

原宗子、『環境から解く古代中国』、大西克也、『漢文教室』、196、38頁、2010.5

(4) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、大西克也、研究代表者、「中国語文法史の歴史的展開——構文と文法範疇の相関的変遷の解明」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、埼玉大学国語教育学会、「戦国秦簡出土文字資料から見た「文字統一」」、2011.12～

特別講演、国立成功大学、「從秦漢出土文献看「史書」的含義」、2011.12～

特別講演、国立成功大学、「上古漢語和出土文献——文本和語言的關係——」、2011.12～

(2) 学会

国内、中国出土資料学会、会長、2010.4～

国内、日本中国語学会、編集委員長、2010.10～

12 東洋史学

教授 小松 久男 KOMATSU, Hisao

1. 略歴

- 1974年3月 東京教育大学文学部史学科東洋史学専攻卒業
- 1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（東洋史学）修了
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（東洋史学）中退
- 1980年4月 東海大学文学部文明学科西アジア課程専任講師
- 1987年4月 東海大学文学部文明学科西アジア課程助教授
- 1992年4月 東京外国語大学外国語学部中東語学科（トルコ語）助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中央アジア近現代史

b 研究課題

- (1) 19世紀末～20世紀初頭の中央アジアにおけるムスリム知識人の思想と運動
- (2) ソ連解体後にその歴史・文化的な広がりが見えるようになった中央ユーラシアの地域研究
- (3) 近現代中央アジアにおけるイスラーム復興

c 主要業績

(1) 論文

小松久男、「中央アジアのムハージル」、『叢書グローバル・ディアスポラ 3 中東・北アフリカのディアスポラ』、102-125頁、2010

小松久男、「中央ユーラシアの変動と波動」、小杉泰編『イスラームの歴史2 イスラームの拡大と変容』（宗教の世界史12）、131-164頁、2010

Комацу Хисао, Мусульманские интеллектуалы и Япония: Панисламистский последник Габдерашит Ибрагим (Ибрагимов), М. Госманов и Ф. Галимуллин, Габдерәшит Ибраһим: фәнни-биографик жьентык, Казан: «Жьен» нәшрияты, стр. 365-387, 2011

小松久男、「近現代史研究の眺望と課題：イスラーム地域を中心に」、『内陸アジア史研究』、26号、69-74頁、2011.3

(2) 学会発表

国内、小松久男「近現代史研究の眺望と課題」内陸アジア史研究の課題と展望、早稲田大学、2010.11.13

国内、小松久男「イブラヒムの夢：イスラーム世界と日本を結ぶ」国際シンポジウム「戦前日本の対回教圏政策とトルコ」東京外国語大学、2012.1.28

(3) 監修

H. Komatsu, Ş. Karasar, T. Dadabaev, G. Kurmangaliyeva Ercilasun, *Central Eurasian Studies: Past, Present and Future*, Maltepe University, 2011

(4) 翻訳

監訳、В.В. Баргольд, История культурной жизни Туркестана, 小松久男『トルキスタン文化史 1・2』、平凡社、2011.2、2011.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

学習院大学文学部非常勤講師（2011年度）

(2) 学会

史学会理事、内陸アジア史学会常任理事（副会長）、日本中東学会理事、日本中央アジア学会理事

- (3) 行政
人文社会系研究科長・文学部長 (2010 年度)、
ハラスメント相談所長 (2011 年度)、
新図書館構想推進委員会委員長 (2011 年度)
- (4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員
日本学術会議第一部会員

教授 水島 司 MIZUSHIMA, Tsukasa

1. 略歴

- 1976 年 3 月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1976 年 4 月 東京大学大学院人文科学系研究科修士課程入学
1979 年 4 月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1988 年 4 月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1992 年 12 月 東京大学文学部より博士号 (文学) 取得
1995 年 4 月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
1997 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

南アジア近現代史

b 研究課題

1. 歴史研究への地理情報システムの応用
2. 在地社会論、ミーラーズ体制からの 18 世紀南インド経済史分析
3. 歴史統計分析による 18-20 世紀の長期変動の分析
4. グローバル・ヒストリーと南アジア

c 主要業績

(1) 著書

- 編著、水島司、『環境と歴史学 歴史研究の新地平』、勉誠出版、2010.9
単著、水島司、『インド・から』、山川出版社、2010.12
編著、水島司・田巻松雄編、『21 世紀への挑戦 3 日本・アジア・グローバリゼーション』、日本経済評論社、2011.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

NHK 高校講座世界史で、古代インド、中世インド、現代インド、および東南アジアを対象とした番組を担当

(2) 学会

日本南アジア学会・理事
社会経済史学会
歴史学研究会
東方学会
史学会・理事長

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究専門委員会委員
日本学術会議連携委員

准教授 **吉澤 誠一郎** YOSHIZAWA, Seiichiro

1. 略歴

- 1991年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了
1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程中退
1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1999年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（東アジア歴史社会）
〔2000年5月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得〕
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

主な研究課題は、近代中国の都市政治、経済建設、ナショナリズム。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 主要業績

(1) 著書

単著、吉澤誠一郎、『清朝と近代世界』、岩波書店、2010.6

(2) 論文

吉澤誠一郎、「懐疑される愛国心—中華民国四年の反日運動をめぐって」、『思想』、1033号、pp. 243-261、2010.5
吉澤誠一郎、「近代中国の租界」、吉田伸之・伊藤毅編『伝統都市2権力とヘゲモニー』東京大学出版会、pp. 209-236、2010.5

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

中央大学大学院文学研究科非常勤講師（2009.9—2011.3）

(2) 学会

史学会理事、中国社会文化学会理事

准教授 **大稔 哲也** OTOSHI, Tetsuya

1. 略歴

- 1983年3月 早稲田大学第一文学部東洋史学専攻卒業
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専門課程）修士課程入学
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専攻）博士課程進学
1988年12月 エジプト・アラブ共和国カイロ大学文学部留学～1991年3月
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専攻）博士課程単位修得退学
1992年4月 日本学術振興会特別研究員
1994年4月 山形大学教養部専任講師
1995年6月 東京大学大学院人文社会系研究科より博士（文学）の学位を得る。
1996年4月 九州大学文学部助教授
2000年4月 九州大学大学院人文科学研究科助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史・中東社会史

b 研究課題

中世エジプトにおける聖墓参詣と聖者崇敬
イスラーム期エジプトにおける諸宗教の並存
現代カイロの庶民街研究

c 主要業績

(1) 著書

編著、大稔哲也・島菌進、『死者の追悼と文明の岐路 2011年のエジプトと日本』、三元社、2012.3
編著、Tetsuya Ohtoshi & Susumu Shimazono、『Commemorating the Dead in a Time of Global Crisis: Egypt and Japan in 2012』、The University of Tokyo、2012.3

(2) 論文

大稔哲也、「ムスリムの『参詣の書』より—エジプトの参詣案内記—」、『説話・伝承学』、第18号、40～56頁、2010.3
大稔哲也、「ムスリムの他界観研究のための覚書—イブン・アフマド・アル・カーディーとサマルカンディーによる他界論をめぐって—」、『死生学研究』、15、1～24(339～362)頁、2011.3
大稔哲也、「エジプト「1・25革命」の社会史点描」、『現代思想』、vol. 39-4、100-107頁、2011.3)

(3) 学会発表

国際、Tetsuya Ohtoshi、“The Creation of Holy Tombs and Saints in Medieval Egypt”、3rd World Congress for Middle Eastern Studies、Universitat Autònoma de Barcelona、Barcelona、2010.7.21
国際、Tetsuya Ohtoshi、“Successes and Failures in Creating Holy Tombs and Saints”、Connectivity and Micro-Region in the Mediterranean II、Trieste University、Trieste、2010.9.2

(4) 会議主催（チェア他）

国際、「HiPeC International Peace Conference 2011、Peace from Disasters: Indigenous Initiatives across Communities, Countries and Continents」、その他、Hiroshima International Conference Hall、Peace Memorial Park、Hiroshima、2011.9.18～2011.9.19
国際、「Egyptian-Japanese International Symposium 2011 - Commemorating the Dead in a Time of Global Crisis」、主催、The University of Tokyo、Hongo Campus、Faculty of Law & Letters Bldg.2、Lecture Hall 1、2011.9.23

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

講演、在日エジプト大使館 文化・教育・科学部、2010.5.28
講演、藤女子大学キリスト教文化研究所、2011.10.1

(2) 学会

日本イスラム協会、運営委員（1998年4月～現在）、常任理事（2008年4月～現在）
日本中東学会評議員（2001年4月～現在）、理事（2007年4月～現在）
日本歴史学協会委員（2006年4月～現在）
史学会編集委員（2007年6月～2010年6月）、評議員（2009年10月～現在）

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国立民族学博物館共同研究員、2008.4～2012.4

1. 略歴

- 1990年3月 岡山大学文学部史学科卒業
1990年4月 大阪市立大学文学研究科修士課程東洋史学専攻入学
1992年3月 同上 修了。文学修士の学位を取得
1992年4月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻入学
1994年9月 武漢大学（中国）にて歴史系高級進修生として在外研究（～1996年7月）
2001年3月 大阪市立大学文学研究科博士課程東洋史学専攻修了。大阪市立大学文学研究科より博士（文学）の学位を取得
2001年10月 岡山大学文学部助教授
2006年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科助教授
2007年4月 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代史

b 研究課題

皇帝権力の形成と展開、4～5世紀の遊牧民族の南下と社会変容、都城史、石刻史料を用いた社会史

c 主要業績

(1) 著書

編著、「中国中古史」編集委員会、『中国中古史研究：中国中古史青年学者聯宜会会刊 第一輯』、2011.2

(2) 論文

佐川英治（劉嘯訳）、「東魏北齊革命与《魏書》的編纂」、陳鋒・張建民主編『中国古代社会經濟史論——黃惠賢先生八十華誕紀念論文集』、湖北長江出版集團・湖北人民出版社、426-448頁、2010.6

佐川英治・阿部幸信・安部聡一郎・戸川貴行、「日本魏晋南北朝史研究的新動向」、『中国中古史研究』、1、2011.2

佐川英治、「中国古代の都城の空間」、『文化交流研究』、24、2011.3

佐川英治、「漢魏洛陽城研究の現状と課題」、『洛陽学國際シンポジウム報告論文集』、2011.3

佐川英治、「游牧与農耕之間—北魏平城鹿苑の機能及其變遷—」、『中国中古史研究』、2、2011.9

佐川英治、「漢代の郊祀と都城の空間」、小嶋毅編『東アジアの王権と宗教』、勉誠出版、40-51頁、2012.3

(3) 学会発表

國際、佐川英治、「漢六朝時代的郊祀与城市規画」、中古時代的禮儀、宗教与制度國際學術研討会、復旦大学、上海、2010.11.7

國際、佐川英治、「漢魏洛陽城研究の現状と課題」、洛陽学國際シンポジウム、明治大学、東京、2010.11.27

國際、佐川英治、「中国中古軍功制度初探」、唐長孺先生百年誕辰紀念國際學術研討会暨中国唐史学会第十一屆年會、武漢大学、武漢、2011.7.4

國際、佐川英治、「中国中古都城史研究的方法及意義」、第五届中国中古史青年学者國際研討会、首都師範大学歴史学院、北京、2011.8.28

國際、佐川英治、「論六朝建康在中国古代都城史上的地位」、江南地域文化的歷史演進國際學術研討会、南京國際會議酒店、南京、2011.9.4

國際、佐川英治、「曹魏明帝太極殿の所在」、中国魏晋南北朝史学会第十屆年會暨國際學術研討会、山西大学歴史文化学院、太原、2011.10.19

国内、佐川英治、「六朝建康の歴史的位置づけについて」、六朝建康と都城研究 シンポジウム、東京大学、2011.12.8

國際、佐川英治、「南北朝新出土墓誌的實地觀察—南京、洛陽、西安、太原—」、東亜碑刻史料解説工作坊、台湾大学、台北、2011.12.9

(4) 予稿・會議録

國際會議、佐川英治、「漢六朝時代的郊祀与城市規画」、2010.11.7

國際會議、佐川英治、「中国中古軍功制度初探」、2011.7.4

国際会議、佐川英治、「中国中古都城史研究的方法及意義」、2011.8.28

国際会議、佐川英治、「論六朝建康在中国古代都城史上的地位」、2011.9.4

国際会議、佐川英治、「曹魏明帝太極殿の所在」、2011.10.19

(5) **研究テーマ**

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、研究代表者、「最新の考古調査および礼制研究の成果を用いた中国古代都城史の新研究」、2010～

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「中国古代軍事制度の総合的研究」、2008～

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「石刻史料と史料批判による魏晋南北朝史の基本問題の再検討」、2010～

文部科学省科学研究費補助金、佐川英治、分担者(代表者は東大外)、「魏晋南北朝時期主要都城の「都城圏」社会に関する地域史的研究」、2011～

3. 主な社会活動

(1) **他機関での講義等**

非常勤講師、大阪教育大学、「中国古代の都城の空間」、2012.2

(2) **学会**

国内、史学会、史学雑誌編集委員会、2011.4～

国内、中国社会文化史学会、評議員、2011.7～

1 3 中国思想文化学

教授 川原 秀城 KAWAHARA, Hideki

1. 略歴

- 1968年4月 京都大学理学部入学
- 1972年3月 京都大学理学部数学科卒業・理学士
- 1972年4月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）編入学
- 1974年3月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）卒業・文学士
- 1974年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程（中国哲学史専攻）入学
- 1980年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程（中国哲学史専攻）単位取得退学
- 1980年7月 岐阜大学教育学部助教授（社会科・哲学研究室）
- 1992年4月 東京大学文学部 助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジアの思想史と科学史

b 研究課題

- (1) 朝鮮思想史
- (2) 朝鮮数学の成立と展開
- (3) 明清西学

c 主要業績

(1) 著書

『朝鮮数学史—朱子学的な展開とその終焉—』，東京大学出版会，頁339，2010年10月

『高橋亨 朝鮮儒学論集』，金光来と共編訳，知泉書館，頁446，2011年9月

(2) 史料

『関流和算書大成—関算四伝書—』第2期，岡本和夫・渡辺純成・佐藤賢一と共編，勉誠出版，2010年3月

『関流和算書大成—関算四伝書—』第3期，岡本和夫・渡辺純成・佐藤賢一・安大玉と共編，勉誠出版，2011年1月

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

山口大学人文学部（2011）立正大学文学部（2011）

(2) 学会

東方学会評議員（2011）

1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
1987年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
1987年4月 東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
1992年4月 徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
1994年4月 同 助教授（人間社会学科）
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（中国思想文化学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。

c 主要業績

(1) 論文

小島 毅、「藤田東湖における道の公共性——「弘道館記述義」私解」、『公共する人間3 横井小楠 公共の政を首唱した開国の志士』、pp.157-181、2010.9

小島 毅、「儒教経学と王権」、『アジア遊学』、151、pp. 52-64、2012.3

(2) 啓蒙

小島 毅、「東アジアの文化伝統と兼統」、『直江兼統——人と時代』、pp. 325-328、2010.3

小島 毅、「江戸時代儒学思想の受容と岡山」、『温故知新——中国と岡山』、pp. 5-28、2010.3

小島 毅、「中国生まれの志士思想」、『歴史読本』、864、pp. 134-139、2010.6

小島 毅、「朱子学・陽明学の日本的受容と幕末維新——現代の鑑としての歴史に学ぶ」、『人間会議』、23、pp. 119-125、2011.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師：岩手大学教育学部（2010-2011年度）、東北大学文学部（2010年度）、慶應義塾大学文学部（2011年度）、九州大学文学部（2011年度）

(2) 学会

中国社会文化学会理事（2010-2011年度）、財団法人東方学会評議員（2010年度）、日本中国学会評議員（2010-2011年度）、日本学術会議連携会員（2010-2011年度）

1. 略歴

- 1988年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
- 1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
- 1991年9月 京都大学人文科学研究所助手
- 1997年4月 千葉大学文学部助教授
- 2003年4月 東京大学大学院人文社会系助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系准教授

2. 主な研究活動**a 専門分野**

中国思想、道教

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
- (2) 道教と中国仏教の交渉史
- (3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 主要業績

(1) 論文

「道教の歴史」、アジア遊学 113、2010.6

「東京大学総合図書館所蔵嘉興蔵の整理課程と経典排列」、『東京大学総合図書館所蔵嘉興大蔵経 目録と研究 II 研究篇』、2010.9

「明初道士何道全的思想」、『洞天福地研究』、2011.3

「道教と唐宋王朝」、アジア遊学 151、2012.3

(2) 学会発表

「宋元道教的内丹養生法」、International Conference on Song Daoism 2011、香港中文大学、2011.9.23

(3) 研究報告書

「東京大学総合図書館所蔵嘉興大蔵経 目録と研究 I 目録篇」、科学研究費補助金成果報告書、2010.9

「東京大学総合図書館所蔵嘉興大蔵経 目録と研究 II 研究篇」、科学研究費補助金成果報告書、2010.9

(4) データベース

「道教関係著書論文目録[2009(平成 21)年]」、『東方宗教』116号、2010.11

「道教関係著書論文目録[2010(平成 22)年]」、『東方宗教』118号、2011.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学非常勤講師、2010.4～9、2011.4～9

(2) 学会

日本道教学会、編集委員、理事、2010.4～2012.3

14 インド語インド文学

教授 **土田 龍太郎** TSUCHIDA, Ryutaro

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業（文学士）
- 1973年3月 同 人文科学研究所大学院修士（印度哲学）
- 1975年10月 ドイツ、マールブルク大学留学（印度文献学）PhD. (1979.4)
- 1979年10月 同 助手（非ヨーロッパの言語と文化）～1983.3
- 1983年4月 東京大学文学部助教授（印度哲学印度文学）
- 1987年6月 日本印度学仏教学会賞受賞（昭和六十二年度）
- 1988年4月 東京大学文学部助教授（印度語印度文学）
- 1994年4月 同 教授
- 1995年4月 同 大学院人文社会系研究科教授
- 2012年3月 同職を退職、名誉教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

印度語学印度文学

b 研究課題

1. 古代印度の家長・苦行者・隠者の生活と生活理念の研究
2. 大説話集 Brhatkatha の研究
3. 二大叙事詩研究
4. Kavya 文芸研究

c 主要業績

(1) 論文

「ラーマーヤナ・ウッタラカーンダの王統史観」、『奥田聖應先生記念論集』、2012年3月（予定）

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

慶應義塾大学言語文化研究科

(2) 学会

日本印度学佛教学会、日本佛教学会

(3) 行政

身障者入試委員

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

財団法人・東京大学仏教青年会・評議員

1. 略歴

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学。

1979年10月～1982年2月 インド・マドゥライ大学へ留学。

1985年4月～1988年9月 オランダ・ユトレヒト大学東洋言語文化研究所へ留学。

1989年6月 ユトレヒト大学より博士（文学）取得。

1991年4月 四天王寺国際仏教大学（現、四天王寺大学）文学部助教授

1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

1999年4月 同 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

タミル語タミル文学

b 研究課題

1. タミル古典文学（紀元後1～3世紀ごろ）および文学理論（詩論）の研究。
2. タミル古典文学により古代社会再考。
3. タミル後期古典文学（4～6世紀ごろ）の年代再考。

c 主要業績

- (1) 論文（2010, 2011年度に限る）

「古代タミルの塩の道」, 『万葉古代学研究所年報』第9号, 万葉古代学研究所, 榎原, 2011.3, 135-144頁。

“Jain Authorship in Tamil Literature: A Reassessment”, 『インド哲学仏教学研究』17, 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部・インド哲学仏教学研究室, 2011.3, 1-12頁。

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等

東洋大学文学部（2006～）

- (2) 学会

日本印度学仏教学会・理事（2008～2011）

日本南アジア学会・編集委員長（2009～2010）、編集委員（2011）

- (3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

(財)東京大学仏教青年会・理事長（2008～）

15 インド哲学仏教学

教授 齋藤 明

SAITO, Akira

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部第I類倫理学専修課程卒業
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程修士課程修了
- 1981年6月 オーストラリア国立大学アジア研究学部博士課程給費留学(～1984年3月)
- 1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程博士課程単位取得退学
- 1984年4月 東京大学文学部助手
- 1985年5月 オーストラリア国立大学より Ph.D.学位取得
- 1988年4月 三重大学人文学部助教授
- 1993年4月 同 教授
- 2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

インド仏教学

b 研究課題

インド大乘仏教思想史の研究。とくに中観派(Mādhyamika)の前史、学派成立の経緯、およびインドからチベットに至る同派の思想展開と影響を洗い直す作業を行っている。

c 主要業績

(1) 著書

- 編著、齋藤 明、『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』、山喜房佛書林、2011.2
- 編著、齋藤 明、『大乘仏教とは何か』(シリーズ大乘仏教・第1巻)、春秋社、2011.6
- 編著、齋藤 明、『大乘仏教の誕生』(シリーズ大乘仏教・第2巻)、春秋社、2011.12

(2) 論文

- 齋藤 明、「新出『中論頌』の系統をめぐって」、『印度学仏教学研究』、59-2、956-964頁、2011.3
- Saito, A.、“Bhavya's Critique of the Sāṅkhya Theory of pratibimba,” *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 18, pp. 13-22, 2011.3
- 齋藤 明、「観音(観自在)と梵天勧請」、『東方学』、122、1-12頁、2011.7
- 齋藤 明、「ナーガールジュナと<無記>説」、『印度学仏教学研究』、60-2、966-971頁、2012.3

(3) 予稿・会議録

- 国際会議、齋藤明他、「仏教と論争—大乘仏教の展開とその宗教思想史的背景—」、第56回国際東方学者会議(ICES)、日本教育会館(東京・一ツ橋)、2011.5.20
- 『東方学会報』、100、17-19頁、2011.7

(4) 受賞

- 国内、齋藤 明、Akira Saito、第21回中村元東方学術賞、Nakamura Hajime Eastern Study Prize 2011、(財)東方研究会 & インド大使館、The Eastern Institute & Embassy of India、2011.10.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

大正大学非常勤講師(大学院演習)

(2) 学会

日本印度学仏教学会理事長、東方学会常務理事、比較思想学会理事、仏教思想学会理事、国際仏教学会(IABS)理事、国際オリエント・アジア研究連合(IUOAS)副会長

(3) 行政

文学部図書委員長(～2011.3)、全学図書行政商議会委員(～2011.3)、全学入試実施委員(2011.5～)

- (4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
日本学術会議連携会員（第21期～2010.9、第22期2010.10～）

教授 **丸井 浩** MARUI, Hiroshi

1. 略歴

1972年4月 東京大学教養学部文科三類入学
1974年4月 東京大学文学部印度哲学印度文学科進学
1976年3月 同 上 卒業
1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻修士課程入学
1979年3月 同 上 修了
1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程進学
1983年3月 同 上 単位取得退学
1984年1月 インド・プーナ大学サンスクリット高等研究センター在学（～1986年1月）（文部省給費留学生）
1983年4月 財団法人東方研究会専任研究員（～1990年3月）
1990年4月 武蔵野女子大学短期大学部専任講師（～1992年3月）
1992年4月 東京大学文学部助教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（大学院部局化に伴う）
1999年1月 同 上 教授（～現在）

<学位>

2011年11月 博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド哲学。インドの哲学的思索の伝統諸派（ダルシヤナ）のなかで、特に多元論的世界観と分析的、合理的思考を特徴とする、ニヤーヤ派・ヴァイシェシカ派のサンスクリット文献の解説・解釈、およびその思想（史）研究に従事している。最近の研究テーマは、(1) 宗教聖典の権威をいかに論理的に擁護するかをめぐる諸議論を分析して、インド思想における哲学と宗教の交錯関係をテキスト実証的に解明すること、(2) 「(インド) 六派哲学」という概念の展開、(3) 『ニヤーヤ・カリカー』というニヤーヤ最古の綱要書のテキスト校訂と翻訳を中心としたジャヤンタ研究、の三つ。

c 主要業績

(1) 論文

丸井 浩「Nyayamanjari に登場する『六タルカ (sattarki)』の意味—ジャヤンタは『六派哲学』を知っていたか—」『インド論理学研究』I（松本史朗教授還暦記念号）、インド論理学研究会、2010年9月、pp.1-40.

丸井 浩「ジャヤンタ研究—中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学—」.iii pp.+383 pp., 学位論文（東京大学）、2011年11月.

(2) 学会発表（口頭）

丸井 浩（コメンテーター）：第56回国際東方学者会議（56th International Conference of Eastern Studies）
2011年5月20日、日本教育会館、SYMPOSIUM IV 「仏教と論争—大乘仏教の展開とその宗教思想史的背景（Buddhism and Debate: The Development of Mahāyāna Buddhism and Its Background in Terms of Religio-Philosophical History）」

(3) 講演等

Hiroshi MARUI “A glimpse into the roles and contributions of Buddhism in the Japanese historical development of cultural diversity and spiritual unity”(invited lecture). AAPA Symposium (アジア・アフリカ哲学協会国際シンポジウム), Mumbai, 21.10.2010 “Buddhism in Asia: Cultural diversities & philosophical unity.”

Hiroshi MARUI “Philosophy or religion?: Reasoning and argumentation as a bridge over inter-religious conflicts in the context of Indian thought”(invited lecture). Center for Religious Studies, Humanities College, Seoul National University, 3.11.2010.

Hiroshi MARUI “The meaning of a diversity of established world views or tenets (siddhanta) in the Indian System of Logic (Nyaya) : What does Jayanta’s explanation of Nyayasutra 1.1.26-31 tell us?” (invited lecture). The Institute of Humanities, Seoul National University, 5.11.2010.

丸井 浩「古代インドの宗教思想から現代を考える」。「足利学校アカデミー」第6回講演、2011年7月3日。

丸井 浩「インドの合理主義思想と仏教—玄奘が訳したインド哲学書」(招待講演)。第12回東方学院・酬仏薬師寺、2011年11月26日。

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等・学会役員

学習院大学非常勤(思想史講義)、2010.4~2011.3

日本印度学仏教学会、理事、常務委員、2010.4-2012.3

日本宗教学会、評議員、2010.4-2012.3

東方学会、評議員、2010.4-2012.3

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

日本学会会議会員、第21期 2008.10-2011.9、第22期 2011.10~

財団法人東京大学仏教青年会、理事、2010.4~2012.3

財団法人東方研究会、理事、2010.4~2012.3、主任研究員、2010.4-2012.3

財団法人大法輪石原育英会、評議員、2010.4-2012.3

教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

- 1981.03 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程卒業
- 1981.04 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(印度哲学)入学
- 1984.03 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(印度哲学)修了
- 1984.04 東京大学大学院人文科学研究科博士課程(印度哲学)進学(-1989.3)
- 1985.07 インド・デリー大学大学院留学(文部省国際交流計画)(-1986.05)
- 1988.04 日本学術振興会特別研究員(-1990.03)
- 1994.06 博士(文学)(東京大学)
- 1994.10 東京大学文学部助教授
- 1995.04 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006.01-03 School of Oriental and African Studies (University of London) 委嘱教授
- 2006.04 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2007.04 東京大学文学部次世代人文学開発センター兼任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野はインド仏教の教典形成史、および人文情報学。前者については sutra, vinaya の形成過程解明を通して初期仏教から大乘仏教にいたる思想史、社会背景史の解明を目標とする。目下の研究課題は(1)大乘仏教の形成過程および大乘仏教の特徴についての従来の研究のみなおし、(2)仏教学を支える近代の仏教研究方法の問いなおし、および(3)仏教と現代の諸問題とのかかわりの考究という3点に集約される。西洋近代から生まれ、200年の歴史を有する仏教学を検証する視野のなかにこれら3点を据え、仏教学の進む新たな道を模索している。後者の課題、すなわち人文情報学については、仏教文献の電子化事業を進める過程で5年ほど前から本格的に着手。科学研究費基盤A「国際連携による仏教学術知識基盤の形成」のプロジェクトを中心に、次世代に向けた仏教学の国際的知識基盤づくりを始めた。

c 主要業績

(1) 著書

共編著、Sengaku Mayeda and Masahiro Shimoda (eds), *Spread and Influence of Hinduism and Buddhism in Asia*, 2010.12

編著、下田正弘、奈良康明『仏教出現の背景：新アジア仏教史01』、佼成出版社、2010.4

編著、下田正弘、奈良康明『仏典からみた仏教世界：新アジア仏教史03』、佼成出版社、2010.7

編著、下田正弘、奈良康明『仏教の形成と展開：新アジア仏教史02』、佼成出版社、2010.10

編著、下田正弘、奈良康明『スリランカ・東南アジア 静と動の仏教：新アジア仏教史04』、佼成出版社、2011.1

共著、末木文美士 編、『現代仏教の可能性：新アジア仏教史15』、佼成出版社、2011.3

編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士『大乘仏教とは何か：シリーズ大乘仏教1』、春秋社、2011.6

編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士『大乘仏教の実践：シリーズ大乘仏教3』、春秋社、2011.11

編著、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士『大乘仏教の誕生：シリーズ大乘仏教2』、春秋社、2011.12

共編、桂紹隆、斎藤明、下田正弘、末木文美士『認識論と論理学：シリーズ大乘仏教9』、春秋社、2012.1

(2) 論文

単著、下田 正弘「他者としての仏教可能性としての南アジア試論」、『南アジア研究』、22、158-169頁、2010.12

共著、永崎研宣、下田正弘「東洋古典文献研究におけるデジタルテキストの適切な記述方法について」、『情報処理学会:人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』、Vol.2010, no.15、311-316頁、2010.12

共著、松田 訓典、彌永 信美、永崎 研宣、下田 正弘「仏教辞典『法寶義林』のデジタル化：TEIとXML DBを利用した情報の共有化に向けて」、『情報処理学会:人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』、Vol.2010, no.15、305-310頁、2010.12

単著、下田 正弘「〈涅槃経〉経典群の編纂過程から照らす〈法華経〉：〈法華経〉の構造解明のための準備として」、『法華文化研究』、36、1-18頁、2011

単著、下田 正弘「経典研究の可能性を再考する：セッションNo.5の発表に対するコメント」、『日本仏教学会年報』、76、195-207頁、2011

共著、永崎研宣、苦米地等流、Dorji Wangchuk, Orna Almogi, 下田正弘「人文学のためのコラボレーション：ITLRコラボレーションシステムの開発を中心的事例として」、『情報処理学会:人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』、Vol.2011、155-160頁、2011

(3) 学会発表

国際、Masahiro Shimoda ,(with A. Charles Muller, Kōzaburō Hachimura, Shoichiro Hara, Toshinobu Ogiso, Mitsuru Aida, Koichi Yasuoka, Ryo Akama, Tomoji Tabata, Kiyonori Nagasaki), *The Origin and Current States of Digitization of Humanities in Japan*, *Digital Humanities 2010*, King's College London, 2010.7.10

国内、下田正弘、「経典研究の可能性を再考する（セッションNo.5の発表に対するコメント）」、2010年度日本佛教学会第80回記念学術大会、大谷大学、2010.9.16

国内、松田訓典、彌永信美、永崎研宣、下田正弘「仏教辞典『法寶義林』目録のデジタル化—TEIとXML DBを利用した情報の共有化に向けて—」、人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2010」、東京工業大学、2010.12.12

国際、Masahiro Shimoda, *An Attempt on Digital Humanities in Japan through International Collaboration Concerning the Research Base for Indology and Buddhist Studies, Computers and the Humanities Symposium "JinMonCom 2010"*, 2010.12.11.

国内、永崎研宣、下田正弘「東洋古典文献研究におけるデジタルテキストの適切な記述手法について—インド学仏教学のための学術知識基盤の構築に向けて—」、人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2010」、東京工業大学、2010.12.12

国際、Masahiro Shimoda, General Comments on the Symposium, Conference: Buddhist Nuns in India, University of Toronto, 2011.4.16

国際、Kiyonori Nagasaki, Toru Tomabechi, Masahiro Shimoda, Toward a Digital Research Environment for Buddhist Studies, Digital Humanities 2011, Stanford University, 2011.6.20

国際、Masahiro Shimoda, The Soteriology of the Mahāyāna Mahāparinirvānasūtra, International Association for Buddhist Studies, Dharmadrum Institute (Taiwan), 2011.6.24

国際、Masahiro Shimoda, Knowledge Base through Cooperation: An Attempt of Digital Humanities in Japan, International Association for Buddhist Studies, Dharmadrum Institute (Taiwan), 2011.6.24

国際、Masahiro Shimoda, Comments on the Dhammachai Pali Tipitaka Pilot Edition, Dhammachai Pali Tipitaka Conference, Dhammachai Institute (Thailand), 2011.7.15

国際、Masahiro Shimoda, ITLR and SAT in the age of Digital Humanities, Workshop of Indo-Tibetan Lexical Resources, University of Hamburg, 2011.7.20

国際、Masahiro Shimoda, General Comments on the Symposium, The 41st International Research Symposium “Modernity and Buddhism,” International Research Center for Japanese Studies, 2011.10.14

国内、下田正弘、「言語的深化と〈信〉実現の実践思想—『教行信証』」、真宗大谷派教学大会、大谷大学、2011.11.3

国際、Masahiro Shimoda, “Creating New Research Environments in International Alliance,” INKE: Research Foundations for Understanding Books and Reading in a Digital Age: Text and Beyond, Ritsumeikan University, 2011.11.18

国内、永崎研宣、苜米地等流、Dorji Wangchuk, Orna Almogi, 下田正弘「人文学のためのコラボレーション—ITLR コラボレーションシステムの開発を中心的事例として—」、人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2011」、龍谷大学、2011.12.10

国際、Masahiro Shimoda, Creating New Buddhist Knowledge Environments in the Collaboration of SAT/DHII and ITLR, SAT-ITLR workshop, The University of Tokyo, 2011.12.24

(4) 研究報告書・辞書・辞典・事典

下田正弘「古写経研究の最前線」、2010.2

下田正弘（星野英紀、池上良正、氣多雅子、島蘭進、鶴岡賀雄編）「教典『宗教学事典』、丸善、2010.10

(5) 予稿・会議録

国際会議、Masahiro Shimoda, (with A. Charles Muller, Kōzaburō Hachimura, Shoichiro Hara, Toshinobu Ogiso, Mitsuru Aida, Koichi Yasuoka, Ryo Akama, Tomoji Tabata, Kiyonori Nagasaki), The Origin and Current States of Digitization of Humanities in Japan Digital Humanities, Digital Humanities 2010, King's College London, 2010.7.9 (Digital Humanities, 2010, pp. 68-70, 2010)

国際会議、Kiyonori Nagasaki, Toru Tomabechi, Masahiro Shimoda, Toward a Digital Research Environment for Buddhist Studies, Digital Humanities 2011, 2011.6.20 (Digital Humanities 2011, pp. 342-343, 2011)

(6) 総説・総合報告

下田正弘「戦前日本における仏教研究」、『宗教研究』363、80-81頁、2010.3

(7) 受賞

国際、下田正弘、Masahiro Shimoda, 仏教功労賞・最高賞、Highest Decoration of Excellence、タイ国議会、the National Assembly of Thailand、2011.4.22

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

委嘱教授、Stanford University 2011.3~2011.4

(2) 学会

国内、日本デジタルヒューマニティーズ学会、会長

国内、日本宗教学会、常務理事

国内、日本印度学仏教学会、評議員、理事

国内、財団法人東方学会、評議員

国内、仏教思想学会、評議員

国内、パーリ学仏教文化学会、理事

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大蔵経研究推進会議、常任議員、議長

一般財団法人人文情報学研究所、評議員

日本学術会議連携会員、2011.10

一般財団法人東京大学仏教青年会、理事

財団法人仏教伝道協会、英訳大蔵経編集委員会委員

公益財団法人石原奨学育英会、選考委員

一般財団法人仏教学術振興会、選考委員

教授 **蓑輪 顕量** MINOWA, Kenryo

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部印度哲学印度文学専修課程 卒業(学士)
- 1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻修士課程入学
- 1986年3月 同大学院（印度哲学印度文学専攻）修士課程修了(修士)
- 1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程進学
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学印度文学専攻博士課程単位取得退学
- 1991年4月 日本学術振興会特別研究員（平成5年3月迄）
- 1998年4月 愛知学院大学文学部日本文化学科 助教授（平成16年1月迄）
- 1998年10月 博士（文学）の学位取得
- 2004年1月 愛知学院大学文学部日本文化学科 教授
- 2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

仏教学、東アジアの仏教及び日本仏教に関する研究。

b 研究課題

東アジアにおける仏教の研究。特に日本仏教における修行、学問に関する研究を行っている。学問に関わる場所では、古代の論義に関する研究を南都に残された法会資料を用いながら考察を進めており、古代から中世に掛けて行われた仏教教理に関する論争に焦点を当てている。また修行道に関する研究は、東南アジアや東アジア世界に伝わる修行の実際に注意を払いながら、東アジア世界に残された文献資料を用いて、修行道の内容を明らかにすることを目指して研究を進めている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、蓑輪顕量、『挑戦する仏教 ―アジア各国の歴史と今―』、法蔵館、2010.10

編著、蓑輪顕量、『お経で読む仏教』、2012

(2) 論文

蓑輪顕量、「塵尾と戒尺」、『アジア遊学 ―東アジアを結ぶモノ・場』、132、85-95 頁、2010.4

蓑輪顕量、「日本仏教におけるスピリチュアルティ」、『宗教研究』、2010.9

蓑輪顕量、「日本天台宗と鎌倉新仏教」、『Journal of Buddhist Studies』、29号 2011.8 韓国仏教学研究會、125-161 頁、2011.8

蓑輪顕量、「日本における王法と仏法」、『アジア遊学 ―東アジアの王権と宗教』、151 勉誠社、2012.3

蓑輪顕量、『法勝寺御八講問答記』にみる論義再考、『印度学仏教学研究』、60-2(126)、162-168 頁、2012.3

(3) 解説

蓑輪頭量、「南都仏教 Q&A」、『大法輪』、77-6、62-67 頁、2010.4

蓑輪頭量、「道昭 — 三蔵法師に教えを請うた仏教導入の先駆者」、『歴史読本 — 日本の信仰人 宗教者 100 人』、22 年 5 月号、50-55 頁、2010.5

(4) 学会発表

国際、蓑輪頭量、「日本天台宗と鎌倉新仏教」、韓国仏教研究会、韓国ソウル市ソウル外国語大学、2010.11

国内、蓑輪頭量、「『法性寺御八講問答記』に見る論義再考」、日本印度学仏教学会学術大会、龍谷大学、2011.9.8

国内、蓑輪頭量、「仏教学再考—教理研究と修行実践」、日本仏教総合研究学会第 10 回学術大会、関西大学、2011.12.11

(5) 研究報告書

蓑輪頭量、「西尾市華蔵寺所蔵黄檗版一切経調査報告書」、1 巻 西尾市教育委員会、2012.3

(6) 総説・総合報告

蓑輪、「日本仏教における修行道の展開—止と観の観点から—」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、24、25-33 頁、2010.3

(7) 共同研究・受託研究

共同研究、河野訓、KAWANOSatoshi、皇學館大学、Kogakkan Universtiy、「宗教都市伊勢における神仏分離と寺院・神祠の景観変化に関する研究」、2010～

共同研究、下田正弘、SHIMODA masahiro、東京大学大学院、Graduate School of the university of Tokyo、「デジタル情報学の構築に関する研究」、2010～

(8) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 C、蓑輪 頭量、minowakenryo、分担者(代表者は東大外)、「朝鮮半島における神仏分離の研究」、「A Study for the separation of Buddha and Deities in Korea」、2010～

文部科学省科学研究費補助金、基盤研究 A、蓑輪頭量、minowakenryo、分担者(部局内に代表者あり)、「国際連携による仏教学術知識基盤の形成—次世代人文学のモデル構築」、2010～

寄附金、財団法人東海冠婚葬祭産業振興センター、蓑輪頭量、minowakenryo、研究代表者、「愛知県吉良町華蔵寺所蔵黄檗版一切経の悉皆調査」、2010～2012

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、立正大学大学院文学研究科、「仏教史特講」、2010.4～

非常勤講師、國學院大學文学研究科、「仏教学研究」2010.4～

特別講演、(財団法人) 中部冠婚葬祭産業振興センター、「法然・親鸞・道元・日蓮が遺したもの—私たちの生活を豊かにするもの—」、2010.3

特別講演、日蓮宗千葉東部宗務所、「中世仏教界と日蓮上人—その主張の背景と僧侶の役割—」、2010.3.29

特別講演、亀田医療技術専門学校、「生命倫理」、2011.3

特別講演、龍谷大学仏教文化研究所、「現代とのつながり—心を見つめ心をみがく—」、2011.7.8

特別講演、日蓮宗宗務院、「命を考える—日本文化と仏教の視点から—」、2011.8.5

特別講演、東大寺、「日本における戒律の歴史と展開」、2011.11.7-8

特別講演、財団法人 中部冠婚葬祭産業振興センター、「お経で学ぶ仏教の教え」、2012.3.21

(2) 学会

国内、パーリ学仏教文化学会、理事、2010.1～現在

国内、日本仏教総合研究学会、理事、2004.1～現在

国内、日本宗教学会、評議員、2002.4～現在

国内、日本宗教学会、理事、2011.4～現在

国内、KIERA-LP 学会 理事 2009.4～現在

16 イスラム学

教授 竹下 政孝

TAKESHITA, Masataka

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学教養学部教養学科(科学史科学哲学分科)卒業(教養学士)
- 1971年6月 シカゴ大学大学院中近東学科修士課程入学
- 1973年6月 シカゴ大学大学院中近東学科修士課程修了
- 1973年9月 テヘラン大学へ留学
- 1974年9月 ベイルート・アメリカン大学へ留学
- 1975年9月 カイロ大学へ留学
- 1976年8月 シカゴ大学大学院中近東学科より修士号取得
- 1976年9月 ウィーン大学留学
- 1979年9月 再び シカゴ大学大学院中近東学科博士課程入学
- 1981年6月 シカゴ大学大学院中近東学科博士課程修了
- 1983年4月 東海大学文学部文明学科アジア課程西アジア専攻専任講師
- 1986年4月 東海大学文学部文明学科アジア課程西アジア専攻助教授
- 1986年8月 シカゴ大学大学院中近東学科より博士号取得
- 1990年4月 東京大学文学部イスラム学助教授
- 1994年4月 東京大学文学部イスラム学教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

イスラム思想史の流れの中で、特にイブン・アラビーに代表される後期スーフイズムの思想をテキストの綿密な分析によって解明するとともに、彼の思想の起源をイスラム哲学や、神学、初期スーフイズムとの関係の中で歴史的に跡付け、また、彼の死後、彼の思想がどのように受容されていったかを明らかにすることを大きな目標にしている。現在、13世紀のアナトリアのイスラムを総合的に捉え、その中で、イブン・アラビー学派の位置を検討している最中である。そのために、ルーム・セルジューク朝の歴史文献を読んでいるが、特にメウレヴィー教団の聖者伝を資料として当時の宗教と社会の関係を探っている。

c 主要業績

(1) 論文

- 「イスラームの聖者マウラーナー・ジャラルッディーン・ルーミー」、中東協力センターニュース、32巻6号、25-30頁、2008.2
- 「サドルッディーン・クーナウィーのイスラーム哲学史上の位置」、哲学、59号、61-76頁、2008.4
- 「サドルッディーン・クーナウィーの人間論」、アジア遊学、111号、2008.5
- 「「マスマヴィー」からの物語」、中東協力センターニュース、vol. 33, no. 2、50-54頁、2008.7
- 「イスラームの暦と年中行事」、中東協力センターニュース、vol. 33, no. 5、50-54頁、2009.1
- 「神の友、アブラハムの物語」、中東協力センターニュース、34巻5号、71-78頁、2010.1

(2) 学会発表

- 「哲学史を読み直す—イスラム思想の視点から」、日本哲学会、広島大学、2008.5.18
- 「ギリシャ政治哲学のイスラム政治哲学への影響—ファーラービーを中心に—」、「ギリシャ政治哲学の総括的研究」全体研究集会、首都大学東京、2008.9.28
- 「Shams-e Tabrizi and the Philosophers」、International Shems Symposium、Istanbul, Konya、2009.12.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東海大学非常勤講師、2006.4～2006.9

東海大学非常勤講師、2007.4～2007.9

教授 **柳橋 博之**

YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
- 1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）
- 1988年10月 茨城大学教養学部専任講師
- 1989年4月 同 助教授
- 1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

2004年3月に『A History of the early Islamic law of property』, 2005年2月に『現代ムスリム家族法』を出版した。
その後7世紀以来のイスラーム実定法の研究を進めている。

c 主要業績

(1) 著書

単著、柳橋博之、『イスラーム財産法』、2012.2

(2) 論文

柳橋博之「巡礼の履行不能をめぐるハディースと法学説について」、イスラム世界、78号、1-35頁、2012.7

(3) 会議主催（チェア他）

国内、2010年度前期・日本イスラム協会公開講演会「異宗教の共生」、実行委員長、東京大学文学部、2010.4.25

国内、2010年度後期・日本イスラム協会公開講演会「イスラーム世界の墓参詣」、実行委員長、東京大学文学部、
2010.10.23

国内、2011年度前期・日本イスラム協会公開講演会「イスラームにおける歴史叙述」、実行委員長、東京大学文学部、
2011.4.23

国内、2011年度後期・日本イスラム協会公開講演会「アラブ世界：回顧と展望」、実行委員長、東京大学文学部、
2011.12.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、神戸大学大学院国際協力研究科、「イスラーム法社会論」、2011.9～2011.9

(2) 学会

国内、日本イスラム協会、理事長、2010.4～

17 西洋古典学

教授 片山 英男

KATAYAMA, Hideo

1. 略歴

- 1971年 6月 東京大学文学部卒業（西洋古典学専修課程）
- 1973年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（西洋古典学専門課程）
- 1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（西洋古典学専門課程）
- 1982年 10月～1983年 6月 イタリア政府奨学金給費留学生（パドヴァ大学文学哲学部）
- 1976年 4月～1977年 3月 日本学術振興会奨励研究員
- 1977年 4月 東京大学文学部助手（西洋古典学研究室）
- 1983年 8月 東京大学文学部助教授（西洋古典学専修課程）
- 1993年 4月 東京大学文学部教授（西洋古典学専修課程）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋古典学専門分野）
- 2000年 4月 同（文化資源学研究専攻文献学専門分野）
- 2010年 4月 同（西洋古典学専門分野）
- 2012年 3月 同 退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学、西洋古典学史

b 研究課題

前3世紀アレクサンドレイアに興った新傾向の詩の文学動向の研究により、こうした学者詩人によって確立された古典学の成立事情を解明する。

ルネサンスの古典研究再興に関し、古典学の近代的変貌を跡づける。

テキストの電子化に際し、多国語処理の統一的方法を検討する。

c 主要業績

(1) 論文

「ポッジョ写本再考」大芝芳弘・小池登（編）『西洋古典学の明日へ—逸身喜一郎教授退職記念論文集—』知泉書館、2010年、373-393

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本西洋古典学会会員

文化資源学会会員

1. 略歴

1978年3月	東京大学法学部第一類（私法コース）卒業
1986年8月	連合王国ブリストル大学古典学・考古学科留学（1988年7月まで）
1992年2月	Ph.D.学位取得（連合王国ブリストル大学）
1978年4月	東京大学法学部助手
1982年4月	新潟大学教養部講師
1986年4月	新潟大学法学部助教授
1992年4月	新潟大学法学部教授
1993年11月	オクスフォード大学クライスト・チャーチ客員研究員（1995年1月まで）
1995年4月	新潟大学大学院現代社会文化研究科担当（「古典社会文化論」担当）
1999年9月	オクスフォード大学ベイリオル・コレッジ客員研究員（2000年9月まで）
2002年4月	新潟大学法学部法政コミュニケーション学科長（2003(平成15)年3月まで）
2004年4月	新潟大学大学院実務法学研究科教授
2006年4月	大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授
2011年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学 ギリシア・ローマ法

b 研究課題

- 1 古代ギリシア人の「対立状況における行動様式」の特徴を、compliance と defiance という概念枠組を用いて、経済、法、宗教、哲学等の諸側面から総合的に考察する。
- 2 ギリシア法を「ギリシア語で書かれた法および裁判に関する文献」と広義に捉え直し、とりわけ民事訴訟をローマとパラレルにとらえることによって、その体系性と技術性を明らかにする。さらに、従来の見方を逆転してローマ法をギリシア法の普及として捉え、古代から近代にいたるギリシア法の歴史を通観する。
- 3 西洋学問の近世・近代の日本への移入を「文化転移」として、「普及」と「翻訳」という視点から総体的に把握する。

c 主要業績

(1) 著書

単著、葛西康德、『法律家としての William Jones — Bailment and Speech of Isaeus』、龍谷大学現代インド研究センター、2011.10

(2) 学会発表

国際、Yasunori Kasai, 「Diffusion and Reception in Japanese Law」、Global Law and Global Legal Theory, Maison Franco-Japonaise, Tokyo, 2011.6.3

国際、Yasunori Kasai, 「Two Perspectives on Mixed System -Japan-」、3rd Congress of the World Society of Mixed Jurisdiction Jurists, Hebrew University of Jerusalem, 2011.6.21

国際、Yasunori Kasai, 「"Open Texture" in Greek Law Revisited - From a Point of View of the Comparative Law - With Special Reference to Paragraphe」、The 20th British Legal History Conference, University of Cambridge, 2011.7.14

(3) 会議主催（チェア他）

国際、「アメリカ奴隷法研究会」、主催、東京大学、2012.1.31

国際、国際シンポジウム「法典化の19世紀（ポスト）コロニアル・パースペクティヴ」、チェア、全体ディスカッション、新潟大学、2012.2.4

国際、「古典学・法制史研究会」、主催、東京大学、2012.2.7

(4) 総説・総合報告

葛西康德、「Mixed Academic Jurisdiction —グローバル時代の学士課程—」、『季刊 創文』、No.03、1～3頁、2011.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

大妻女子大学大学院比較社会論専攻（修士課程）非常勤講師「国際交渉論」（2単位）
新潟県農業大学校「法律」非常勤講師（2単位）

(2) 学会

「日本西洋古典学会」「日本法制史学会」「日本宗教学会」「19世紀学学会」
「法とコンピュータ学会」（理事）

The Hellenic Society, The Selden Society

(3) 行政

北陸信越地方交通審議会船員部会公益委員

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

新潟大学超域学術院運営委員会委員

18 フランス語フランス文学

教授 月村 辰雄

TSUKIMURA, Tatsuo

1. 略歴

- | | |
|-----------|-----------------------------------|
| 1974年 3月 | 東京大学文学部卒業（フランス語フランス文学） |
| 1976年 3月 | 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学） |
| 1977年 10月 | パリ高等学術研究院博士課程（フランス政府給費留学、～80年 9月） |
| 1979年 10月 | パリ第3大学東洋語東洋文化研究所講師（日本語科、～80年 9月） |
| 1981年 3月 | 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学（仏語仏文学） |
| 1981年 4月 | 同 文学部助手（フランス語フランス文学） |
| 1986年 4月 | 獨協大学外国語学部専任講師（フランス語科） |
| 1989年 4月 | 東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学） |
| 1995年 1月 | 同 教授（フランス語フランス文学） |
| 1995年 4月 | 同 大学院人文社会系研究科教授（仏語仏文学） |
| 2000年 4月 | 同 文化資源学研究専攻（文書学専門分野）に配置換 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス文学（中世文学、ルネサンス文学）
文化資源学（書物史、ヨーロッパ図書館史）

b 研究課題

(1) マルコ・ポーロ研究

マルコ・ポーロ『東方見聞録』の中世フランス語本、イタリア方言本、ラテン語本等の比較研究。

(2) 中世西ヨーロッパのアジア観についての研究

『アレクサンドロス大王物語』、プレスター・ジョンの手紙、カルビーニ、ルブルク、オドリコ等の東方旅行記録、ハイトンの地誌、マンドヴィルの架空旅行記など、12～14世紀のヨーロッパの東方記述の総体を対象に、中世西ヨーロッパのアジア観についての研究を進めている。

(3) レトリック教育史研究

古典修辞学が古代ギリシア以降、19世紀末のフランスに至るあいだ、どのように学校教育の中で教えられてきたのかという問題を、とりわけディスクールの様々な型を教える初等教科書『プロギュムナスマタ』を中心に研究している。

(4) 明治期の演説研究

レトリックの歴史に関連して、文化資源学においては、明治初頭の日本にヨーロッパのどのようなレトリック教本が移入され、それがどのように理解、ないしは誤解されて、自由民権運動とともに盛んになった演説の中に取り入れられたのかを研究している。

c 主要業績

(1) 小論

「田村毅先生退官記念特集号 あとがき」、東京大学仏語仏文学研究会『仏語仏文学研究』第42号、2011年5月、pp.297-310.

「インタヴューファイル 6」、東京大学大学院文化資源学研究室『書棚再考——本の集積から生まれるもの』、2010年12月、70-74.

(2) 学会発表、テーブル・ロンドなど

「今、フランス語フランス文学とは」司会、日本フランス語フランス文学会 2011年度春季大会、2011年5月29日、一橋大学。

3. 主な社会活動

(1) 学内行政

東京大学総長賞選考会議委員、2010年4月－12年3月

教授 中地 義和

NAKAJI, Yoshikazu

1. 略歴

1976年3月 東京大学教養学科（フランスの文化と社会）卒業
1979年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1982年10月 パリ第三大学東洋語東洋文明研究所講師（～'83年9月）
1985年12月 同 第三期課程博士（フランス文学・19世紀部門）
1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（仏語仏文学）単位取得のうえ退学
1986年4月 同 教養学部助手
1988年4月 同 助教授
1992年4月 同 文学部助教授
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科助教授
1996年2月 同 教授、現在にいたる
2004年4月
～2006年3月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長・東京大学教育研究評議員
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2013年3月の予定）

2. 主な研究活動

a 専門分野

フランス近代詩。フランス現代文学の諸相

b 研究課題

- (1) ボードレールの散文詩と美術批評における「モデルニテ」のテーマの相関性の研究
詩といえば韻文が常であった西洋の伝統のなかで、はじめて意識的に「散文においても詩人」たらんとしたボードレールにおける都市詩人像と、コンスタンタン・ギースの肖像に託した「現代生活の画家」の理想像との比較を通して、「モデルニテ」の美学を炙り出す作業。
- (2) ランボー『地獄の一季節』の、主題論的、ジャンル論的視点からの再検討
長年の研究対象であるこの散文作品を、「慈愛」から「自負心」への移行という流れのなかに位置づけて再解釈を図るとともに、単純な自伝でも純然たる虚構でもなく、散文詩でも小説でもなく、反宗教を標榜しながらキリスト教的世界観に深く規定されているテキストの超ジャンル性を輪郭づける試み。
- (3) 現代作家ル・クレジオの形成過程における映画の影響の研究
2007年に刊行された映画論 *Ballaciner* に基づいて、従来から強く感じられたこの作家と映画芸術との親近性の角度から、作家の形成過程と作品世界の基盤を探る。
- (4) 科研課題「フランス近代作家の歴史意識」を進めるための基礎作業
上記3人の詩人・作家を含め、フランス近現代文学の尾根を形づくる作家における歴史意識がどのように作品に投影され、作品を駆動しているかを探る研究を進めるための基盤づくり。

c 主要業績

(1) 共編著書

L'Année Baudelaire 13/14 : Baudelaire au Japon. Hommage à Yoshio Abé, Textes réunis par Yoshikazu Nakaji et Keiji Suzuki, Champion, 2011, 296p.

(2) 論文

「リヒテルと自由」、『ユリイカ』、特集「現代ピアニスト列伝」、2010年4月号、p.135-145.

「ランボー『地獄の季節』生成の一面——一八七二年の詩における教訓的な声」、田口紀子・吉川一義 [編]『文学作品が生まれるとき』、京都大学学術出版会、2010、p.169-182.

«La "charité" dans *Une saison en enfer*», "*Je m'évade! Je m'explique.*" *Résistance d'Une saison enfer*, Études réunies par Yann Frémy, Éd. Classiques Garnier, 2011, p.145-158.

«Réécriture et transformation de soi : Rimbaud face au code biblico-chrétien», *Comment naît une œuvre littéraire ? Brouillons, contextes culturels, évolutions thématiques*, Textes réunis par Kazuyoshi Yoshikawa et Noriko Taguchi, Honoré Champion, 2011, p.191-202.

«La poésie de Baudelaire à la lumière des *Paradis artificiels*», *L'Année Baudelaire 13/14 : Baudelaire au Japon. Hommage à Yoshio Abé*, Textes réunis par Yoshikazu Nakaji et Keiji Suzuki, Champion, 2011, p.137-156.

(3) 小論

「ヨーロッパ文学と海」Ship & Ocean Newsletters、海洋政策研究所、2012.2.20、pp.6-7.

(4) 翻訳

J・M・G・ル・クレジオ「今日の文化について」、『ほんとうの豊かさとは何だろう—21世紀文明の再定義—瀬戸内国際シンポジウム』基調演説、同プログラム(2010年8月6日・7日・8日)、瀬戸内国際シンポジウム実行委員会/財団法人福武学術文化振興財団、2010、p.12-18

J・M・G・ル・クレジオ、『『シネマ逍遥』第①回、ノーベル賞作家が語る、溝口健二『雨月物語』の魅力とは』、季刊『Kotoba』創刊号、2010秋、p.206-213; 『『シネマ逍遥』第②回、フランス文学の巨匠が語る、パズリーニ監督『アッカトーネ』』、季刊『Kotoba』第2号、2010冬、p.206-213; 『『シネマ逍遥』第③回、フランス文学の巨匠が語る韓国映画の趨勢』、季刊『Kotoba』第3号、2011春、p.214-221;

J・M・G・ル・クレジオ「荒ぶる神と人災を越えて——日本に寄せる期待」、特集「震災後の日本に向けて」、『すばる』、2011年7月号、p.168-173.

(5) 書評

「無垢な少年の目に映る世界の夢想を綴った詩的断章 (ル・クレジオ『地上の見知らぬ少年』)、鈴木雅生訳、河出書房新社、2010)、『フィガロ・ジャポン』、2010.7、p.120.

(6) 学会発表、ラウンド・テーブルなど

«Roland Barthes et le Japon», (ロラン・バルトと日本)、招待講演、ポワティエ大学、2010.11.17.

«Une parole qui se veut performative : considérations génériques sur *Une saison en enfer*» (実効的であろうとする言葉——『地獄の季節』をめぐるジャンル論的考察)、国際シンポジウム«Le genre et ses qualificatifs» (ジャンルとその形容語)での発表、ポワティエ大学、2010.11.19.

«Le poète en prose est-il moderne ou antimoderne ?» (散文詩人ボードレールはモダンか反モダンか)、コレージュ・ド・フランス (パリ)、アントワヌ・コンパニオン教授セミナーでの招待講演、2012.3.27

教授 塚本 昌則

TSUKAMOTO, Masanori

1. 略歴

1982年3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学 (仏語仏文学)
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
1988年10月 パリ第12大学博士課程 (~ 1991年9月) (フランス文学、フランス政府給費留学生)
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
1992年4月 東京大学文学部助手
1994年4月 白百合女子大学文学部専任講師 (フランス文学)
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (フランス語フランス文学)
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (フランス語フランス文学)

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

ポール・ヴァレリーを中心とする 20 世紀フランス文学研究。苦痛、眠り、エロス等々、知性では割り切れないものをどこまで明晰に捉えられるのか、終わりなき探求をおこなったヴァレリーの作家活動を、「夢」というトポスに焦点を当てて研究してきた。同時に、ヴァレリーが偏愛した断章形式についても、ブランショとバルトを視野におさめながら、分析を進めている。

また、科学研究費補助金による研究「フランス文学における時間意識の変化」(2004-2006 年度)では、より広い視野から、現代の変化しつつある時間意識の把握を試みている。特に 1910-30 年代における〈前衛〉と〈後衛〉の錯綜した関係、さらにカリブ海の文学における時間意識の表現に焦点を当てながら、〈近代〉の特質の一端を明らかにすることを目指している。

c 主要業績

(1) 著書

『フランス文学講義——言葉とイメージをめぐる 12 章』中公新書、2012.1、240p.

(2) 共著

『〈前衛〉とは何か? 〈後衛〉とは何か? ——文学史の虚構と近代性の時間』(鈴木雅雄との共編著)、平凡社、2010.4、552p.

(3) 論文

« Littérature et langage indirect chez Valéry », *Valéry et l'idée de littérature*, Sous la direction de William Marx, Fabula : la recherche en littérature, « Colloques en ligne », 2011

(<http://www.fabula.org/colloques/document1418.php>)

« « La bêtise n'est pas mon fort » — la notion de bêtise chez Valéry et chez Flaubert », 立教大学フランス文学, n° 40, 2011 年, p.67-79

「言葉と写真——ロラン・バルトの『明るい部屋』を中心に」、『文化交流研究』、第 24 号、東京大学文学部次世代人文学開発センター、2011 年、p.91-104.

「内なる対話——ヴァレリーからベケットへ」、『仏語仏文学研究』、第 42 号: 田村毅先生退官記念特集号、p.155-169、2011.5

「散文芸術としての『シルトの岸边』」、『別冊水声通信 ジュリアン・グラック』、p.116-136、2011.12

(4) 翻訳

パトリック・シャモワゾー『カリブ海偽典——最期の身ぶりによる聖書的物語』、紀伊國屋書店、2010.12、967p.

ポール・ヴァレリー『〈夢〉の幾何学』、『ヴァレリー集成 II』、筑摩書房、2011.5、645p.

(5) 学会発表、ラウンド・テーブルなど

« Littérature et langage indirect », « Paul Valéry et l'idée de littérature » (「ポール・ヴァレリーと文学概念」、パリ第 10 大学主催国際研究集会), Université Paris Ouest Nanterre La Défense, 2010.6.4

「〈逸話的自我〉——バルト『明るい部屋』再考」、東京大学文学部フランス文学研究室主催によるワークショップ「20 世紀フランス文学と写真」での発表、東京大学、2010.11.6

« Degrés du dessin : une autre poétique de Paul Valéry », 東京大学文学部フランス文学研究室主催 (研究代表者: マリアンス・シモン=及川) による国際研究集会« ECRIRE L'IMAGE »での発表、東京大学、2010.11.27

「ヴァレリーとフロイト——声・仮面・文化への不満」、東京大学文学部フランス文学研究室主催 (研究代表者: 塚本昌則) による研究集会「フロイトの時代——文学・人文科学・無意識」での発表、東京大学、2011.11.5

(6) 受賞

第 48 回日本翻訳文化賞、日本翻訳家協会、2011.10.28 (『カリブ海偽典』の翻訳にたいして)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国際基督教大学講演「言葉と写真——ロラン・バルトの『明るい部屋』を中心に」、2011.6.8

(2) 学会

日本フランス語フランス文学会幹事長、2011.6~2012.5

1. 略歴

1981年3月	東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1981年4月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学 (仏語仏文学)
1985年4月	東京大学大学院人文科学研究科専攻博士課程進学
1985年9月	パリ第3大学博士課程 (～1989年3月) (フランス文学、フランス政府給費留学生)
1989年4月	東京大学文学部助手
1990年4月	一橋大学法学部専任講師
1993年4月	一橋大学法学部助教授
1997年5月	一橋大学大学院言語社会研究科助教授
2000年4月	東京大学大学院総合科学研究科助教授
2007年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

フランス・ロマン主義文学、とりわけジェラルド・ド・ネルヴァルの作品が主要な研究対象である。その代表的な作品『東方紀行』を分析し、オリエンタリズムに回収されない異文化体験の諸相を読み取る試みに取り組んでいる。探求の成果を『異国の香り ネルヴァル「東方紀行」論』一卷にまとめることができた。同時に、現代小説や古典作品の翻訳紹介にも力を注ぎ、日本におけるフランス文学受容の活性化に貢献すべく努めてきた。

文学研究と並び、フランス、アジアを中心とする映画にも関心を寄せている。2009-2011年度科学研究費補助金による研究「フランス文学と映画の相関関係についての総合的研究」では、二つの領域間にはたらく創造的な刺激と影響を多面的に明らかにすべく、内外の研究者との交流を深めつつ探索を続けている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、斎藤兆史、野崎歓、『英仏文学戦記 もっと楽しむための名作案内』、東京大学出版会、2010年7月、251p. +17p.

単著、野崎歓、『異国の香り ネルヴァル「東方紀行」論』、講談社、2010年4月、438p.

単著、野崎歓、『フランス小説の扉』、白水社、白水uブックス、2010年11月、286p. (2001年刊の著書の増補新装版)

共編著、管啓次郎・野崎歓編、『ろうそくの炎がささやく言葉』、勁草書房、2011年8月、208p.

(2) 論文

「水に書かれた物語 ジャン・ルノワール『ピクニック』をめぐる」、『映画と文学』アウリオン叢書08、白百合女子大学言語・文学研究センター編、川竹ジョジアース、福田耕介責任編集、2010年12月、p.65-78

「21世紀のフランス文学 資本・越境・記憶」、神戸大学大学院国際文化学研究科異文化研究交流センター2010年度報告書、2011年3月、p.76-89

«Japanese Readings: The Textual Thread», *Opening Bazin: Postwar Film Theory & Its Afterlife*, edited by Dudley Andrew, Oxford University Press, 2011, p. 324-329.

«Retraduire Stendhal aujourd'hui : *Le Rouge et le noir* dans le contexte japonais», *Réception et créativité : le cas de Stendhal dans la littérature japonaise moderne et contemporaine*, édité par Julie Brock, Peter Lang, 2011, p.65-74

(3) 訳書

ボリス・ヴィアン『うたかたの日々』、光文社古典新訳文庫、2011年9月、388p.

(4) 書評、解説、啓蒙

「エリック・ロメール監督追悼」、読売新聞、2010年1月15日朝刊

「すばる文学カフェ・映画」、「すばる」、集英社、2010年2月号、5月号、8月号、11月号、2011年2月号、8月号、11月号

「批評家発映画批評」、「キネマ旬報」、キネマ旬報社、2010年2月号より2011年1月まで、毎月上旬号に連載

- 「日仏交流、これからがおもしろい！」野崎歓、Corinne Quentin (対談)、「ふらんす」、白水社、2010年4月号、p.14-17
- 「わが巨匠、ネルヴァル」、「本」、講談社、2010年5月号、p.26-28
- 「シネマ万華鏡 『あの夏の子供たち』」、日本経済新聞、2010年5月28日夕刊
- 「ナンシー・ヒューストン『暗闇の楽器』」、日本経済新聞、2010年6月6日朝刊
- 「世界文学を旅する」(柴田元幸・沼野充義との鼎談)、「群像」、講談社、2010年7月号、p.208-221
- 「古人に学ぶ恋の知恵」、東京大学新聞、3614号、2010年7月6日
- 「カミュ、太陽の一撃」、「ふらんす」、白水社、2010年8月号、p.42-43
- 「シネマ万華鏡 『彼女が消えた海辺』」、日本経済新聞、2010年9月17日夕刊
- 『冬の小鳥』の啓示、「Equipe de cinéma」、岩波ホール、n.178、2010年10月、p.6-7
- 「アムールの教育装置 『英仏文学戦記』の余白に」、「UP」、東京大学出版会、2010年11月号、p.8-13
- 「これだけは読んでおきたいブックガイド2010 海外文学」野崎歓、鴻巣友季子(対談)、「文藝」、河出書房新社、冬号、p.30-47
- 『暮らし』をつなぎとめる小説 角田光代『ツリーハウス』、「新潮」、新潮社、2011年1月号、p.298-299
- 「フランス流愛について」、電通報、2011年1月17日
- 「朝吹真理子『きことわ』」、日本経済新聞、2011年1月30日朝刊
- 「シネマ万華鏡 『イギリス国王のスピーチ』」、日本経済新聞、2011年2月25日夕刊
- 「シネマ万華鏡 『神々と男たち』」、日本経済新聞、2011年3月11日夕刊
- 「多和田葉子『雪の練習生』」、東京新聞、2011年3月20日朝刊
- 「時空を超える文学の恵み」(野崎歓・青山七恵対談)、「群像」、講談社、2011年4月号、p.54-65
- 「旅する文学 時空と言語を渡って」(管啓次郎・野崎歓対談)、「すばる」、集英社、2011年5月号、p.212-228
- 「シネマトグラフからエクリチュールへ 小説家アンヌ・ヴィアゼムスキー」(アンヌ・ヴィアゼムスキー、ジャン＝クロード・ボネ、堀江敏幸、野崎歓鼎談)、「文學界」、文藝春秋、2011年5月号、p.218-231
- 「翻訳せよと、彼らはいふ」、「文藝」、河出書房新社、2011年夏号から毎号連載中
- 「世界の文学 フランス」、東京新聞、2011年5月19日朝刊
- 「ジョナサン・リテル『慈しみの女神たち』(上・下)」、日本経済新聞、2011年7月10日朝刊
- 「映画愛と友情の一季節」、「キネマ旬報」、キネマ旬報社、2011年7月下旬号、p.24-27
- 「シュルレアリスムの何が未知のままか」(齋藤哲也、野崎歓、西谷修、鈴木雅雄の鼎談)、「水声通信」、水声社、34号、2011年8月31日、p.23-60
- 「父と子 大江健三郎の小説の源泉」、「早稲田文学」第十次第4号、2011年9月、p.260-267
- 「星野博美『コンニャク屋漂流記』」、「文學界」、文藝春秋、2011年10月号、
- 「金原ひとみ『マザーズ』」、「新潮」、新潮社、2011年10月号、p.306-307
- 「真屋和子『プルーベの空間 ラスキンの美学の向こうに』」、「ラスキン文庫たより」、一般財団法人ラスキン文庫、第61号、2011年10月1日、p.17
- 「曖昧さの魅惑——『ルルドの泉で』に寄せて」、『ルルドの泉で』パンフレット、新日本映画社/エスパース・サロウ
- 「魔法のような文芸映画 『風にそよぐ草』礼賛」、「Equipe de Cinéma」、岩波ホール、n.185、2011年12月、p.8-9
- 「私の3点(文学)」、朝日新聞、2011年12月20日夕刊

(5) 学会発表等

- 日本フランス語フランス文学会 2010年度春季大会ワークショップ「シュルレアリスムの何が未知のままか」発表、「アンドレ・ブルトンと子ども」、2010年5月29日、早稲田大学
- 第10回東京大学ホームカミングデイ・シンポジウム「現代文学における『私』をめぐる」パネリスト、2010年10月29日、東京大学文学部

(6) 受賞

- 国内、野崎歓、読売文学賞(研究・翻訳賞)、「異邦の香り——ネルヴァル『東方紀行』論」、読売新聞社、2011.2.21

3. 主な社会活動

(1) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

- 小西財団、日仏翻訳文学賞選考委員、2010.1～

19 南欧語南欧文学

教授 **長神 悟**

NAGAMI, Satoru

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部言語学専修課程卒業
1977年3月	同 大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了
1977年4月	同 博士課程～'79年3月
1977年11月	ピサ高等師範学校留学（イタリア政府給費留学生）～'78年10月
1978年11月	フィレンツェ大学文学部留学～'79年3月
1979年4月	東京大学文学部助手
1983年4月	成城大学文芸学部専任講師
1990年4月	同 助教授
1991年4月	東京大学文学部助教授（イタリア語イタリア文学）
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授（南欧語南欧文学）
1996年4月	同 教授（南欧語南欧文学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

イタリア語学、ロマンス語学

b 研究課題

イタリア語史上の諸問題、とりわけ「言語問題」に関する検討

c 主要業績

(1) 会議主催（チェア他）

国内、「Emanuele Banfi 教授講演会」、主催、東京大学文学部南欧文学研究室、2010.6.3

国内、「Francesco De Renzo 講師講演会」、主催、東京大学文学部南欧文学研究室、2010.10.18

(2) 翻訳

監訳、Francesco Sanvitale、「Il canto della vita. Francesco Paolo Tosti.」、森田 学・長神 悟、『トスティ ある
人生の歌 —フランチェスコ・パーオロ・トスティの生涯と作品』、東京堂出版、2010.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、成城大学大学院文学研究科、「歴史言語学研究」、2010.4～2012.3

非常勤講師、京都大学文学部・大学院文学研究科、「統一イタリアの言語問題 —G.I.アスコリをめぐって」、2011.9

特別講演、日本イタリア京都館、「イタリア語辞書の歴史」、2011.9

セミナー、慶應義塾大学文学部、「イタリア語の辞書」、2010.6

(2) 学会

国内、日本ロマンス語学会、会長・理事・編集委員、2011.5～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

公益財団法人・日伊協会、評議員、2010.12～

1. 略歴

- 1982年3月 東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業
 1984年3月 同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業
 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程（イタリア語イタリア文学専攻）修士課程修了
 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程（イタリア語イタリア文学専攻）博士課程進学
 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程（イタリア語イタリア文学専攻）博士課程中途退学
 1988年4月 東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
 1990年4月 同 助教授
 1994年4月 東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
 1995年4月 同 大学院人文社会系研究科助教授
 2010年4月 同 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野

（ダンテを中心とした）イタリア文学、中世オック語文学

b 研究課題

c 主要業績

(1) 論文

- Kazuaki URA, 2 note per l'uso dei segni diacritici, «Lingua e Letteratura Italiana» (Facoltà di Lettere, Università di Tokyo), V, 2010, pp.167-79, 2010.4
 Kazuaki URA, La retorica dell'anima solitaria: 3 sonetti di Torquato Tasso, «Lingua e Letteratura Italiana» (Facoltà di Lettere, Università di Tokyo), V, 2010, pp.181-93, 2010.4
 浦一章、「ダンテは『神曲』をいかに書き進めたか——「地獄篇」第26歌に関する一考察」、『イタリア語イタリア文学』（東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要）、V、2010年、75-120頁、2010.4
 浦一章、「イタリア文学におけるヴィーナスとその周辺人物たち」、『イタリア語イタリア文学』（東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要）、V、2010年、3-52頁、2010.4
 浦一章、「到来することば——ポワティエ伯ギリエム七世の謎歌をめぐって」、『文学』、第12巻1号（2011年）、100-13頁、2011.1
 Kazuaki Ura（浦一章）、La tenzone del “duol d'amore”. La linea Notaio - Dante da Maiano - Boccaccio, «Medioevo letterario d'Italia», 7. 2010, pp. 7-28, 2011
 浦一章、「孤独な魂のレトリック——タッソの短詩をめぐって」、『文化交流研究』（東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要）、第24号（2011年）、9-24頁、2011.3
 Kazuaki URA, La ricezione della letteratura italiana in Giappone: il caso di Dante, «Satura: arte letteratura spettacolo», 15 (2011 / 3), pp.21-38, 2011.11

(2) 学会発表

- 国際、Kazuaki URA, La tenzone del “duol d'amore”. La linea Notaro - Dante (da Maiano?) - Boccaccio, Circolo Filologico Veneto, Università di Padova, Dipartimento di Romanistica, 2011.3.23
 国際、Kazuaki URA, La ricezione della letteratura italiana in Giappone: il caso di Dante, Biblioteca universitaria di Genova - Via Balbi 3 - Sala di lettura, 2011.6.6
 国際、Kazuaki URA, La tenzone del “duol d'amore”. La linea Notaro - Dante (da Maiano?) - Boccaccio, Università di Milano, Dipartimento di Filologia Moderna, 2011.6.8
 国際、Kazuaki URA, Dante e l'invenzione della letteratura “nazionale”, “Letteratura e sentimento nazionale nel nome del Francesco De Sanctis”, Morra De Sanctis (AV), Castello Biondi Morra, 2011.10.14

国内、Kazuaki URA、Dante e l'invenzione della letteratura "nazionale"、第 11 回世界イタリア語週間「Buon compleanno, Italia! イタリア統一 150 周年記念」、東京イタリア文化会館、2011.11.6

(3) 史料および翻訳

浦一章、チャールズ・S・シングルトン「キタ・ノワ試論」[第 3 章]、『イタリア語イタリア文学』（東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要）V、2010 年、196-237 頁、2010.4

浦一章、クラウディオ・ジュンタ「ダンテ『詩集』への新註釈」、『イタリア語イタリア文学』（東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要）V、2010 年、53-73 頁、2010.4

浦一章、「ウフィツィ美術館自画像コレクション関連の資料から」、『美術史論叢』（東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室紀要）第 26 号（2010 年）、104-52 頁、2010.4

浦一章、『ウフィツィ美術館自画像コレクション—巨匠たちの「秘められた素顔」1664-2010—』（損保ジャパン東郷青児美術館展覧会カタログ）、日本語版 228-37 頁、イタリア語版 76-84 頁、2010.9

20 英語英米文学

教授 平石 貴樹 HIRAISHI, Takaki

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部英語英米文学科卒業
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）
- 1979年4月 工学院大学共通課程専任講師
- 1981年4月 武蔵大学人文学部助教授
- 1983年4月 東京大学教養学部助教授
- 1986年4月 東京大学文学部助教授
- 1994年6月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

概要

- (1) 20世紀前半のアメリカの主要な小説家の文学史的な位置と評価の研究をしてきた。
- (2) いわゆるイデオロギー問題などを念頭においた、アメリカ文学史の再構成にかかわる諸問題の研究をしてきた。

c 主要業績

(1) 著書

- 『アメリカ文学史』松柏社、2010.10.
- 編著、田中久男監修、亀井俊介・平石貴樹編、『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア』、南雲堂、2009.10

(2) 論文

- 谷崎潤一郎『細雪』、『名作はこのように始まる II』、2008
- フォークナー『アブサロム、アブサロム!』、『名作はこのように始まる I』 千葉一幹・芳川泰久編、2008

(3) 書評

- 巽孝之編『反知性の帝国——アメリカ・文学・精神史』、一般雑誌、『週刊読書人』、2008.7
- 藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想——「アブサロム、アブサロム!」の真実』、学術論文誌、『英語青年』、2009.3

1. 略歴

- 1973年 3月 京都大学文学部英語英文学科卒業
- 1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）
- 1976年 4月 岡山大学教養部助手
- 1977年 4月 岡山大学教養部講師
- 1978年 4月 愛媛大学法文学部講師
- 1981年 4月 学習院大学文学部講師
- 1983年 4月 東京大学教養学部助教授
- 1992年 4月 東京大学文学部助教授
- 1994年 12月 東京大学文学部教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英文学

b 研究課題

いわゆるイギリス小説を主たる研究対象とし、そのなかでも、1) モダニズム文学とそれ以降の文学の特質の解明、2) モダニズム運動と連動した〈新批評〉以降に目覚ましい展開を見せた現代批評によって獲得されたように見える様々の知見を踏まえた小説技法とイデオロギーの分析、3) それと表裏一体の関係にある文学理論の有効性の検討、に関心を払うことによって、そこから必然的に派生する、4) 英文学の正典形成という古くて新しい、つまり厄介な問題に首を突っ込む羽目に陥っている。

c 主要業績

(1) 学会発表

国内、高橋 和久、「『ピーター・ウィルキンズの生涯と冒険』をめぐって」、日本英文学会第83回、2011.5.22

(2) 総説・総合報告

高橋 和久、「イギリス小説と批評の研究」、『英語年鑑』、2011.3

高橋 和久、「イギリス小説と批評の研究」、『英語年鑑』、2012.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、「英文学演習」、2010.4～2012.3

非常勤講師、熊本大学、「英文学史」、2011.4～2011.9

非常勤講師、立教大学、「英語散文講義」、2011.9～2012.3

(2) 学会

国内、日本英文学会、評議員、2011.4～2012.3

国内、日本学術会議、連携会員、2010.4～2012.3

1. 略歴

- 1970年4月 お茶の水女子大学文教育学部英文科入学
1974年3月 お茶の水女子大学文教育学部英文科卒業
1974年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程入学
1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程進学
1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程単位取得のうえ中途退学
1977年4月 富山大学文理学部（改組後 人文学部）専任講師
1981年4月 富山大学文理学部（改組後 人文学部）助教授
1982年10月 お茶の水女子大学文教育学部 専任講師
1985年11月 お茶の水女子大学文教育学部 助教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動**a 専門分野**

英語学／言語学

b 研究課題

「普遍文法と言語獲得理論研究」

(概要)

さまざまな言語事象について、大人の文法だけでなく子供の文法に関する通言語的資料を検討・考察し、表現形式とそれが担う意味との対応を律する原理や習得過程を律する原理を実証的に解明し、統語論と意味論・語用論とのインターフェイスや言語機能と他の認知体系とのインターフェースに課される制約を解明することにより、言語間変異と言語の習得可能性を妥当に説明しうる普遍文法の構築を模索する。

c 主要業績**(1) 著書**

共著、今西典子、「主要部が音形を欠く名詞句表現をめぐって：普遍性と多様性の考察」75-93、開拓社、2012.3

3. 主な社会活動**(1) 他機関での講義等**

非常勤講師、お茶の水女子大学文教育学部、「特殊講義」、2010～2010

非常勤講師、東京言語研究所 理論言語学講座、「生成文法入門」（隔年）、「生成文法特論」（隔年）、2010～2011

(2) 学会

国内、日本英語学会評議員 2010～2011

日本英語学会学会賞選考委員会、委員長、2011.4～2012.3

1. 略歴

1976年3月	東京教育大学文学部文学科英語英文学専攻 卒業（文学士）
1979年3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程 修了（英文学）
1979年4月	東京大学文学部英文科 助手
1981年4月	中央大学法学部 専任講師（英語）
1983年4月	学習院大学文学部英米文学科 専任講師
1985年4月	学習院大学文学部英米文学科 助教授
1994年4月	学習院大学文学部英米文学科 教授
1996年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 助教授（英語学英米文学）
1999年4月	東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英国演劇・批評理論

b 研究課題

- (1) シェイクスピアを中心とする英国初期近代演劇の研究。ジェンダー理論（クィア理論を含む）とポストコロニアル理論の適用ならびにシェイクスピア・カトリック説をめぐるシェイクスピア研究環境の変化を考える。
- (2) 「文芸映画」とりわけ現在も製作されつつあるシェイクスピア映画を題材にして、アダプテーションの問題、文化的歴史的なパースペクティブからみた「文学テキスト」の変容、解体、再生などのプロセスを考察する。
- (3) 英語圏の文学理論の研究。教育の場で、理論あるいは分析法をいかに教えるかという問題も視野に入れる。

c 主要業績

(1) 論文

大橋洋一、「シェイクスピアと文学理論」、『英語圏文化研究 UT』No.9, 24-61 頁, 2010.10.15.

大橋洋一、「フォルスタッフの誕生—シェイクスピア歴史劇と殉教の文化」、『言語文化』第14巻第1号 2011年8月（同志社大学言語文化学会）1-41 頁, 2011.8.25.

(2) 翻訳

フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（共訳者：木村茂雄・太田耕人）

平凡社ライブラリー, 平凡社, 2010.4.9. [ライブラリー版のために改訳]

テリー・イーグルトン『宗教とは何か』（共訳者：小林久美子）青土社, 2010.5.10.

テリー・イーグルトン『テロリズム 聖なる恐怖』岩波書店, 2011.8.24.

テリー・イーグルトン『批評とは何か』青土社, 2012.2.20.

(3) 書評

大橋洋一、「モータル・エネミー——松下千雅子著『クィア物語論 — 近代アメリカ小説のクローゼット分析』評」『論叢クィア』第3号（クィア学会）2010.9.30.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

講演「シェイクスピアと文学理論」大東文化大学英文科講演会 2010.3.10.

講演「フォルスタッフの誕生」言語文化学会学術講演会（同志社大学）2010.9.21.

非常勤講師 一橋大学言語文化研究科 共通科目「ジェンダーから世界を読む」（リレー講義）2011年冬学期.

(2) 学会

2011年11月より クィア学会幹事ならびに代表幹事（代表幹事は2名）

1. 略歴

- 1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
 1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了
 博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
 博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
 1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
 1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

phi 素性の役割

b 研究課題

c 主要業績

(1) 論文

渡辺明 (2010) 「両極性表現」加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美 (編) 『否定と言語理論』開拓社、74-96.

Akira Watanabe (2010), "A Morphological Solution to Agreement Puzzles in Slavic," *Proceedings of the 7th Mediterranean Morphology Meeting*, 112-122.

(http://www.philology.upatras.gr/LMGD/el/research/downloads/MMM7_Proceedings.pdf)

Akira Watanabe (2010), "Mental Representations for Natural Numbers," 『応用言語学研究』No.12, 7-15. 明海大学大学院

Akira Watanabe (2011), "Adjectival Inflection and the Position of Measure Phrases," *Linguistic Inquiry* 42, 490-507.

(2) 学会発表

国際、Akira Watanabe, "Measure Phrases in Adjectival Projections," Mini-Wokshop on Modifiers and Cartography, University of Tromsø, 2010.3

国際、Akira Watanabe, "Measure Phrase Modification in the Extended Projections of Adjectives," 20th Japanese/Korean Linguistics Conference, Oxford, 2010.10

国際、Akira Watanabe, "Person-Number Interaction: An Underspecification Approach to Fula," 8th Mediterranean Morphology Meeting, Sardinia, 2011.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、東京言語研究所理論言語学講座、「生成文法II」2010年度

(2) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

Editorial Board member of *Journal of East Asian Linguistics* (Springer), 2010-2011年度

Advisory Board member of *the Language Faculty and Beyond series* (John Benjamins), 2010-2011年度

1. 略歴

- 1985年3月 静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
 1985年4月 東京大学教養学部文科三類入学
 1989年3月 同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
 1989年4月 東京大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）入学
 1992年3月 同 修士課程修了・修士（文学）
 1993年10月 連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学（英米文学専攻）
 1997年5月 同博士課程修了 博士号取得（文学）
 タイトル：‘Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom’
 1992年4月 東京大学文学部英語英米文学科助手
 1993年4月 帝京大学文学部助手
 1997年4月 帝京大学文学部専任講師
 2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

英米文学

b 研究課題

英語圏の詩、とくに20世紀におけるイギリスやアメリカの詩の研究を中心とする。個々の詩作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならないか？」という素朴な疑問との取り組みをも新たな課題とする。詩を自足的なジャンルとみなすのではなく、「詩的であること」を絵画・舞台芸術、スポーツ、インターネット空間などとの関係でとらえることもテーマとする。

c 主要業績

(1) 著書

- その他(自由入力)、玉井暉、『英米文学の可能性 — 玉井暉教授退職記念論集』、英宝社、2010
 単著、阿部公彦、『英語文章読本』、研究社、2010.3
 単著、阿部公彦、『小説的思考のススメ — 「気になる部分」だらけの日本文学』、東京大学出版会、2012.3

(2) 論文

- Masahiko ABE, 『"What's Wrong with the Stomach Specialist?: The Ethics of Stomach Disorder in Bernard Malamud's "The Magic Barrel"』、『The Japanese Journal of American Studies』、21、67-88 頁、2010
 阿部公彦、「凝視の作法： 太宰治と注意散漫」、『文學界』、4月号、218-227 頁、2010.4
 阿部公彦、「凝視の作法： 読書人の投票行動」、『文學界』、5月号、232-42 頁、2010.5
 阿部公彦、「英語文章読本： 読んだふり——ジョージ・オーウェル『一九八四年』（上・下）、『Web 英語青年』、5・6月号、2-9、25-39 頁、2010.6
 阿部公彦、「凝視の作法： 選挙と抒情詩の変な関係」、『文學界』、6月号、278-88 頁、2010.6
 阿部公彦、「凝視の作法： 朔太郎が詩を終わらせるためにしたこと」、『文學界』、7月号、216-26 頁、2010.7
 阿部公彦、「英語文章読本： 真心——オスカー・ワイルド『幸福な王子』（上・下）、『Web 英語青年』、7・8月号、2-9、2-13 頁、2010.8
 阿部公彦、「凝視の作法： 柄谷行人と詩」、『文學界』、8月号、194-204 頁、2010.8
 阿部公彦、「凝視の作法： マーク・ロスコの読み方」、『文學界』、9月号、222-32 頁、2010.9
 阿部公彦、「凝視の作法： “志賀嫌いの真相”」、『文學界』、10月号、214-24 頁、2010.10
 阿部公彦、「英語文章読本： 恥ずかしさ——ライオネル・トリリング『アメリカの現実』（上・下）、『Web 英語青年』、10・11月号、2-11、2-9 頁、2010.11
 阿部公彦、「凝視の作法： 志賀直哉とモランディの儀式」、『文學界』、11月号、220-30 頁、2010.11
 阿部公彦、「凝視の作法： 夏目漱石のフラクタル」、『文學界』、12月号、216-26 頁、2010.12
 阿部公彦、「英語文章読本： 疑問文——『ヨブ記』（上）、『Web 英語青年』、12・1月号、36-48、13-21 頁、2011.1
 阿部公彦、「凝視の作法： 大江健三郎の魔法」、『文學界』、1月号、230-40 頁、2011.1

- 阿部公彦、「凝視の作法： 導く視線 — 清張、カーヴァー、マンダラ」、『文學界』、2月号、222-33頁、2011.2
- 阿部公彦、「英語文章読本： つぶやき——レイモンド・チャンドラ『長いお別れ』(上)、『Web 英語青年』、2・3月号、2-9, 2-15頁、2011.3
- 阿部公彦、「凝視の作法： 文学がわかる、ということ」、『文學界』、3月号、228-41頁、2011.3
- 阿部公彦、「女を嫌うための作法」(上・下) (連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、3・4月号、16-25, 2-11頁、2011.3
- 阿部公彦、『『スー』と『アッ』のテキスト論』(連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、4月号、18-27頁、2011.4
- 阿部公彦、『『怪人二十面相』はなぜ『ですます』なのか』(連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、5月号、11-27頁、2011.5
- 阿部公彦、「宮沢賢治は何を遠慮しているのか?」(上・下) (連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、6・7月号、13-23, 2-12頁、2011.6
- 阿部公彦、「ナサニエル・ホーソン『七破風の家』の気遣う語り手」(上・下) (連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、8・9月号、2-11, 2-13頁、2011.8
- 阿部公彦、「シェイクスピアの恋愛術」(上・下) (連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、11・12月号、2-14, 2-14頁、2011.11
- 阿部公彦、「英会話の起源」(上・下) (連載「善意と文学」)、『Web 英語青年』、1・2月号、2-14, 2-21頁、2012.1

(3) 書評

- イーディス・シットウェル著・藤本真理子訳、『凍るU』、書肆山田、阿部公彦、『図書新聞』、2010年9月4日、4頁、2010
- マルコム・ラウリー著・斎藤兆史監訳、『火山の下』、白水社、阿部公彦、『産経新聞』、2010年5月16日版、10面、2010.5
- 丸谷才一、『文学のレッスン』、新潮社、阿部公彦、『群像』、2010年8月号、332-33頁、2010.8
- ウィリアム・トレヴァー著・榎木伸明訳、『アイルランド・ストーリーズ』、国書刊行会、阿部公彦、『週刊読書人』、2010年10月15日、5頁、2010.10
- 絲山秋子、『妻の超然』、新潮社、阿部公彦、『群像』、12月号、346-47頁、2010.12
- 絲山秋子、『未畜』、講談社、阿部公彦、『文學界』、5月号、266-67頁、2011.5
- 池澤夏樹監修、『世界文学全集 短篇コレクションI』『同 II』、集英社、阿部公彦、『図書新聞』、2011年5月21日、4頁、2011.5
- 亀井俊介、『英文学者夏目漱石』、松柏社、阿部公彦、『図書新聞』、2011年8月6日号(3025号)、2011.8
- ベルンハルト・シュリンク著・松永美穂訳、『週末』、新潮社、阿部公彦、『週刊読書人』、2011年9月23日号、7頁、2011.9
- 山崎ナオコーラ、『ニキの屈辱』、河出書房新社、阿部公彦、『群像』、11月号、378-79頁、2011.11
- ジョナサン・フランゼン著・黒原敏行訳、『コレクションズ』、早川書房、阿部公彦、『図書新聞』、2011年11月26日号、5頁、2011.11
- イアン・マキューアン著・松村潔訳、『ソーラー』、新潮社、阿部公彦、『文學界』、2011年12月号、302-303頁、2011.12
- 鴻巣友季子、『本の寄り道』、河出書房新社、阿部公彦、『週刊読書人』、2011年12月2日号、6頁、2011.12
- サンティアゴ・ノバーレス著・木村榮一訳、『キャンパス』、ヴィレッジ・ブックス、阿部公彦、『週刊文春』、2012年2月2日、120頁、2012.2
- 有元志保、『男と女を生きる作家 — ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯』、国書刊行会、阿部公彦、『週刊読書人』、2012年2月24日、5頁、2012.2

(4) 解説

- 阿部公彦、『完全犯罪』(スナップル劇場センター) — 殺されるのはいつも知らない人、『悲劇喜劇』、1月号、6-7頁、2011
- 阿部公彦、「批評の温度」、『小島信夫批評集成⑥ 私の作家遍歴III』(水声社)、465-76頁、2011

(5) 学会発表

- 国内、阿部公彦、「シェイクスピアの恋愛術 — 『コピペする語り手』の演出をめぐる」、日本英文学会九州支部大会シンポジウム、九州大学箱崎キャンパス、2010.10.30
- 国内、阿部公彦、「カタイ本の明るい未来」、「図書館総合展」、パシフィコ横浜、2010.11.24

国内、阿部公彦、『七破風の家』の!!!をめぐって」、日本ナサニエル・ホーソン協会・第30回大会・シンポジウム、西日本総合展示場、2011.5.21

国内、阿部公彦、「敗北と文学」、久住夏季セミナー、長湯温泉、2011.8.18

国内、阿部公彦、「英文学と事務能力 — 夏目漱石を中心に」、日本英文学会北海道支部支部大会、札幌学院大学、2011.10.1

国内、阿部公彦、「言いたいことのない詩人 — ウォレス・ステイヴンズの後期作品」、日本アメリカ文学会全国大会、関西大学、2011.10.8

国内、阿部公彦、「詩と〈私〉の困難をめぐって — 西脇順三郎とW・B・イエイツ」、神戸市外国語大学セミナー、神戸市外国語大学、2011.10.10

国際、阿部公彦、「詩の仕事」、松山大学英語圏文化・文学研究会 第2回研究大会、松山大学、2011.12.10

(6) 啓蒙

阿部公彦、「トルーマン・カポーティ『ティファニーで朝食を』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、4月号、118-21頁、2010.4

阿部公彦、「ジョン・キーツ『ギリシャ壺に寄せるオード』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、5月号、114-17頁、2010.5

阿部公彦、「ウォルト・ホイットマン『ぼく自身の歌』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、6月号、112-15頁、2010.6

阿部公彦、「名言の名手 オスカー・ワイルド』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、7月号、116-19頁、2010.7

阿部公彦、「謎に包まれた伝説の詩人 エミリー・ディキンソン』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、8月号、116-19頁、2010.8

阿部公彦、「ジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、9月号、118-21頁、2010.9

阿部公彦、「ウィリアム・シェイクスピア『ソネット集』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、10月号、118-21頁、2010.10

阿部公彦、「ウィリアム・シェイクスピア『ソネット集』その2』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、11月号、114-17頁、2010.11

阿部公彦、「アーネスト・ヘミングウェイ『老人と海』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、12月号、100-113頁、2010.12

阿部公彦、「超絶主義者の中の個人哲学 ヘンリー・ディヴィッド・ソロー』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、1月号、114-17頁、2011.1

阿部公彦、「『絶望』と仲良しになるために フィリップ・ラーキン』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、2月号、114-17頁、2011.2

阿部公彦、「恋愛について考えてみませんか? ジェーン・オースティン『高慢と偏見』、『NHKテレビテキスト ギフト ～E名言の世界』、3月号、116-19頁、2011.3

阿部公彦、「しようと思ったことができない病』、『図書』、6月号(748号)、18-20頁、2011.6

阿部公彦、「由良先生とコールリッジ顔のこと — ワーズワスを教えたい(1)』、『図書』、12月号(754号)、12-17頁、2011.12

阿部公彦、「記憶の捏造をめぐって — ワーズワスを教えたい(2)』、『図書』、1月号、31-35頁、2012.1

阿部公彦、「突然の人 — ワーズワスを教えたい(3)』、『図書』、2月号(756号)、25-29頁、2012.2

(7) 会議主催(チェア他)

国内、「日本アメリカ文学会東京支部月例会」、チェア、「モダニズムの詩学を問い直す — 詩と散文の交錯」、慶應義塾大学三田キャンパス、2010.6.26～2012.6.26

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、慶應義塾大学、「英文学演習」、2011.4～

非常勤講師、福岡女子大学、「イギリス文学特別講義 I I」、2011.8～

(2) 学会

国内、日本アメリカ文学会、代議員、2010.4～2011.3

国内、日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2010.4～

国内、日本英文学会、事務局長、2010.4～2011.5

准教授 **諏訪部 浩一** SUWABE, Koichi

1. 略歴

1994年3月 上智大学文学部英文学科卒業
1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程修了
2002年3月 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得退学
2004年4月 東京学芸大学教育学部講師
2004年6月 ニューヨーク州立大学バッファロー校大学院英文科博士課程修了
2006年4月 東京学芸大学教育学部助教授
2007年4月 東京学芸大学教育学部准教授
2007年10月 東京大学大学院総合文化研究科准教授
2010年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

アメリカ文学

b 研究課題

モダニズム文学を中心とするアメリカ小説研究

c 主要業績

(1) 著書

共著、杉野健太郎責任編集、『アメリカ文化入門』、三修社、2010.7

単著、諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義』、研究社、2012.3

(2) 論文

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第13回』、『Web 英語青年』、第156巻第1号、36-51頁、2010.4

諏訪部浩一、『「モダン」のあとで——『村』におけるフレム・スノープス』、『フォークナー』、第12号、57-71頁、2010.4

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第14回』、『Web 英語青年』、第156巻第2号、20-41頁、2010.5

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第15回』、『Web 英語青年』、第156巻第3号、40-54頁、2010.6

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第16回』、『Web 英語青年』、第156巻第4号、10-28頁、2010.7

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第17回』、『Web 英語青年』、第156巻第5号、23-42頁、2010.8

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第18回』、『Web 英語青年』、第156巻第6号、15-32頁、2010.9

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第19回』、『Web 英語青年』、第156巻第7号、24-45頁、2010.10

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第20回』、『Web 英語青年』、第156巻第8号、20-36頁、2010.11

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第21回』、『Web 英語青年』、第156巻第9号、20-35頁、2010.12

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第22回』、『Web 英語青年』、第156巻第10号、34-49頁、2011.1

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第23回』、『Web 英語青年』、第156巻第11号、10-26頁、2011.2

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』の改稿について(上)』、『Web 英語青年』、第156巻第11号、52-119頁、2011.2

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』講義 第24回』、『Web 英語青年』、第156巻第12号、30-52頁、2011.3

諏訪部浩一、『『マルタの鷹』の改稿について(下)』、『Web 英語青年』、第156巻第12号、71-162頁、2011.3

諏訪部浩一、『フォークナーと暴力(小説)』、『文化交流研究』、第24号、83-90頁、2011.3

諏訪部浩一、『『ハックルベリー・フィン』と『行け、モーセ』—ートウエインの後継者としてのフォークナー』、『マ
ーク・トウエイン—研究と批評』、第10号、34-49頁、2011.5

(3) 書評

Houston A. Baker, Jr., 『I Don't Hate the South: Reflections on Faulkner, Family, and the South』、諏訪部浩一、
『英文学研究』、第 87 巻、106-09 頁、2010.12

(4) 学会発表

国内、諏訪部浩一、「Isaac McCaslin と Sam Fathers——Twain の後継者としての Faulkner」、日本アメリカ文
学会第 49 回全国大会、立正大学大崎キャンパス、2010.10.10

(5) 啓蒙

諏訪部浩一、「解説」、ダシール・ハメット、池田真紀子訳『ガラスの鍵』、光文社古典新訳文庫、425-41 頁、2010.8

小鷹信光、諏訪部浩一、滝本誠、吉野仁、「米国暗黒小説全集発行計画——これがノワールの精髓だ！（前篇）」、『ハ
ヤカワミステリマガジン』、第 55 巻 10 号、4, 86-94 頁、2010.10

小鷹信光、諏訪部浩一、滝本誠、吉野仁、「米国暗黒小説全集発行計画——これがノワールの精髓だ！（後篇）」、『ハ
ヤカワミステリマガジン』、第 55 巻 11 号、12, 68-76 頁、2010.11

諏訪部浩一、「アメリカ文学から三篇」、『ハヤカワミステリマガジン』、152 頁、2011.3

諏訪部浩一、「アメリカ文学の現況と翻訳・研究 '10」、『文藝年鑑 平成 23 年度版』、89-91 頁、2011.6

諏訪部浩一、「成長する作家——『マルタの鷹』講義」補講、『ハヤカワミステリマガジン』、76-81 頁、2011.8

諏訪部浩一、「失われた秩序を求めて」、アーネスト・ヘミングウェイ、土屋政雄訳『日はまた昇る』、ハヤカワ epi
文庫、377-83 頁、2012.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学、「英米文学特殊研究」2010.9～2011.3、2011.9～2012.3

非常勤講師、九州大学、「アメリカ文学特論」2011.8～2011.8

非常勤講師、京都大学、「英語学英米文学 特殊講義」2011.9～2011.9

(2) 学会

国内、日本アメリカ文学会東京支部、評議員、2010.4～2012.3

国内、日本アメリカ文学会、大会運営委員、2011.4～2012.3

21 ドイツ語ドイツ文学

教授 松浦 純

MATSUURA, Jun

1. 略歴

- 1968.3 東京都立新宿高校卒業
1968.4 東京大学文科三類入学
1971.10 サンケイスカラシップによりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学留学 (1973.4 帰国)
1974.3 東京大学教養学部教養学科「ドイツの文化と社会」分科卒業 (教養学士)
1976.3 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程修了 (文学修士)
1976.4 東京大学文学部助手 (ドイツ語ドイツ文学)
1977.9 ドイツ連邦共和国テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所にて在外研究 (1980.3 帰国)
1980.4 東京都立大学人文学部講師 (ドイツ語ドイツ文学)
1983.4 同 助教授
1985.4 東京大学文学部助教授 (ドイツ語ドイツ文学)
1985.5 ドイツ語学文学振興会賞受賞
1985.7-9 ドイツ学術交流会 (DAAD) の招待によりドイツ連邦共和国へ研究出張
1986.7-9 東京大学学術基金によりドイツ連邦共和国へ研究出張
1989.10 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の研究奨学金によりテュービンゲン大学ドイツ文学科および後期中世・宗教改革研究所にて在外研究 (1991.9 帰国)
1994.12 東京大学文学部教授 (ドイツ語ドイツ文学)
1995.4 学部改編により東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る
1995.7 ドイツ連邦共和国大統領より Philipp Franz von Siebold-Preis 受賞 (同賞により 1995、1997、1998、1999 の各年度夏期休暇時、ドイツ連邦共和国ほかへ研究出張)
2001.4 国際交流基金助成により、ドイツ連邦共和国ミュンヘン大学にて、同大ラインハルト・シュヴァルト名誉教授と共同研究 (2002.3 帰国)
2002.8 国際ルター学会 (於コペンハーゲン) で研究報告
2005.7-9 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の受賞者再招待により、テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所ほかへ研究出張
2009.11 ドイツ、ハイデルベルク学士院主催ワイマール版ルター全集完結記念シンポジウムで研究報告
2011.8 学術振興会科学研究費により、ドイツ、ヴォルフエンビュッテル、イェナ、ドレスデン各図書館他へ調査出張
2012.2 ドイツ、ヨーロッパ史研究所 (マインツ) 主催コロキウムで研究報告

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野としては、ルター研究とドイツ中世文学・中世思想研究を重点としている。

前者については、西欧思想史の中で、伝統的キリスト教思想を革新するとともに近代への発展の関与が問題にされ、また特にドイツ思想史上まれな独自性と影響力を兼ね備えた思想家、ルターの思想を、完成した教義としてでなく、中世思想の伝統やアクチュアルな状況との関係の中で運動としてとらえ、日本人にとってのあらたな理解の地平を開くことを課題としている。

c 主要業績

(1) 口頭発表

„Das Wolfenbütteler Psalter als Reformationsdokument“ (2012年2月17日、於ドイツ連邦共和国マインツ、ヨーロッパ史研究所、コロキウム Das Erbe der Reformation. Martin Luther in Dokumenten. Ein Expertengespräch)

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、連携会員、2010～

日本学術会議、連携会員、言語・文学委員会委員、文化の邂逅と言語分科会委員長、2011.10～

ドイツ学術交流会奨学生選考委員 2007-8, 2010-11

学術振興会審査委員 2010-11

教授 **重藤 実**

SHIGETO, Minoru

1. 略歴

1970年4月 東京大学教養学部文科3類入学

1974年3月 東京大学文学部第3類（言語学専修課程）卒業（文学士）

1974年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程進学

(1975年7月～1977年9月 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国ボン大学、シュトゥットガルト大学に留学)

1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程修了（文学修士）

1978年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程博士課程進学

1979年4月 同 教養学部助手

1980年4月 一橋大学経済学部講師

1984年4月 東京大学教養学部助教授

(1984年4月～85年3月 一橋大学経済学部併任)

(1991年10月～93年3月 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学に研究滞在)

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授

(1996年4月～97年3月 東京大学大学院人文社会系研究科併任)

1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ語学

b 研究課題

現代ドイツ語の記述、および現代ドイツ語を生み出したドイツ語史の記述を研究の目標と考えている。背景となる言語理論や言語変化についての理論についての考察も必要となる。

研究では、最近是一般言語学の言語理論に関することとドイツ語史に関することに重点を置いている。

c 主要業績

(1) 学会発表

・「Inchoativität und Genitiv」

2010.8.29. 日本独文学会第38回語学ゼミナール（IPC 生産性国際交流センター（葉山））

・「werden' als Bezeichnung der Inchoativität」

2011.8.29. 日本独文学会第39回語学ゼミナール（コープイン京都）

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

学習院大学文学部非常勤講師 2010.4.～2011.3

明治大学文学部非常勤講師 2010.4.～2012.3.

(2) 学外組織委員（学協会、省庁を除く）委員・役員

大学評価・学位授与機構 学位審査会専門委員 2010.4.～2012.3.

教授 **大宮 勘一郎** OHMIYA, Kanichiro

1. 略歴

1984年3月 東京大学教養学部教養学科第2・ドイツの文化と社会卒業

1986年3月 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了

1991年4月 共立女子大学国際文化学部専任講師

1992/93年 ドイツ学術交流会（DAAD）奨学金によりドイツ連邦共和国マンハイム大学留学

1996年4月 共立女子大学国際文化学部助教授

2001/02年 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国ベルリン自由大学研究滞在

2002年4月 慶應義塾大学文学部助教授

2005年4月 慶應義塾大学文学部教授

2007年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員兼任

2011年4月 東京大学文学部・大学院人文社会系研究科教授（現職）

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近現代文学

b 研究課題

ヴァルター・ベンヤミン研究、ハインリッヒ・フォン・クライスト研究

c 主要業績

(1) 論文

大宮勘一郎、「クライスト — 群れの民主政 — 」、『ドゥルーズ 千の文学』、2011.1

大宮勘一郎、「新シイ天使の救済と暴力 — クレーとベンヤミン —」、『ユリイカ』、2011.4

大宮勘一郎、「試みと処置」、『現代思想』、臨時増刊、2011.7

OMIYA, Kanichiro, 「Zwischen Romantik und Wirklichkeit: die Sehnsucht nach dem Exil im modernen Japan」、
『Flucht und Rettung. Exil im japanischen Herrschaftsbereich (1933-1945)』、157-166 頁、2011.11

大宮勘一郎、「始まりの記述者 — フリードリヒ・キットラーのために —」、『思想』、1055、143-146 頁、2012.3

(2) 学会発表

国際、OMIYA, Kanichiro, 「Zwischen Romantik und Wirklichkeit - die Sehnsucht nach dem Exil im modernen Japan」、Exil im Ostasien (1933-1945)、Gakushuin-University、2010.9.18

国際、OMIYA, Kanichiro, 「Die Wiederbelebung der Anthropologie in den 1920er Jahren (Helmuth Plessners Politische Anthropologie)」、Die Frag-Wuerdigkeit des Menschen、Keio-University, Mita-Campus、2010.11.5

国際、OMIYA, Kanichiro, 「Kommentar zu Sybille Kraemers Vortrag: "Das Auge des Geistes und die Ordnung der Simultaneität oder: Über die Erkenntniskraft der Linie"」、Simultaneität、Rikkyo-University, Ikebukuro-Campus、2010.12.4

国際、OMIYA, Kanichiro, 「Der Mensch als Para-Existenz」、Das Doppelwesen Mensch、Keio-University, Mita-Campus、2012.1.28

(3) 総説・総合報告

大宮勘一郎、「ドイツ文学の現況と翻訳・研究 10」、『文藝年鑑』、平成二十三年版、94-96 頁、2011.6

(4) 翻訳

共訳、Sigmund Freud、"Hemmung, Symptom, Angst"、大宮勘一郎、『制止、症状、不安』、『岩波フロイト全集』、第 17 巻、岩波書店、2010.6

個人訳、Heinrich von Kleist、"Die Geistererscheinung"、大宮勘一郎、『幽霊現わる』、『モンキー・ビジネス』、Vol. 11、ヴィレッジブックス、2010.10

個人抄訳、Johann Wolfgang von Goethe、"Die Leiden des jungen Werthers"、大宮勘一郎、『若きヴェルターの悩み』、『モンキー・ビジネス』、12、ヴィレッジブックス、2011.1

個人訳、Friedrich Kittler、"Gibt es eigentlich den Berliner Zoo noch?"、大宮勘一郎、『ベルリン動物園は、一体まだあるのかね? — ニクラス・ルーマン追悼 —』、『思想』、1055、157-164 頁、岩波書店、2012.3

(5) 共同研究・受託研究

共同研究、大宮勘一郎、OMIYA, Kanichiro、慶應義塾大学、ドイツ・フライブルク大学、Keio University, University of Freiburg、「ヒューマン・プロジェクト 文化史的観点からの人間学の再構築」、「Human Project - Reconstruction of the Anthropology from the Cultural-historical Viewpoint」、2010~2012

(6) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金、大宮勘一郎、OMIYA, Kanichiro、研究代表者、「ヒューマン・プロジェクト 文化史的観点からの人間学の再構築」、「Human Project - Reconstruction of the Anthropology from the Cultural-historical Viewpoint」、2010~2012

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、東京ドイツ文化センター、「映画 "Die Akte Kleist" について（上映会解説講演）」、2011.9~2011.9

特別講演、東京ドイツ文化センター、「クライスト 2001 / 2011 — 21 世紀最初の 10 年とクライストの諸作品」、2011.9~2011.9

1. 略歴

- 1987年3月 京都大学文学部卒業（文学士）
- 1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
- 1990年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
- 1990年4月 神戸大学教養部助手
- 1991年10月 神戸大学教養部講師
- 1992年10月 神戸大学文学部講師
- 2000年10月 神戸大学文学部助教授
- 2000年4月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味を中心にあった。また、その問題意識を継承する20世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18世紀以後、ドイツ語圏にあって、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人々—ハラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで—の営みを「実験者の文学」という観点から跡付けするという作業を進めている。

c 主要業績

(1) 論文

宮田眞治「自然の内部に、被造物の精神は踏み込まない—A. v. ハラーにおける境界 / 限界の諸相」『死生学研究』第14号、1-41頁、2010.12

(2) 学会発表

国内、「イエナ・ロマン主義における〈能動・受動〉モデルの問題」（シンポジウム「ヘーゲルとロマン主義」における提題）2011.12.18. 日本ヘーゲル学会 第14回研究大会（神奈川大学）

(3) 会議主催（チェア他）

国内、「第52回ドイツ文化ゼミナール」、実行委員、2010.4.21～2010.4.27

国内、「第54回ドイツ文化ゼミナール」、実行委員長、2012.3.10～2012.3.16

国内、「日本シェリング協会第19回大会」、チェア、ドイツ・ゴシックをめぐって、神奈川大学、2010.7.3～2010.7.4

(4) その他

Auswahlbibliographie zum Sonderthema: Der Krieg als Thema deutschsprachiger Literatur seit 1945.

In: "Neue Beiträage zur Germanistik" (Herausgegeben von der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik)

Band 10 / Heft 1 2011 pp.99-102

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本独文学会 理事および編集委員 2009.4～

日本シェリング協会 理事および「シェリング年報」編集委員長 2008.10～

22 スラヴ語スラヴ文学

教授 **長谷見 一雄** HASEMI, Kazuo

1. 略歴

1973年3月	東京大学文学部第3類ロシア語ロシア文学専修課程卒業(文学士)
1976年3月	同 大学院人文科学研究科露語露文学専門課程修士課程修了
1977年5月	ワルシャワ大学ポーランド文学研究所研究生(～1979年5月)
1979年9月	東京大学大学院人文科学研究科露語露文学専門課程博士課程 中途退学
1979年10月	東京大学文学部助手(ロシア語ロシア文学, 西洋近代語近代文学)
1981年4月	山形大学教養部専任講師(露語)
1982年8月	山形大学教養部助教授(露語)
1993年4月	東京大学文学部助教授(ロシア語ロシア文学)
1994年11月	同 教授(スラヴ語スラヴ文学)
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授(スラヴ語スラヴ文学)

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

- (1) 19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシアおよびポーランドの文学を、その時代の文脈に即してとらえ直し、最終的には象徴主義小説(特に幻想文学)の詩学の構築を目指す。その基礎作業として、まず先行する文学研究を調査研究するのももちろんのこと、同時代人の言語意識を理解するために、当時のロシア語・ポーランド語に関する歴史文法および歴史文体論関係の文献の調査研究も続けている。また当時刊行されていた数多い文芸雑誌を重視し、資料収集に努め、主にそこに掲載された単行本収録以前の初出作品、評論、時評、書評、挿絵、広告、さらには紙面のレイアウトなどのヴィジュアルな側面等をも検討し直す一方で、当時の読者文化、書物文化の諸相に関する文芸社会学的研究にも留意する。
- (2) また、当時の文学に大きな影響を与えた神話学的・民俗学的・宗教学的関心の実態にも目を向け、背景の理解に努める。
- (3) さらに、近代ロシア・ポーランドの文学作品に現れた語彙・語法の歴史的系統性と変化に注目し、19世紀のロシア語・ポーランド語に関する辞書・研究書などの基本文献の調査収集を行う。
- (4) その上で、19世紀ロシア語・ポーランド語の語彙・語法・比喩表現に関する基本的なデータベースを作成する。
- (5) 以上とは別に、紹介の遅れている近現代ポーランド文学の優れた作品の翻訳・解説作業を進める。
- (6) その他、ポーランド語辞典編纂の準備作業として、ポーランドにおいて刊行されている現行辞書の調査収集を行う。

c 主要業績

(1) 著書

- 共訳、チェスワフ・ミウオシュ、「ポーランド文学史」、2006.5
共訳、飯島周・小原雅俊編、「ポケットの中の東欧文学」、2006.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 国内、日本ロシア文学会、理事、2010.1～2010.12
国内、日本ロシア文学会、編集委員、2010.1～2012.3
国内、西スラヴ学研究会、企画編集委員、2010.1～2012.5

教授 **金澤 美知子** KANAZAWA, Michiko

1. 略歴

- 1974年 3月 東京大学教養学部教養学科卒業
- 1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（ロシア語ロシア文学）
- 1981年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学
- 1981年 4月 東京大学文学部露語露文学研究室助手（～1989年 3月）
- 1989年 4月 放送大学教養学部助教授（～1994年 3月）
- 1994年 4月 東京大学文学部助教授（スラヴ語スラヴ文学）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（スラヴ語スラヴ文学）
- 1996年 1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（スラヴ語スラヴ文学） 現在に至る
- 2000年 10月-2001年 8月 ワルシャワ大学東洋研究所客員講師

2. 主な研究活動

a 専門分野

ロシア文学、文化 比較文学

b 研究課題

18、19世紀のロシア文化 ロマン主義 ドストエフスキー ロシアと西欧

c 主要業績

(1) 論文

「フォードル・エミンと18世紀ロシア—「現実」の様式化へ向けて—」、日本18世紀ロシア研究会年報 No.6、2010

(2) 書評

「伊東一郎、宮澤淳一『文化の透視法』」、2008、『ロシア語ロシア文学研究』、日本ロシア語ロシア文学会、2009

(3) 監修

共同編集、「SLAVISTIKA」No.26、2010

共同編集、「日本18世紀ロシア研究会ニューズレター」No.6、日本18世紀ロシア研究会、2010

共同編集、「SLAVISTIKA」No.27、2011

共同編集、「日本18世紀ロシア研究会ニューズレター」No.7、日本18世紀ロシア研究会、2011

共同編集、「日本18世紀ロシア研究会ニューズレター」No.8、日本18世紀ロシア研究会、2012

(4) 随筆他

「18世紀のロシア文学、ジャン・ジャック・ルソーの在る風景」、「学会ニュース」No.67、日本18世紀学会、2011
"Русский сентиментализм и история «развращенной дочери»" 「2011 俄羅斯語語言語文学国際論壇」手冊、淡江大学、2011

(5) 国際学会発表

Russian sentimentalism and the motif of 'the prodigal daughter' (招待講演)、Conference: Russian language and Literature 2011, Tamkang University, Taiwan, 2011.12.2

(6) 国内学会発表

「18世紀ロシアにおける「公」と「私」を論じる」、日本18世紀ロシア研究会、東京大学、2012.9.25

(7) 学会開催

日本18世紀ロシア研究会 第8回大会、2010.9.20

日本18世紀ロシア研究会 第9回大会、2011.9.23

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術振興会専門委員、2008～2010

学位授与機構委員、2010～

日本18世紀ロシア研究会運営委員、2003～

教授

沼野 充義

NUMANO, Mitsuyoshi

23 現代文芸論 参照

23 現代文芸論

教授 野谷 文昭

NOYA, Fumiaki

1. 略歴

- 1971年 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科学士・文学士
1975年 東京外国語大学大学院外国語研究科（ロマンス系言語学）修士・文学修士
1986年4月～1987年3月 東京工科大学、助教授（スペイン語）
1987年4月～1994年3月 立教大学一般教育学部、助教授（スペイン語）
1992年4月～1993年3月 カリフォルニア大学アーバイン校（University of California, Irvine）、客員研究員
1994年4月～1998年3月 立教大学一般教育学部、教授（スペイン語）
1998年4月～2005年3月 立教大学法学部、教授（全学共通カリキュラム担当）
1999年12月～2000年3月 メキシコ大学院大学(El Colegio de México)、客員研究員
2001年4月～2005年3月 立教大学大学院比較文明学専攻、教授
2005年4月～2008年3月 早稲田大学教育・総合科学学術院、教授（スペイン語・複合文化学）
2008年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部、教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

ラテンアメリカ文学、現代文芸論

b 研究課題

ラテンアメリカ＜ブーム＞期およびポスト＜ブーム＞期の小説、文学と映画、ラテンアメリカ現代詩

c 主要業績

(1) 著書

- その他(自由入力)、野谷文昭、『中村邦生編』、岩波書店、2010.7
その他(自由入力)、野谷文昭、『メキシコの美の巨星たち—その多彩でユニークな世界』、東京堂出版、2011.4
その他(自由入力)、野谷文昭、『日本の作家が語るボルヘスとわたし』、岩波書店、2011.9

(2) 論文

野谷文昭、「ロペ・デ・アギーレの表象をめぐって」、東京大学現代文芸論研究室紀要『れにくさ』、3号、2012.3

(3) 書評

- ロベルト・ボラーニョ、『野生の探偵たち』、野谷文昭、『日本経済新聞』、2010.5
野谷文昭 訳、『絆と権力』ステファニー・パニチュェリ、アンヘル・エステバン』、石井登、『日本イスパニヤ学会
会報』、17号、2010.10
エベリオ・ロセーロ、『顔のない軍隊』、野谷文昭、『日本経済新聞』、2011.3
イグナシオ・ラモネ、『フィデル・カストロ—みずから語る革命人生』、野谷文昭、『ラティーナ』、2011.4
田村さと子、『百年の孤独を歩く』、野谷文昭、『宮崎新聞 他』、2011.5
マリオ・バルガス＝リョサ、『ケルト人の夢』、野谷文昭、『東京新聞』、2011.7

(4) 解説

- 野谷文昭、「青春の一冊 書かれなかった章 ジーン・フランコ『ラテンアメリカ文化と文学—苦悩する知識人』」、
『東大新聞』、2010.3
野谷文昭、「対立と和解—小説から映画へ」、『DVD 蜘蛛女のキス』、2010.4
野谷文昭・鼓直・細野豊、「特集・ボルヘス」、『詩と思想』土曜美術社、2010.7
野谷文昭、「小説と映画のはざまで」、劇場用プログラム「瞳の奥の秘密」ロングライド、2010.8
野谷文昭、「ノーベル文学賞バルガス＝リョサ氏の魅力」、『朝日新聞』、2010.10
野谷文昭、「決定！永遠の小悪魔女優ベスト10」、『文藝春秋』、2010.11
野谷文昭、「ビートルズとキューバの感性」、東京大学現代文芸論研究室紀要『れにくさ』、2号、pp. 7-12.、2010.12
野谷文昭、「繋がりへの回復」、劇場用プログラム「愛する人」ファントム・フィルム』、2011.1
野谷文昭、「ラテンアメリカ文学とボリバル」、劇場パンフレット『シモン・ボリバル 夢の断片』劇場文化、2011.7

野谷文昭、「世界の文学ラテンアメリカ バルガス=リヨサ『ケルト人の夢』」、『東京新聞』、2011.7

野谷文昭、「ラテンアメリカ文学—ポスト・ブームを越えて—」、『淡青』、2011.10

野谷文昭、「文学への情熱ともうひとつの現実の創造」、『すばる』、159-168頁、2011.10

(5) 学会発表

国内、野谷文昭・林みどり、「第8回メキシコにおける女性の表象：1940～60年代の文学・映画を中心に」、上智大学グローバル・スタディーズ研究科大学院生・次世代研究者ワークショップ、2010.1.31

(6) 啓蒙

野谷文昭、「サルト・モルタル—決死の飛躍」、東京大学2010『進学ガイダンス』、2010

野谷文昭、「読者アンケート」、『みすず』、2011

野谷文昭、「世界の酒と文学」酒はうまさの証拠、『yom yom』、3月号、2011.2

野谷文昭、「マリオ・バルガス=リヨサ氏に名誉博士号を授与」、『東京大学 学内広報』、1414、2011.7

野谷文昭、「読者アンケート特集」、『みすず』、2012.1

野谷文昭、「映像をめぐる言葉」、『恵比寿映像祭』、2012.3

(7) 会議主催（チェア他）

国内、「マリオ・バルガス=リヨサ氏講演会」、セルバンテス文化センター、2011.6

国内、「マリオ・バルガス=リヨサ氏講演会」、東京大学本郷キャンパス、2011.6

国内、「マリオ・バルガス=リヨサ氏講演会」、京都外国語大学、2011.6

国際、国際シンポジウム「世界文学とは何か?」、東京大学文学部法文2号館、2011.11

(8) 総説・総合報告

野谷文昭、「マリオ・バルガス=リヨサ氏講演『文学への情熱ともうひとつの現実の創造』(梗概)」、『日本経済新聞』、2011.7

(9) マスコミ

「絆と権力—アンヘル・エステバン、ステファニー・パニチェリ著(読書) (評者: 旦敬介)」、『日本経済新聞』、日本経済新聞社、2010.6.6

「絆と権力 アンヘル・エステバン、ステファニー・パニチェリ著 (評者: 柄谷行人)」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2010.6.20

「不思議な「友情」にメス (評者: 今福龍太)」、『読売新聞』、読売新聞社、2010.7.26

「野谷文昭氏に会田由翻訳賞」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2010.8.5

「作品への情熱が翻訳の質決める。」、『日本経済新聞』、日本経済新聞社、2010.8.18

「講座・講演 マリオン」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2010.8.24

「会田由翻訳賞受賞」、『東京大学学内広報』、東京大学広報室、2010.9.24

「ノーベル文学賞バルガス・リヨサ氏」、『毎日新聞』、毎日新聞社、2010.10.8

「ノーベル文学賞 バルガス・リヨサ氏」、『読売新聞』、読売新聞社、2010.10.8

「情熱と反抗投影 ノーベル文学賞バルガスリヨサ氏の魅力」、『朝日新聞』、朝日新聞社、2010.10.9

「中南米作家に再び光、ノーベル賞発表も後押し(活字の海で)」、『日本経済新聞』、日本経済新聞社、2010.10.10

「マリオ・バルガス・リヨサ氏謝辞」、『日本経済新聞』、2011.7

「そして生は続く」、2011.10

(10) 受賞

国内、野谷文昭、会田由翻訳賞、日本スペイン協会、2010.7.24

(11) 翻訳

個人訳、Ángel Esteban, Stephanie Panichelli, "Gabo y Fidel: El Paisaje de una Amistad", 野谷文昭、『絆と権力: ガルシア=マルケスとカストロ』、新潮社、2010.4

個人訳、Octavio Paz, "Mi vida con la ola", 「波との生活」、中村邦生編『生の深みを覗く』、岩波書店、2010.7

個人訳、Jorge Luis Borges, "Siete noches", 野谷文昭、『七つの夜』、岩波書店、2011.5

個人訳、Manuel Puig, "El beso de la mujer araña", 野谷文昭、『蜘蛛女のキス』、集英社、2011.5

個人訳、Edmundo Desnoes, "Memorias del subdesarrollo", 野谷文昭、『低開発の記憶』、白水社、2011.6

個人訳、Octavio Paz, "Mi vida con la ola", 野谷文昭、『波との生活』、集英社、2011.7

個人訳、オクタビオ・パス, "El ramo de ojos azules", 野谷文昭、『ラテンアメリカ5人集「青い目の花束」』、集英社、2011.7

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

- 特別講演、セルバンテス文化センター、ロベルト・ボラーニョ『野生の探偵たち』、2010.4～
特別講演、県立国際言語アカデミア、「アルゼンチンを代表する作家・詩人・ボルヘス」、2012.2～
特別講演、(社)日本詩人クラブ 3月例会、「詩人ボルヘス」、2012.3～
セミナー、日本近代文学館、「声のライブラリー 自作朗読の会」、2010.9～
セミナー、東京外国語大学、「映画と女性の表象」、2010.11～2010.12
セミナー、豊洲センター、「メキシコを楽しむアラカルト」、2010.11～
その他、上智大学グローバル・スタディーズ研究科、「第8回 メキシコにおける女性の表象：1940年代～60年代の文学・映画を中心に」、2010.1～
その他、メキシコ大使館、「HANABI クリスティーナ・ラスコン・カストロ」、2010.10～
その他、ギャラリー東京ユマニテ、「詩人の宴 10月13日 パブロ・ネルーダ」、2011.10～
その他、ギャラリー東京ユマニテ、「詩人の宴 12月27日 オクタビオ・パス」、2011～
その他、シネマート新宿、「「グッド・ハーブ」とメキシコ文化」、2011.7～
その他、ユーロスペース、「低開発の記憶」、2011.8～
その他、西荻窪 数奇和、「ボルヘスを読む～『七つの夜』から「盲目について」」、2012.3～

(2) 学会

日本イスペインヤ学会理事、ボルヘス会会長

教授 柴田 元幸 SHIBATA, Motoyuki

1. 略歴

1979年	東京大学文学部（英語英米文学）学士・文学士
1984年	東京大学大学院人文社会研究科（英語英文学）修士・文学修士
1986年	イエール大学 Yale University（Department of English）修士・文学修士
1984年4月～1987年11月	東京学芸大学教育学部、講師
1987年12月～1988年9月	東京学芸大学教育学部、助教授
1988年10月～1997年3月	東京大学教養学部 助教授
1997年4月～1999年3月	東京大学大学院総合文化研究科、助教授
1999年4月～2005年3月	東京大学大学院人文社会系研究科、助教授
2005年4月～	東京大学大学院人文社会系研究科、教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

(概要)

アメリカ文学。これまで同様、現代アメリカ小説の紹介・翻訳に努めるとともに、翻訳の文化的意義などについても発言してきた。

c 主要業績

(1) 論文

柴田元幸、「20世紀アメリカ小説と映画」、『れにくさ』、2、181-92頁、2010.12

(2) 受賞

国内、柴田元幸、日本翻訳文化賞、日本翻訳家協会、2010.10.26

(3) 翻訳

個人訳、Ernest Hemingway、「in our time」、柴田元幸、『in our time』、ヴィレッジブックス、2010.5

個人訳、Thomas Pynchon、“Mason & Dixon”、柴田元幸、『メイスン&ディクスン（上下巻）』、新潮社、2010.6
個人訳、Paul Auster、“Oracle Night”、柴田元幸、『オラクル・ナイト』、新潮社、2010.9
個人訳、Barry Yourgrau、“Gangster Fables”、柴田元幸、『真夜中のギャングたち』、ヴィレッジブックス、2010.11
個人訳、Joseph Conrad、“Lord Jim”、柴田元幸、『ロード・ジム』、河出書房新社、2011.3
個人訳、Mark Twain、“The Adventures of Tom Sawyer”、柴田元幸、『トム・ソーヤーの冒険』、『モンキービジネス』、Vol. 15、pp. 1-224、ヴィレッジブックス、2011.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

講演 翻訳について語るときに翻訳者の語ること 早稲田大学文化構想学部 2010.5.28
講演 21世紀アメリカ小説——現実の組み立て方について 中・四国アメリカ文学会第39回大会、香川大学
2010.6.12
公開対談 (マイケル・エメリック氏と) 小説を訳すということ J-Lit シンポジウム 2010 日本財団ホール
2010.7.31
講演 ぼくはこうして英語とつきあってきた 教育と学校を語る集い 2010年長水教育研究集会 長野市東部中
学校 2010.10.2
講演 翻訳という仕事 第14回東京大学文学公開講座 常呂高校特別講座 2010.10.8
モデレーター わたしたちが世に届けたい物語：今、文芸誌に何ができるか？ 日本財団ビル 2010.10.25
対談 (with Paul Auster) Lost and Found in Translation. Asia Society, New York. 2010.12.7
講演会運営・司会 Japan/America: Writers' Dialogue Asia Society, New York 2011.4.30
講演会運営・司会 Seeing Stories: Fiction, Manga & Graphic Novels. Japan Society, New York. 2011.5.3
講演会運営・司会 Japan and Canadian Writers in Association. The Japan Foundation, Toronto. 2011.9.9
講演会運営・司会 Japanese Literature Today. York University, Toronto. 2011.9.12
講演会運営・司会 The Translator and the Novelist: Japanese Writing After Fukushima 2011.9.13
講演 翻訳の楽しみと楽しみ 京都精華大学 2011.9.29
講演 英語を読む、小説を訳す 埼玉県立浦和高校 2011.10.25
朗読会 Storyville, Kyoto 京都造形芸術大学 2011.11.5
シンポジウム 世界文学とは何か？ 東京大学文学部 2011.11.12
講演 世界文学を愉しもう 江戸川区立葛西図書館 2011.11.25
講演 翻訳質問箱—小説を訳す 第62回駒場祭 東大駒場キャンパス 2011.11.27
講演 現代アメリカ小説の面白さ——オースター、ミルハウザーを中心に 東京大学附属図書館 2011.12.15

(2) 学会

日本アメリカ文学会会員・学会誌編集委員、日本英文学会会員

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学教養学部教養学科学士
1979年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士
1981年9月～1985年7月 ハーヴァード大学 Harvard University（フルブライト全額給費奨学生として留学（スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）
1984年6月 ハーヴァード大学修士
1985年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学
1984年2月～1985年6月 ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント
1985年8月～1989年1月 東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）
1987年10月～1988年9月 ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）
1989年1月～1994年3月 東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）
1994年4月～2004年3月 東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学）
2000年5月～11月 ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）
2002年10月～11月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

b 研究課題

- (1) ロシア・東欧から日本までを視野に入れた形での新たな世界文学論へのアプローチ
- (2) ポスト共産主義時代のロシア東欧文学の総合的研究、
- (3) ユーラシア研究という新たな枠組みの中でのロシア東欧文学の位置づけ
- (4) ロシア近代小説研究（特にチェーホフ、ナボコフ）
- (5) ロシア詩詩の見直しと新しいロシア詩アンソロジーの編纂

c 主要業績

(1) 著書

共編著、Mitsuyoshi Numano and Tadashi Wakashima., *Revising Nabokov Revising: Proceedings of the International Nabokov Conference in Kyoto*. Kyoto: The Nabokov Society of Japan., 2011.

共編著、若島正・沼野充義、『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』、研究社、2011.6

共著、沼野充義（他5名との対話形式の講義集）、『世界は文学でできている』、光文社、2012.1

(2) 論文

Numano, Mitsuyoshi, "On Stylistic Exuberance: Nabokov's *Gift* as a Russian Novel," in Mitsuyoshi Numano and Tadashi Wakashima., *Revising Nabokov Revising: Proceedings of the International Nabokov Conference in Kyoto*. Kyoto: The Nabokov Society of Japan, 2011, pp.63-39.

Numano, Mitsuyoshi, "The River as a Metaphor for Human Experience: Adam Mickiewicz's "Nad wodą wielką i czystą" in comparison with Tadeusz Różewicz's "Lyrniki lozańskie" and Czesław Miłosz's "Rzeki," 『西スラヴ学論集』 No.14、71-88頁、2011.6

Нумано, Мицүёси, «Женщины как четыре квадранта мировоззрения: Метонимическое средство в «Спекторском» и «Повести» Пастернака», *SLAVISTIKA XXVII*, pp.73-102, 2012.3

(3) 報告書

Numano, Mitsuyoshi, et al. ed., *Russian Literature and East Asia* (Proceedings of the Panel at ICCEES World Congress VIII, Stockholm, 42 pp., 2011.3

Numano, Mitsuyoshi, et al. ed., *Русская литература как социальный институт* (Proceedings of the Conference at the University of Tokyo), 66 pp., 2011.3

沼野充義他編「本郷の春—ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる連続講義の記録」、120頁、2011.3

沼野充義・ドミトリー・バグのポリスキー共編、「ヴェルボンド」、第1号、192ページ、2011.6

(4) 訳書

沼野充義訳、ナボコフ『賜物』、河出書房新社、2010.4

沼野充義編訳及び解説、『新訳チャーホフ短篇集』、集英社、2010.9

共編訳、関口時正・沼野充義共編、『チェスワフ・ミウォシユ詩集』、成文社、2011.11

(5) 書評

村上春樹、『1Q84』、新潮社、Mitsuyoshi Numano（沼野充義）、『JLT2010』、No. 27、94-99頁、2010
「毎日新聞」日曜版「今週の本棚」に書評を定期的に寄稿（年間平均約10本）。

(6) 啓蒙

沼野充義、「「ハルキが私たちのことを書いてくれる」—どうして村上春樹はロシアでこんなに人気があるのか」、『熱風』、2010年3月号、15-19頁、2010.3

沼野充義、「名句で読むロシア文学の傑作」、NHK テレビテキスト『テレビでロシア語』2010年4月～2012年3月、毎月連載（全24回）。

新聞三社連合配信各紙（東京新聞、中日新聞、北海道新聞、西日本新聞）に毎月文芸時評を連載。

(7) 学会発表

国内、沼野充義、「ロシア文学者としての内村剛介」、第21回上智大学ロシア研究シンポジウム、上智大学2号館508番教室、2010.2.27

国内、Numano, Mitsuyoshi, “On Stylistic Exuberance of *The Gift* as A Russian Novel,” International Nabokov Conference in Kyoto, 2010.3.25

国外、沼野充義、「日本におけるロシア文学の翻訳の新しい傾向」（ロシア語）、第1回国際翻訳者会議、モスクワ（全ロシア外国文献図書館主催）、2010.9.3

国内、沼野充義、「翻訳で迷子になって Lost In Translation」、ロシア語通訳協会30周年記念集会、上智大学12号館202号室、2010.11.20

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本ロシア文学会中部支部講演会、「チャーホフの新訳をめぐって」、中京大学、2012.2.18

外交学院（北京）、現代日本文学に関する連続講義、2012.3.13-15

中国社会科学（北京）、「ハルキ対カラマーゾフ：現代日本文学に対するロシア文学の影響」（ロシア語）、2012.3.16

中国社会科学院（北京）、「現代日本の長編小説について」、2012.3.16

(2) 学会

「日本ロシア文学会」、会長、2009～（任期2013まで）

「日本ナボコフ協会」、運営委員、1998～

「日本スラヴ東欧研究学会(JSSEES)」、理事、1998～

「ロシア・東欧学会」、理事、2000～

「日本西スラヴ学研究会」、企画編集委員、2000～

「日本ロシア・東欧研究連絡協議会(JCREES)」、幹事、2009～

(3) 行政

「文化庁」、JLPP 現代日本文学翻訳作品選定委員 2007～

「文化庁」、芸術選奨（文学部門）推薦委員、2009～

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「毎日新聞社」、書評委員、1995～

「セゾン文化財団」、評議員、1999～

「国際交流基金」、Japanese Book News 編集委員、2004～

「新聞三社連合」（東京新聞・中日新聞他）、文芸時評担当、2004～

「読売新聞社」、読売文学選考委員、2005～

「日本ペンクラブ」、国際委員、2006～

「東京大学出版会」、企画委員、2007～

「早稲田大学」、坪内逍遙大賞選考委員、2007～

「北海道大学スラブ研究センター」、運営委員、2008～2010

「光文社」、感想文コンクール審査委員、2008～

「サントリー文化財団」、サントリー学芸賞選考委員、2010～

24 西洋史学

教授 近藤 和彦

KONDO, Kazuhiko

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部（西洋史学専修課程）卒業
- 1973年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（西洋史学）修了
- 1974年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（西洋史学）中途退学
- 1974年8月 東京大学助手（文学部西洋史学）
- 1977年4月 名古屋大学講師（文学部西洋史学）
- 1980年9月 ケインブリッジ大学大学院博士課程（歴史学）～1982年8月
- 1983年1月 名古屋大学助教授（文学部西洋史学）
- 1988年4月 東京大学助教授（文学部西洋史学）
- 1994年4月 東京大学教授（文学部西洋史学）
- 1994年9月 ロンドン大学（UCL 史学科）客員教授 ～1995年12月
- 1995年4月 東京大学教授（大学院人文社会系研究科西洋史学）
- 2003年10月 オクスフォード大学（リナカ学寮）客員上級メンバー ～2004年3月

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋史学（イギリス近代史）

b 研究課題

- (1) 18世紀マンチェスタの地域史研究、史料編纂。
- (2) イギリス諸島の通史の試み。
- (3) 16世紀～19世紀ヨーロッパ史の構造的理解。
- (4) 近代歴史学の歴史。

以上4つの課題を時間をかけて遂行している。

c 主要業績

(1) 著書

共著、近藤和彦、『伝統都市 4 分節構造』、東京大学出版会、2010.8

編著、近藤和彦、『イギリス史研究入門』、山川出版社、2010.10

編著、Kazuhiko Kondo and Miles Taylor、『British history 1600-2000: expansion in perspective』、Institute of Historical Research、2010.10

(2) 学会発表

国際、Kazuhiko Kondo、『Moral economy again: E. P. Thompson retried in digital archives』、Essex Research Seminar、University of Essex, Colchester, UK、2010.5.12

国内、近藤和彦、『モラル・エコノミー論を歴史的に再考する』、史学研究会、京都大学文学研究科、2010.11.2

国際、Kazuhiko Kondo、『E. P. Thompson's 'moral economy' retried in digital archives』、Korean Japanese Conference of British History、熊本大学くすのき会館、2010.11.13

(3) マスコミ

「上半期の収穫から」、『週刊読書人』、2010.7.25

(4) 教科書

『現代の世界史』、近藤和彦、編集委員、山川出版社、2010

『世界の歴史』、近藤和彦、編集委員、山川出版社、2010

(5) 研究テーマ

寄附金、三菱財団人文科学研究助成、近藤和彦、研究代表者、『17・18世紀イギリスにおけるモラル・エコノミーと啓蒙』、2010～

1. 略歴

1973年 3月	東京大学文学部（西洋史学専修課程）卒業
1976年 3月	同 大学院人文科学研究科（西洋史学専門課程）修士課程修了
1981年 3月	同 大学院人文科学研究科（西洋史学専門課程）単位取得の上退学
1984年 4月	神戸大学文学部（西洋史学担当）助教授（1993年 3月まで）
1993年 4月	東京大学文学部（西洋史学担当）助教授（1994年 11月まで）
1994年 12月	同 文学部（西洋史学担当）教授
1995年 4月	同 大学院人文社会系研究科教授（～継続中）

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋史学（近現代ロシア史）

b 研究課題

革命後、最初の経済復興策を調査し、これまでのイデオロギー的な解釈から離れてとらえ直す作業を行った。それにより、いわゆる戦時共産主義とは、一時的なものではなく、ソヴィエト期ロシア全体の解明にとっても決定的な意義を持つ政策体系であることが確認された。続いて、そうした政策体系を採用する政治体制の解明に着手した。

成立直後の時期のソヴィエト社会の、複雑な政治的メカニズムの実態を整理することを通して、古参党员集団による寡頭支配として、新しい支配構造をモデル化した。第二に、ソ連世界（文明）の歴史的な性格を解明すること。そのさい、発生的な接近方法と、解剖学的に接近する方法を組み合わせ、総合することを試みてきた。さらに、ロシア・マルクス主義と、それにもとづく歴史観が、各地の歴史研究に大きな影響をあたえた事実をふまえ、ロシアや日本の史学史を、思想的に整理することにも従事している。

c 主要業績

(1) 論文

「ロシア革命とコミンテルン（ロシア革命）の誕生と東アジアへの連鎖」、『岩波講座・東アジア近現代通史』第3巻、47-69、2010.11

「都市史研究のアイデアにむけて」、『年報都市史研究財』（山川出版社）、2-7、2012.3

(2) 書評

【新刊紹介】「加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人—洋行知識人の反帝ネットワーク—』、『史学雑誌』120-9、104-5、2011.9

(3) 学会発表

「シンポジウム報告『伝統都市について』（主催：「都市史研究会・ぐるーぷ・とらっど3」於東京大学工学部、2010.12.5）

「瀧口順也報告（ポリシェヴィキ党大会（1927-1934）—スターリニズムの演出と舞台装置）へのコメント」（ロシア史研究会大会：於青山学院女子短期大学、2011.10.22）

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

長野市民教養座「ロシアの変革について」（長野市）2010.10.15

立教大学大学院（2010年度—2011年度）

東京芸術大学（2010年度—2011年度）

北海道大学文学部（2011年度）

1. 略歴

- 1973年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
 1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程入学
 1978年3月 同 課程修了(文学修士)
 1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程入学
 (1984年3月 同課程単位取得満期退学)
 1980年10月 フランス・プロヴァンス第1大学第3課程(歴史と文明)登録
 1984年12月 同課程修了 フランス第3課程博士号(歴史と文明)取得
 1986年12月 九州大学文学部助教授
 1994年10月 九州大学文学部教授
 1995年4月 東京大学人文社会系大学院教授/九州大学文学部教授(兼任)
 1995年10月 東京大学人文社会系大学院教授
 1997年3-5月 フランス・ボルドー第3大学客員教授
 2005年3-7月 フランス・ニース大学文学部客員教授
 2007年6月 フランス・南ブルターニュ大学、客員教授

2. 主な研究活動**a 専門分野 b 研究課題**

近世ヨーロッパ、とくにフランスを主要な対象として以下の諸分野を研究。

- 1) 国際商業史、2) 港湾都市史、3) 宗教社会史、4) フリーメイソン史

c 主要業績**(1) 著書**

編著、深沢克己、『ユーラシア諸宗教の関係史論—他者の受容、他者の排除』、2010.11

編著、深沢克己・桜井万里子、『友愛と秘密のヨーロッパ社会文化史—古代秘儀宗教からフリーメイソン団まで』、2010.11

(2) 論文

Katsumi Fukasawa, « L'histoire française moderne vue du Japon : la place incertaine du XVIIe siècle », *XVIIe siècle*, 248, pp.491-498, 2010.7

「18世紀末フランスの知的エリートとフリーメイソン—マルセイユの医師アシャールの内面的軌跡」(立教大学史学会『史苑』72巻1号、2011年12月、57-76頁)

「近世フランスの王権と宗教—比較の視点から」(小島毅編『東アジアの王権と宗教』アジア遊学 151、勉誠出版、2012年3月、132-142頁)

« Claude-François Achard dans sa jeunesse: médecin, académicien et franc-maçon marseillais à la fin du XVIII^e siècle », *Provence historique*, t. LXII-fasc. 247, janvier-mars 2012, pp. 11-24.

(3) 書評

「ルネ・レモン、『政教分離を問う—EUとムスリムのはざまで—』、青土社(『史学雑誌』、119編9号、2010.9、115-116頁、)

「回顧と展望 2010年の歴史学界 総説」(『史学雑誌』120編5号、2011年、1-5頁)

(4) 学会発表

国内、深沢克己、「高校世界史と大学の歴史教育とを結ぶもの」、日本西洋史学会第60回大会大シンポジウム「世界史教育の現状と課題」、別府国際コンベンションセンター、2010.5.29

国内、深沢克己、「啓蒙の世紀のフリーメイソン—石工伝説から騎士伝説へ」(東洋大学白山史学会第49回大会公開講演、東洋大学、2011年11月26日)

(5) 会議主催(チェア他)

国際、Journée d'études dix-septémistes françaises au Japon : théâtre, poésie, philosophie, histoire des idées、チェア、2010.11.3

国際、The first international workshop: “Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World”、チェア、2010.11.23

国際、The second international workshop: “Religious Conflict, Religious Concord in Europe and the Mediterranean World”、チェア、October 29, 2011

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等
立教大学文学部（2010-2011 年度）
- (2) 学会
（財）史学会理事長（2010-2011 年度）
- (3) 行政
国際委員（全学、2010 年度）
入試制度委員（全学、2011 年度）
- (4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
日本学術会議連携会員（2010-2011 年度）

教授 **姫岡 とし子** HIMEOKA, Toshiko

1. 略歴

- | | |
|------------|-------------------------------------|
| 1973 年 3 月 | 奈良女子大学理学部化学科卒業 |
| 1980 年 6 月 | フランクフルト大学歴史学部修士課程修了 |
| 1984 年 3 月 | 奈良女子大学大学院人間科学研究科比較文化学専攻単位取得退学（文学博士） |
| 1988 年 4 月 | 立命館大学国際関係学部講師 |
| 1991 年 4 月 | 立命館大学国際関係学部助教授 |
| 1995 年 4 月 | 立命館大学国際関係学部教授 |
| 1998 年 9 月 | ドイツ・ボーfum大学社会科学部客員教授（1999 年 3 月まで） |
| 2005 年 4 月 | 筑波大学人文社会科学部歴史・人類学専攻教授 |
| 2009 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学教授（現在に至る） |

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋史

b 研究課題

近現代ドイツ社会史、女性・ジェンダー史

c 主要業績

- (1) 著書
編著、姫岡とし子、『歴史教育とジェンダー—教科書からサブカルチャーまで』、2011.2
- (2) 論文
姫岡とし子、「歴史認識・歴史教育とジェンダー」、『学術の動向』、2011-10、48-50 頁、2011.10

3. 主な社会活動

- (1) 学会
日本ドイツ学会（理事長 2010—2011）
- (2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
日本学術会議連携会員（2010—2011）

1. 略歴

- 1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
- 1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学
- 1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）
- 1982年4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学
- 1984年9月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学
(Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88による)
- 1986年5月 アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
- 1987年9月 アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
- 1989年6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員(1990年3月まで)
- 1990年5月 アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得
Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
- 1990年4月 一橋大学助教授（経済学部）(1993年4月から1994年3月まで併任助教授)
- 1993年4月 東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）
- 12月 サントリー学芸賞
- 1994年6月 地中海学会賞
- 10月 マルコ・ポーロ賞
- 1995年10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員（1996年9月まで）
(国際交流基金フェローシップによる)
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文化交流研究施設・基礎部門）
- 2001年10月 (西洋史学助教授を併任)
- 2002年4月 21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員（人文科学）(2005年まで)
- 2002年10月 イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome),
(12月まで)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋史学） 現在に至る
- 2004年4月 日本学術振興会 学術システム研究センター研究員（人文学）(2007年まで)
- 2009年10月 アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar

2. 主な研究活動**a 専門分野**

西洋中世史

b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏（ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏）研究の接合を目指す。
- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。
- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- (6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

c 主要業績**(1) 論文**

高山博、「中世シチリアの「宗教的寛容」～ノルマン君主支配下のムスリム～」、『島嶼と異文化接触』、神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター、35-56頁、2010

Hiroshi Takayama, 「Frederick II's Crusade: An Example of Christian-Muslim Diplomacy」、『Mediterranean Historical Review』、25-2、169-185 頁、2010

(2) 学会発表

国内、高山博、「フロンティア概念と中世ヨーロッパ研究」、地中海学会大会、シンポジウム「フロンティア～周縁か中心か」、東北大学、2010.6.20

国際、高山博、「Migrations in the Mediterranean Area and the Far East: Medieval Sicily and Japan」、International Conference: The European Middle Ages in Global Entanglement、Hotel Aquino, Berlin, Germany、2011.5.27

国内、高山博、「フリードリヒ 2 世の十字軍～ムスリム君主との外交関係の視点から～」、史学会第 109 回大会、東京大学、2011.11.6

(3) 会議主催 (チェア他)

国内、「史学会第 108 回大会」、チェア、西洋史部会中世関係、2010.11.7

国内、「史学会第 109 回大会」、チェア、西洋史部会中世関係、東京大学、2011.11.6

国内、公開講演会: L. Little, "Plague in the European Middle Ages" (「西洋中世学会」+東京大学グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」共催)、その他、東京大学、2012.3.4

国内、Seminar: L. Little, "Making Saints in the Middle Ages"、その他、2012.3.7

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、西洋中世学会、常任委員 (2009～現在)、事務局長 (2010～2012)

国内、史学研究会、評議員 (2004～現在)

国内、史学会、理事 (2009～2011)、評議員 (1994～2012)

国内、地中海学会、常任委員 (1999～現在)

国際、The Mediterranean Seminar、Advisory & Editorial Board、2009～現在

国際、International Medieval Bibliography (Leeds, U.K.)、Regular Contributor for Japan、1995～現在

国際、Journal of Medieval Iberian Studies、Editorial Board、2007～現在

(2) 行政

文部科学省、科学技術政策、科学官、2008～2012

日本学術会議、立案、連携会員 (史学)、2006～現在

伊豆会議、世話人、2009～現在

1. 略歴

- 1991年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）
1991年11月 東京大学文学部助手
1993年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年11月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動**a 専門分野**

古代ギリシア史

b 研究課題**c 主要業績****(1) 著書**

共著、Hashiba, Yuzuru (editor-in chief: Worthington, Ian)、『Brill's New Jacoby』、Brill、2011.10

(2) 書評

佐藤昇、『民主政アテナイの賄賂言説』、山川出版社、橋場弦、『史学雑誌』、120編9号、93-99頁、2011.9

(3) 学会発表

国内、橋場弦、公開シンポジウム「歴史のなかの公と私」趣旨説明、史学会109回大会公開シンポジウム、東京大学、2011.11.5

(4) 翻訳

監訳、Cartledge, Paul、"Ancient Greece: a History in Eleven Cities"、新井雅代、『古代ギリシア：11の都市が語る歴史』、白水社、2011.8

3. 主な社会活動**(1) 学会**

国内、史学会、編集委員、2010.1～2010.5

国内、史学会、評議員、2010.1～2010.12

国内、史学会、理事、2011.6～2011.12

国内、日本西洋古典学会、常任委員、2010.1～2011.12

25 社会学

教授 盛山 和夫 SEIYAMA, Kazuo

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部社会学科卒業
- 1978年4月 北海道大学文学部助教授（社会行動学）
- 1985年4月 東京大学文学部助教授（社会学）
- 1994年6月 東京大学文学部教授（社会学）
- 1995年4月 同 大学院人文社会系研究科教授（社会学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会学、理論社会学、数理社会学、社会階層、社会保障

b 研究課題

概要：基本的に以下の4領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会学的問題領域における数理モデルの開発。
- (2) 社会学的な計量モデルと分析手法の研究。
- (3) 社会階層と社会移動に関する実証的および理論的研究。
- (4) 秩序問題と制度に関する理論的研究。

c 主要業績

(1) 著書

- 共著『社会調査法』（近藤博之・岩永雅也と共著）放送大学教育振興会、1992
- 単著『制度論の構図』創文社、1995
- 共著『社会階層：豊かさの中の不平等』（原 純輔と共著）東京大学出版会、1999
- 単著『権力』東京大学出版会、2000
- 単著『統計学入門』放送大学教育振興会、2004
- 単著『社会調査法入門』有斐閣、2004
- 共著 *Inequality amid Affluence: Social Stratification in Japan*. (translated by Brad Williams.) (with Hara Junsuke), Melbourne: Trans Pacific Press. 2005
- 単著『リベラリズムとは何か——ロールズと正義の論理』勁草書房、2006
- 単著『年金問題の正しい考え方——福祉国家は持続可能か』中公新書、2007
- 単著「Liberalism: Its Achievements and Failures」、Trans Pacific Press、2010.3
- 単著『社会学とは何か——意味世界への探求』ミネルヴァ書房、2011
- 単著『経済成長は不可能なのか——少子化と財政難を克服する条件』中公新書、2011
- 共著『社会学の学び方・活かし方』（金子勇・藤田弘夫・吉原直樹・今田高俊と共著）勁草書房、2011

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

北星学園大学社会福祉学部非常勤講師、2007

(2) 行政

日本学術振興会、科学技術政策、学術システムセンター主任研究員、2007.4～2010.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学術会議、連携会員、2006.10～

一般社団法人社会調査協会、理事、2008.12～

1. 略歴

1977年3月	京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得退学
1977年4月	京都大学大学院文学研究科社会学専攻研修員
1978年4月～1979年3月	日本学術振興会奨励研究員
1979年4月～1982年3月	平安女学院短期大学専任講師
1982年4月～1989年3月	平安女学院短期大学助教授
1989年4月～1992年9月	京都精華大学人文学部助教授
1992年10月～1993年3月	京都精華大学人文学部教授
1993年4月～1995年3月	東京大学文学部助教授
1995年4月～2011年3月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

この間、ノースウェスタン大学人類学部客員研究員、シカゴ大学人類学部客員研究員、ボン大学日本学研究科客員教授、フランス社会科学高等研究員人間学研究所客員研究員などを務める。

また、京都大学経済学部、富山大学人文学部非常勤講師のほか、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所客員研究員、国立民族学博物館客員研究員、国立歴史民俗博物館客員研究員、国立国際日本文化研究センター客員助教授などを歴任。

2. 主な研究活動

a 専門分野

女性学、ジェンダー研究、フェミニズム理論、福祉・介護

b 研究課題

- (1) フェミニズム・ジェンダー理論
- (2) 高齢社会と介護
- (3) ナショナリズムとジェンダー

c 主要業績

(1) 著書

単著、上野千鶴子、『女ざらい』、紀伊国屋書店、2010.10

共著、長尾真・遠藤薫・吉見俊哉編、『書物と映像の未来』、岩波書店、2010.11

共著、上野千鶴子・香山リカ・嶋根克己、『生きづらさの時代』、専修大学出版局、2010.11

(2) 書評

タイモン・スクリーチ、『春画 片手で読む江戸の絵』、講談社、上野千鶴子、『文庫』、2010.7

1. 略歴

- 1981年 3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
- 1982年 4月 城西大学経済学部専任講師 (社会学)
- 1985年 4月 城西大学経済学部助教授 (社会学)
- 1993年 6月 博士 (社会学) 取得 (東京大学)
- 1995年 4月 城西大学経済学部教授 (社会学)
- 1996年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (社会学)
- 1998年 10月 オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ上級客員研究員 (～1999年 10月)
- 2003年 4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (社会学)

この間、エジンバラ大学ゲノム政策研究所 Distinguished Visiting Scholar も務める (2007.6)。

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

概要：以下の4つの領域を中心に研究をすすめている。

- (1) 科学技術の社会学におけるセクターモデルの地球環境問題、エネルギー問題への展開
- (2) 軍産学複合体の形成・展開過程の研究
- (3) 不確実性のもとでの社会的意思決定に関する理論社会学的研究
- (4) 知の失敗の研究の理論化

c 主要業績

- (1) 著書
松本三和夫 他、『年報 科学・技術・社会』第19巻、2010.6

3. 主な社会活動

- (1) 学会
国際、International Journal of Technoethics (IGI Global)、編集理事、2010～

1. 略歴

1984年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
社会保障研究所、中央大学を経て、1993年4月から東京大学助教授
現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動**a 専門分野**

福祉社会学、社会政策、比較福祉レジーム分析

b 研究課題

- (1) 社会政策および社会計画に関する理論的研究
- (2) 日本の地域社会計画に関する実証的研究
- (3) 諸外国の社会政策に関する研究
- (4) 社会保障をはじめとする社会政策に関する政策論的研究
- (5) 福祉国家と福祉社会に関する理論的実証的研究
- (6) 社会政策と社会意識に関する実証的研究

c 主要業績**(1) 著書**

共著、Takegawa Shogo、『Welfare Reform in East Asia』、Routledge、2011
単著、武川正吾、『《福利国家的社会学：全球化、个体化与社会政策》』、商务印书馆、2011.7
単著、武川正吾、『福祉社会 新版』、有斐閣、2011.10

(2) 論文

武川正吾、「福祉社会学の想像力」、『福祉社会学研究』、2011.6
武川正吾、「ベーシック・インカムの理論と実践」、『大原社会問題研究所雑誌』、634、2011.8
武川正吾、「社会政策学者としての福武直」、『社会政策』、2011.10

3. 主な社会活動**(1) 他機関での講義等**

中央大学文学部兼任講師（2010年度）

(2) 学会

福祉社会学会会長、社会政策学会幹事、日本地域福祉学会理事

(3) 行政

大学設置・学校法人審議会専門委員、国家公務員試験専門委員

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

大学評価・学位授与機構専門委員、国立社会保障・人口問題研究所評価委員

1. 略歴

- 1981年 3月 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
- 1983年 3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
- 1983年 4月 東京大学教養学部助手
- 1986年 4月 法政大学社会学部専任講師
- 1988年 4月 法政大学社会学部助教授
- 1994年 10月 東京大学文学部助教授（東京大学大学院社会学研究科担当）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文学部担当）
- 2000年 4月 同研究科文化資源学専攻助教授（形態資料学専門分野）併任
- 2005年 9月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文学部担当）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化の社会学、社会意識論、社会学方法論、社会調査史

b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。一つの基礎資料としての柳田国男を中心とした全集の編纂。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践と方法意識の展開について。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、など。

c 主要業績

(1) 著書

編著、佐藤健二・山田一成、『社会調査論』、八千代出版、2010.9
単著、佐藤健二『社会調査史のリテラシー』、新曜社、2011.1、604p.

(2) 論文

単著、佐藤健二「民間学者としての喜多川周之」『喜多川周之コレクション』東京都江戸東京博物館調査報告書第22集、東京都江戸東京博物館、2010.3：pp.123-148.

共著、佐藤健二・行吉正一「喜多川周之著作目録」『喜多川周之コレクション』東京都江戸東京博物館調査報告書第22集、東京都江戸東京博物館、2010.3：pp.162-168.

単著、佐藤健二「近代日本民俗学史の構築について／覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』第165集、国立歴史民俗博物館、2011.3：pp.13-45.

Kenji Sato, "Rumors Following the Kantô Earthquake of the Taishô Era," in *Bulletin of Death and Life Studies*, Vol.7, 2011：pp.54-116.

単著、佐藤健二「文化資源学の立場からの提言」、石川徹也・根本彰・吉見俊哉編『つながる図書館・博物館・文書館』東京大学出版会、2011.5：233-249.

単著、佐藤健二「喜多川周之コレクションの魅力」『喜多川周之コレクション 第2集』東京都江戸東京博物館調査報告書第26集、東京都江戸東京博物館、2012.3：pp.37-55.

(3) 予稿・会議録

単著、佐藤健二「総合的コメント：“非常の死”と“家族／社会／国家”と“想像の場”」、池澤優・アンヌ=ブッシィ編『非業の死の記憶』、東京大学出版会、2010.3：pp.367-375

Kenji Sato, "Comments on the Papers Delivered by Takeshi Hara and Khaled Azab," in *Commemorating the Dead in a Time of Global Crisis: Egypt and Japan in 2011*, edited by Tetsuya Ohtoshi and Susumu Shimazono, Global COE Program DALs: pp.84-89

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

静岡県立大学非常勤講師（2010年度～2011年度）、常呂町・北見市（2011年度）での講演

(2) 学会

日本社会学会、社会調査協会

教授 白波瀬 佐和子 SHIRAHASE, Sawako

1. 略歴

1997年 オックスフォード大学 University of Oxford (社会学) ・社会学博士
1997年 4月 国立社会保障・人口問題研究所室長
2003年 4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授
2006年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、計量分析

b 研究課題

主な研究課題として次の4つに取り組んでいる。

- (1) 少子高齢社会の不平等構造
- (2) 社会的不平等に関する国際比較研究
- (3) 世代・ジェンダー格差の実証分析
- (4) 家族変動と社会保障制度

c 主要業績

(1) 著書

単著、白波瀬佐和子、『生き方の不平等—お互いさまの社会に向けて』、岩波書店、2010.5

編著、白波瀬佐和子、『Demographic Change and Inequality in Japan』、Trans Pacific Press、2011.12

(2) 論文

白波瀬佐和子、"Japan as a Stratified Society: With a Focus on Class Identification" *Social Science Japan Journal*, Volume 13, number1, Summer 2010, pp. 31-52, 2010.8

白波瀬佐和子、「少子化社会の階層構造—階層結合としての結婚に着目して」、『現代日本の階層社会2 階層と移動の構造』石田浩・近藤博之・中尾啓子編著、317-333頁、2011.9

白波瀬佐和子、"Income Inequality in a Rapidly Ageing Society, Japan." in *Imploding Populations in Japan and Germany: A Comparison*, edited by Florian Coulmas and Ralph Lutzeler, pp. 115-139, 2011.10

(3) 学会発表

国際、白波瀬佐和子、"Income Inequality in a Society with Low Fertility: Deterioration in Familialism Welfare States," Symposium: Poverty, Inequality, and Social Policies in Korea and Japan from Gender Perspective, Seoul National University, 2010.3.6

国際、白波瀬佐和子、"Income Inequality and Mother's Work in Japan with Cross-national Comparisons," International Sociological Association World Congress, Gothenburg, Sweden, 2010.7.14

国際、白波瀬佐和子、"Poverty among Families with Children in Japan with Cross-national Perspective," International sociological Association World Congress, research committee 19, Gothenburg, sweden, 2010.7.16

国際、白波瀬佐和子、"Does mom make a difference in child economic well-being?" Center for Research on Inequalities and Life course Workshop, the Department of Sociology, Yale University, U.S.A., 2010.10.8

国際、白波瀬佐和子、"Social Inequalities in Contemporary Japan: From a Mass-Middle-Class Society to a Class-divided Society," Donald Keene Center of Japanese Culture, Lecture, Comunbia University, New York, U.S.A., 2011.2.3

国内、白波瀬佐和子、「人口高齢化と世帯変動からみる経済格差 ―社会的公正と承認への道筋」、東北社会学会、宮城学院女子大学、2011.7.17

国内、白波瀬佐和子、「高齢層の経済格差 ―世帯構造と資産に着目して―」、日本社会学会、関西大学、2011.8.18

国際、白波瀬佐和子、「Economic Hardship Faced by Widows in Japan,」 International Sociological Association, RC19 meeting、Soeul National University、2011.8.26

国内、白波瀬佐和子、「新政権の熱狂と迷走 ―少子化対策と福祉政策の混同―」、日本社会学会 大会シンポジウム、関西大学、2011.9.18

(4) 受賞

国内、白波瀬佐和子、生協総研賞「研究賞」、生協総合研究所、Consumer Co-operative Institute of Japan、2011.12.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本社会学会・国際社会学会組織委員 副委員長

(2) 行政

厚生労働省・社会保障審議会委員 2011年1月～

東日本大震災復興構想会議検討部会委員 2011年4月～

文部科学省・中央審議会臨時委員 2011年6月～

内閣府・統計委員会委員 2011年10月～

准教授 **赤川 学**

AKAGAWA, Manabu

1. 略歴

- 1990年3月 東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
- 1995年 東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
- 1995年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
- 1995年 専修大学文学部社会学科非常勤講師
- 1996年 富山大学人文学部非常勤講師
- 1998年 徳島大学総合科学部非常勤講師
- 1999年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
- 1999年 信州大学人文学部人間情報学科非常勤講師
- 2000年 筑波大学第一学群社会学類非常勤講師
- 2001年 岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
- 2002年 信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授
- 2005年 名古屋大学大学院国際多元文化専攻ジェンダー論講座非常勤講師
- 2006年 東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学

歴史社会学

b 研究課題

セクシュアリティの歴史社会学

少子化社会論

人口減少社会論

社会問題の構築主義アプローチ

c 主要業績

(1) 論文

「言説分析は、社会調査の手法たりえるか」、『社会と調査』、No.3、52-58 頁、2009.9

「構築主義を再構築する」米村千代・数土直紀編『社会学を問う』（勁草書房）95-109 頁、2012.3

(2) マスコミ

新聞、「異見新言」、朝日新聞、2008.5.10

(3) 研究報告書

「人口減少時代の社会学をめざして」、1-52 頁、2009.3

「地域ブランドの手法による地域社会の活性化」、59-62, 293-294 頁、2009.3

(4) 会議主催（チェア他）

「関東社会学会テーマ部会『人口減少時代の地域づくり』」、実行委員、首都大学東京、2008.6.21～2008.6.22

「UT-SNU Sociology Joint Forum2008」、主催、東京大学文学部、2008.11.20～2008.11.21

「関東社会学会大会」、実行委員、テーマ部会 A、お茶の水女子大学、2009.6.21

(5) 教科書

『社会福祉学学習双書 2009 社会学』、編集委員、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、2009

(6) 学会発表

Manabu Akagawa, "Can a Foucauldian analysis on sexualities be applied to non-Western societies?"
International Sociological Association WORLD CONGRESS, RC16-18, 2010.07.16, University of
Gothenburg.

赤川学「『造化機論』の翻訳者・千葉繁とは誰か」歴史社会学フォーラム自由報告、2012.2.13、華東師範大学、中
華人民共和国。

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

熊本大学文学部非常勤講師、2008.12

明治大学情報コミュニケーション学部、「情報コミュニケーション概論」非常勤講師、2011-2012

(2) 学会

国内、日本社会学理論学会、理事（事務局長）、2011.4～2012.4

国内、日本社会学会、編集委員会専門委員、2009～2011

准教授

出口 剛司

DEGUCHI, Takeshi

1. 略歴

1993 年 3 月 一橋大学社会学部卒業

1994 年 4 月 東京大学大学院 社会学研究科社会学専攻 修士課程入学

1996 年 3 月 同 人文社会系研究科社会文化研究専攻 修士課程修了

1996 年 4 月 同 博士課程進学

2001 年 3 月 同 博士課程単位取得退学

2001 年 4 月 博士（社会学）学位取得（東京大学）

2001 年 4 月-2007 年 3 月 立命館大学産業社会学部助教授

2005 年 9 月-2006 年 9 月 フランクフルト大学社会研究所客員研究員

2007 年 4 月-2008 年 3 月 立命館大学産業社会学部准教授

2008 年 4 月 明治大学情報コミュニケーション学部准教授

2011 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

理論社会学 社会学史研究

b 研究課題

- (1) 社会学における理論と実践問題
- (2) フランクフルト学派の理論史

c 主要業績

(1) 論文

出口剛司、「希望はいかにして生成したか?」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、25(2012)、29-38 頁、2012.3

(2) 書評

藤田哲司、『権威の社会現象学』、東信堂、出口剛司、『現代社会学理論研究』、第6号、114-118 頁、2012.3

(3) 会議主催 (チェア他)

国内、「日本社会学会大会テーマセッション」、チェア、実践からの社会学理論の生成と変容、関西大学、2011.9.18～2012.9.18

(4) 教科書

『コミュニケーション・スタディーズ入門』、出口剛司、執筆、大修館書店、2011
『よくわかる社会学史』、出口剛司、執筆、ミネルヴァ書房、2011

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「社会的人間論」、2011.4～2012.3

非常勤講師、明治大学大学院情報コミュニケーション研究科、「集約型外国語文献講読(ドイツ語)」、2011.4～2012.3

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「社会心理学」、2011.4～2012.3

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「問題分析ゼミ」、2011.4～2012.3

非常勤講師、明治大学情報コミュニケーション学部、「問題解決ゼミ」、2011.4～2012.3

非常勤講師、立教大学社会学部、「社会学史」、2011.4～2012.3

非常勤講師、大阪大学外国語学部、「異文化社会論Ⅲa」、2011.4～2011.12

非常勤講師、大阪大学外国語学部、「異文化社会論Ⅲb」、2012.1～2012.4

(2) 学会

国内、日本社会学理論学会、理事(研究委員長)、2011.4～2012.4

国内、日本社会学会、編集委員会専門委員、2011.4～2012.4

国内、日本社会学史学会、一般会員、2011.4～2012.3

国内、関東社会学会、一般会員、2011.4～2012.3

国内、日本倫理学会、一般会員、2011.4～2012.4

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター、運営委員(学外委員)、2011.4～2012.3

26 社会心理学

教授 山口 勸 YAMAGUCHI, Susumu

1. 略歴

1974年3月 東京大学文学部第四類(心理学専修課程)卒業(文学士)
1976年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程心理学専門課程 修了(文学修士)
1980年6月 同 博士課程心理学専門課程 修了退学
1980年7月 同 文学部社会心理学研究室助手 ~'82年3月
1983年4月 学習院大学文学部心理学科助手 ~'84年3月
1984年4月 米国オハイオ州立大学大学院留学 ~'84年12月
1985年2月 放送大学客員助教授 ~'85年3月
1985年4月 同 教養学部助教授 ~'87年9月
1987年10月 東京大学文学部助教授(社会心理学)
1991年9月 博士(社会学)学位取得(東京大学)
1994年6月 東京大学文学部教授(社会心理学)
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科教授(社会心理学)~現在
1995年7月 米国ハワイ大学客員教授 ~'95年12月
2000年8月 米国ミシガン大学客員教授 ~'00年12月
米国ハワイ大学、グローバルイノベーション研究センター(affiliate faculty)~現在

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

集団主義的傾向の比較文化的研究 集団主義的傾向は、日本でだけ見られるものではない。さらに、集団主義的な文化のもとでも、個人差がみられる。現在は集団主義的傾向と、集団として環境をコントロールしようとする傾向との関連を研究している。

個人の集団内行動 個人の集団内行動は、集団から独立している場合の行動と、多くの場合異なっている。また、他者の行動を観察する場合でも、その行動が集団の影響下で行われた場合と、そうでないときとは、異なった判断がなされることが多い。こうした点について、実験的研究を行っている。

甘えに関する研究 日本人に特有な心理的傾向と考えられている「甘え」については、実証的な研究が少ない。そこで、この問題について日本でのデータ収集と結果の分析を終えたところである。これから、日本人の甘えと同様の現象が、他のアジア文化や西欧の文化でも見られるかどうかを問題とする予定である。

自尊心に関する実験的研究 近年、日本人の自尊心は欧米人のそれと比較して低いことが主張されている。しかしながら、日本人には謙遜をするという傾向があることを忘れてはならない。したがって、実際には高い自尊心を表明しないのか、それとも本当に自己評価が低いのか、見きわめる必要がある。この点について、実験的な検討を比較文化的に行っている。

c 主要業績

(1) 著書

監修、山口 勸(監修) 森尾博昭(編著)『対人関係の心理学 -社会心理学でのぞく心の仕組み- (ぐっと身近に人がわかる)』、技術評論社、2011

(2) 論文

Lin, C., & Yamaguchi, S. 「Effects of face experience on emotions and self-esteem in Japanese culture」, 『European Journal of Social Psychology』, Vol 41(4), 446-455, 2011.

Gelfand, M. J., Raver, J. L., Nishii L., Leslie, L. M., Lun J., Lim B C., Duan L., Almaliaich, A., Ang, S., Arnadottir, J., Aycan, Z., Boehnke, K., Boski, P., Cabecinhas, R., Chan, D., Chhokar, J., D'Amato, A., Ferrer, M., Fischlmayr, I. C., Fischer, R., Fulop, M., Georgas, J., Kashima, E. S., Kashima, Y., Kim, K., Lempereur, A., Marquez, P., Othman, R., Overlaet, B., Panagiotopoulou, P., Peltzer, K., Perez-Florizno, L. R., Ponomarenko, L., Realo, A., Schei, V., Schmitt, M., Smith P B., Soomro, N., Szabo, E., Taveesin, N., Toyama, M., Van de

Vliert, E., Vohra, N., Ward, C., & Yamaguchi, S. 「Differences between tight and loose cultures: A 33-nation study」, 『Science』, Vol 332(6033), 1100-1104, 2011

Lin, C., & Yamaguchi, S. 「Under what conditions do people feel face-loss? Effects of the presence of others and social roles on the perception of losing face in Japanese culture」, 『Journal of Cross-Cultural Psychology』, Vol 42(1), 120-124.

Tafarodi, R. W., Shaughnessy, S. C., Yamaguchi, S. 「The reporting of self-esteem in Japan and Canada」, 『Journal of Cross-Cultural Psychology』, Vol 42(1), 155-164.

(3) 予稿・会議録

国際、Yamaguchi, S. 「The role of modesty values in the Japanese expression of self-esteem」 Invited talk at the 2010 Jacobs Foundation Conference The role of values and religion in youth development: A culture-informed perspective.

Schloss Marbach, Germany. 2010.4.29

(4) 学会発表 (主要なもの)

国際、Yamaguchi, S., Morio, H., Cai, H., Xu, Y., Yagi, Y., Lin, C., Buchholz, C. 「Further evidence for the universal need for high self-esteem」 The 9th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Kunming, China. 2011.7.29

国際、Yamaguchi, S., & Morio, H. 「Further Evidence for the Functional Equivalence of Self-Esteem across Cultures」 The Regional Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Istanbul, Turkey. 2011.7.3.

国際、Yamaguchi, S., Morio, H., Lin, C., Cai, H., Xu, Y., Yagi, Y. 「Expression of modest self-esteem appears adaptive both in East Asia and the U.S.」 The 20th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Melbourne, Australia. 2010.7.9.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国際、Sapienza University of Rome、特別講演、2011

国際、University of Milan-Bicocca、特別講演、2011

教授 池田 謙一

IKEDA, Ken'ichi

<http://socpsy.Lu-tokyo.ac.jp/ikeda/>

1. 略歴

1978年 3月 東京大学文学部社会心理学専修課程卒業 文学士
1980年 3月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程修士課程修了 社会学修士
1982年 3月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程博士課程中途退学
1982年 4月 東京大学新聞研究所助手
1987年 4月 明治学院大学法学部専任講師
1990年 4月 明治学院大学法学部助教授 (政治学科 [政治社会学・情報学])
1992年 4月 東京大学文学部助教授 (社会心理学)
1995年 3月 博士 (社会心理学)
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (大学院大学化に伴う)
2000年 8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
現在にいたる
1995年 7-9月 ミシガン大学政治研究センター客員研究員 (文部省短期在外研究)
1996年 7-8月, 1998年 11月 ニュージーランド・ビクトリア大学心理学科客員研究員
1997年 8月-1998年 5月 インディアナ大学高等研究所客員研究員
2003年 8月-9月 トロント大学都市・コミュニティ研究センター・客員研究員
2007年 8-9月 トロント大学社会学科客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

概要

- 政治社会心理学の再構成 : 実証研究の主力は、政治社会心理学に認知科学的なアプローチを展開するところにある。世論調査、投票行動調査の分析をこの観点から行うとともに、投票行動・世論過程の理論的再構成をめざしている。
- コミュニケーション行動の研究 : マスメディアやインターネット等、高度情報システム諸領域におけるコミュニケーション行動の生成・変容を検討している。
- 社会のリアリティの社会心理学的研究 : 上記諸研究に基づきつつ「認知社会心理学」の理論化の試みを継続している。特にわれわれの社会のリアリティを構成する諸力の社会心理学的な分析に力点を置いている。
- データ・サイエンス : 以上の実証研究は調査データの収集と密接に結びついている。これに関わる中で、国際・国内の共同研究に多く関わり、実施した調査データの公開作業を活発に行っている。

c 主要業績

(1) 著書

- 共著、池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子、『社会心理学』、有斐閣、2010
- 編著、Wolf, Michael R., Morales, Laura and Ikeda, Ken'ichi, 『Political Discussion in Modern Democracies: A comparative perspective』、Routledge、2010 (うち4章を執筆)
- 編著、池田謙一、『クチコミとネットワークの社会心理 : 消費と普及のサービスイノベーション研究』、東京大学出版会、2010.2
- 共著、Ikeda, Ken'ichi & Richey, Sean, 『Social Networks and Japanese Democracy: The Beneficial Impact of Interpersonal Communication in East Asia』、Routledge、2011.7
- 編著、Amrita Daniere and Hy Van Luong、『Amrita Daniere and Hy Van Luong (Eds.) The Dynamics of Social Capital and Civic Engagement in Asia: Vibrant Societies』、Routledge、2012.2 (うち1章を執筆)

(2) 論文

- 池田謙一、「行政に対する制度信頼の構造」、『年報政治学』、2010-I、11-30頁、2010
- 池田謙一、「政治選択と消費選択の類似性」、『都市問題』、2010.9、8-12頁、2010
- 高木大資・辻竜平・池田謙一、「地域コミュニティによる犯罪抑制 : 地域内の社会関係資本および協力行動に焦点を当てて」、『社会心理学研究』、26、36-45頁、2010
- Ikeda, Ken'ichi & Boase, Jeffrey、「Multiple discussion networks and their consequence for political participation」、『Communication Research』、38、pp.660-683、2011
- 高木大資・池田謙一・針原素子・小林哲郎、「近隣の範囲による社会関係資本の犯罪抑制効果の変動 : GIS による住民間の物理的距離を用いた分析」、『GIS ー理論と応用』、19、13-24頁、2011
- Boase, Jeffrey & Ikeda, Ken'ichi、「Core Discussion Networks in Japan and America」、『Human Communication Research』、38、pp.95-119、2012

(3) 口頭発表等

- 国際、Ken'ichi Ikeda (2012) 「A latitude theory of political party support and meaningful choice: Analyses from Japanese elections from 1996 to 2010」. AES Symposium at Keio University, February 5, 2012.
- 国内、池田謙一(2012) 「ソーシャルネットワーク時代のコミュニケーションと消費者行動を考える」、吉田秀雄記念事業財団事業委託研究プロジェクト研究会 第10回、2012.02.13.
- 国際、Daichi Kimura, Tomohisa Gotoh, & Ken'ichi Ikeda (2011) 「Eliciting Considerable Requirements with Word and Customer Graphs」. COMPSAC 2011 – The Computed World: Software Beyond the Digital Society (IEEE Computer Software and Application Conference) held in July 18-22, 2011 at Munich, Germany (Proc. 35th IEEE Annual Computer Software and Applications Conference (COMPSAC2011), pp. 476-485, July 2011).
- 国際、Ken'ichi Ikeda(2011) 「Political discussion in daily life, social network environment and electoral outcomes」. International Conference on Comparative Electoral Systems held at Instituto Federal Electoral in Mexico City .June 13-14, 2011.
- 国内、池田謙一(2011) 「普及過程という社会変容のシミュレーションを試みる」、日本学術会議社会学委員会社会理論分科会・公開シンポジウム発表。日本学術会議大会議場。2011.6.4.
- 国内、池田謙一(2011) 「社会関係資本(social capital)と社会集団・ソーシャルネットワーク・信頼」。日本学術会議土木建築委員会社会資本分科会。2011.6.24.

- 国内、池田謙一 (2011). 「消費の公共性意識の源泉を探る：世界価値観調査 2010 日本調査に基づく探索的検討」. 日本社会心理学会第 5 2 回大会研究発表. 名古屋大学. 2011 年 9 月 19 日.
- 国内、池田謙一 (2011). 「ワークショップ指定討論. 市民参加による環境計画の合意形成：多元的価値を反映した合意形成は可能か?」. 日本社会心理学会第 5 2 回大会ワークショップ. 名古屋大学. 2011 年 9 月 19 日.
- 国際、Ikeda, Ken'ichi (2011). 「A New Approach to Diffusion of Innovation Study Using Snowball Sampling Survey and Multi-Agent Simulation: Development of Social Network Research in Japan under the Influence of Paul Felix Lazarsfeld」. in the Symposium "Paul Felix Lazarsfeld ? His Methodological Inspirations and Networking Activities in the Field of Social Research", September 25-27, 2011, Prague, Czech Republic.
- 国内、池田謙一 (2011). 「『アジア的価値』と政治参加の国際比較：アジアンバロメータ第 2 波調査データをもとに」. 2011 年度日本政治学会大会分科会 D 3 「マルチ・レベル・モデリングの政治学的応用」. 岡山大学. 2011 年 10 月 9 日.
- 国内、池田謙一 (2011). 「指定討論」. 2011 年度日本政治学会大会分科会 B 1 「投票参加研究におけるマルチメソッド・アプローチ」. 岡山大学. 2011 年 10 月 8 日.
- 国内、池田謙一 (2010) 「政権交代と幻滅の社会心理学：2009 年衆議院選挙と半年後の変容」、日本社会心理学会 2010 年度大会発表論文集.
- 国際、Ikeda, Ken'ichi (2010) 「Power of Network Social Capital on Personal and Collective Outcomes: Japanese case」. Paper prepared for EASS 2010 Conference and Drafting Meeting in May 20-22, 2010 at the Survey Research Center, Sungkyunkwan University, Seoul, Korea.
- 国内、池田謙一 (2010) 「制度信頼、ネットワーク、2009 年の政権交代」、日本政治学会 2010 年度大会発表論文.

(4) 啓蒙

- 池田謙一、「研究室へようこそ」、『宣伝会議』、2010.5.15、132-133 頁、2010.5
- 池田謙一、「追悼 世論研究者エリザベス・ノエル＝ノイマン先生」、『日本世論調査協会報』、106、31-34 頁、2010.12
- 池田謙一、「社会心理学的察知力」、『書齋の窓』、2011.3、43-47 頁、2011.3
- 池田謙一、「社会心理学の守備範囲」、『心理学を学ぼう』、26-29 頁、2011.10
- 池田謙一、「普及過程という社会変容のシミュレーションを試みる」、『学術の動向』、2012.2、26-29 頁、2012.2

(5) 研究報告書

- 稲増一憲・池田謙一、「バイコットと社会参加の社会心理学的研究：JGSS2008 データを用いた検討」、日本版総合社会調査共同研究拠点研究論文集、10、73-85 頁、2010.3
- 平野浩・小林良彰・池田謙一・山田真裕、「特別推進研究：変動期における投票行動の全国的・時系列的調査研究：2010 年政治意識調査コードブック」、2010.3
- 平野浩・小林良彰・池田謙一・山田真裕、「特別推進研究：変動期における投票行動の全国的・時系列的調査研究：2010 年政治意識調査原資料」、2010.3
- 池田謙一、「行政に対する制度信頼、行政の信頼性確保、向上方策に関する調査研究報告書（平成 21 年度）、17-34 頁、2010.3
- 平野浩・小林良彰・池田謙一・山田真裕、「特別推進研究：変動期における投票行動の全国的・時系列的調査研究：2010 年参議院選挙前後調査コードブック」、2011.3
- 平野浩・小林良彰・池田謙一・山田真裕、「特別推進研究：変動期における投票行動の全国的・時系列的調査研究：2010 年参議院選挙事前調査原資料」、2011.3
- 平野浩・小林良彰・池田謙一・山田真裕、「特別推進研究：変動期における投票行動の全国的・時系列的調査研究：平成 2 2 年度研究成果論文集」、2011.3
- 宮田加久子・池田謙一、「社会関係資本が政治参加に及ぼす効果：ジェンダーの視点からの因果分析」、明治学院大学社会学・社会福祉学研究、136、1-25 頁、2011.3

(6) 受賞

- 国内、稲増一憲・池田謙一、平成 2 2 年度日本社会心理学会奨励論文賞、日本社会心理学会、2010.9.15
- 国内、高木大資・辻竜平・池田謙一、平成 2 3 年度日本社会心理学会奨励論文賞、日本社会心理学会、2011.9.17

(7) 教科書

- 『社会心理学』、池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子、執筆、有斐閣、2010
- 『国語（小学 5 年教科書）』、池田謙一、執筆、光村図書、2011

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本社会心理学会常任理事（広報委員会担当）2011－2012年度

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国内、大阪商業大学 JGSS 研究センター 嘱託研究員 2008年8月－2013年3月

教授 唐沢 かおり KARASAWA, Kaori

1. 略歴

1992年 University of California, Los Angeles Ph.D
1992年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程
1992年4月 名古屋明德短期大学講師
1995年4月 日本福祉大学情報社会科学部助教授
1999年6月 名古屋大学情報文化学部助教授
2001年4月 名古屋大学大学院環境学研究科助教授
2006年10月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

- 1) Mind reading and moral agency
- 2) Automaticity and self-regulation
- 3) Methodology and Science communication

c 主要業績

(1) 著書

唐沢かおり、『現代の認知心理学6：援助場面での社会的認知』、2010

唐沢かおり、『個人の中の社会：動機・意図・特性の推論』、2010

辞書・辞典・事典、海保博之他、『感情と思考の科学事典』：「基本情動理論」，「感情の認知的評価理論」，「感情の進化」、2010

唐沢かおり、『キーワード社会心理学：対人魅力、対人関係』、2011

(2) 論文

豊沢純子・唐沢かおり・福和伸夫、「小学生に対する防災教育が保護者の防災行動に及ぼす効果—子どもの感情や認知の変化に注目して」、『教育心理学研究』、2010

竹橋洋毅・唐沢かおり、「コミュニケーション、集団同一視、共有的認知の再帰的な強化過程の解明」、『実験社会心理学研究』、2010

大高瑞都・唐沢かおり、「所得による生活保障の責任帰属バイアスと社会保障政策に対する態度の違い」、『実験社会心理学研究』、2010

橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年、「大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル：準組織的集団の観点からの検討」、『実験社会心理学研究』、2010

唐沢かおり・大高瑞都・竹内真純、「中高齢者の失業に対する政策への態度規定要因：原因帰属からのアプローチ」、『社会心理学研究』、2010

唐沢かおり・月元敬、「情報処理スタイルが不思議現象の信じやすさに及ぼす影響」、『人間環境学研究』、2010

- 月元敬・橋本剛明・唐沢かおり、「間接的連想関係による虚記憶——職業ジェンダーを用いた検討」、『心理学研究』、2011
- 豊純子・唐沢かおり・戸田山和久、「大学初年時学生の分野別の科学のイメージ：天文学イメージの特異性」、『科学技術社会論研究』、2011
- 渡辺匠・唐沢かおり、「潜在的な自己評価と内集団評価の相互関係の検討」、『人間環境学研究』、2011
- 渡辺匠・唐沢かおり・大高 瑞郁、「被介護者における家族介護と公的介護に対する選好度の規定要因および関係性について」、『実験社会心理学研究』、2011
- 大高瑞郁・唐沢かおり、「父親の政治的会話と子の内的政治的有効性感覚の関連」、『山梨学院大学法学論集』、2011
- 尾崎由佳・唐沢かおり、「自己に対する評価と接近回避志向の関係性：制御焦点理論にもとづく検討」、『心理学研究』、82、450-458 頁、2011.12

(3) 学会発表

国際学会

- Takaaki Hashimoto & Kaori Karasawa, 「Function of apologies for the victims and the third-parties: Empathy, responsibility, attribution, and their antecedents. 」, 27th International Congress of Applied Psychology, 2010.7.13
- Yuko Shiraiwa & Kaori Karasawa, 「The effect of “Victim Participants” expression of emotions on the judgments of mock jurors 」, 27th International Congress of Applied Psychology, 2010.7.15
- Takumi Watanabe & Kaori Karasawa, 「Terror management and implicit group identification: The effects of mortality salience on overlapping mental representations of self and ingroup. 」, 27th International Congress of Applied Psychology, 2010.7.15
- Yuko Shiraiwa & Kaori Karasawa, 「Development of the Educational Game for Victimology (2): Validation」, 国際犯罪学会第 16 回世界大会、2011.8.7
- Takaaki Hashimoto & Kaori Karasawa, 「Effects of account-making on punitive motivations in an organizational context 」, 国際犯罪学会第 16 回世界大会、2011.8.7

国内学会シンポジウム・ワークショップ

- 唐沢かおり・戸田山和久・山口裕幸・出口康夫、「社会心理学方法論の再検討5」、応用哲学会、2010.4.25
- 西村太志・黒川光流・森尾博昭・谷口淳一・唐沢かおり、「我々は、グループ・ダイナミクスや社会心理学をどのように教えていけばよいのか」、日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会、2010.8.28
- 吉田寿夫・村井潤一郎・唐沢かおり、「心理学における統計教育のあり方」、日本社会心理学会第 51 回大会、2010.9.17
- 戸田山和久・唐沢かおり・山口裕幸・浦光博、「社会心理学方法論の再検討パート 6—さらに面白い社会心理学のアプローチと方法論を求めて—」、日本社会心理学会第 51 回大会、2010.9.18
- 白岩祐子・荒井崇史・上市秀雄・水田恵三・唐沢かおり、「犯罪心理学の研究対象としての市民：犯罪研究の新たな展開を目指して」、日本心理学会第 74 回大会、2010.9.21
- 唐沢かおり、「集合知への期待と可能性：社会心理学の立場から」、第 2 回集合知シンポジウム、2011.1.27
- 山口裕幸・唐沢かおり・戸田山和久・出口康夫・一ノ瀬正樹、「「集団錯誤の呪縛」からの解放と、その後。—社会心理学方法論の再検討 (7) —」、応用哲学会第 4 回大会、2011.9.24
- 萬屋博喜・唐沢かおり・信原幸弘、「実験哲学と心理学のはざま」、哲学会第 50 回研究発表大会、2011.12.3

国内学会個人発表

- 大高瑞郁・唐沢かおり、「視点取得と援助行動の関連：親子関係を対象とした検討」、日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会、2010.8.28
- Takumi WATANABE & Kaori KARASAWA, 「Implicit Group Identification in the Face of Mortality Salience」, 日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会、2010.8.28
- 橋本剛明・唐沢かおり、「侵害者の謝罪が被害者／傍観者の動機づけに与える影響」、日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会、2010.8.28
- 白岩祐子・唐沢かおり、「強姦神話と被害者に対するネガティブ判断との関係」、日本グループ・ダイナミクス学会第 57 回大会、2010.8.28
- 白岩祐子・唐沢かおり・橋本 剛明、「機会と結果における格差の帰属 1：収入格差を正当化する要因としての機会平等性認知」、日本社会心理学会第 51 回大会、2010.9.18

橋本剛明・唐沢かおり・白岩 祐子、「機会と結果における格差の帰属 2：機会の統制可能性認知と社会的階層認知の関連について」、日本社会心理学会第 51 回大会、2010.9.18

大高瑞都・唐沢かおり、「親の同一視と若者の非正規労働者に対する態度の関連」、日本社会心理学会第 51 回大会、2010.9.18

渡辺匠・唐沢かおり、「自己脅威状況におけるセルフアンカリングプロセスの検討」、日本社会心理学会第 51 回大会、2010.9.18

月元敬・橋本剛明・唐沢かおり、「間接的連想関係による虚記憶：職業ジェンダースtereオタイプを用いた検討」、日本心理学会第 74 回大会、2010.9.20

白岩祐子・唐沢かおり、「裁判員裁判における第三者効果の検討：「人々の判断は被害者感情に左右される」という認識と行動との関係について」、日本心理学会第 74 回大会、2010.9.22

荒川歩・白岩祐子・唐沢かおり、「被害者学教育ゲーム作成の試み」、法と心理学会第 11 回大会、2010.10.16

Takehiko Ito & Kaori Karasawa、「The Effect of the Out-Group Threat on Intergroup Emotion and Behavior」、日本グループ・ダイナミクス学会第 58 回大会、2011

渡辺匠・唐沢かおり、「共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的評価の検討」、日本グループ・ダイナミクス学会第 58 回大会、2011.8.24

橋本剛明・唐沢かおり、「社会的勢力感が謝罪への反応に与える影響—制裁の動機づけと情報への注意時間の 2 側面からの検討—」、日本心理学会第 75 回大会、2011.9.16

竹内真純・唐沢かおり、「高齢化の予期がエイジズムに与える効果」、日本社会心理学会第 52 回大会、2011.9.18

白岩祐子・荻原ゆかり・唐沢かおり、「人々の法的判断における第三者効果の影響：裁判と被害者イメージの観点から」、日本社会心理学会第 52 回大会、2011.9.18

伊藤健彦・唐沢かおり、「外集団脅威が差別感情・行動に与える影響」、日本社会心理学会第 52 回大会、2011.9.18

橋本剛明・唐沢かおり、「社会的勢力感が企業の積明にともなう責任判断に与える影響」、日本社会心理学会第 52 回大会、2011.9.18

池谷光司・唐沢かおり、「情報処理方略への気分の効果に状況因が与える影響」、日本社会心理学会第 52 回大会、2011.9.18

(4) 科学研究費等

文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、研究代表者、「組織の責任判断における統合的研究」、2010～

文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、研究代表者、「問題解決場面における社会心理学方法論拡張の可能性：個人焦点の方法論を越えて」、2010～

文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、分担者(代表者は東大外)、「宇宙についての疑問における研究者と市民の差異に関する国際比較研究」、2011～

文部科学省科学研究費補助金、唐沢かおり、分担者(代表者は東大外)、「科学画像の適切な使用に向けての基礎的・総合的研究」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、九州大学教育学部、「社会的心理学」、2010.12

特別講演、東洋大学、「対応推論と集団心」、2011.7

(2) 学会

国内、日本グループ・ダイナミクス学会、常任理事、2010.4～2011.3

国内、日本社会心理学会、常任理事、2011.4～

1. 略歴

- 1984年4月 東京大学文科Ⅲ類入学
- 1988年3月 東京大学文学部社会心理学専修課程卒業
- 1988年4月 株式会社 日本長期信用銀行 入行
- 1992年4月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻修士課程入学
- 1994年3月 同 修了(修士(社会心理学))
- 1994年4月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専攻博士課程進学
- 1997年3月 東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻博士課程単位取得退学
- 1998年4月 京都大学総合人間学部基礎科学科 助手(2000年3月迄)
- 1999年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 博士(社会心理学)取得
- 2000年4月 岡山大学文学部行動科学科 助教授
- 2001年4月 岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻 助教授(兼任)
- 2004年4月 横浜国立大学経営学部 助教授
- 2005年4月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 助教授
- 2007年4月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 准教授
- 2011年4月 横浜国立大学大学院国際社会科学研究科 教授
- 2011年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 研究課題

関係性の類型と拡張自己評価維持過程(2011-2014年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究C)

c 主要業績

(1) 著書

分担執筆、村本由紀子、「組織と個人のダイナミクス：組織行動論の系譜」(池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子『New Liberal Arts Selection 社会心理学』, 351-372頁)、有斐閣、2010.9

分担執筆、村本由紀子、「集合行動とマイクロ=マクロ的過程：群れをなす人々」(池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子『New Liberal Arts Selection 社会心理学』, 373-394頁)、有斐閣、2010.9

分担執筆、村本由紀子、「心の文化差：異文化間比較の視点」(池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子『New Liberal Arts Selection 社会心理学』, 395-416頁)、有斐閣、2010.9

分担執筆、村本由紀子、「心と文化の相互構成：文化を生きる、文化を創る」(池田謙一・唐沢穰・工藤恵理子・村本由紀子『New Liberal Arts Selection 社会心理学』, 417-437頁)、有斐閣、2010.9

分担執筆、村本由紀子・辻本昌弘、「文化的存在としての人間」(唐沢穰・村本由紀子(編)『展望 現代の社会心理学Ⅲ：個人と社会のダイナミクス』, 266-285頁)、誠信書房、2011.9(次項の書籍の一部)

編著、唐沢穰・村本由紀子、『展望 現代の社会心理学Ⅲ：個人と社会のダイナミクス』、誠信書房、2011.9

(2) 論文

Tae-Yeol Kim, Todd J. Weber, Kwok Leung, & Yukiko Muramoto, 「Perceived fairness of pay: Importance of task versus maintenance inputs in Japan, South Korea, and Hong Kong」、『Management and Organization Review』, 6, pp.31-54, 2010

(3) 学会発表

国際、Yukiko Muramoto & Hiroki Tsukahara, 「Extended self-evaluation maintenance in the context of achievement attribution」, 27th Congress of International Association of Cross-Cultural Psychology, Melbourne, Australia, 2010.7

国内、潘怡安・村本由紀子、「パッケージ化された個性：日本の雑誌記事が台湾の若者に与える印象」、日本社会心理学会第51回大会、広島大学、2010.9

国内、山田和樹・村本由紀子、「日本人における対応性バイアスと時間の影響」、日本社会心理学会第 51 回大会、広島大学、2010.9

国際、Yukiko Muramoto、「Effect of anticipated regret to choice among Japanese」、9th Conference of Asian Association of Social Psychology、昆明（中国）、2011.7

国内、村本由紀子、「答志島寝屋慣行の維持と変容」、日本心理学会第 75 回大会、日本大学、2011.9

国内、山田和樹・村本由紀子、「自己-他者間の心理的距離が原因帰属に及ぼす影響」、日本社会心理学会第 52 回大会、名古屋大学、2011.9

(4) 会議主催（チェア他）

国際、「9th Conference of Asian Association of Social Psychology」、チェア、Oral Session 31: Cross-Cultural Comparison 1、2011.7.28～2012.7.31

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、放送大学神奈川学習センター、「木を見る西洋人 森を見る東洋人」、2010.10～2012.3

非常勤講師、学習院大学文学部、「心理学特殊講義：社会と個人のダイナミクス」、2011.9～2012.3

セミナー講師、NTT データ経営研究所 応用脳科学アカデミー、「企業経営における『心と文化』：社会心理学からのアプローチ」、2012.2～2012.2

(2) 学会

国際、Asian Association of Social Psychology、Executive Committee member (Treasurer)、2010.1～

国内、日本グループ・ダイナミクス学会、学術雑誌編集委員、2011.4～

国内、日本社会心理学会、理事、大会運営委員、2011.4～

27 文化資源学

《文化経営学専門分野》

教授 木下 直之 KINOSHITA, Naoyuki

1. 略歴

- 1979年3月 東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
- 1981年3月 東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学
- 1981年4月 兵庫県立近代美術館学芸員
- 1995年4月 同美術館学芸課長に昇任
- 1997年4月 東京大学総合研究博物館助教授
- 2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年4月 国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学

b 研究課題

幕末・明治期の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方をも明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史的視点の導入を積極的に進めてきた。

c 主要業績

(1) 著書

著書、『股間若衆 男の裸は芸術か』、新潮社、2012

(2) 論文

「Kisaburo, Kuniyoshi and the “Living Doll”」『IMPRESSIONS』31、Japanese Art Society of America、2010年、100～113頁

「台湾戦争図再々考」『近代画説』20、明治美術学会、2011 23-43頁

3. 主な社会活動

(1) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

静岡県立美術館第三者評価委員、2006～

横浜美術館、アドバイザー、2008～

独立行政法人国立美術館、運営委員、2009.4～

東京都写真美術館、第三者評価委員、2010～

日本動物園水族館協会、広報戦略会議委員、2011～

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

30 次世代人文学開発センター《萌芽部門》参照

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi

07 美学芸術学 参照

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

- 1987年3月 早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
- 1987年4月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
- 1990年3月 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了（政治学）
- 1990年4月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
- 1993年5月 早稲田大学人間科学部助手（1996年3月まで）
- 2006年3月 早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
- 2008年4月 昭和音楽大学音楽学部助手
- 2000年4月 静岡文化芸術大学文化政策学部講師
- 2001年1月 博士（人間科学）
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（職名変更）

2. 主な研究活動

a 専門分野

文化資源学（文化政策学）

b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策のドラスティックな動きに対して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び2003年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設（美術館、文化ホール等）の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

他方、芸術を支える制度としての劇場についても関心を持っており、この数年はドイツの劇場のあり方をめぐる動向、それを取り巻く文化政策、環境について関心をもって研究している。とはいえ、そもそも「制度」そのものについて疑問をもっていることから、あるべき「制度」に固執しているわけではない。むしろ「制度」を超えた活動、とくにドイツの社会文化活動とそれを巡る政策に大なる関心を持っている。

c 主要業績

(1) 著書

共著書『アクセス公共学』（日本経済評論社、2010年）

共編著『公共劇場の10年—舞台芸術の公共性の現在と未来』（美学出版、2010年）

(2) 論文

小林真理、「地域に住まう—文化でつながるコミュニティの可能性」、『住宅』、3-10頁、2010.7

Mari Kobayashi、「The problems of cultural policy in Japan: An uncertain Future for Regional Theaters and Concert Halls」、『International Arts Management Concepts- Higher Education for the Market?』、2011.3

小林 真理、「自治体博物館の全体像—その法制度と直面する課題」、『都市問題』、2011.11

(3) 学会発表

国内、小林真理、「自治体文化行政における制度形成の課題－市民協働の方法と大学の媒介機能」、文化経済学会<日本>2010年研究大会、2010.7.3

(4) 研究報告書

東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究室・小金井市コミュニティ文化課、「小金井市芸術文化振興計画推進事業協同研究報告書 2009-2011」、2012.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

非常勤講師、早稲田大学「法学」「政治学英書講読」

(2) 学会

国内、日本文化政策学会理事

国内、文化経済学会<日本>理事

国内、日本アートマネジメント学会、一般会員、2010.4～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国際交流基金、事業プログラム外部評価委員、2010.4～

神奈川県立藤野芸術の家指定管理者外部評価委員会、委員、2010.6～

公益財団法人 武蔵簿文化事業団、評議員、2011.4～

日本学術振興会、特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員、2011.8～

准教授

中村 雄祐

NAKAMURA, Yusuke

29 言語動態学 参照

《 形態資料学専門分野 》

- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
30 次世代人文学開発センター《 萌芽部門 》参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照
- 教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji
25 社会学 参照
- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学《 文化経営学専門分野 》参照
- 准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学《 文化経営学専門分野 》参照

《 文字資料学文書学専門分野 》

- 教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
30 次世代人文学開発センター《 萌芽部門 》参照
- 教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照
- 教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo
18 フランス語フランス文学 参照
- 教授 **片山 英男** KATAYAMA, Hideo
17 西洋古典学 参照
- 教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学《 文化経営学専門分野 》参照
- 准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学《 文化経営学専門分野 》参照

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
29 言語動態学 参照

准教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照

《 文字資料学文献学専門分野 》

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo
30 次世代人文学開発センター 《 萌芽部門 》 参照

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi
07 美学芸術学 参照

教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo
18 フランス語フランス文学 参照

教授 **片山 英男** KATAYAMA, Hideo
17 西洋古典学 参照

教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki
27 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari
27 文化資源学 《 文化経営学専門分野 》 参照

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
29 言語動態学 参照

准教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya
11 中国語中国文学 参照

28 韓国朝鮮文化

教授 服部 民夫

HATTORI, Tamio

1. 略歴

- 1971年 同志社大学文学部社会学科社会学専攻 Faculty of Letters, Doshisha University 学士・経済学博士
- 1971年4月 アジア経済研究所主任研究員・課長
- 1991年4月 東京経済大学経営学部教授
- 1996年4月 同志社大学文学部教授
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2011年6月 東京大学大学院人文社会系研究科退職
- 2012年6月 東京大学名誉教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国を中心とする北東アジアの経済と社会

b 研究課題

- (1) 経済開発過程における社会変化、
- (2) 財閥の社会的分析、
- (3) 工業化の発展パターンと経済成長の特質

c 主要業績 (2006-2007年度)

(1) 著書

編著、服部民夫ほか、「日韓政治社会の比較分析」、慶応義塾大学出版会、2006
単著、「東アジア経済の発展と日本一組立型工業化と貿易関係」、東京大学出版会、2007
単著、韓国語、「開発の経済社会学」、伝統と現代社、2007

(2) 論文

「韓国の経済・経営をどう理解するか」、えーじえつくれぼーと、Vol. 43、2007.2

(3) 研究報告書

「日韓財閥のサステイナビリティ—危機後の韓国財閥と最末期三井財閥を中心として」、科学研究費補助金報告書、2006.3

3. 主な社会活動

(1) 共同研究・受託研究

アジア経済研究所、「韓国機械産業の競争力」、2006～2007
日韓文化交流基金、「日韓歴史共同研究 (第3分科会・近現代史)」、2007～

(2) 他機関での講義等

東洋英和女学院大学非常勤講師、2007.4～

教授 **川原 秀城** KAWAHARA, Hideki

13 中国思想文化学 参照

教授 **早乙女 雅博** SAOTOME, Masahiro

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（考古学）
1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（考古学）
1981年4月 東京国立博物館学芸部東洋課東洋考古室研究員
1988年7月 東京国立博物館学芸部東洋課主任研究官
1990年4月 東京国立博物館学芸部北東アジア室長
1996年4月 東京大学文学部助教授（附属文化交流研究施設朝鮮文化部門）
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（附属文化交流研究施設朝鮮文化部門）
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（韓国朝鮮文化研究専攻）
2010年8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（韓国朝鮮文化研究専攻）
現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国朝鮮を中心とする東アジアの考古学

b 研究課題

- (1) 朝鮮半島の古代国家の成立と発展過程を考古学資料から追求している。とくに、高句麗、新羅、百濟、加耶の相互交流を中心として、比較研究している。
- (2) 高句麗の積石塚と壁画古墳の多様性から、国内社会の内的成長発展を探ることによって、一国における国家形成の過程を追求している。
- (3) 朝鮮考古学史では、戦前に朝鮮総督府を中心として行なわれた考古学発掘調査の成果を学術的な面から探っている。植民地政策としての古蹟調査事業のなかで、いかに学術的成果をあげてきたか、また日本における考古学の発展とどのようにかかわってきたかを追求している。

c 主要業績

(1) 著書

単著、早乙女雅博、『新羅考古学研究』、同成社、2010.5

(2) 論文

早乙女雅博、「高句麗壁画古墳の模写資料」、『つながる図書館・博物館・美術館・文書館』、東京大学出版社、2011.5

早乙女雅博、「慶州西岳洞石枕塚出土遺物」、国立慶州文化財研究所『新羅古墳精密測量及び分布調査研究報告書』、国立慶州文化財研究所、2011.8

早乙女雅博、「植民地期日本人研究者の楽浪認識」、『楽浪漆器』樋田豊郎編、美学出版、2012.2.

(3) 学会発表

国内、早乙女雅博、「考古学から見た新羅の国家形成」、メトロポリタン史学会第6回秋季シンポジウム、2010.11.20

国内、早乙女雅博、「東山洞高句麗壁画古墳の共同学術調査」、日本考古学協会第77回大会、2011.5.29

(4) 監修

早乙女雅博、『韓国国立博物館（世界の博物館26）』、朝日新聞出版、2012.2

(5) マスコミ

「小倉 権威者教授」、『ハンギョレ新聞』（韓国）、2010.8.11

「平壤に高句麗壁画古墳」、『中国新聞』、2010.8.15

「平壤・東山洞壁画古墳を調べて」、『愛媛新聞』、2010.8.21

「高句麗古墳日朝考古学者が再発掘」、『東京新聞』、2011.10.31

「高句麗壁画古墳調査」、『山形新聞』、2011.11.25

(6) 受賞

国内、早乙女雅博、日本建築学会賞、日本建築学会、2010.5.31

(7) 教科書

『高校日本史』、早乙女雅博他、執筆、山川出版社、2010、2011

(8) 共同研究（産学連携除く）

国際、社会科学院考古学研究所、「東山洞壁画古墳共同学術調査」、2010

国際、社会科学院考古学研究所、「高山洞1号壁画古墳共同学術調査」、2011

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、日本考古学協会、国際交流委員会委員長、2011.5～2013.5

国内、文化遺産国際協力コンソーシアム、委員、2010、2011

国内、日本考古学会、幹事、2010、2011

国外、高句麗渤海学会、海外学会諮問委員、2010、2011

(2) 行政

世田谷区文化財保護審議会委員、2010、2011

(3) 他機関での講義

学習院大学文学部「考古学概説」2010年度

駒澤大学大学院「考古学特講Ⅳ」2010年度

駒澤大学大学院「考古学特講Ⅴ」2011年度

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

財団法人東洋文庫、研究員（客員）、2010、2011

准教授 **福井 玲**

FUKUI, Rei

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部言語学科卒業（文学士）

1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了（文学修士）

1984年9月～1986年10月 韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学

1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学

1987年4月～1989年3月 東京大学文学部助手（言語学研究室）

1989年4月～1992年9月 明海大学外国語学部講師（日本語学科）

1992年10月～1997年3月 東京大学教養学部助教授

1994年10月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授（併任）

1997年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換

1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換

2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科に配置換

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専攻分野は韓国語学であるが、言語学（音声学・音韻論）、日本語学（方言研究）にも関心をもっている。韓国語学の中では、中世語を中心として、古代語や近代語についても音声や方言研究などを行ってきた。

2003年、2007年に小倉文庫目録を作成したが、2011年度には小倉文庫の特徴についてまとめるとともに、目録の韓国語版を作成し、ソウル大学奎章閣韓国学研究院の『奎章閣』誌に発表した。また、小倉文庫の中で対馬出身の通詞として明治初期に活動した中村庄次郎の寄贈資料についての研究を継続して行っており、『酉年工夫』という、雨森芳洲が編纂したと推定できる資料が18世紀初頭の韓国語を知るうえでも重要であることを指摘して、何度か研究発表を行い、論文にまとめた。他の中村庄次郎関連資料についても研究を進めている。

また、ここ数年、世宗実録に掲載されている「致和平」という楽譜の歌詞として用いられている龍飛御天歌の声調（アクセント）が、旋律に反映されていることを報告し、中世語の声調ないしアクセント研究の音声的実態を知るための新しい重要な資料になりうることを論じてきたが、その成果を韓国の国語学会から出ている『国語学』誌などに発表した。その他に、『捷解新語』の音注における語頭の清濁の書き分けに当時の日本語のアクセントが関わっていることを論じる研究発表を行い、また、韓国の訓民正音学会主催のSCRIPTA2011において東国正韻と中世韓国語の音韻体系の間の関係を論じる研究発表を行い、その成果を論文にまとめた（近刊予定）。さらに、筆者がこれまでに行ってきた韓国語の音韻史にかかわる研究をまとめて単行本として出版する準備を進めている。

c 主要業績

(1) 論文

福井玲、「致和平譜に反映した中世語声調について」、『国語学』、57、107-130頁、2010.5

福井玲、「小倉文庫の特徴について ―中世語資料と対馬関連資料を中心に―」、『奎章閣』、39、241-376頁、2011.12

福井玲、「中村庄次郎筆写本『酉年工夫』の語学的特徴」、『韓国朝鮮文化研究』、11、1-20頁、2012.3

(2) 学会発表

国内、福井玲、「15世紀の楽譜「致和平譜」に反映された韓国語のアクセント」、国立国語研究所共同研究プロジェクト、青山学院大学、2010.3.8

国内、福井玲、「捷解新語の音注とテキスト分析」、朝鮮語史研究会、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所、2010.12.8

国際、福井玲、「Tongguk chongun and the phonological system of Middle Korean」、Scripta 2011, Writings and Cognition, Seoul National University、2011.10.8

3. 主な社会活動

(1) 学会

朝鮮語研究会幹事 2010年度～

日本音声学会会計監査委員 2011年度～

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

国立国語研究所研究員

1. 略歴

- 1985年3月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
1987年3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）修士課程修了
1989年3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）博士後期課程中途退学
1989年4月 九州大学文学部助手（～1992年3月）
1992年4月 久留米大学文学部専任講師（～1995年3月）
1995年4月 久留米大学文学部助教授（～1996年3月）
1996年4月 九州大学文学部助教授（～2000年3月）
2000年4月 九州大学大学院人文科学研究院助教授（～2002年3月）
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（～2007年3月）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

朝鮮王朝（李朝、1392-1910）時代の水運史や財政史・経済史などを中心に研究している。現在の主たる研究課題は、(1) 朝鮮前期漕運制研究、(2) 朝鮮中世・近世海事史研究、(3) 朝鮮中世・近世「水環境」研究、(4) 朝鮮後期財政史研究、(5) 朝鮮時代古文書研究などである。(1)の漕運制とは朝鮮時代における官営の税穀船運機構であり、朝鮮前期におけるその整備・変遷過程や運営実態等を明らかにする作業に取り組んでいる。(2)は(1)から派生したもので、朝鮮の前近代史を「海」とのかかわりで再構成するという問題意識から、済州島民の海難関係記録の分析を通じて彼らの海上活動の実態や異国への漂流・漂着をめぐる諸問題、朝鮮時代の海防体制や「水賊」などについて研究している。(3)は(2)をさらに発展させ、広く人と「水」とのかかわりを明らかにしようとするもので、当面は漢江という内陸河川を主たる対象として、水運だけでなく、渡船や漁撈、さらには治水・水利といった点も含めて「水環境」史の構築をめざしている。(4)は、朝鮮後期に施行された新税制である大同法について、その運用実態を地方財政との関連に注目しながら研究している。このほか、高麗から朝鮮への王朝交代期における社会的・経済的諸変動の歴史的意義をいかに理解するかという問題にも関心を抱いている。(5)は日本各地の諸機関に所蔵される朝鮮古文書の調査である。2010年度から2011年度にかけては、これらのうちとくに(1)(4)と(5)の課題を中心に研究を進めた。

c 主要業績

(1) 著書

(共著)

朝鮮史研究会編『朝鮮史研究入門』名古屋大学出版会、2011.6（担当部分「第4章 高麗／2 経済史・社会史・文化史」110-126頁）

(共編著)

原尻英樹・六反田豊・外村大編『日本と朝鮮 比較・交流史入門—近世、近代そして現代』明石書店、2011.11（担当部分「第1章 朝鮮王朝時代の国家と政治」47-74頁、「第2章 近世の日本と朝鮮—国家間関係と人々の交流」75-101頁）

(2) 論文

六反田豊「十九世紀慶尚道沿岸における「朝倭未弁船」接近と水軍営鎮等の対応—『東萊府啓録』にみる哲宗即位年（一八四九）の事例分析—」井上徹編『海域交流と政治権力の対応』（東アジア海域叢書 2）汲古書院、295-347頁、2011.2

六反田豊「洞春寺所蔵『新編古今事文類聚』紙背朝鮮文書の復元と検討」『山口県指定有形文化財『洞春寺開山嘯岳鼎虎禪師手沢本』保存修理事業報告書』2011.3

六反田豊「朝鮮時代の「武」と武臣」『韓国朝鮮の文化と社会』第10号、23-60頁、2011.10

(3) 書評

六反田豊「書評 矢木毅『高麗官僚制度研究』」『朝鮮史研究会会報』第181号、18-22頁、2010.9

(4) 解説

六反田豊「朝鮮時代の君臣関係と王権」『アジア遊学』第151号、65-79頁、2012.3

(5) 学会発表

(国内)

六反田豊「朝鮮時代の「武」と武臣」韓国・朝鮮文化研究会第11回研究大会、東京大学、2010.10.23

六反田豊「大同法の歴史的意義とその運用実態」東方学会第61回全国会員総会シンポジウム「朝鮮朝後期の社会
と思想」、日本教育会館、2011.11.4

(6) 研究テーマ

日本学術振興会科学研究費補助金、六反田豊(研究代表者)・森平雅彦・石川亮太・長森美信(以上研究分担者)「朝鮮半島の「水環境」をめぐる社会・経済・文化の歴史的諸相—漢江を中心として」2010～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

(大学等非常勤講師)

埼玉大学教養学部、「韓国文化特殊講義I「朝鮮史概説」、2010.4～2010.9

埼玉大学教養学部、「韓国文化特殊講義II「朝鮮時代社会文化研究」、2010.10～

国際基督教大学教養学部、「前近代朝鮮史」、2011.4～2011.6

(市民講座等講師)

朝日カルチャーセンター・横浜、「朝鮮半島の歴史と文化」、2010.5～2010.7

世田谷市民大学、「朝鮮半島の歴史」、2010.9～2010.10

かわさき市民アカデミー、「世界を旅する⑤ 韓国・朝鮮ツアー歴史／②高麗から朝鮮王朝へ」、2011.4

かわさき市民アカデミー、「世界を旅する⑤ 韓国・朝鮮ツアー歴史／イ・サンとその時代」、2011.6

八丈島民大学、「朝鮮時代の歴史を学ぶ」、2011.2

(2) 学会

(国内)

朝鮮学会、常任幹事、編集委員、2010.4～

朝鮮史研究会、幹事、2010.4～

朝鮮史研究会、幹事長、2010.4～2010.9

韓国・朝鮮文化研究会、運営委員、2010.4～

韓国・朝鮮文化研究会、副会長、2011.10～

史学会、評議員、2010.10～

(海外)

韓国中世史学会、地域理事、2010.12～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く)委員・役員

財団法人東洋文庫、研究員(客員)、2010.4～

NHK教育テレビ「高校講座世界史」、講師、2010.4～

1. 略歴

- 1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学分科卒業
1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専修課程修士課程入学
1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了
1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）
1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）
1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）
1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）
1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所研究員（～2000年8月）
2000年3月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）
2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学

b 研究課題

韓国朝鮮社会を対象として、人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在籍時より20余年間、韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を重ねている。近年の研究課題は、(1) 近年の韓国社会における都市居住者の農村地域への移住現象（「帰農」「帰村」）とコミュニティ運動、(2) 朝鮮半島中・南部農村社会を対象とした民族誌資料の再分析、(3) コミュニティ概念の再検討と近現代韓国社会への適用、等である。

c 主要業績

(1) 論文

本田洋、「日本の人類学における韓国研究：1980年代末以降」、『社会科学 Webzine（韓国社会科学協議会）』、6号、2010.8

HONDA Hiroshi, 'Return to Peasantry': Urban-to-rural Migration in South Korea after the IMF Crisis, *Material Asia: Objects, Technologies & Rethinking Success* (Proceedings of SEAA 2011), pp.62-68, 2011.8

本田洋、「韓国の帰農：智異山麓山内地域の事例から」、『韓国朝鮮文化研究』、11号、21-55頁、2012.3

(2) 書評

嶋陸典彦著『韓国社会の歴史人類学』（風響社、2010年）、本田洋、『文化人類学』、75巻4号、617-621頁、2011.3

(3) 学会発表

国内、本田洋、「都市からの離脱、競争からの離脱：韓国南西内陸山間部山内地域の「帰農」、日本文化人類学会第45回研究大会、2011.6.12

国際、本田洋、「Return to Peasantry': Urban-to-rural Migration in South Korea after the IMF Crisis」、SEAA 2011 Material Asia: Objects, Technologies & Rethinking Success、韓国全北大学校、2011.8.1

国際、本田洋、「공간에 결부된 시간의 흐름: 나의 필드 키우기」、 전북대학교 고고문화인류학과 BK21 사업단: 해외석학 초청강연회、韓国全北大学校、2011.8.5

(4) 教科書

『社会学概論 2010』、盛山・上野・服部・松本・武川・佐藤・白波瀬・本田・赤川、執筆、東京大学文学部社会学専修課程、2010

『社会学概論 2011』、盛山・松本・武川・佐藤・白波瀬・中村・本田・赤川・出口、執筆、東京大学文学部社会学専修課程、2011

(5) 研究テーマ

文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(C)）、本田洋、研究代表者、「韓国社会のポスト産業化に関する人類学的研究」、2010

文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)）、本田洋、研究代表者、「韓国社会の生き方に関する人類学的研究：グローバル化する競争社会における折衝と離脱」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

特別講演、日韓文化交流基金、「地方から見た韓国社会：人類学的考察」、2010.3

非常勤講師、東北大学文学部・大学院文学研究科、「韓国地方社会の民族誌」、2010.12

(2) 学会

国内、韓国・朝鮮文化研究会、運営委員（事務局・庶務責任者）、2010.4～

国内、日本文化人類学会、広報委員、2010.4～

29 言語動態学

准教授

中村 雄祐

NAKAMURA, Yusuke

1. 略歴

- 1980.04 東京大学教養学部理科I類、入学
1982.04 同学部教養学科第一文化人類学学科、進学
1984.03 同学科、卒業
1984.04 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学
1986.03 同修士課程、修了
1986.04 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学
1988.04 社会学研究科より総合文化研究科へ移管
1990.08 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
1995.11 東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得
1994.04 - 1997.03 東京大学教養学部専任講師
1996.04 大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換え
1997.04 - 2004.09 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
2004.10 - 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005.04 - 2009.03 国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
2009.04 - 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授

2. 主な研究活動

多様な状況における文書・読み書き、その人間・社会との関係の研究

a 専門分野 b 研究課題

文書文化論

主に発展途上国を念頭に置きつつ、広く文書・読み書きと人間・社会の関係について研究している。また、調査研究方法の検討、改善にも強い関心を持っている。様々なフィールド調査で得られるデータや知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的人工物（cognitive artifacts）の変化に関する歴史学的研究と有機的に接合することを目指して、隣接諸分野の研究者との共同研究にも積極的に取り組んでいる。

c 主要業績

(1) 論文

Akira Saito & Yusuke Nakamura (編著), *Les outils de la pensée: Etude historique et comparative des « textes »*, 2010.3

Akira Saito & Yusuke Nakamura, « Introduction : Outils de la pensée, outils de la vie », *Les outils de la pensée: Etude historique et comparative des « textes »*, 2010.3

中村雄祐、「書評への応答（書評 中村雄祐『生きるための読み書き — 発展途上国のリテラシー問題』（みすず書房、2009年））」、『社会言語学』、10、pp.203-206、2010.10

永崎研宣、中村雄祐、後藤真、「人文学におけるデジタル化に関するオープンなメタ議論の意義 — じんもんこん / Humanities Computing/Digital Humanities の将来に向けて」、『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集「じんもんこん2010」』、pp.1-6、2010.12

(2) 研究報告書

Hiroko Kazama, Yusuke Nakamura, Ken Shibushita, "Sobre el estado actual de los documentos para la comunicación pública en las áreas rurales en Guatemala — Memorandum de la visita a dos municipalidades", 2010.6

村岡ゆかり、中村雄祐、「絵図作成に使われた色料 — 調査方法・データのまとめ方・所見」、東京大学史料編纂所研究成果報告 2011-2 『「地図史料学の構築」の新展開』、第二部 pp.12-19、2012.3

(3) 予稿・会議録

国内会議、中村雄祐、「永崎・田畑両氏講演へのコメント」、南山大学社会倫理研究所「歴史・記憶・情報」研究プロジェクト デジタル技術がみせる人文学の未来 — Digital Humanities の現在 —、南山大学社会倫理研究所、2011.1.29

『人間・社会・未来 — 相繋がり生きる基盤を求めて』、pp.256-261、2011.3

(4) マスコミ

「生きるための読み書き」、『視点論点』、日本放送協会、2010.7.29

(5) 受賞

国内、中村雄祐、国際開発学会 2010 年度学会賞（奨励賞）、国際開発学会、2010.12.4

(6) 共同研究・受託研究

共同研究、中村雄祐、南山大学社会倫理研究所、「ガバナンスと環境倫理」、2011～

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

セミナー、南山大学人類学博物館、「文書：その仕組みと使われ方の歴史」、2010.6

セミナー、南山大学 社会倫理研究所、「デジタル技術がみせる人文学の未来 — Digital Humanities の現在」コメント、2011.1

その他、東京大学史料編纂所 科研費プロジェクト「『地図史料学の構築』の新展開」（研究代表者：杉本史子）、「国絵図作成の社会的条件 — 復元研究と歴史研究の関係」、2011.7

その他、岡山デジタルミュージアム、「国絵図復活」、2011.10

その他、凸版印刷株式会社デジタル文化財ラボ、「心の道具と情報のデザイン — E.Tufte の研究を中心に」、2011.11

30 次世代人文学開発センター

《 先端構想部門 》

教授 **小佐野 重利** OSANO, Shigetoshi

03 美術史学 参照

特任教授 **佐藤 慎一** SATO, Shin'ichi

1. 略歴

1969年6月	東京大学法学部第3類卒業（法学士）
1969年7月	東京大学法学部助手（国際政治学講座）
1972年7月	東北大学法学部助教授（比較政治学講座）
1979年7月	カリフォルニア大学バークレー校客員研究員（～1981年8月）
1987年4月	東京大学文学部助教授（中国哲学第1講座）
1993年4月	東京大学文学部教授（中国哲学第1講座）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（アジア文化研究専攻）（～2009年3月）
1997年4月	東京大学評議員（～2000年3月）
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（～2003年3月）
2006年4月	東京大学理事・副学長（～2007年3月）
2009年3月	東京大学を定年退職
2009年4月	東京大学理事・副学長、人文社会系研究科特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想史（特に近代思想）

b 研究課題

民国期の歴史意識の研究

c 主要業績

(1) 論文

「歴史の変革と歴史学の変革—中国史解釈をめぐる民国期の論争について」、『中国哲学研究』24号、2009年11月

「19世紀西洋の思想遺産と中国—進化論、アナーキズム、マルクス主義」、『19世紀学研究』4号、2010年3月

3. 主な社会活動

(1) 行政

文部科学省 研究機関における公的研究費の管理・監査に関する検討会、立案、座長代理、2008.4～

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「人間文化研究機構「地域研究推進委員会」、委員、2008.4～

《 萌芽部門 》

教授 古井戸 秀夫 FURUIDO, Hideo

1. 略歴

1973年 3月	早稲田大学第一文学部演劇専攻学士
1975年 3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻修士
1981年 4月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻
1981年 4月	早稲田大学文学部助手
1984年 4月	早稲田大学文学部専任講師
1987年 4月	早稲田大学文学部助教授
1992年 4月	早稲田大学文学部教授
2006年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

演劇学・舞踊学

b 研究課題

c 主要業績

(1) 論文

古井戸秀夫、「歌舞伎の『三国志』、『文化交流研究24』、2011.3

(2) 啓蒙

古井戸秀夫、「『石切梶原』と『車引』、『歌舞伎座「初春大歌舞伎」筋書』、2010.1

古井戸秀夫、「正月の曾我狂言」、『新橋演舞場「初春花形歌舞伎」筋書』、2010.1

古井戸秀夫、「道成寺物の系譜5」、『NBF』会誌37、2010.1

古井戸秀夫、「歌舞伎座と女性たち」、『伝統と文化』33、2010.1

古井戸秀夫、「『爪王』と『高杯』、『歌舞伎座「二月大歌舞伎」筋書』、2010.2

古井戸秀夫、「弁天小僧と白浪五人男」、『歌舞伎座「御名残三月大歌舞伎」筋書』、2010.3

古井戸秀夫、「石川五右衛門伝説と歌舞伎」、『国立劇場歌舞伎公演『金門五三桐』解説書』、2010.3

古井戸秀夫、「『連獅子』と能『石橋』、『歌舞伎座「御名残四月大歌舞伎」筋書』、2010.4

古井戸秀夫、「名優が生んだ『棒しばり』と『浮世風呂』、『こんびら大歌舞伎筋書』、2010.4

古井戸秀夫、「『寺子屋』と『熊谷陣屋』、『新橋演舞場「五月花形歌舞伎」筋書』、2010.5

古井戸秀夫、「歌舞伎舞踊三題」、『六月博多座大歌舞伎筋書』、2010.6

古井戸秀夫、「『文屋』と『暫』、『新橋演舞場「七月大歌舞伎」筋書』、2010.7

古井戸秀夫、「歌舞伎の翻訳劇・翻案劇」、『シアターコクーン『ファウストの悲劇』』、2010.7

古井戸秀夫、「道成寺物の系譜6」、『NBF』38、2010.7

古井戸秀夫、「『四谷怪談』と若者たち」、『新橋演舞場「八月花形歌舞伎」筋書』、2010.8

古井戸秀夫、「山村流舞扇会『慣ちよっと七化』の復活上演」、『上方芸能177』、2010.9

古井戸秀夫、「江戸東京の顔見世」、『新橋演舞場「吉例顔見世大歌舞伎」筋書』、2010.11

古井戸秀夫、「福森久助の人と作品」、『国立劇場歌舞伎公演『四天王御江戸鑑』解説書』、2011.1

古井戸秀夫、「桜田治助作『御ひいき勸進帳』と鶴屋南北作『浮世柄比翼稲妻』、『新橋演舞場「寿初春大歌舞伎」筋書』、2011.1

古井戸秀夫、「わが心の歌舞伎座」、『週刊朝日』1月18日号、2011.1
 古井戸秀夫、「道成寺物の系譜7」、『NBF』39、2011.1
 古井戸秀夫、「『於染久松色読販』を創り出した三人の男たち」、『ルテアトル銀座「二月花形歌舞伎」筋書』、2011.2
 古井戸秀夫、「佐野次郎左衛門の「大屋根の捕り物」、『新橋演舞場「五月大歌舞伎」筋書』、2011.5
 古井戸秀夫、「『義経千本桜』『吉例寿曾我』と源頼朝」、『新橋演舞場「七月大歌舞伎」筋書』、2011.7
 古井戸秀夫、「道成寺物の系譜8」、『NBF』40、2011.7
 古井戸秀夫、「江戸東京の芝居番付・筋書①」、『平成中村座「十一月大歌舞伎」筋書』、2011.11
 古井戸秀夫、「江戸東京の芝居番付・筋書②」、『平成中村座「十二月大歌舞伎」筋書』、2011.12
 古井戸秀夫、「二つの英雄伝説—平家の景清 源氏の弁慶」、『日生劇場十二月歌舞伎公演』、2011.12
 古井戸秀夫、「江戸の花—『加賀鷺』と『め組の喧嘩』」、『新橋演舞場「初春大歌舞伎」筋書』、2012.1
 古井戸秀夫、「三人吉三—綽名で呼ばれた男たち」、『国立劇場「初春歌舞伎」解説書』、2012.1
 古井戸秀夫、「江戸東京の芝居番付・その三」、『平成中村座「寿初春大歌舞伎」筋書』、2012.1
 古井戸秀夫、「歌舞伎十八番『鳴神』と竜神」、『月刊みんぱく』1月号、2012.1
 古井戸秀夫、「松風物の系譜①」、『NBF』41、2012.1
 古井戸秀夫、「『忠臣蔵』九段目—「鶴の巣籠」と山鹿流「大星伝」、『新橋演舞場「三月大歌舞伎」筋書』、2012.3
 古井戸秀夫、「中村屋の系譜」、『演劇界』4月号、2012.3

(3) 予稿・会議録

国際会議、古井戸秀夫、「歌舞伎の『三国志』」、第2回PESETO人文学会議、2010.4.10
 国際会議、古井戸秀夫、「九世市川団十郎と女優」、檀国大学校東洋学研究所学術大会、ソウル、2011.7.8

(4) 監修

古井戸秀夫、『特集 歌舞伎座を支えてきた女性たち』、財団法人ポーラ伝統文化振興財団『伝統と文化』33、2010.1

3. 主な社会活動

(1) 学会

国内、舞踊学会、会長、2010.1～2011.12

(2) 行政

文化庁、芸術選奨（評論）選考委員、2010.1～2011.12
 文化庁、文化審議会専門委員文化財分科会、2010.2～2011.12

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本芸術文化振興会、復活上演候補作品検討委員、2010.1～2011.12
 日本芸術文化振興会、芸術文化振興基金運営委員会専門委員（伝統芸能・大衆芸能）、2010.1～2011.12
 日本舞踊花柳流、顧問、2010.1～2011.12
 日本舞踊協会、副会長、2011.6～2011.12
 財団法人日本舞踊振興財団、評議員、2010.1～2011.12
 公益財団法人新日鉄文化財団、理事、2010.10～2011.12
 財団法人ポーラ伝統文化財団、理事、2011.2～2011.12

1. 略歴

- 1995年4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授
1996年11月 東京大学文学部附属文化交流研究施設教授
1997年8月 同 大学院人文社会系研究科附属文化交流施設教授
2004年4月 同 大学院人文社会系研究科言語動態学講座教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、ウラル諸語、ロシアの少数言語のテキストの電子化、コーパスを用いた文法研究

b 研究課題

科研費（基盤研究）のプロジェクトを中心に、次のような研究活動を行った。

- (1) エストニア・タルト大学のコーパス言語学研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (2) フィンランド・トゥルク大学のマリ語研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (3) エストニア国会図書館の協力を得て、20世紀初めのエストニア語の言語資料（193万語）を電子テキスト化し、言語コーパスとして利用可能なようにXML文書化した。また、このコーパスを含むエストニア語のコーパスを複数用いて、エストニア語の研究を行った。
- (4) スウェーデン北部、トーネ川流域のフィンランド語系少数言語・メアンキエリ語のコミュニティーを訪問し、メアンキエリ語の言語資料を収集するとともに、学校などを訪問し、現地の言語事情を調査した。

c 主要業績

(1) 研究報告書

「電子化された言語資料と個別言語研究」、2009.3

(2) 学会発表

「エストニア語の動詞 *joudma* の多義性について」、日本ウラル学会35回研究大会、2008.7.5

「エストニア語の動詞 *pruukima* 「必要だ；用いる」の多義性 —コーパスと辞書の記述に基づく考察—」、日本言語学会137回大会、2008.11.29

「エストニア語の他動詞文における「接格+動詞 *mast* 形」構文」、日本ウラル学会36回研究大会、2009.7.11

「コーパスから見える統語的变化—エストニア語の不定詞構文—」、日本言語学会139回大会、2009.11.28

(3) 受賞

「*Maarjamaa Risti IV klassi teenetemark*」、The 4th class Order of the Cross of Terra Mariana、エストニア共和国政府、2009.2.23

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本言語学会、会計監査委員、2007～

Suomalais-Ugrilainen Seura [フィン・ウゴル学会]、一般会員、2007～

Suomalaisen Kirjallisuuden Seura [フィンランド文学協会]、一般会員、2007～

Societas Linguisticae Europae、一般会員、2007～

CONGRESSUS XI INTERNATIONALIS FENNO-UGRISTARUM]、国際委員、2008.1～

日本ウラル学会、理事、2008.1～2008.12

日本言語学会、評議員、2009.4～

- 教授 **小松 久男** KOMATSU, Hisao
12 東洋史学 参照
- 教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro
15 インド哲学仏教学 参照
- 教授 **水島 司** MIZUSHIMA, Tsukasa
12 東洋史学 参照
- 教授 **塚本 昌則** TSUKAMOTO, Masanori
18 フランス語フランス文学 参照
- 准教授 **大稔 哲也** OTOSHI, Tetsuya
12 東洋史学 参照
- 准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA, Yusuke
29 言語動態学 参照
- 准教授 **本田 洋** HONDA, Hiroshi
28 韓国朝鮮文化 参照

《 創成部門 》

- 教授 **島蘭 進** SHIMAZONO, Susumu
06 宗教学宗教史学 参照
- 教授 **一ノ瀬 正樹** ICHINOSE, Masaki
04 哲学 参照

1. 略歴

- 1969年4月 東京大学理学部天文学科卒業
1972年3月 東京都立大学人文学部人文学科（哲学専攻）卒業
1974年3月 同大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1977年3月 同大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学
1977年6月～80年8月 東京都立大学人文学部倫理学講座助手
1980年8月～82年8月 北海道大学文学部西洋哲学第二講座講師
1982年8月～93年3月 同 助教授
1990年2月 文学博士（東京都立大学）
（1990年10月～91年6月 文部省在外研究員（英国ケンブリッジ大学）
1993年4月～96年3月 東北大学文学部助教授（西洋哲学史第一講座）
1996年4月～2000年3月 同 教授
2000年4月～2007年3月 東北大学大学院文学研究科教授（哲学講座）
（2004年4月～2006年3月 東北大学教育研究評議会評議員、文学研究科副研究科長）
2007年4月～2011年3月 東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学講座
特任教授
2011年4月～現在 同大学院同研究科 死生学・応用倫理センター 上廣死生学講座 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、臨床死生学、臨床倫理学、西欧中世思想

b 研究課題

- ① 医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ 医療の現場への哲学的アプローチから出発し、その思索を医療の質の向上につなげるべく、研究と実践が一体となった活動を行っている。従来の人文系の研究者による生命倫理学研究は現場と結びつかずに終わっていたのに対し、80年代後半から医療現場の医師、看護師等と対話しつつ哲学するという新しい試みをして来ており、その線上で、医療者が患者・家族とコミュニケーションを通して治療方針の決定等に至るプロセスを、現実にも有効であり、理論的にも適切に基礎付けられたものとして整えようとする臨床倫理学研究に取り組んでおり、最近では、介護の現場にも活動領域を広げている。この線上で、臨床現場において死生をどう理解し、その理解を医療・介護のケア実践にどう活かして行くかという臨床死生学の課題に向かっている。ここ二年間では、高齢者が経口摂取できなくなった時の人工的水分・栄養補給の導入について、老年医学会の要請により意思決定プロセスについてのガイドライン作成ワーキンググループの取りまとめ役として、自らの臨床倫理学・死生学の研究成果を反映させながら、これの作成をした（2012年6月にほぼ原案通り老年医学会が承認）。
- ② 西欧中世の言語哲学・キリスト教思想 西欧中世における言語と論理の哲学をテーマとし、当時の哲学者たちが古代ギリシア哲学とキリスト教思想の伝統を受け継ぎ、この二つの絡み合いにおいて西欧中世特有の哲学的思索を展開していく状況を明らかにしつつ、現代の私たちの哲学がそこから学び得るものを見出そうとしている。アンセルムス、アベラルドゥス、オッカムを主要な研究対象としているが、さらにキリスト教思想伝統の源流であるパウロ思想等にも取り組む。この系統の研究はさらに死生学領域にもつながるものと今後なっていくであろう。

c 主な業績 2010.4～2012.3

(1) 著書

『ケア従事者のための死生学』島菌進と共編著、ヌーベルヒロカワ、2010.9 全413頁、執筆担当：序2（16-34頁）、1章1（38-63頁）

(2) 論文その他

「看護実践に即して倫理を学ぶ・活かす」、月刊ナースマネージャー、12-10: 3-6, 2010.12

「臨床倫理の視点からの医療終末期の倫理的問題（特集 神経内科領域における終末期の倫理的問題）」、月刊神経内科、74-2: 176-181, 2011.2

「姿勢としての倫理—行為の倫理と徳倫理の狭間で、人間と医療（九州医学哲学・倫理学会）」、1: 78-83, 2011.6

「医療現場における生と死—臨床死生学の視点1~5」, 『臨床栄養』, 119-2: 185-8; 3: 297-303; 5: 561-7; 6: 671-6; 7: 795-800, 2011. 8,9,10,11

Palliative Care, Encyclopedia of Applied Ethics, 2nd ed., vol.3: 328-337, Elsevier, 2012.2

「臨床倫理エッセンシャルズ(2012年春版)」, 『東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター』, 38ps, 2012.2

「高齢者ケアと人工栄養を考える—本人・家族の選択のために(改訂第二版)」, (会田薫子と共著), 日本老年医学会平成23年度老健事業『意思決定支援ツール』作成WG, 66ps, 2012.3

「ある新聞記者の病と死—萬朝報入社前後の堺利彦とその交友」, 『死生学研究』, 17: 14-67, 2012.3

(3) 研究費の獲得状況

日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (A) 「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」(2011~) (研究代表者)

同上 基盤研究 (B) 「長寿社会における終末期医療のあり方—東洋型意思決定法の実証と実践および発信」(2011~) (研究分担者、研究代表=甲斐一郎)

厚生労働省科学研究費・難治性疾患克服研究事業「特定疾患患者の生活の質 (Quality of life, QOL) の向上に関する研究」 分担研究者 (2010)

厚生労働省科学研究費・難治性疾患克服研究事業「希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究」 分担研究者 (2011)

(4) 学会講演・国際会議発表など

招待講演「臨床倫理のコンセプトとプロセス」, 日本神経学会大会生涯教育セミナー, 2010.5.19, 東京

シンポジスト提題「臨床倫理の視点から」, 日本神経学会大会 2010.5.22, 東京

招待講演「臨床倫理とリスクマネジメント」, 医療マネジメント学会青森支部大会, 2010.6.5, 青森

招待講演「看護ケアの姿勢を表現する倫理」, 看護倫理学会 第3回大会, 2010.6.12, 札幌

シンポジスト提題「鎮静ガイドラインの臨床倫理—現状と今後の課題—」, 日本緩和医療学会シンポジウム「治療抵抗性の苦痛に対する鎮静とは—ガイドライン改訂の要点と今後の課題—」 2010.6.19, 東京

招待講演「姿勢としての倫理」, 九州医学哲学倫理学会第一回大会, 2010.7.17

東北哲学会第60回大会 講演「同の倫理と異の倫理—現場に臨む哲学から」, 2010.10.23

シンポジスト提題「意思決定プロセスにおける生物学的生命と物語られるいのち」, 日本緩和医療学会シンポジウム「緩和ケアにおけるEBMの意義と限界—総合的人間学としての緩和医療学へ」, 2011.7.29, ロイトン札幌

シンポジスト提題「認知症高齢者の意思決定プロセスと死生の評価」, 日本老年医学会東海支部会シンポジウム, 2011.9.17, 名古屋大学医学部付属病院

招待講演「最期まで希望をもって生きられるか」, 死の臨床研究会, 2011.10.9, 幕張メッセ

招待講演「在宅終末期ケアの臨床倫理」, 第14回在宅医学会, 2012.3.18, ホテルグランドパレス

3. 主な社会活動

(1) 学術団体役員・各種委員等

日本医学哲学・倫理学会会長

第15回日本臨床死生学会大会会長

日本学術会議連携会員

日本哲学系諸学会連合事務局長

日本哲学会理事

中世哲学会理事

日本倫理学会評議員

日本生命倫理学会理事

日本臨床死生学会常任理事

東北大学利益相反アドバイザーボード 委員

東札幌病院臨床倫理委員、倫理セミナー講師

日本緩和医療学会 鎮静ガイドライン作成専門委員

同 終末期輸液ガイドライン作成専門委員

日本老年医学会平成22年度老健事業「認知症末期患者に対する人工的な栄養・水分補給法の導入・差し控え・中止に関するガイドライン作成へ向けた検討」 検討委員

日本老年医学会平成 23 年度老健事業「高齢者の摂食嚥下障害に対する人工的な水分・栄養補給法の導入をめぐる意思決定プロセスの整備とガイドライン作成」検討委員、ガイドライン作成ワーキンググループ等委員

(2) 他大学への出講

宮城大学大学院非常勤講師 (2010~11 年度)、看護倫理

島根大学大学院医学研究科 (看護学) 非常勤講師 (集中 2010~11 年度)、看護倫理

京都大学大学院人間健康科学研究科 非常勤講師 (2010~11 年度)、人間健康科学特論

放送大学客員教授「生命と環境の倫理」主任講師 (2010~11 年度)

(3) 講演、研修会講師等

東京大学 GCOE「死生学の展開と組織化」事業推進担当者としてリカレント教育「医療・介護従事者のための死生学」担当。夏季・冬季セミナー開催 (東京大学 2010~11 年度 計 4 回)。

全国各地にて出前セミナー：

*2010 年度 臨床倫理セミナー in 仙台 (7.4 臨床倫理プロジェクト単独の主催)、臨床倫理セミナー in 大阪 (8.8 臨床倫理事例研究会と協働)、臨床倫理セミナー in 金沢 (9.23, がんプロフェッショナル養成と協働)、臨床倫理セミナー@北海道医療大学札幌サテライト (1.15 精神障がい者・高齢者臨床倫理検討会主催)、臨床倫理セミナー in 札幌 (1.16 東札幌病院臨床倫理委員会と協働)、臨床倫理セミナー in 奄美大島 (1.29 日本看護協会鹿児島 大島支部と協働)、臨床倫理セミナー in 大阪 II (2.20 臨床倫理事例研究会と協働)、

*2011 年度 臨床倫理セミナー in おおさか(1) (7.03 大阪の諸病院看護部による臨床倫理事例研究会主催に協力)、臨床倫理セミナー@北海道医療大学札幌サテライト(1) (8.21 精神障がい者・高齢者臨床倫理検討会主催のセミナーに協力)、臨床倫理セミナー in かがしま (8.28 厚労省の資金による老健事業として、鹿児島県公的病院等看護部長会の共催を得て開催)、臨床倫理セミナー in 金沢 (9.23 石川県立看護大学、金沢大学病院看護部を中心に進めている「がんプロフェッショナル養成プログラム」と共催)、臨床倫理セミナー in となみ (11.12 富山県砺波市 ナラティブホームと共催。老健事業による開催)、臨床倫理セミナー in たかさき (11.19 群馬県高崎市にて単独主催)、臨床倫理セミナー@北海道医療大学札幌サテライト(2) (1.14 精神障がい者・高齢者臨床倫理検討会主催に協力)、臨床倫理セミナー in さっぽろ (1.21 東札幌病院の協力による開催)、臨床倫理セミナー in おおさか(2) (2.18~19 臨床倫理事例研究会主催に協力)、ミニ臨床倫理セミナー in まつもと (3.3 中信松本病院会議室にて単独主催)、臨床倫理セミナー in まつもと (3.4 長野県民医連医活部倫理委員会との共同主催)。

臨床倫理学と医療人類学のフォーラム、講演、2010.4.17, 2010.10.9, 2011.4.23, 2011.10.22

東京大学 EMP 第 4 期プログラム講義「死に至るいのちを生きる」、2010.5.21

千葉大看護学部 乳がん看護認定看護師コース講師「臨床倫理」、2010.7.16; 2011.7.8

傾聴ボランティアネットワーク川崎 講演、2010.7.21, 2012.1.20

静岡県立がんセンター認定看護師コース講師「臨床倫理」、2010.7.26-7

大阪看護協会認定看護師コース講師「臨床倫理/看護倫理」、2010.7.28, 2011.4.27, 2011.5.25, 2011.7.15

東札幌病院倫理セミナー 講演、2010.8.30, 2011.10.14

医療 ADR 学術研究会 講演、山形大学医学部、2010.9.10

安楽死・尊厳死シンポジウム 報告、立命館大学、2010.10.2

ユニットケア全国セミナー 講演「施設で豊かに最期を迎えるために、施設でできること」、名古屋、2010.10.3

大阪南学術セミナー 講演、「臨床倫理の考え方」、大阪南医療センター、2010.10.8

社会保険連合研修センター 認定看護師 (疼痛) コース講師「臨床倫理」、2010.10.22

埼玉県病院局看護管理者研修 講師、大宮、2010.10.29

宮城音楽療法研究会 講師「相手に寄り添うケアの進め方/最期の日々を前向きに生きること」、2010.10.31

グリーフケア研究所 公開講座「悲嘆について学ぶ」 講演「物語られるいのちの間の交流と断絶」、尼崎市、2010.11.26

日本口腔ケア学会学術大会 講演「死生の境でケアする者の臨床倫理」、大阪、2010.11.28

国立大学医学部倫理委員会連絡会議 シンポジウム提題「病棟における臨床倫理カンファレンス」、前橋、2010.12.4

東北大学病院臨床倫理講演「臨床倫理の考え方—治療を拒否する患者さんへの対応を例にして—」、2010.12.7

第 2 回栃木県在宅緩和ケア公開講座 講演「臨床死生学—死に直面しても希望をもって生きられるか—」、宇都宮、2011.1.8

大阪医科大学附属病院講演「臨床倫理ベーシック」、高槻市、2011.1.21

十和田市立中央病院講演「医療現場に必要な臨床倫理 2」、2011.2.10

平成 22 年度老人保健増進等事業シンポジウム《食べられなくなったらどうしますか? : 認知症のターミナルケアを考える》, 講演「意思決定プロセスと死生の評価—人工的水分・栄養補給の導入をめぐる》, 東大鉄門講堂, 2011.2.27

群馬県介護研修センター講演「《最期まで自分らしく生きる》を支える」, 2011.3.3

上廣フォーラム講演「同の倫理—異の倫理」, 上廣倫理財団, 2011.3.23

上智コミュニティカレッジ講師「ケアの哲学」等, 2011.6.3, 2011.6.29

十和田緩和セミナー 講演「緩和ケアに必要な倫理的観点」, 十和田市立中央病院, 2011.6.4

健和会病院講演「臨床倫理」, 飯田市, 2011.6.25

日本社会医療福祉協会 ソーシャルワークスキルアップ研修 講師, 東京, 2011.7.9

日本緩和医療学会ワークショップ 講師, 千葉幕張, 2011.9.25

AMG キャリアサポートセンター看護学生実習指導者講習会・認定看護管理者ファーストレベル講師, 上尾, 2011.9.28, 2011.10.28

名古屋セントラル病院講演「臨床倫理と死生学」, 2011.9.29

NHK 文化センター柏 講演「人生の最期をどう考え、どう生きるか—死生学入門—」, 2011.10.7

第 8 回 Nichidai Heart Network 講演「終末期医療の臨床倫理」, 東京, 2011.10.27

砂川市立病院附属看護専門学校 講演「「津波でんこ」とケアの倫理」, 2011.10.14

坂総合病院講演「意思決定プロセスと臨床倫理—高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法をめぐる》, 塩釜市, 2011.10.29

高齢者ケアと人工栄養を考える in さいたま (老健事業) 講師「意思決定プロセスと臨床倫理—高齢者ケアにおける人工的水分・栄養補給法をめぐる》, 2011.10.30

市立砺波総合病院 臨床倫理研修会 講演「意思決定プロセスの臨床倫理—患者・家族に寄り添うあり方」, 富山県砺波市, 2011.11.11

聖学院大総合研究所「スピリチュアルケア」講演会講師「希望・尊厳・スピリチュアル—緩和ケアからのアプローチ」, 埼玉県, 2011.11.18

宮城県がん総合相談支援センター主催シンポジウム「宮城における死生観と療養支援」講師, 2011.11.26

日本老年医学会平成 23 年度老健事業主催シンポジウム「認知症の終末期ケアを考える～死生観を見つめて」にて 鼎談「ひとりの生活者として生老病死を思うとき」(島藺進、大内尉義と共に), 東大安田講堂, 2011.12.4

医療事故・紛争対応研究会 シンポジウム「病気についてのつらい知らせ - がん告知」座長・講演「哲学者からみた、つらい知らせ」, 横浜, 2011.12.10

姫路赤十字病院講演「臨床倫理」, 2012.1.31

日本看護協会神戸研修センター研修会講師「臨床倫理のコンセプトとプロセス」, 2012.2.1

山形県立保健医療大学 特別講義「医療現場に臨む哲学 —臨床倫理の考え方—」, 2012.2.10

藤沢市民病院院内研修会講師「意思決定プロセス—臨床倫理の核心—」, 2012.2.29

難病の緩和ケア研修研究会講師「意思決定プロセスと〔自己決定〕」, 東京, 2012.3.10

第 11 回気づきを築くユニットケア実践者セミナー講演「東日本大震災に学ぶ要援護者と援護者への支援—死生学の視点から」, 神戸, 2012.3.11

1. 略歴

- 1996年12月 University of Edinburgh, Graduate School of Social and Political Studies 修了 (MSc with Distinction in Social Anthropology)
- 2002年3月 京都大学 大学院人間・環境学研究科 環境相関研究専攻 博士課程単位取得退学 (2006年1月: 博士 (人間・環境学) 取得)
- 2002年4月～2005年3月 京都大学 大学院医学研究科 非常勤講師
- 2003年4月～2005年3月 同志社大学 社会学部 非常勤講師
- 2005年4月～2006年3月 京都大学 大学院医学研究科 非常勤研究員
- 2006年4月～2007年3月 関西看護医療大学(前・順心会看護医療大学) 専任講師
- 2007年4月～2011年9月 東京大学 大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学講座 特任講師
- 2011年10月～ 現在 信州大学医学部准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、医療社会学、質的研究

b 研究課題

現代日本社会における生きづらさについて、その現象の解明と是正策の検討を研究の根幹に据えている。具体的には、①マンガを題材に死生の物語の構築と読解という現象に照準し、そこにいかなる死生観や医療観がどのように生産・消費されるのかを解明することで、「良い死」という概念を問いなおす、②死別悲嘆（とくに公認されない悲嘆 [disenfranchised grief]）にまつわる現象の解明とグリーフケアのあり方を検討する、③地方（青森県）におけるがんをめぐる病气観・医療観などを探り、予防やケアの可能性と限界を考察する、④保健医療研究および死生学研究における質的研究の実践と可能性を検討する、⑤性的マイノリティの文化と HIV 感染リスクの関係を分析し、感染予防に役立ちうる知見を生成する、といった研究に2008～2009年度は取り組んだ。

c 主要業績（転出されたため、年報10号の内容を転記しています。）

(1) 著書

共訳、『ナラティブ・ベイスト・メディシンの臨床実践』、金剛出版、2009.6

(2) 論文（翻訳論文を含む）

『イキガミ』を読む——死生の物語の構築と読解に関する試論『死生学研究』第9号、304(43)-279(68)頁、2008

「悲嘆と向き合う死生学」『春秋』第499号、8-11頁、2008.6

「死別とグリーフに向き合う——他者へのケアとセルフケア（二）」(Wogrin C 著、山崎浩司訳)『死生学研究』第11号、8-44頁、2008.9

Rethinking Good Death: Insights from a case analysis of a Japanese medical comic. Carnegie-Uehiro-Oxford Conference,

http://www.practicaethics.ox.ac.uk/Docs/yamazaki_uehiroconf_medicalcomic.pdf, 2008.12

Research into Accupuncture for Respiratory Disease in Japan: a systematic review. (with Suzuki M & Yokoyama Y) Accupuncture in Medicine, 27, 54-60, 2009

Characteristics of Qualitative Studies Published in Influential Journals of General Medicine: a critical review. (with Slingsby BT, Takahashi M, Hayashi Y, Sugimori H & Nakayama T) BioScience Trends, 3(6), 202-209, 2009

「青森県民のがん検診に関する認識と経験——胃がん・大腸がん・肺がんの検診を中心に」(横山葉子・石倉綾子・開沼博・梶原葉月・佐藤まなび・橋本望・原田満里子・宮崎亮・山田淑子・大西基喜、共著)『保健師ジャーナル』第66巻第4号、358-365頁、2010.3

(3) 研究報告書

「インターネットを利用するMSMのHIV感染リスク行為をめぐる意味づけと行為の検討」(横山葉子・日高庸晴、共著)『インターネット利用層への行動科学的HIV予防介入とモニタリングに関する研究(厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成20年度 総括・分担研究報告書)』、82-93頁、2009.3

『青森県民の胃がん・大腸がん・肺がんの検診にまつわるがん予防意識調査報告書』(横山葉子・石倉綾子・開沼博・梶原葉月・佐藤まなび・橋本望・原田満里子・宮崎亮・山田淑子・大西基喜, 共著) 東京大学大学院人文社会系研究科・青森県健康福祉部保健衛生課, 全47頁, 2009.3

「HIV陽性MSMの感染リスクとHIV対策をめぐる意味づけと行為の検討」(横山葉子・日高庸晴, 共著) 『インターネット利用層への行動科学的HIV予防介入とモニタリングに関する研究(厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業 平成21年度 総括・分担研究報告書)』, 78-85頁, 2010.3

『青森県がん体験者の語りデータベース構築のための調査研究報告書』(飯塚久子・和泉聡子・岩田光行・上間愛・大迫充江・大場良子・開沼博・梶原葉月・神田雅貴・向後裕美子・今野啓介・佐藤まなび・高野みどり・中川真美・橋本望・原田満里子・平野裕子・三品竜浩・安原千賀・横山葉子, 共著) 東京大学大学院人文社会系研究科・青森県健康福祉部医療業務課, 全54頁, 2010.3

(4) 学会・研究会発表, 講演

「ストラウス/死の意識」健康と病の社会学研究会, 佛教大学四条センター, 2008.4.25

「質的研究について」日本看護研究学会・東海部会, 名古屋第二赤十字病院, 2008.8.9

「医療とメディアにおける〈良い死〉」第35回質的研究の会, 奈良女子大学, 2008.11.3

「ライフスタイルとしてのケア: ケアラー体験の把握とサポートシステムの創出」日本質的心理学会第5回大会, 筑波大学, 2008.11.29

“Rethinking Good Death: Insights from a case analysis of a Japanese medical comic”, Carnegie-Uehiro-Oxford Conference, University of Oxford, 2008.12.12

「グラウンデッド・セオリー・アプローチの苦難」第1回「書くための質的調査」研究会, 同志社大学, 2009.3.27

「MSMによる性交渉の意味づけ——男性同性間性交渉によるHIV感染の予防介入にまつわる示唆」第35回日本保健医療社会学会大会, 熊本大学, 2009.5.17

「参与観察をめぐる交渉」第2回「書くための質的調査」研究会, 京都大学, 2009.6.26

「青森県民の胃がん・大腸がん・肺がんの予防にまつわる認識と行動」第24回日本保健医療行動科学学会学術大会, 甲南大学, 2009.6.28

「幸せに生きるとは」上越教育大学地域貢献フォーラム「生きがい感を高める教育とは」, 上越教育大学, 2009.7.4

「男性の死別悲嘆?——死生学からの考察」第5回GCC グリーフ・カウンセラー定例勉強会, グリーフ・カウンセリング・センター, 2009.7.18

「死と看取りの社会学: その問題圏」へのコメント」第56回東北社会学会, 東北学院大学, 2009.7.19

「ライフスタイルとしてのケアラー体験とサポートモデルの構築/配偶者との死別にまつわる悲嘆のプロセスの解明——死別悲嘆のジェンダー差とケアの在り方の検討」第50回M-GTA研究会, 立教大学, 2009.8.1

「質的研究における分析——M-GTAを中心に」質的研究勉強会, 京都大学, 2009.8.21

「立ち上がる【研究する人間】」日本質的心理学会第6回大会, 北海学園大学, 2009.9.12

「死生学教育に対する教育現場からの発言」聖学院大学2009年度第4回死生学研究会, 新都心ビジネス交流プラザ, 2009.10.24

「データの切片化と【研究する人間】——M-GTAの分析特性をふりかえる」2009年M-GTA公開研究会, 聖隷クリストファー大学, 2009.11.14

「MSMによるハッテン場での性交渉の意味づけ——男性同性間性交渉によるHIV感染の予防介入にまつわる示唆」第23回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋国際会議場, 2009.11.26

「データをめぐる競合と協働——参与観察調査を書くために」第3回「書くための質的調査」研究会, 龍谷大学, 2009.12.21

「幸せに生きるとは——日常の死生学から考える」第13回「いのち」をめぐる連続講演会, 新潟県立がんセンター新潟病院, 2010.2.26

「男性同性間性交渉におけるHIV感染リスクをめぐる意味づけと行為の検討——生きづらさをてがかりに」第39回質的研究の会, 奈良女子大学, 2010.3.14

(5) 研究費の獲得状況

青森県がん対策推進事業費「がん予防意識調査」, 研究代表者: 山崎浩司(東京大学), 2008年度

青森県がん対策推進事業費「がん体験者の語りデータベース構築のための調査研究」, 研究代表者: 山崎浩司(東京大学), 2009年度

分担研究: 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究B「「生きがい感」を高める教育の開発と科学的評価」, 研究代表者: カール・ベッカー(京都大学), 2009年度~2012年度

分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 B「ライフスタイルとしてのケアラー(介護・養育)体験とサポートモデルの構築」, 研究代表者：木下康仁 (立教大学), 2009 年度～2012 年度

分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 B「緩和ケアへの移行と実施の円滑化に向けた研究」, 研究代表者：宮崎貴久子 (京都大学), 2009 年度～2011 年度

分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 C「家族における死者のメンバーシップ：死者の社会的生を問う」, 研究代表者：木村好美 (早稲田大学), 2009 年度～2011 年度

厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業, 「インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモラル」に関する研究」, 研究代表者：日高庸晴 (関西看護医療大学), 2008 年度～2010 年度

3. 主な社会活動 (転出されたため、年報 10 号の内容を転記しています。)

(1) 他機関での講義等

聖学院大学大学院人間福祉学研究科 (2008 年度秋学期、2009 年度春学期：水 18:00～21:00)

新潟大学医学部保健学科 (単発講義：2008.10.11)

神奈川県立保健福祉大学実践教育センター研究基礎講座 (集中講義：2009.1.21、2010.1.16)

立教大学社会学部非常勤講師 (2009 年度秋学期：水 16:30～18:00)

東京理科大学薬学部非常勤講師 (4 コマのみ：2009.10.5・19・26・11.2)

滋賀県立大学看護学部 (単発講義：2008.10.11)

(2) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

青森県総合的地域診断手法に係る研究検討委員会委員

実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) 研究会世話人

質的研究の会代表

日本マンガ学会若手研究者ネットワーク部会発起人

日本臨床死生学会第 15 回大会実行委員

3 1 死生学・応用倫理センター

教授 **池澤 優** IKEZAWA, Masaru **(センター長)**

06 宗教学宗教史学 参照

教授 **榊原 哲也** SAKAKIBARA, Tetsuya

04 哲学 参照

教授 **秋山 聡** AKIYAMA, Akira

03 美術史学 参照

准教授 **大稔 哲也** OTOSHI, Tetsuya

12 東洋史学 参照

特任教授 **清水 哲郎** SHIMIZU, Tetsuro

30 次世代人文学開発センター創成部門 参照

特任講師 **山崎 浩司** YAMAZAKI, Hiroshi

30 次世代人文学開発センター創成部門 参照

3 2 北海文化研究常呂実習施設

准教授

熊木 俊朗

KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

- 1990年3月 北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業
- 1990年4月 旭化成工業株式会社入社
- 1994年3月 明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業
- 1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了
- 1996年4月 東京大学文学部助手（附属常呂実習施設勤務）
- 2004年4月 北海道常呂町教育委員会社会教育課ところ遺跡の森主幹
- 2005年2月 博士（文学）学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

北東アジア考古学

b 研究課題

北海道を中心とした北東アジア地域の考古学的研究を専門とするが、特に近年は以下の2点を主要な課題として、北海道やロシア極東地域でフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

- (1) アイヌ文化成立過程の考古学的研究
- (2) 日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究

c 主要業績

(1) 著書

共著、菊池俊彦・松村博文・石田肇・熊木俊朗ほか28名、『北東アジアの歴史と文化』、北海道大学出版会、2010.12
共著、今村啓爾・後藤直・鈴木徳雄・山崎真治・小林謙一・比田井克仁・佐々木憲一・熊木俊朗・河西学、『異系統土器の出会い』、同成社、2011.11

(2) 論文

熊木俊朗、「オホーツク土器の編年と地域間交渉に関する一考察」、『比較考古学の新地平』、709-718頁、2010.2
熊木俊朗、「香深井 A 遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年」、『東京大学考古学研究室研究紀要』第26号、1-38頁、2012.3

(3) 学会発表

国内、熊木俊朗、「道東地区の概況1」、2010年度北海道考古学会遺跡報告会、北海道大学、2010.12.25
国内、福田正宏・I.Shevkomud・熊木俊朗・國木田大ほか8名、「アムール河口域の考古学的調査（2010年度）」、第12回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学社会連携センター、2011.3.6

(4) 研究報告書

大貫静夫・福田正宏・I.Shevkomud・内田和典・熊木俊朗、「東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究」、2011.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本赤十字北海道看護大学 非常勤講師（2010.4～2012.3）

(2) 学会

日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員（2010.4～2012.3）
北海道考古学会会誌編集委員（2010.4～2011.3）

(3) 行政

北海道立北方民族博物館運営評価委員（2010.4～2012.3）
北見市文化財審議委員会委員（2010.4～2012.3）

北見市史跡整備専門委員 (2010.4～2012.3)

北見市史編さん委員会委員 (2010.4～2012.8)